RECONSTRUCTION

改造

宗教改革號

思想と研究

堺利彦
賀川豊彦
山川菊榮
堀江歸一
上田貞次郎
田中智學
谷本富

金持大名の運命觀

大本教及迷信批判

批判と文藝

柳宗悅
内田魯庵
村松梢風
上司小劍
白柳秀湖
德田秋聲
谷崎潤一郎

八月號

コンモンス氏
アンドリユス氏 共著

鑛業監督官補
兼工場監督官補 法學士 北岡壽逸先生譯

勞働法原論

四六版總クロース製金文字入全一冊紙數六百頁 定價金四圓五拾錢 遞送料內地金拾八錢

◇最新刊

マルクス、ラッセル、クロポトキン、我が思想界が社會改造思想を送迎するも亦努めたりと云ふべし。然れども徒に悠久の思想を趁うに急にして現在社會秩序の下に於ける勞働保護の施設に關して多く語る所無きは何が故ぞや。此の書は勞働組合、同盟罷業、賃銀、時間、失業、保險、危害豫防等の問題を網羅し一々其の理論を叙說し各國の法制を紹介し其の是非を批判す。此の書の如きは現下の我國が最も必要を感ずべきものならずや。原著者は共に米國勞働問題の權威にして本書の米國に於て有する地位は正に英國に於けるウエッブのインダストリアル・デモクラシーに匹敵すと稱せらる。譯者は熱情と信念とを以て此の問題に從ふ新進の學者にして今現に農商務省に在つて勞働行政に鞅掌しつゝあり原著者譯者誠に其の人を得たりと云ふべし敢て自信を以て江湖に推奬する所以なり。

東京市神田區今川小路
清水書店
振替口座東京七四四七番
電話九段五七七・五七八

改造八月號目次

宗教改革問題

大本教及迷信現象批判

申込殺到忽三版

鐘淵紡績株式會社
六拾七回決算報告

貸借對照表

貸方（負債之部）

株金	一七、四三七、六五〇・〇〇〇
諸積立金	二一、四三八、一九一・〇〇〇
社債	三、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
當銀償還未濟社債	二〇〇・〇〇〇
配當未濟割賦金	五〇、一五八・三六三
未拂金及買掛金	三、五四三、一〇一・一八九
支拂手形	一八、五六三、四一三・六一〇
諸預り金	七、〇八四、五〇五・七三七
鐘紡同志會預金	九七、五八四・六八〇
鐘紡共濟組合預り金	六九〇、六七七・五三〇
故中上川氏記念獎勵資金	一〇六、七〇六・〇〇〇
故朝吹氏記念職工療養基金	一〇一、八三三・二九〇
職工衛生資金	九〇、一一一・〇三〇
使用人病傷老衰退職恩給資金	二、〇八三、八九三・九三〇
職工幸福増進資金	二、四九一、七七二・八三〇
職工救濟資金	一三八、三一四・六七六
職工休養院及療養所建設費預金	六四、三三三・二六四
戰後海外商工業視察費預り金	一一〇、五六七・五五〇
從業員子弟教育費資金	四一七、四〇四・四〇〇
前期繰越金	六、二七〇、三二二・九一四
當期純益金	九、四四六、四五五・三三二
計	一〇三、二一六、一六五・三三七

借方（資産之部）

拂込未濟株金	一、六四〇、六八〇・〇〇〇
土地	三、一四六、九二八・二三〇
建物	六、六六一、三五三・二四七
器械	六、二一九、二三〇・四五三
防火裝置	一一三、五四三・〇一八
工場用具及什器	五三三、五九四・四〇三
有價證券	二七八、〇三〇・一四〇
各店器械建物増設勘定	二、五七一、五〇三・三五〇
受取手形	一、四九七、五八二・八〇〇
預ケ金及現金	二〇、七八〇、一三〇・六六〇
職工立替金及假拂金	八三六、六六二・七二〇
賣掛金	二、七六七、三七四・〇三〇
小賣店賄所及醫局勘定	七〇一、一〇六・三五〇
原料製品仕掛物屑物石炭荷造用品及工場用品	五四、八二〇、二六三・八五七
期日未經過火災保險料	一三〇、二二二・〇七〇
計	一〇三、二一六、一六五・三三七

損益計算

總收入金	一三六、三五一、〇五〇・〇七〇
總支出金	一二四、九〇四、五九四・七三八
差引	一一、四四六、四五五・三三二
固定資産消却金	二、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
再差引	
當期純益金	九、四四六、四五五・三三二
前期繰越金	六、二七〇、三二二・九一四
計	一五、七一六、七七八・二四六
內	
株主配當金（但年二割）	一、五七八、六九七・〇〇〇
臨時株主配當金（但年五割）	三、九四六、七四二・五〇〇
諸種積立金	二、五〇〇、〇〇〇・〇〇〇
使用人病傷老衰退職恩給資金	二〇〇、〇〇〇・〇〇〇
職工幸福増進資金	二〇〇、〇〇〇・〇〇〇
使用人職工臨時給與金	三五〇、〇〇〇・〇〇〇
役員賞與金	三〇〇、〇〇〇・〇〇〇
後期繰越金	六、六四一、三三八・七四六

右報告候也

大正九年七月

東京府南葛飾郡隅田村

鐘淵紡績株式會社

取締役會長　日比谷平左衛門
專務取締役　武藤山治
取締役　藤正純
同　長尾良吉
同　前山久吉
同　山口八左右
同　橋爪捨三郎
同　福原八郎
同　望月榮作

右審査候處相違無之候也

監査役　平賀敏
同　野崎廣太
同　清岡邦之助
同　安田善三郎
同　室田義文

■改造社主幹 山本實彥著 ◻◻寫眞版三十餘頁◻◻

好評五版

人を見よ山を見よ

新式總クロース
頗美本正價壹圓
郵送料拾貳錢

序に曰く

欠伸して一句。起きて一句。蛙が鳴いたで一句。世が綠になつたで一句。蚊がさゝぬうちに一句。みゝずのやうにのばしたこの一書。

支那政界の大立者梁士詒を拉へて共和政に及第する目玉なるやと試驗臺に立ち、明石大將は豪傑試驗の落第者、水野前內相は探偵政治家の舊型、秋山中將は神經衰弱的天才なり、屈原は高士、雪舟は古今の人格者、鉢の木の常世が現代に慕はしいと欽し、佛法僧鳥を高野山頂に聽いて世界一の靈鳥なりと讃へ、濱口雄幸は、大宰相として適任なるやを評し、スコットの「湖上の美人」で名高いカトリン湖畔で半日の瞑想に耽れるを叙し、高知に民權婆さんを訪ねて民權論の當時を追憶し、頭山滿の事情を語る、巴里千尺の空中より歐洲の風雲を窺ひ、雪のウラル、月のスエスに憧憬し、野武士の隊長、長曾我部元親の越へし四國アルプスを越へし記など全卷趣味溢るゝが如し。

[國民新聞] 曰く人を見るにも山を見るにも一隻眼を有するは本書の著者なり。[東京朝日] 曰く、人物評は皆着眼の他に類するを見ず蓋し近來の快著として江湖に推薦す。

東京芝區櫻田久保町七番地　改造社　振替東京八四〇二番



―（改造八月號）―

人心の衝動と宗教の變革

市街の巷にも、邊陬の漁村にも改造の聲は行き互つた。その改造の聲が甚だしく權威を缺ぎ、そして些の生氣がない。權助も改造を叫び、太郞兵衞もマルクスを語る。止むに止まれない勇敢なる人心の衝動があつてこそ、其處に澎湃たる改革は出來る。天籟の聲の如く民衆が均しく共鳴して其處に社會的大改造はなるのだ。自分が飽まで信じ、自分を飽まで犧牲に供してこそ天地を震撼すべき大業は成されるのである。

近來の改造論者はオペラ役者の如く、舞臺の上で、形式ばかりの扮裝は出來るが、人心の奧底に何等深甚なる印象を與へ得ない。議會も上つすべりのオペラ劇場の如く、衆數に大抵偶像崇拜で一代の人心を崇高地に誘致し得ない。總ての文物が殆んど死物視せられ、道具視せられ、道德の頽敗は今日を以て頂點とすべく、人心の表徵と云ふに忍びざるものがある。かくて人生の靈的生活の本城は散々に滅却せられて、跡には腐敗せる肉塊の存するのみである、「現代」は丁度其取殘されたる肉の一塊の如きものだ。

宗教の革新は急務也、されど、腐敗墮落せる現代人心にては其改革は出來ず、何を云ふても本源は人である。自己肉塊の總てを犧牲し得る眞男子の意氣に待たねば社會何れの改造も不可能である。

理想國の基本となるものは自己の敬虔なる確信と勇氣とにある。自然科學の發達と理想宗教の進歩にある。現代の宗教は宗教そのものが迷信の本體である、この迷信を打破するのが宗教の力であり、自然科學の威力である。

人間の眞の生活には此兩個のものが相並馳するによつて始めて光輝ある靈の生活が出來るのである、優越的人間生活が營まれるのである。

而して、宗教の變革も、政治の改革も、社會改造も根本は人間の問題であり、その人間が崇高なる人生觀を正歩せんとする強き衝動によりてのみ、總ての改革は遂げ得られるのである。

自己の強烈なる衝動なきものは、斷じて改造を叫ぶ資格はないのである、天下國家を談ずる資格はないのである。

金持大名の運命

堺利彦

一　改造問答

『オイ君、君の讀んでる其の雜誌は何だい？』
『改造だよ。』
『改造！變な名だねえ。』
『變なもんかい。好い名ぢやないか。改造、改造ツて、此頃のはやり言葉だぜ。』
『そうかい。ぢや、改造ツて何んの事ツたい？』
『君は馬鹿だなア。改め造るんぢやないか。』
『俺は馬鹿でも構はないが、一體、何を改め造るんだい？』
『何をツて、社會をさ。世の中をさ。』
『成程、世の中を改め造るんか。そいつは豪氣だ。然し一體どんな風に改め造るんだらう。』
『君は馬鹿だなア。ソラ此の表紙に英語が書いてあるだらう、之はリコンストラクションと云ふんだ。』
『君はエライよ。だけど其のリコンストラクシヨンといふのは何んだい。』
『リ・コン・ストラク・シヨンだよ。それが其の改造といふ事なんだよ。』

『ヘエ、改造を英語でリ・コン・ストラクション』と云へば、それで世の中をどんな風に改め造るかツて事が分るんかい。』

『君は實に馬鹿だなア。先づ英語でソウ云ふんだと云ふ事を君に敎へただけぢやないか。』

『君は實にエライよ。だけど、そんな事を敎はつたツて何んにもなりやしない。俺の様な馬鹿に分る様な話をしてくれ。世間には俺の様な馬鹿が八九歩どほりで、君の様なエライ人はたんと無いんだから。』

『困るなア。其の事が色々この雜誌に書いてあるんだけど、君等は丸で讀まないんだから。』

『君は讀んでるから嘸ぞ善く知つてるだらう。サア話してくれ。』

『話せと云つたつて、そう一口に話せるもんぢやない。』

『一口でなくてもいゝ。百口でも千口でも構やしない。サア話してくれ。それとも君も分らないんか。』

『馬鹿を云ふな。分つてらい。俺にやチヤアント分つてらい。』

『ちや話してくれ。サア話してくれ。それとも實は、矢つぱり……分らないんか。』

『馬鹿にするない。英語まで知つてる俺に分らなくてどうするかい。だけど君、丁度いゝ人が來た。ソラ貝塚先生が來た。……ヤア先生、今日は。』

『又何か議論を戰はせてるな。』

『えゝ實は其の、此の男が馬鹿で何んにも分らないもんですから……。』

『全くです。私は先生、馬鹿で何んにも分らないんですが、此の野郎は又あんまり利口で何んにも分らないんです。』

『ハヽア、それぢや馬鹿も利口も大した違ひはないといふわけだな。』

『兎にかく先生、此の馬鹿野郎に社會の改造といふ事を少し話してやつて下さい。』

『ハア、社會の改造！　それなら其の雜誌に色々書いてあるぢやないか。』

『所が先生、此の利口野郎が此の雜誌を讀んでる癖に、何んにも話が出來ないんです。』

『イヤ、それは其の先生、私は英語まで知つてるんですが、どうも其の、無學な奴に分る様に話す事が下手なもんですからね。』

『成程、成程。宜しい。ぢや僕が善く分る様に話してあげよう。』

二　大政奉還、江戸城引渡

貝塚先生は羊の様な柔和な目をして、長い白髯をしごきながら、諄々として語りだした。

諸君は五十年ばかり前に德川幕府の舊社會が、明治の新社會に改造された事を知つてるだらう。謂ゆる御維新、或は維新の改革といふ奴だ。

德川の社會は封建制度と云つて、武士の天下だつた。德川家が代々將軍樣で、其の下に三百諸侯と云つて、百萬石から一萬石までの大名が三百ばかりあつた。それが日本全國のあちこちに城を構へて、それぞれ多くの武士を養ひ、腰にさした兩刀の威力で以て、百姓と町人とをねめつけながらフンぞり返つてゐた。

其の將軍と大名と武士とは、固より自分で勞働なんどしなかつた。彼等は百姓から取上げる年貢米と、町人から取上げる御用金とで贅澤な暮しをして遊んでゐた。尤も、小侍は『雀の餌ほどの祿』を貰ふなど〻云つて、隨分貧乏もしてゐたが、それでも『武士は食はねど高楊枝』といふ諺もある通り、空元氣でフンぞり返る事だけは忘れなかつた。

所が、何分にも大勢の武士だ。將軍の旗下だけでも八萬騎あつて、それが三百諸侯を通じて皆な遊んで食ふのだから堪らない。年貢米と御用金とだけでは引足らなくなつて來た。幕府の世帶向も諸大名の勝手元も皆な苦しくなつて來た。百姓等がそこにもこゝにも一揆を起して騷いだほど厳しく年貢米を絞りあげたが、それでも足りなかつた。然し大町人は其あいだに段々肥えて來た。百姓の中にも豪農が出來た。つまり世の中の上と下とがキユウキユウ云つてゐる間に、中ほどの少數な大町人と大百姓とが富の力を貯へた。兩刀の威力が次第に其の富の力に負けて來た。將軍も大名も

皆な大町人から金を借り、大百姓の機嫌を取つて、ヤットの事で當座を凌いでゐた。

そこでアメリカから山の様な黒船が來た。傳馬船か何かでおつとりまいて見ても叶はなかつた。それが騒動の始まりで、之はもう何とかして社會の改造をやらねば立行かんといふ事になつて來た。尤も、當時そんな言葉は使はなかつたが、意味はそれだ。

それから色々と面倒な事になつて來て、此ごろ歌舞伎座でやつた井伊大老の一件などが起つた。『井伊の掃部さんは首なしで』といふ歌を僕は今でも覺えてゐるが、それは大變な騒ぎだつた。

(三行缺)

九州の儒者村上佛山といふ人が其時に詩を作つたのだ。僕もウロ覺えだが、何んでも此詩は(二十五字缺)天下の多事これよりか生ぜんと云ふのだつたと記憶してる。

實際それからが天下多事で、諸藩の諸士がいよいよアバレ出す。外國は難題を持ちかける。勤王攘夷の説が盛んになる。公民合體と云つて、朝廷と幕府との間を調和させる(今で云へば勞資協調と云つた様な)策略も行はれたが、結局、討幕論が勢力を得て、薩州長州あたりが京都の朝廷を守り立て、幕府を征伐するといふ事になつて來た。

すると將軍徳川慶喜が先を越して、三百年間自分の家に委托されてゐた天下の政權を朝廷に返上した。謂ゆる大政奉還なる者だ。之は實に大出來だつたね。若しあの時、幕府側がモット頑張つて居ようものなら、それこそ天下の大亂だつたね。然るに聰明なる慶喜公が大勢に逆らはないで、速かに恭順の意を表し、サッサと投出すべきものを投出して了つたので、日本國民が大助かりをしたわけだ。

それでも伏見鳥羽の小ぜりあいは免かれなかつたが、いよいよ官軍が京都から江戸に押寄せて來た時、例の有名な西郷南州と勝海舟との肝胆相照で又國民が大助かりをした。之も先年歌舞伎座で、左團次が西郷になり、中車が勝になつて大いに腹藝を見せたのたが、若しあの時、勝が幕府を代表して、あの思ひ切つた大膽な讓歩をしなかつたら、そして

西郷が官軍を代表して、勝の苦衷を察し、其の誠意を信じなかつたら、要するに此の二人の英雄が、大勢の前に無益の爭ひを省き、無益の犧牲を救ふといふ度量と見識とを持たなかつたら、どんな大騷動が起り、どんな悲慘が生じてゐたか知れない。

それでも上野彰義隊の戰爭や、奥羽戰爭や、函館戰爭は免がれなかつたが、然し大體から云へば、先づ先づ無事な變革だつた。從つて德川家は八百萬石といふ大高から、一時は靜岡の七十萬石に押しこめられたが、後には貴族の最上位たる公爵の地位に置かれて、今では貴族院の議長さんといふお芽出度い事になつてゐる。

時に一パい茶を飲ませて呉れたまへ。大ぶん長話しで喉が乾いた。

三　藩籍奉還及び其後

『それぢや先生、社會の改造と云ふなア、御維新の昔話の事ですかい。之から先、世の中を造りかへようといふ事ぢや無いんですかい。』

マアそうセキたまふな。之からボツボツ其の話になるんだ。そこで幕府の政權が朝廷に返上された。王政が復古した。京都の天皇様が千代田城に御移りになつて、江戸が東京になり、慶應が明治になつた。然しそれだけで明治の新社會が出來上つたわけではない。德川幕府は仆れたに相違ないが、薩長土肥を初として、諸藩の大名と武士とはまだ其儘に殘つてゐた。

そこで今度は藩籍奉還、廢藩置縣といふ事が行はれた。藩籍奉還とは、諸大名がそれぞれ藩籍を朝廷に奉還したので、例へば毛利家は防長二州の領地に於ける大名としての支配權を奉還し、島津家は薩摩、大隅、日向に於ける、同じく大名としての支配權を奉還したのだ。德川幕府に將軍としての全國の支配權を奉還させた以上、諸大名も亦それに倣つて藩籍を奉還するのは當然の譯合だが、然しそれが中々容易な事ではなかつた。

當時、東京の新政府には、薩州長州などから出て來た大久保利通とか、木戸孝允とかいふエライ人物が、參與とか參議とか云つて今の大臣役を務めてゐたが、それらが銘々國に歸つて藩侯を說き、天下の大勢の前に藩籍奉還の詰腹を切らせたわけだつた。尤も、此の奉還はロハでさせたのではない。新政府から金祿公債證書といふものを發行して、それを諸大名及び其の家中の武士全體に分ち與へた。卽ち武士階級は總て從來の知行高、若しくば祿扶持を、一定の率に依つて新政府に買上げられたのである。政府の方から云へば、大名の支配權と武士の特權とを廢し、其の代りに公債證書を渡し、年に七步かそこらの利子をやり、永い年月の中に追々その元金を拂ひ戾したのである。

そこでいよいよ廢藩置縣だ。卽ち藩が廢されて縣が置かれ、封建制度の形が全く壞れて武士といふものが無くなり、謂ゆる四民平等の新社會が出來上つた。藩の廢された時、當分の間は舊藩主が其まゝ縣知事に任命され、暫くしてからそれが中央政府派遣の官吏に代へられたなどは、最も手際な遣り方だつた。尤も、之にも多少の騷動が伴はないでは無かつた。長州前原一誠の亂があり、佐賀に江藤新平の亂がありしたのは、つまり亡びゆく武士階級の最後の反抗運動であつた。薩州の西南戰爭も勿論やはり其の同じ性質のものだつた。然し、封建制度の破壞といふ大改造が其の位の騷動で濟んだのは、返す返すも日本國民の大助かりであつた。

然るにだ、『四民平等』の新社會が出來上つて見ると、そこには矢張り薩長出身者の藩閥があつた。そうして其の藩閥の壓制があつた。そこで藩閥政府を仆せ、壓制政府を仆せといふ叫びが起つた。自由民權の運動が卽ちそれだ。其の結果として現はれたのが、帝國憲法の發布、及び帝國議會の開設で、日本國は之に依つて立憲政治の文明國になつたと云はれてゐる。

然るにだ、此の立派な立憲政治の下に、不思議にも貧富の爭ひ、資本勞働の爭ひが起つて來た。（十行缺）どうだ諸君、之が現在の社會の有樣だ。不景氣、失業者、ストライキ、勞働運動、普選運動、勞資協調、社會政策、何のかのとゴッタ返してゐるのは、諸君の現在を見らるゝ通りだ。もうどうしても此儘ではやりきれない。何とかして

今一度、社會の改造をやらなくちやならない時節が來たのだ。

『なアるほど。さすがは貝塚先生だ。私の云はうと思つてゐた事をスツカリ云つて下すつた。どうも有がたう。オイ馬鹿、聞いたか。之で分らなきや君は餘つぽどの馬鹿だぜ。』

『ウン、俺は餘つぽどの馬鹿だ。だから矢つ張り分らない。改造をやらなくちやならないと云ふ事は分つたが、どんな風に改造するのか、それが分らない。俺は初めからそれを聞いてるんだ、』

『イヤ大きに御尤も。それには僕先生も實は困つてる。どんな風に改造すべきものか、どんな風に改造されて行くものか、それがハツキリ分れば大したものだが、僕にもトント見當がつかない。だからマアその返答は勘辨して貰ふとして、ついでに一つ二つ西洋の話しをしやう。少しくらゐ何かの參考にはなるだらう。

四　プラム案（鐵道公有の方法）

先づアメリカの勞働團體が聯合して拵へた鐵道公有案の事を話して見る。之は鐵道從業員組合の顧問プラムといふ人が起草したのだから、プラム案と呼ばれてゐる。此事は隨分あちこちの雜誌などに書かれてゐるのだが、兩君は恐らくまだ讀んで居られまい。よしんば讀んだにした所で、餘りハツキリとは頭にはいつてゐないだらうから、も一度こゝで話したつて無駄にもなるまい。

日本では先年から鐵道が官有になつて、今では鐵道大臣まで出來てゐるのだから、こんな話を聞くと、氣の早い連中は、何アんだ、今ごろ遲まきにそんな事を騷いでゐるのか、などと云ふかも知れないが、プラム案の内容は日本の鐵道官有とは丸で譯が違ふ。兩君、よく聞いて下さいよ。（貝塚先生はこゝで又長い白髯を一しごきしごいた。そして羊の様な柔しい目が一層柔しく見えてゐた。）

アメリカの鐵道勞働者は大きな組合を作つて、幾度も幾度も賃金の増加を會社に要求して、其の要求も可なり容れら

れはしたが、それと同時に物價がズンズン騰貴するので、實際上には何んの役にも立たない。之では丸で、物價騰貴と賃金増加とイタチゴッコをやつてる様なもので、いつまでやつても果しがない。そこで賃金増加の要求にはモウ飽き果て、今度は鐵道其者の國有を主張しだしたわけなのだ。そして今では六百萬人の勞働者から成るプラム案同盟といふ團體を作つて、盛んに此案の趣旨を宣傳してゐる。

此案に依れば、政府は現金若しくは四分利以下の公債で總ての鐵道を買收する。但し其の買收價額は實際の投資額を基礎として算出するので決して水膨れになつてゐる現在の空株を標準にしない。日本の鐵道國有の時は、たしか建設費の約二倍の價格を五分利公債で買收したのだから、隨分高い利子に當つてゐる。然しそんな事は先づ五十歩百歩として置いてもいゝ。プラム案の特色はまだ外にある。

即ち此案に依れば、一切の鐵道は國有鐵道經營會社の手に貸與される。此の會社には資本といふものがなく、必要な運轉資金は總て政府から供給される。そして會社は重役と事務員(技師、支配人を含む)と勞働者とだけから成り立つ。重役は十五人で、勞働者の中から五人、事務員の中から五人を選出し、殘り五人は大統領が選任する。扨この仕組で鐵道を經營して、其の收入金は、先づ一切の賃金及び經營費と、公債の利子と、減債基金とに振り當てられる。次に、右の諸項に振り當てた後の純益金は、政府と會社とで折半する。そして會社の受けた純益金は從業員の賃金に對して配當される。尤も、事務員の配當率は勞働者の二倍としてある。若し政府の受ける純益金が、會社の總收入の五歩以上に達する時は、其の以上の分だけ乘客及び荷物の賃金が低下される。

先づザット斯ういふわけだ。要するに之は、資本家即ち株主を鐵道の經營から排斥して、勞働者と事務員とが主力となつて自ら經營の任に當り、減債基金に依つて結局は全く資本家を頼らずに、直接從業員と公衆とが其の利益に浴しようと云ふのである。(二行缺)

『成アるほど。そいつは旨いや。ちや先生何んですね、鐵道の車掌だの、機關手だの、札賣だの、驛長だのといふ連中

が、其まゝ會社の株主になつて、自分達の中から重役を出して、そして其の利益の半分を自分達で配當するといふわけですね。』

『マアそんなわけさ。勞働者の團體が主となつて、それが政府の代表者と相談して、一切の事を自治制でやらうと云ふのさ。』

『それで公債の利拂だの、元金の償却だのが無かつたら嘸ぞ好いだらうがなア。そういふ譯に行かないもんでせうかねえ先生。』

リカと來ちやア、あそこの資本家ぐらゐ露骨に横恣を働く奴は無いのだから、どんな事を仕出來すか知れたものぢやない。』

『困つたもんですねえ。それぢや先生、何んですか。つまり其の、資本家と政治家とが正直で利口でありさへすりや、無事な改造が出來上るわけなんですね。』

『所がさ。どこの資本家も、どこの政治家も、大抵みな不正直で、不聰明なものと相場が極まつてゐるのだからなア。現にロシヤなどはあんな事になつてしまつた。』

『成程ねえ。ぢや先生、ロシヤはどんな事をやつてるんですかい。』

『うン、ついでだから少し其事を話してあげよう。』

六　勞働者の天下

ロシヤの今日では、大きな産業は皆な國有になつてる。銀行も國有になつてる。

（二行缺）

『そいつア隨分痛快ですねえ。』

君等には痛快か知らんが、資本家に取つては分隨迷惑だつたらうよ。然しそれもあの成行ぢや仕方があるまい。

(四行缺)

『サアそこだて。さうなると大きに好都合だが、兎にかく此案は四分の利子を拂つて行つて、何十年かの中に元金を償却しようと云ふのだ。隨分氣の永い話さ。それに之はまだ案だけだよ。そして資本家側は隨分猛烈に反對してるのだよ。』

『オヤ、さうですかい。まだ實行されてるんぢや無いんですか。何アんの事ツたい。』

五　ヘマな政治家と横暴な資本家

『然し先生、そんな風の事が鐵道ばかりでなく、鑛山でも紡績でも、何でも斯でもに行はれるとすりや、例の「改造」テいふ奴が先づ無事に出來上るわけですね。日本の御維新よりもモツト無事に行きやしませんかねえ。』

『サア、どういふものだらうか。僕に見當がつかないと云ふのはそこの事なんだ。イギリスなどぢやア、前にも云つた通り、ギルド社會主義といふ奴が大流行で、(三十字缺)政府でも工場委員會の設置を奬勵し、資本家の中にも頗る奇特な連中があつて、工場内に色々な委員會を設け、少しづつ勞働者を工場の經營に參與させる事になつてゐる。

(二行缺)

『先生もそう信じておゐでなんですかい。』

『サア、僕は前に云ふ通りどうも見當がつかない。現にイギリスの有力な勞働組合では、そんなノロくさい遣口に滿足しないで、『炭坑の國有』や『鐵道の國有』を主張してる。其の『國有』の方法の委しい事は知らないが、どうもプラム案のような氣の永い話では無さそうだ。』

『それぢや矢張り英米にも何か大きな騷動が起るんでせうか。』

『サア、それが何とも云はれない。イギリスは由來、何でも上手に片づける國だから、先に一番平和な改造が出來るだ

らうと多くの人に思はれてゐるのだが、然しイギリスにも隨分頑固な馬鹿なへマな政治家が居るからなア。それにアメ
馬鹿を云つちやイカン。それはロシヤの話だ。尤も、ロシヤでは『勞働者の天下』とは云はない。『勞働者の獨裁政治』と云つてる。君等はロシヤの選擧權の事を知つてるか。ナニ知らない？ よく新聞などに出てゐたぢやないか。マア斯ういふわけだ。

ロシヤでは、總て自分で働いて自分で食ふ人間が選擧權を持つてる。だから勞働者は皆な有權者だ。兵士も皆な有權者だ。學校教員も皆な有權者だ。（二行缺）

『ヘエ！ そいつはおかしいなア。（一行缺） それぢや丸でアベコベぢやありませんか先生。』

成程、どこやらの國に比べると丸でアベコベだが、そこがそれ『勞働者の獨裁政治』なのだ。勞働者の天下なのだ。先達て永井たらいふ新米代議士が『西にレーニンあり、東に原あり』などゝいふ不屆な事を申して、好い氣味に懲罰を受け、お蔭で五日間の暇が取れたから避暑かた〲演說旅行に出かけるなどと太平樂を並べたりしたのも、何か此邊の事を勘違ひしたものと見える。

七　農業の社會化

『時に先生、今まで色々と鐵道の事や何かお話を聞きましたが、百姓の方は一體どんなことになるんでせうか。つまり其の、農業の改造ですな。ロシヤあたりでは、其の方の事はどんな風にやつてるんでせうか。』

ウン、其事はまだ餘り新聞雜誌などにも出てゐない樣だから、少しそれを話してあげよう。

ロシヤでは、（二十八字缺） 實際上には、矢張り多數の百姓が銘々に別別の土地を使用してる。一昨年來、貴族領、皇族領、寺領などの廣大な土地の八割ばかりは矢張り舊領内の百姓に耕されてゐる。

（一行缺）

然しそういふ遣方は政府の本意でない。政府では飽くまでも『農業の社會化』をやらうとしてる。そこで先づ『ソヴイエット領』といふ者を拵へた。早分りに云へば政府領なのだ。

ソヴイエット領は模範的農園を意味するもので、近隣の農村に對し、諸般の農業的設備なり、農業的生産力なりについて教育を施し、援助を與へるのが目的だ。そこで從來個人の私有してゐた進歩的農園は皆な此ソヴイエット領に取入れられてゐる。從つて倉庫もある、果樹園もある、葡萄園もある。茶、煙草、砂糖大根などの畑もある。チーズ、バタの製造所、製粉所、釀造所などもある。牧畜場もある、養魚場もある、農具店もある。彼は今後は農事に關する試驗所、講習所、陳列所、學校、圖書館、劇場の類まで盛んに設備する事になつてゐる。

此の領内の勞働者は皆な國家の使用人で、其中から勞働委員を選出し、其の委員會が領内の仕事を處理し、勞働者の經濟上及び衛生上の事などを世話する。賃金は勞働組合で定め。それを中央政府の農務部で認可する。技術上の事や行政上の事については、別に專門技師があり、評議會がある。

政府は（二十二字缺）農民が任意に結合して、銘々の割り當てられた土地を共同に耕作し、共同に消費するといふ遣方を奬勵してゐる。（一行缺）

此の團體は中央政府農務部の監督を受け、地方土地部の拵へた準則に依つて事業を經營する。事業の一切は團體員の手でやるのだが、專門技師を雇ふことと、收穫などいふ特に忙がしい時に臨時の勞働者を雇ふ事とが許されてゐる。團體内の一切の事柄は、團體員の中から選出した評議會が處理するので、技師や臨時雇には發言權だけあつて、評決權がない。ソヴイエット領の地方事務所から此の團體の評議會に代表者を送る事も出來る。其の場合には、團體の方からもソヴイエットの事務所に代表者を送る權利がある。

團體の産出物は、先づ或る分量だけ團體員の需要を充す爲に使用し、次に其の餘剩を中央政府の供給掛に引渡す。供

給掛はそれに對して、農業資金、農業器具、肥料、其他の物を供給する。

政府は次に又『共同耕作』といふ事を奬勵してゐる。之は一村內、或は村內の一部落で、個人の所有でない土地や、何かの理由に依り個人が自分で耕作する事の出來ない土地や、ソヴイエツト領なり××體なりで當分利用する事の出來ない土地に對して、共同の耕作をやらせるのである。卽ち之は一種の組合であつて、銘々に家畜なり農具なりを出して共同に畑を鋤き、共同に種を播き、共同に收穫をするのだが、場合に依つては、一時的に臨時の雇人を入れる事も出來るし、又場合に依つては、組合員の中の富裕者が持つてる不用な農具などを、右賠償或は無賠償で、組合の所有に移すとも出來る。

收穫の一部は種子、肥料、家畜飼料、農具などの爲に控除し、一部は組合員の間に分配し、其の餘剩は政府の供給掛に引渡す。其の收入から貸付金と稅金とが支拂はれる事になる。

組合內の一切の事務は、組合員の選出した委員會で處理する。政府の農務部及び其の地方的代表者は種々の點に於いて此の組合に助力する。

先づザツトこんなわけで、政府の考へでは、ソヴイエツト領の模範と、共同耕作なりの好成績とが、必ず農民一般の心を動かし、遠からずしてロシヤの全部に『農業の社會化』…………が本統に行はれると豫期してゐる。（三行缺）

政府は又、農業奬勵の爲め十億ルーブルの基金を設け、それを貨幣、肥料、器具、機械等の類で、共產團體なり、共同耕作組合なり、其他の農業的組合なりに貸付けてゐる。此の貸付金は總て無利子で、只だ返濟を怠つた場合に、一月一步の罰金を課せられる。

政府は又、全國の農業技師（學術上及び經驗上の專門家）を三部に分つて農務部に登錄しておき、必要に應じてそれに動員を下し、各地に派遣して農業の改善に努めてゐる。

但し今の所では、多数の農民がまだ舊習舊慣に捉はれてゐる爲と、設備や器具の不足の爲と、及び戰爭の爲に壯丁を取られてゐるとの爲に、思ふ樣な改善進步が見られないでゐるが、遠からず平和が回復した曉には、必ず急遽な大進步を生ずるだらうと云はれてゐる。

八　後の鳥が先になる

『兩君、マア今日の話は之でヨシにしようよ。どうだい、農業の話なんぞ餘んまり面白くもなかつたらう。』
『イヤ先生、そうでもありません。』（二十字八缺）
『サア、それはどうか分らない。ロシヤはロシヤ、日本は日本だ。エライ人達がよくソウ云つてるぢやないか。』
『だつて先生、幾ら日本が强くても大勢といふ奴にや勝てないでせう。』
『サア、どんなものかねえ。日本の政治家は大勢なんどに頓着しないほど、それほどエライ人だからなア。』
『何しろ「改造」ていふ奴を、どうかして無事にやりとげたいもんですねえ先生。』
『サア、僕も勿論そうは思つてるんだが、……時にもう今日はお暇しよう、夜がふけた。左樣なら。』
『先生、ついでの事にモ少しお話しなさいな。夜ふかしも二時三時になりやア朝起と同じ事でさア。』
『成アるほど。そいつは旨い事を云つた。（三十字缺）アハヽヽヽ、兎にかくマア今夜は左樣なら。』

大杉榮君都落ちの記

△さるほどに、アナアヤ朝臣大杉榮君は、落花の雪[illegible]跡に、都の春に名殘を惜みつゝ、野枝女史始め、一族郎黨五人と打連れて鎌倉の新居へと引越した。

△サア朝臣の行方が不明とのことで、警視廳では鵜の目、鷹の目、彼處此處を散々に探し廻つたが、皆目その行方が判明せぬ。誰云ふとなく、葉山へ逃げたとのことで、今回は神奈川縣警察部は、私服巡査、正服巡査の非常召集をやるなぞの大騷ぎ。

△處が三日目になつて、漸く朝臣が鎌倉へ高飛したとのことて、探し當てたのが、鎌倉驛前の大谷嘉兵衛氏の別宅だから堪つたものじやない。そしてそれが、鎌倉御用邸の眞正面であるから、鎌倉警察の周章さ加減は甚し御察する。

△最始、大杉君は鎌倉在の知人[illegible]屋某氏に說いて、大谷氏の別宅を一借に及んだ譯だつたが、當の大谷老人はそんなこととは露知らず、妾の番人か、家の夜番位のつもりで、店子の一人に加へたのが日本無政府主義者の頭領大杉君てあつたので、顫ぶるえをして縮み上つたとのことじや。

△そこで、早速差配に命じて立退を要求すると、其處はチヨコでも動かぬ大杉君のこととて流石の大谷老人も策の施すべきなく、困つた困つたの思案投首。

△唯だ、玆に面白きは、差配の使用人であつて、そして大杉君に直接立退の交渉に當つたものが、大杉君から社會主義者は貧民の味方で、天下萬民のために肌を拔くものだとの說教を聞いてからは熱心なる大杉信者の一人となつたそうだ。

△大杉君の鎌倉の別莊といふのは、檜造りの立派な隱宅で、一ケ月の賃借料、驚く勿れ、大枚八十圓。

△久しく貧乏に苦んだ朝臣も、一陽來復とあつて、近頃では原稿料が這入る、書籍の印稅も這入る。先づ先づ生活には支障がない、君が本郷時代の生活は悲慘極まるもので、滿一年と幾月は屋賃なぞは鐚一文も支拂ふことが出來なかつたものだそうな。

△その家主は、誰あろう當時の警視廳消防本部長從四位勳三等室田景辰閣下だから堪らない。官邸のお威光や、何かで極力、その引越を迫つて見たが、朝臣がビクともせぬので、警察界での乃木將軍と稱せられた室田君もトウトウ匙を投げた。

△一年間以上籠[illegible]守を極め込んだが、モトモト唯乘りイヤ唯だ住みを極め込むほどの大惡黨でない朝臣は、小金が出來て引越すときに殊勝にも拾圓羊羹のする折箱を一年分の賍賃を支拂はなかつた罰償として、室田君に贈つた。

△毛色以上　豺狼の徒とまで惡んだ大杉君にも、こうした人情の閃きがあると看取した室田君は老眼に涙滿えつゝ、瞑想一番。「ウム、大杉にもこうした情誼はあつたか……折角の贈物なれば有難く頂戴する、どうぞ宜しく」と大杉君の使者を返した。

△處で、部下の巡査を自宅に呼んだ室田君はコノ品はかくかくの品だ。有難く頂戴はしたものゝ、サテ大杉君にも合點がおらるると聞く……改めて此品を鑑別に廻つて與れと……大杉君も此品の役活は豫期して居なかつたこととて、流石は……室田君だと一本參つた……。

△全國民に、虎の如く畏れされておる、大杉榮君はコンナ人間て御座――い。

勞働組合の心理

賀川豐彦

社會心理としての組合心理

勞働組合は人間の集合體であるから、群衆心理によつて支配されるものである。然しそれも組織化したものであるから、ルボンが云ふような群衆心理で支配せられるよりか、寧ろ、有目的の充分意識のある社會心理によつて導かれるものである。

私は勞働組合に關係した短時日の經驗と歐洲各國の勞働組合に關する各種の報告から組合心理を尋ねたいと思ふが、私は出來るだけ忠實に日本の勞働者の組合心理を研究したいと思ふ。

國民性と自治組合

勞働組合は社會本能の强いものが最もよく之を利用しまた發達せしめ得るものである。それで、英國民や、米國民のように自治的によく訓練せられた國民は、勞働組合を發達せしめる可能性を持つて居るのである。その反對に專制政治に慣れた國民の間には自治的組合を發達せしむることは非常に困難である。日本などに於ても勞働組合の發達し無い最大の原因は自治的精神が涵養されて居ら無いからである。米國の小學兒童などは早や五人とよれば、或種の組合を作つて會長を選擧し、書記を專任して居るので、その方法が如何にも民主的で、私などは少なからずそれに感心したのであるが、日本だと大會社の重役會議のようなものでも凡てが小田原評定のようなものになつてしまつて頗る困るのである。多數のものが集ると如何にその意志決定をするかと云ふ方法に就て訓練されて居ら無い。それで折角多數決で決定したものでも一人のものが反對する爲めに根柢から破れて了ふと云ふようなことは、日本の勞働組合の決議には今迄澤山あつたことであつたのである。之と云ふのも今迄が多數の力で仕事をしたことが無く專制的に慣れて來て居るの

で、それを破る努力が出ないのである。で、英國の如き產業革命が早く來た國であるとは云へ、もしもあの國の勞働者が自由と自主を愛せ無い國民で有つたならば、或は勞働組合は全く發達せず、十七世紀に世界の一等國になつてすぐ凋んだ西班牙の樣になつたかも知れ無いのである。それで勞働組合と云ふものは全くその國民の國民性をそのまゝ反影するものであつて、たとひ、英國や米國の職業別組合(クラフトユニオン)が安全なものであるから、日本でもそれを摸倣しようとしてみたり、また或種の指導者がロシア流のボルセヴヰズムを直に輸入せんとした處でそれは直に國民性により修正されるものである。丁度日本の佛敎が印度の佛敎とは全く違つたものであるが如く、勞働組合なども日本に這入るとまた全く形の變つたものとして發達するのであらうと私は思うて居る。

それは英米では社會主義が發達せずして、勞働組合の方が寧ろ、社會主義以上の社會主義と化しつゝある如く、獨逸では初めから純理論の社會主義で勞働者が團結し、一九一八年の革命の如きが、革命と云はれるよりか、寧ろその社會主義團體の進化したものであると考へられるやうな節のある程簡易に出來たのも全く國民性の然らしむるものであつて、佛國民は、その國民性からしてサンヂカリズム的に出來て居るので、どうしても獨逸的のマルキシズムは佛國民に適當しそうにも無い。況や、英米流の勞働組合など云ふ調和的なそしてまた何かしら粘着力のあるものは、佛國人は受入れられ無いのである。佛國人は勞働運動をやつても藝術的に全人的に手並みのあざやかなものであらねばならぬと考へて居る。革命をやつても反動から反動へ進み、勞働哲學を組織しても、ベルグソンの創造的進化論から導かれたと主張するソレルの行動哲學をその基本とし、漸進的進化など云ふ英米式の忍耐は說かなくてド・ヴリスの突變進化說と、過去の宗敎的信仰に現れて居る千年說とか、基督再臨說とか云ふユートピア的突變主義を喰付けて社會革命を夢みるのである。ロシアにはまたロシア人の心理と歷史がある。それはソヴヰエト主義に最もよく現れて居る。ロシアのソヴヰエト主義は勞働組合では無い。然しまた今迄のような議會主義でも無い。それは產業的に固つた團體の代表者の集つた大きな相談會である。それはロシア人の發明した團體であり會議法である。之はロシア人には適當したものであるかも知れぬ。そしてこのソヴヰエト主義に少しばかりの專制を加へたものが過激派である。

經濟組織と勞働組合

然し今日の經濟組織が、世界共通の資本主義であるから、その上に發生した勞働組合の運動が、國によつて特別に風變りのものであらねばならぬと云ふことは少しも無い。よく日本には日本の勞働組合がある。それは溫情主義――即ち資本家が主人公(君主)で、勞働者が從者と云ふ所で、そこに君主專制的恩顧に感激した勞働組合が出來ねばならぬと云ふ男もあるが(牧野伸顯男はそんな意見をもう少しの處で巴里で發表するところであつた)今日資本主義が跋扈して來て居るに、そんな微溫的なことであつて行けるか否かは頗る疑問である。否同一の資本主義が、株式會社を歐洲に建てたと同樣に日本にもそれを建てたとすれば、日本に於ても反資本主義的勞働組合が歐洲と同じく出來るのは當然である。

それで此點に於て即ち形式に於て私は勞働組合が國民性によつて相違するものでは無いと思ふ。たゞ同一の形式を取りつゝも、それが、今度は資本の上に築かれた株式會社では無くして、人間の心の上に築かれた勞働組合であるだけ、それだけ民族性が組合と云ふ社會心理の上に明白に現れて來ると云ふことを云ひたいのである。即ち先に述べた各國に於ける勞働運動の色彩の違ふのは、全くその爲めであると私は云ひたい。

社會主義と勞働組合の心理的相違

そこで私の注意したいと思ふ所は、社會主義と勞働組合の心理的相違である。社會主義であるならば、先づ理論を立てゝ行くから群衆心理も、その刻々に變化して行く經濟狀態をも無視して一足飛びに社會は如斯ある可きものであると決定することが出來るのである。ところが、勞働組合ではそうは行か無い。勞働組合は勞働者の人格の成長を待たねばならぬ。勞働者が成長してくれ無ければ、いくら指導者が頑張つても何の役にもたた無いのである。その代り勞働者が成長してくると、社會主義が考へも附か無かつたことを勞働組合がどしどしやつてのけることが出來るのである。社會主義は一個の信仰個條のようなものである。それは一個の思想である。思想はマルクスに云はせば實生活の反影であるから――プログマチムもそう云ふ――行動の變化と共に變化するものであるが、その導きをもつけてくれるものである。それに反して勞働組合は行動そのものである。それは思想を根柢から修正する。その變り五分間の中に社

會主義以上に過激化することもある。何にしても勞働組合は實生活そのものであるから之からどの方向に進化して行くものであるか一寸と想像が附か無い程未來の多いものである。それに對して社會主義はちやんと鑄型がきまつて居てそれから右にも左にも動きの取れぬものである。

それで社會主義は型に這入つた點に於ては充分唯物的であり得るが、勞働組合は嘗て唯物的で有つたことが無い。それはいつでも要求して居る點に於て、理想主義的である。勿論理想主義にも二通あつて、絶對理想主義と云ふ客觀に目標を立てゝ進むものと、主觀的要求に導かれて、要求そのものを理想として進む內包的理想主義(Inclusive Idealism)の二通りあるが、勞働組合は客觀的理想主義では無いけれども、いつでも後者の意味に於ける理想主義團體である。この點が社會主義と勞働組合はその心理的立て方に於て根本的に違ふ。

それに勞働組合は生きて居る團體であるから、色々な社會心理的作用が行はれて居る。卽ち模倣も行はれるし、感情も作用するし、反感もあるし、その變り心理的結合もあると云つた樣なわけで、社會主義のような簡單なものでは無くして關係して見ると實に面白いものである。兎に角、今日では生きた勞働組合を背景とした動的な社會思想で無ければ面白く無いと云ふので、今日では社會主義そのものが、勞働組合の行動によつて修正されんとして居る。ソレルの哲學的サンヂカリズムは表看板は哲學であるけれども、その哲學は行動哲學であるから、佛國の勞働組合行動そのものの上に基礎をおく哲學と云ふことになつて居る。つまり、行動そのものが哲學だと云ふことになつたのである。つまり行動があれば哲學はいらぬと云ふ哲學であつて、その哲學がまた行動を呼び起すと云ふことになるのである。之などは哲學と行動の一致して來た新氣軸であるが、英國のギルド・ソシアリズムもそう云つた行き方をして居るものである。

かう云うても社會主義の心理と社會主義團體の心理は今日に於ては全く違ふものである。「恐怖主義」など云ふ心理は社會主義の何處を探がしても出て來ない筈であるけれども――社會主義はその根本に於て、人道的のものであるから――然るに、その主義を實行に移す段になると、なか〳〵人道的にやれないものであるから、そこに社會主義の理想と全く弛背した恐怖主義などを舁ぎ出したくなるのである。健全な思想の人々などから見ればお可笑いことであるが、出來るだけ、新しくありたい

と云ふ心理と——それは時間的に社會が自覺して來ると必ず知覺される一つの心理である——出來るだけ刺激に對して强く見せたいと云ふ心理と、社會的に示威的でありたいと云ふ心理の爲めに、社會主義の學說はいつとは無しに極端に運ばれて行き、昨日正統マルクス學派で有つたものが、それではあまり大勢のものが云ふので面白くない、何か一つ新しいものを唱へてやりたいと眞理拔きの感情的サンヂカリズムを考へ出す少しサンヂカリズムが流行すると、また無權力國家を豫想して哲理拔きでクロパトキンズムに移り行くのである。然しクロパトキンの愛だけでは面白く無いので、執政官の這入つたボルセヴキズムを感心して見る。然し之もソヴキエツトの理論は見ない。が、それでももの足ら無いので、刺激の强いものを求めて恐怖主義(テロリズム)を唱道したくなるのである。

之は社會主義が多く靑年の間に信じられ靑年が心理的に推移するので自然とかうなるのである。が、之は巴里の市民が社會的に經驗したものであり、如何なる時代に於ても革命期に於て一度は經驗する心理である。即ち心理と主義とが常に並行し無いものであると云ふ證據である。

平和的であらねばならぬ社會主義の中に階級爭鬪說が這入つて居つた革命主義が平和主義より高調せられるのはその心理的分裂から來るのである。

それで社會主義はその原理に於て見るものと實行に於て見るものとは全く違つて居る。それは科學として見たものは實に立派なものであるが、階級爭鬪を心理的に組入れる爲めにいつでも喧嘩することが專門的となり常習的となり、人間が殺伐になり、人道的であらねばならぬものが、その裏面では喧嘩ばかりして居るのである。之は日本の『社會主義暗鬪史』などを讀んでも感じることであるが、小さい感情の爲めに大主義が全く裂され裏切られて居ることは實に殘念なことである。

即ち今日科學的社會主義など云ふものはそれを實行に移す段になると、科學の部分は何處へか飛んで行つて終つて、心理的社會主義——或はもう少し惡く云へば感情的社會主義となり、科學の部分は信仰的ドグマと變つて了ふのである。それで今日行はれて居る社會主義は皆一種の宗教のようなものである。印度の六大哲學々派の中には唯物的で且つ宗教であり得たものがあつたが、今日の社會主義は新しい印度的唯物宗教である。而もその遣り方に於ては日蓮宗の感情とよく似たものを持つて居て、いつでも排他的であらねばならぬも

のが餘程注意をしないと革命ばかりを主張する爲めに反社會的になるのである。

以上は社會主義の思想と感情が相馳背することを述べたのであるが、そこはソレルなどの學說であるとちやんと統一してあるから嚴いと思ふ。ソレルなどになるとマルキシズムはもう完全な狂熱的な宗敎となつて居る。

所が勞働組合には、社會主義のような絕對の歸依佛が無い。それで熱狂する分子も少ないわけである。それだけ急所が無い代りに派手な成功が無い。それは寧ろ進步の遲々たるものである。そして、社會主義者に導かれて行かうと云ふ傾向がある。然しその代りにまた社會主義のみにも聞か無い。愈々採決となれば國家本位の保守黨と化することが多い。そうかと思つて居ると無政府主義にも利用せられることがある。佛國のサンヂカリズムが無政府主義的色彩を帶びて居るものを包有して居るのを見ても知れる。

勞働組合は思想團體では無い。從つて社會主義のように信仰を持つて居ら無い。然し敢て其の信仰を尋ねるならば『勞働によれる社會改造——或は勞働の藝術化』と云つたようなものであらう。即ちそれは常に人間を本位としたものであるから白紙のような心を持つて居る。そして之を強い力で引つぱる人があれば何時でもついて行く。然しそれ自身としては常に處決をする權利を保留するのである。之が英國でラムゼー・マクドナルドなどの急進派が思想的に勞働組合に勢力があるにかゝわらず、いつも採決に於て破れて居る理由である。それで勞働組合は白紙であると考へて居て少しも間違は無い。勞働組合は今何を考へて居るかと云ふことを尋ねることは全く野暮なことである。今日に於て勞働組合は『生きんこと』を求めるのであつて、考へることを求めて居るのでは無い。然し生きんとする要求が考へんとする要求より強い時には、勞働組合は考へて議論ばかりして居る社會主義よりも早く仕事を爲て了ふ。最近英國の勞働組合が完成した或事業は社會主義が豫想だに爲無かつたものがある。たとへばロバアト・スミリーの要求の如きは、社會主義の力では出來ないものであるが、勞働組合によつて初めて出來た芝居である。獨逸の革命が秩序よく運んだのも、軍閥の反動革命が成功爲無かつたのも全く勞働組合の威力が後部に扣へて居たからであつた。（勿論獨逸の勞働組合は先に社會主義が有つてそれから生れたものが多いが、戰時中にはそれも充分愛國的なものであつた。あれを見ると必しも思想團體的に固つたもので無

いことが知れる、矢張り生くる爲めの團體であつたものらしい。かく考へてくることによつて、私は社會主義が一個の宗教的情熱的心理を持つて居るに對して、勞働組合は、白紙的な教育團體のようなものであることを理解せられるであらうと私は思ふのである、それで社會主義が急進的であるに對して、勞働組合は非常に保守的であると云ふことが出來よう。サムエル・ゴンパアスが十數年間米國の全勞働聯盟の總理であり得ると云ふことだけでもそれが如何に保守的であるかを知るのである。それで勞働組合に急進的に進むことを教へても決して隨いて來るものでは無い。一人立ちするまで辛抱強く教育するより外に道は無いのである。それで或人々はあせつて反つて勞働組合を潰すことがあるのである。

勞働組合は社會主義である必要は無い。それを社會主義であらねばならぬかの樣に、先に私が述べたような社會主義的感情――いや感情と云ふよりかセンチメンタリズムで教育すると、勞働者はすぐ、革命の歌や、他人を罵倒することと憎惡することを覺えて、他人を尊敬し社會に奉仕せんとする感情を失墜させ、その爲めに會員が離散し、再び一つに纒めることが出來なくなつて了ふのである。勞働組合は先づ勞働組合として發達するが善い。その中に社會主義もギルド・ソシアリストも國家論者も、サンヂカリストも居るが善い。勞働組合を主義による信仰個條で區切ることはあまりに純白なそして大きな團體である。勞働組合はたゞ『勞働を基礎にした社會』と云つた位の處で意志的に大同團結しないと、効力が無くなつて了ふものである、その爲めには發達の餘地をいつでも存して置かねばならぬ、それでなければその指導者はいつでも振ひ落されて了ふ。私は日本に於て最近二つの勞働組合がこの點で失敗して居ることを見た。英米の一千萬を超ゆる勞働組合員が社會主義に指導され乍ら社會主義になつて了は無いのはこの邊の心理を傳ふるものである。

勞働組合組織の心理

勞働組合の組織の心理には、(I)經濟組織から來る心理的影響と、(II)社會心理が直接組合に影響するものと、(III)勞働組合を組織する人間の心理そのものと三段に區別して研究せねばならぬ。

産業組織が組合心理に與ふる影響は二重である。それは或産業の下では勞働組合は全然組織が出來ないのである。(1)即ち

工業では勞働組合は昔のギルドの形になる傾向が有つて、機械工業に於て初めて眞正の勞働組合が出來易いのである。(2)それも工業組織の大小によつて組合組織に影響する。小工場であると勞働者と資本家が仲が善いか、或は全く勞働者が資本家に負けて終ふかする。それで勞働組合が出來ない。(3)地理的分布に影響する。都會であると勞働組合は作り易いが、いくら資本主義が跋扈して居ても農村では一寸と作り難い。(4)工業の性質による、不熟練工の多いものでは組織が困難である。(5)景氣不景氣に影響がある。(6)社會的機會に心理的關係がある。(7)資本主義の發達の程度、とその壓迫、(8)産業の勞働組織そのもの等に直接影響がある。

以上は産業組織の方であるが、組合それ自身の經濟的組織が之に關係する。組合員の收入、會費の率、恵與金、個人的保護、失業救濟職業紹介、工場獨占、等は直接影響のあることである。

又、社會的輿論が勞働組合を作るに與つて大に力あるものである。(1)社會それ自身の進步卽ち、民主思想の勃興、機械文明の威壓、新聞紙、雜誌等による社會敎育の進步、勞働問題に關する社會的理解等が進むに從つて、勞働組合の組織は容易となる。

組合の人格そのものに就ては個人的人格と衆合人格の二つに別けて研究しなければならぬが、組合員の個人的人格としては、その人の職業、年齡、性別敎育、職業上の熟練程度、移動性品性、自覺信仰等が直接影響する。組合としての人格には、組合の精神主義綱領創立者の人格、その歷史的傳說、組織委員卽ち主動者（オーガナイザー）Organizer 宣傳の方法、印刷物、演說、示威方法、敎育、ストライキ、ボイコツト、サボテーヂ、組合證票、組合員の團結性、組合員の移動率、組合の性質、(職業別、産業的、革命的)他の組合との競爭或は喧嘩、組合員の數組合としての人格——卽ち調子等が直接影響あるものである。

卽ち勞働組合の心理と云つても一瞥寸としてすますわけ度には行か無いのである。深くくぐつて見ればみる程、勞働組合の心理は複雜であると共に面白いものである。之を表にしてみると次の通りである。

産業組織そのもの
- 産業の發達程度
- (2) 産業の大小
- (3) 地理的分布
- (4) 産業の性質
- (5) 景氣不景氣

勞働組合組織の心理

- 經濟組織が組合心理に與ふる影響
  - (6) 社會的機會
  - (7) 資本家の壓迫
  - (8) 勞働組織
  - 組合の經濟そのもの
    - (1) 會員の收入
    - (2) 會費の率と納入率
    - (3) 慰與金
    - (4) 個人的保護
    - (5) 失業救濟職業紹介
    - (6) 工場獨占
- 組合心理の影響する社會的輿論
  - (1) 民主思想の勃興
  - (2) 機械文明の威壓
  - (3) 社會教育の進歩
  - (4) 勞働問題に對する理解
- 組合の人格
  - 個人的人格
    - (1) 職業
    - (2) 年齢
    - (3) 性別
    - (4) 教育
    - (5) 熟練程度
    - (6) 移動性
    - (7) 品性
    - (8) 自覺
    - (9) 信仰
  - 群團的人格
    - (1) 組合の精神、主義綱領
    - (2) 創立者の人格
    - (3) 組合の人口
    - (4) 傳統と歴史
    - (5) 組織委員の努力と人格
    - (6) 宣傳
    - (7) 示威（ストライキ、ボイコット、サボタージ、ラベル、行列等）
    - (8) 教育
    - (9) 團結―性質、人格
    - (10) 他の組合員との關係

經濟組織が組合心理に與ふる影響

(一) 產業組織と組合心理

(1) **產業の發達程度と組合**　產業の發達の程度の低いものでは勞働組合を見ることは不可能である。即ち手工業に於ては、どうかすると勞働組織が中世紀のギルドの型或は日本の德川時代の時にあつた樣な親分兒分の關係となる。然るに機械文明の發達と共に中世紀式ギルドや親分兒分の關係が絶滅して近世式勞働組合が發達する樣になる。之は心理的にそうなる理由であつて、

手工業であれば親方は教師であり恩人であり一種の資本家である。從つて民主的であり得ない。然るに近代の産業組織に於ては、分業の發達の結果又機械の發達した結果、生産作業に於て閥族的關係を不必用とする様になつた。それが近代の民主的勞働組合であつて、日本に於ては北清事件以來中學卒業生等がぽつぽつ官立工場等に職工として這入る様になつて、今迄の親分兒分の關係を離れて工場に勤務する様になつたために勞働組織が稍や民主的になりかけたものである。英國に於てもウエブ夫妻の如きが、中世ギルドを近世の勞働組合との間に何等關係が無いと云つて居るのは此の邊の消息を語つて居るのである。近世機械工業に於ては分業の發達が著しいために今迄のものとは異なつた何等かの勞働組織が必要となつたのである。即ち機械の發達はそれと共に當然勞働者をして團結せしめる心理的機運を作つたのである。

(2) **産業の大小**　産業の大小に依つて、勞働組合の性質が違つてくる。小さい工場の集まつて居るところは、どうも勞働組合を作ることは困難である。その反對に大工場に於ては勞働組合は實に作り易い。例へば日本では、大阪の安治川にある二三百の鐵工場の勞働者は數萬人あるだらうがこれを纒めることは實に困難である。それで大阪に於てはどうも思つた様に勞働組合が發達しない様な傾向がある。その反對に大工場の固まつて居るところでは勞働組合が作り易い。例へば室蘭、神戸、呉、八幡、大牟田、等に於ては勞働組合は比較的早く發達する傾向がある。外国に於ても同様であつて、シカゴ、ピツツブルグ、ランカシヤイアー、クライド、ロンドン等に於ては勞働組合が著しく發達して居る。それで勞働者が多いと云ふことは必ずしも勞働組合が作り易いと云ふ理由にはならない。少なくも千人以上を使用して居る大工場が多く出來なければ、勞働組合は發達しない。これは資本家に威壓されるためでもあらう、然しまた一面から見れば勞働者の團結の可能性が少ない爲めである。

地理的分布と組合組織

日本の農商務省の勞働組合法案では、地理的に勞働組合を區分しようと云ふて居るが、勞働力は、貨幣と同じように流通するのであるから、之を地理的に區分する必要が無いと云ふのが正當なる議論である。

然し、勞働組合は農商務省が特別の法律を以つてしなくとも自然地理的に分立するものである。米國の都市勞働組合の如き

は『その都市の五十哩圓周内のものを以つて一團となす』と云つたような規則をも設けたことも有つたが、(T.U. Glocler:The Zonenment of American Trade Unions P. 16)勿論それは地方組合の區域で有つて、交通の發達と共に、地理的境界線が人爲的に消滅して全國的になりまた萬國的にならんとする傾向がある。殊に組合運動の如きは一つは經濟運動のようなものであるけれども一方に於てはまた一種の人間運動思想運動である爲めに、新聞雜誌等のプロパガンダと共に傳播して行くものであるから、その地理的區別も要するに、その地方の經濟地理——特に產業組織上の地理的關係と思想の系統から來る地理的分布に非常な影響を受けるものである。

孤立した都市では、勞働組合がどうしても發達しない。九州大牟田市の如きは三井系の都市であつて、一から十まで三井全能である爲めに、どうしても勞働組合の大きなものが出來ない。之れはあまり市とも離れて居るからである。然し勞働者は坑夫を入れて三萬人以上も居るのである。大體に人口の多い都會には勞働組合が發達する。田舍に於ては全く駄目であると云つても差支へは無い。然し之も交通の發達と共に可能であるかも知れ無い。

勞働組合が初期の場合にはそれは甚しく地理的に支配せられること、初期の文明が地理的に支配せられたのと同一である。同じ街にある工場でも大工場には勞働組合が早く這入り、そして人員も增加することが早いが、小工場の多い所であると地理的に交通の無い爲めに組合の發達が實に鈍いものである。大阪市の如き印刷工場が現今六百軒あると云はれて居るが、印刷工場組合員は、今日まだ二百五十人しか無いと云ふ有樣である。之と云ふのも全く地理的關係である。

この勞働組合に及ぼす地理的影響には考へてもおかしいようなことが澤山ある。同じ資本家の同一系統のものの、同じ製作所に住んで居るものでも工場が違つて、交通が無い場合には少しも勞働組合の存在を知らずにすむものが澤山ある。それは今日の日本の勞働者の多くがまだ新聞を讀まず、互に交際が無い爲に宣傳者の手を經なければ少しも勞働組合を知らずにすむものが澤山あることを證して居るのである。米國に於てすらまだ多くの勞働者は勞働組合の必要を認めずに居るものが澤山あるのであつて、鋼鐵工の如き比較的進んだものの間にすら最近に組合運動が着手せられたような次第である。

日本のある勞働者は或地方より移動することを非常に忌むの

である。それでストライキをも根本的にやれないのである。大正八年大阪電氣分銅會社のストライキの時に馘首されたものを全部大阪以外の某工場に周旋したが一人として行くものは無かつた。皆大阪に居たいと云ふのであつたが生憎、他の大阪の工場へ行くと賃銀が下るので、彼等は皆降伏することになつた。地理的に固着的であり、植物的であると云ふことが日本の勞働者をして組合運動に成功せしめ無い一大理由である。私は之を京都に於ても、九州の八幡市に於ても、大牟田市に於ても見たのである。日本の勞働者は工場はよく出入するが、その都市を離れることは非常に少ないのである。それで私は、私一個の觀察として決論を下し得るならば、日本の組合運動は日本の勞働者が今日の地理的固定性から動き得る時が來なければ成功し無いと。歐洲人特に英米人の間には移民性が發達して居る爲めに、自己の主張の爲めには喜んで地理的領土を打捨てるのであるが、日本人は主張を捨てゝも地理的郷土に喰ひついて居りたいと云ふ因襲が殘つて居るのである。失業問題が起つても、この問題は矢張り起る。即ち勞働者は決して他の都市に動かうとはしないのである。それで失業救濟機關は他の都市に向つては今日の處何の役にもたゝないのである。動き得るものは多くは獨身ものである。

産業の性質と組合成立の心理

産業の性質に從つて組合組織に非常に差違がある。(1)勞働者が集中して居るものには組合が造り易い。(2)熟練的のものには造り易い。(3)文化的なものには造り易い。即ち一般工場勞働者は他の然らざるものに比較して、集中的であり、熟練的であり、文化的であるから組合が作り易いが、石工、土工、人足のようなものになると非常に勞働組合が作り難いのである。特に産業組合として發達するものと、職業組合として發達するものとは多くはこの心理的の關係があるのであつて、産業的に固らんとするものは多くは集中的、文化的のものに多く——運搬鐵道、石炭、坑山の如きがそれである——職業的に組合に發達せんとするものは、熟練の心理が、分業的に文化的に一方に偏するものに多く出來るものである。即ち熟練學習の心理に支配せられて相互に利益が相反するようになると職業組合の方に向くのである。然し之が最近一大組合の傾向に向ひつゝあるのは産業が一層資本主義の集積（アッキュミュレーション）によつて、集中的となり、文化的となるので、今迄のように熟練的孤立と分離分立の心理の支配す

るものでは資本主義を倒すことが出來ないと云ふことが自覺されて來た爲めである。

然しここに注意し無くてはならぬことは幼年工の多い、女工の多い産業には勞働組合が發達し無いと云ふことと、賃銀の低廉な處ではたとひそれが集中的であり、熟練的であり、文化的であつても勞働組合が成立し難いと云ふことである。

即ち日本に於て紡績會社及燐寸會社に勞働組合が發達し無いのは、日本の紡績女工の七割までが十五才から十七才までの處女が多く永年之に從事しようと云ふ覺悟のあるものが少ないからである。燐寸會社に於ても同樣である。絹糸會社は全部女工であり幼年工である上に、移動率が高く一年の中に一度は必ず三ケ月乃至四ケ月間故郷に歸らねばならぬと云ふような特殊な事情に置かれて居る爲めに勞働組合が發達し無いのである。

それに賃銀の高低が組合の成立に非常に關係する。勞働量には一定の需要供給の法則があるから、全國的に勞働組合が發達するか、所謂取締付工場政策（Closed shop policy 私は便宜に組合による工場の獨占を締付と譯す）を取るで無ければ勞働者はその賃銀を維持することが出來ない。そして一定の賃銀が維持出來ない爲めに低廉なる勞働に從事して居るものはいつも供給が多くあつて、組合主義者は追出されて非組合主義者の更に低廉なるものが使用されると云ふ傾向がある。今日日本の土木建築手傳に勞働組合の發達出來ないのはこの理由である。即ち賃銀の低廉と生活の不安定と移動の激烈なる爲めである。一般に大都會の下級勞働者に組合の組織の困難なのはこの爲めである。彼等は組合主義者を排除してゞも自己の生活の安定を求め無ければならぬから組合を成立せしめ無いで、競爭して職業にありつかんとするのである。不景氣の時には之が一般的に來るのであるが、不熟練勞働者には之が永遠的にそうである。

貧民の間に勞働組合の發達し得ないのは全く以上の理由によるのである。貧民——支那の山東省から出て來る人間動力の無盡藏の如きは忽ちにして組合を破壞して終ふのである。黑人の間に勞働組合の發達し無いのも一理由である。一體に人口の過剩——否人間動力の過剩な國では勞働組合が發達し無いのは、勞働者の間に職業の奪ひ合ひが激しくて、勞働組合が出來ても直に之を破壞して了ふのである。それで支那印度のような國ではなか／＼勞働組合が發達することが困難である。濠洲や米國のように勞働力が高價であり、人間動力が競爭的に販賣せられ無いならばそれは自然勞働組合が發達する傾向を以つて居

る。然し米國のように移民の多く這入つてくるところとして勞働力の市價を一度に減退せしめる處では勞働組合は餘程注意しなければ潰れる恐れがある。英國の如き古い國であり乍ら勞働組合が完全に發達したのは、英國人口の八割以上が都市住民であるのと、熟練工の多いのと、民主的文化が進んで居る上に、機械文明が早くより這入つて、産業的に餘程先に進んで居るからであるが、それに比較すると米國は人口が稍分散的であり、移住民が多く、文化がまだ統一せられて居らぬ傾きがあるからである。要するに人口が過多であつて、賃銀に對して競爭の多い勞働市場には、いつでも『ストライキ破り(ブレーカー)』が居るのと同じであつて勞働組合が發達し無い。

移動率の激しいことも勞働組合を發達せしめるに非常に邪魔になる。友愛會の如き一年間に會員平均三萬五千内外であるが、その中一萬五千人は一年間に新しく入會してまたその年の中に移動の爲めに退會して了ふのである。

日本に於て紡績の如き最も移動率の少ないものに有つても一年に百%の移動率のあることは決して珍らしくなく、炭坑の如きで最も著きもので一年に百三十パアセント位であるから如何に移動率の高いものであるかを知るものである。況や普通の鑛山の如きその移動率の高いことを殆ど想像以上である。そしてこの移動率の高いことが日本に於ける勞働組合の發達を阻害することは頗る甚しいものである。米國に於ても勞働組合の勞働者の移動によつて非常な打撃を受けて居るようであるが日本の勞働者のように、或工場に居る間は勞働組合に屬し然らざる場合は勞働組合を止めると云ふのでは移動する度毎に新しく組合運動を初めなければならぬ爲めに、その組合は非常に困難に立つものである。

不景氣の勞働組合に及ぼす影響

不景氣になればストライキは減少し、勞働組合は潰れるものである。英國の勞働組合史を見ても不景氣の時に勞働組合が全滅したことが有つた。米國の統計を見ても不景氣になると勞働組合が潰れると云ふことになつて居る。即ち次の通である。

(W.O. Weyforth: The Organizability of labour, P. 244)

紐育州の商況と勞働組合員との關係

年次	商況	會員實數	增減%	組合實數	組合實數增減
一八九四年	不景氣	一五七、一九七	……	八六〇	……
一八九五年	稍回復	一八〇、三五一	+一四・七	九二七	六七
一八九六年	再不況	一七〇、二九六	−五・五	九六二	三五
一八九七年	下半期可	一六八、四五四	−一・一	一〇〇九	四七
一八九八年	好景氣來	一七一、〇六七	+一・六	一〇八七	七八
一八九九年	上景氣	二〇九、〇二〇	+二二・二	一三二二	二三五
一九〇〇年	稍鎭靜	二四五、三八一	+一七・四	一六三五	三一三
一九〇一年	一般商況良好	二七六、一四一	+一二・五	一八七一	二三六
一九〇二年	好景氣連續	三二九、一〇一	+一九・二	二二二九	三五八
一九〇三年	活躍甚好	三九五、五九八	+二〇・二	二五八三	三五四
一九〇四年	温和なる鎭靜	三九一、六七六	−一・〇	二五〇四	七九減
一九〇五年	景氣恋激來	三八三、三五六	−二・二	二四〇二	一〇二減
一九〇六年	上上景氣	三九八、四九四	+四・〇	二四二〇	一八
一九〇七年	十月より十二月恐慌	四三六、七九二	+九・六	二四九七	七七
一九〇八年	商工業不景氣のどん底	三七二、四四九	−一四・七	二四四四	五三減
一九〇九年	下半期稍回復	三七二、七三九	+〇・一	二三六八	七六減
一九一〇年	下半期又不景氣	四一八、九三四	+一二・四	二四五七	八九
一九一一年	稍不況減	四三八、二一四	+四・六	二四九八	四一
一九一二年	……	四五七、六七二	+四・四	二四六九	二九減

即ち之を見ても不景氣と勞働組合とは相比例することを見るのである。好景氣の時には勞働組合も著しく發達するが、不景氣が一寸來ると會員は減退し、組合の數も減るのである。それで勞働組合には好景氣の時に作つておかねば不景氣の時にはどうしても資本家に敗ける傾があることを知らねばならぬ。

日本では漸く近頃になつて勞働組合の組織が出來つゝあるのであるが、大正九年の如き恐慌時代には必ずやストライキも會員も組合數も減退するに極つて居るのである。

從つて會員は夏期に增加して冬期に減少するものであることは略ゞ想像がつくことであらうと思ふ。之は實際に於てそうであつて、大阪の如きは著しくそれを感じるのである。每年春期から夏期にかけて入會者は多いが、秋期から冬期にかけて組合員數は減退するものである。即ち霜枯期（十二月より二月まで）は勞働組合に取つても霜枯期であつて、日本の如き産業組織の幼稚な所では四季が社會組織にまで影響するものであるから驚くのである。

またそうかと云ふて、景氣が極く善過ぎると勞働者は勞働組合の必要をあまり感じないのである。米國の統計を見ても一九〇五六年の最好景氣の時には僅かに二%乃至四%の組合員數の增加しか勝ち得て居らないのである。然るに反つて最好景氣で無い外の時の方が組合の進步が著しいのである。卽ち勞働組合に取つては最好景氣は不景氣同樣禁物である。殊に日本の勞働者は單純であつて、大阪のブラシユエの如き大正六七年頃にはこんな景氣の善い時に組合などはいらぬと云ふて少しも組合組織に贊成しなかつたものである。それを聞いて私は笑つたが勞働者の間にもそんな考を持つて居るものが實に多いのである。

社會的機會と勞働組合

戰爭があれば勞働組合の能力は全く萎縮して了ふものである。英國の如き戰時中には二重の意味に於て勞働組合の能力を發揮することが出來なかつた。一つは勞働組合が國家の公認機關となつた爲めにストライキをする權能を奪れてしまつたことゝ、從つてショプ・シユチユワート(工場委員)運動が盛んになつて、內部から組合の能力を無視したことである。

これはたゞ一つの例にしか過ぎ無いが、勞働組合も一つの文明運動で有る爲めに一進一退するものであることは拒むことは出來ない。殊に文明が勞働者に有利になれば進步もするが然らざる場合は常に敗北せねばならぬ地位に居るのである。殊に、勞働者は宣傳せられることを待つて居るから宣傳を怠れば思想的に萎縮して了ふものである。殊に日本の國のような新聞雜誌が流行を追ふ國ではとても堅實な足並を揃へて進步することが出來ない。新聞の如きはその販賣政策の爲めには全く勞働組合のことを書か無いこともあると云ふ狀態であるから、勞働運動が進步しない筈である。

一つの大きなストライキが有つても、それで勞働組合の成立に關係すると云ふのであるから全く驚くより外無いのである。大正八年八月の京都奧村電機會社のストライキが失敗した爲めに組合を脫退したいと申込むものもあれば、大正八年十一月日立礦山のストライキの爲めに、友愛會の會費が八割五分滯納になつたと云ふことなどは殆ど想像もつかなく、勞働者の無氣力を笑は無ければならないのであるが、日本の多くの勞働者は多くはあきらめて居るか寢つて居るかである。根本的要求から、目醒めて立ち上ると云ふことは實に少ないのである、北九州に於ける十八萬の炭坑夫がその最も甚しいものである。彼等が一

濟に目醒めるならば炭坑主が之の首を切ることは出來ないものであるにかゝわらず、一人二人が目醒めて叫ぶものであるから直に首を切られる。然し炭坑夫等は決して自ら叫ぶことをし無い。勞働問題の演説會を開いて資本家側の破戸漢がその演説會を妨害しても默つて居る。そしてたゞ機會を待つて居るのである。然し暴動でもあれば最も激しく騒ぐのは北九州の炭坑である。然らば何故勞働組合が如斯内部的に發達し無いかと云ふに、それは第一、教育程度が進んで居らぬ爲めである。第二は輿論がその方へ向いて居らぬことである。第三は組合の中心となる人物の居らぬこと、第四勞作場に於て組合を造る機會の來ないことである。

勞働者の教育が進んで來れば、組合は實に强固である。そして自發的に何時でも組合を造る。教育のあるものには社會的機會は何時でもある。然し無教育な勞働者はいつでも外部から指導者が來るのを待つて居る。指導者は然しいつでも來るものでは無い。それで勞働組合は發達し無いのである。

また輿論の問題である。輿論と云ふもの程面白いものは無いが、社會的に輿論の助けが無ければ組合は發達し無い。大正八年九月まで日本では勞働問題が國家の一大問題でも無かつたが、ワシントン會議に使節を送るに就て急に輿論が沸騰したと云ふ傾きがあつた。また大正九年四月伊太利ゼノアに海員代表者を送ると云ふことになつて、今迄僅か八個しか無かつたものが急に四十九個に增加して、一二週間に四十一の新團體が生れたと云ふのなども全く輿論と機會の問題である。經濟的の原因からでは無いけれども、社會的原因から勞働組合を造るに非常に便利な場合があるものである。勞働組合法が出來るならば一層、勞働組合は澤山出來ることであらうと私は思ふて居る。

それから人物の問題であるが、その主唱者と云ふのが大事な役をつとめるものであるが之がなか〳〵得られ無いものである。日本に於ける勞働組合の歴史を見てみるに、友愛會が大正元年に先づ第一に聲をあげて以來、他の凡ての組合はその後に出來たものは大抵一度友愛會の會員で有つたものが造つて居るのを見ることは面白いことである。大阪に於ては、印刷工組合でも、伸銅工組合でも、京都に於ては織友會、印友會等凡て友愛會に現在席を持つて居るものか、一度は友愛會に關係して居たものが造つて居る。即ち今日友愛會を卒業して他の組合を造つて居るものが多いことは面白いことである。之から見るも組合運動は一つの教育運動であり、模倣運動であるとも云へるの

である。それで指導者が無い時には勞働階級はどうしても動かぬ場合が多い。

　それからも一つ面白いことは、一つの工場に組合のあつた場合、それが或事情で資本家の手で解散せられるとか、馘首されるとかすると各地方に散つて三つも四つもの新しい組合を造るものであることも注意すべき現象であらうと思ふ。それで無くとも一つの組合が解散して五つも六つも勞働組合の出來るのも一つの社會的機會だと云へば云へる。即ち帝國勞働協會と云ふものが出來て居たものが大正八年四月三日發會式の當日に解散して、大阪鐵工組合、友染工組合、屋外勞働組合などが產れる動機となつたと云ふことは注意すべきことである。

ストライキと組合組織

　工場內に於ける組合成立の機會は主としてストライキであるが、ストライキの時だけに組合員が激增するものもあれば、ストライキの時に組合が出來たものが永續するものもある。多くの組合はストライキの時に組合員を增加する。そしてストライキの終了と共に成功不成功にかゝわらず組合を脫退するものもある。然しストライキが失敗すればそれこそ組合は全滅になるものである（William O. Weyforth : The Organizability of labour P. 13.35.38.87. 參照）

　米國に於ける裁縫職工はストライキと共にその會員數を增加する傾向がある。一九〇一年十月ボストンに於ける裁縫工二萬五千人の同盟罷工は一週間續いたが一割二分乃至一割五分の賃銀值上げになつた爲めに組合員は非常に增加して完全なる勞働組織が出來た。一九〇九年八月約八千の裁縫職工が紐育でストライキをしたが洋服仕立工組合がこれを引き受けて成功した結果新らしく五千人の會員を增加した事がある。

　一九一一年の春、シカゴに約四萬五千人の裁縫工のストライキがあつたが、多くは非組合員だつた。然しストライキが續くと共に皆組合に這入て了つた。斯う云ふ樣な實例は至る處にあつて、一九〇二年のあの有名なる石炭坑夫のストライキの如き、ストライキの結果三萬二千の會員から、一年のうちに六萬二千人に增加したことがある。其後炭坑夫の勞働組合員は減つたり增えたりしてゐたが、ストライキが再び一九一二年の四月に布告せられた時に組合員は、二萬三百九十八人から九萬五百十七人に激增した。

　或組合は、平常勞働組合が少しも無いものでもストライキと

云へば、直に或一種の勞働組合が出來る場合がある。例へば大正八年九月川崎造船所のサボテージの如き、其時迄友愛會の會員は川崎造船所に於て僅か千五百內外であつたが、いざサボテージと云ふ場合には一萬六千人の勞働者が全部團結して友愛會員を中心にして、サボテージに成功した。そして其後、大きな共同體は解散したが、工場別に依る組合が川崎造船所の中に四つも五つも出來る事となつた。そしてその組合はやはり友愛會員を基礎にして事務の進捗を計つて居る。

然しストライキだけに加はつて、他の場合に於ては少しも勞働組合に關係しないものがある。紐育の裁縫職工の如き、內職的勞働の多いものにはそれが甚だしい。又一九一二年の米國ペンシルブニヤ州の石炭坑夫のストライキに加はつた者が、ストライキの後に直ちに脫退した如きはやはりそれを示して居る。それで勞働組合員の中には全く無自覺で這入つてゐる者が何時でも多いと云ふことを頭に置いておかねばならぬ。こう云ふ者を私はストライキ會員と呼んで居る。それでもしもストライキ會員を堅實なる組合員に仕樣と思へばどうしても惠與金制度でも採つて會員を繫ぎ止めるより外はない。然し今日では各工場に共濟制度が發達してゐるために、勞働組合がそれに打ち勝つことが出來ない狀態に居る。それで組合組織をあせるもの又組合の威力を發揮して見たい者は、何時でもストライキを仕たがる。その例は最近屢々關西にも關東にも我等が見たもの である。然し大抵の場合この種のストライキは暴動を誘ひ失敗に終つてゐる。之を見ても如何に勞働組合の組織が困難なるものであるかゞ解る。

ストライキが失敗した場合に、組合は殆ど潰れて了ふ。米國の礦山組合の如き、一八九四年にストライキを行つて、賃銀の低下を防止せんとしたがそのために反つて失敗して十二萬五千人の會員が僅に八千人に減つたことがあつた。同樣に米國の鋼鐵工組合に於ては一八八二年ストライキの結果一萬六千の會員を一萬一千八百人に減らしたことがあつた。その樣な實例は幾何でも上げることが出來る。大正八年八月京都奧村電氣株式會社のストライキの結果、京都友愛會聯合會は一千百もあつた組合員が僅に二百五十人に減退して了つた。

シカゴの罐詰工場に働く屠殺人組合は一九〇四年ストライキに失敗して三萬四千四百の組合員が、僅にその翌年六千二百人しか止まつて居らなかつた。同樣に米國シカゴに於て家具製造工組合は度々同情罷工をした結果、一九〇四年七月一日より翌

年の七月一日迄に約一萬の會員を失つて居る。かう云ふ風にストライキをするのでも餘程注意しないと組合の發達を障げるものである。

資本家の壓迫と組合組織

資本家の壓迫の烈しい處では、どうしても勞働組合が出來にくい。資本家の壓迫と云ふのにも色々の種類がある。資本家がどうしても組合を許さ無いと云ふて反對するものと、その程度では無くとも、勞働組合に賛成し無いものとがある。反對し無い程度で自ら縱斷組合を作るものもある。一般に三井系統は反組合的の態度を取り、三菱系の諸工場は反對し無い程度で縱斷組合を造りたがる。松方幸次郎氏も縱斷組合式の考を持つて居る。武藤山治氏も今日の女工は年齡が幼いから資本家側から進んで溫情主義を實行するより外に道はないと云ふて居る。古河系は組合を公認して居る。久原が日立鑛山で取つた方式は三井が九州の炭坑でやるのと同一で、破戸漢を使用して勞働組合を妨害しようとするのである。私は大正九年五月二十日大牟田市の私等の演說會に三井の役員だと稱する破戸漢が演說の眞最中千五六百人の坑夫の集つて居る中を攪亂の目的か演壇に登り來り組合のビラを破つたのは鑛務所の役員だと詰問した一馘首勞働者の言質を求める爲めに亂暴な言葉を吐きその後ひつゝこくその勞働者に付き纏ふて居たのを見た。それで私はこの手段が久原か日立で勞働者を怒らしたのだと思つた。

勞働組合は勞働者が自覺してくれば資本家の壓迫位いは少しも恐れ無いが、資本家と官憲はいつでも聯合してくるので、一寸と困難を感ずる。特に日本のように官憲──特に警察が資本家と關係の深い處では、勞働者は恐ろしく壓迫せられるのである。米國でも一九一三年コロラドのストライキに軍隊が數百人の勞働者を射ち殺したことが有つた。それはロックフエラー所有の鑛山勞働者を州の軍隊が射ち殺したのであつた。之などは極端な資本家が勞働者に對する軍隊的壓迫の一例であるが、勞働者は無力である爲めに常にこの樣な虐待に甘ぜねばなら無い。それで勞働者はこの資本家の壓迫に對して、五種の手段を取るのである。(一)ストライキ、(二)サボターヂユ (三)組合證票 (四)ボイコツト (五)工場締付 (Closep shop) がそれである。然し勞働者の多くは、日本に於てはまだ資本家の溫情的設備に甘じて、それ以上に戰鬪にならうとはし無いのである。

資本家の壓迫は忠實に默つて働くものには加はら無い。發言「

するもの、ストライキを煽動するものには加はる。資本家は飽迄儲けたいのである。それで勞働者を勞働力發生器としてのみ雇入れるのであつて人格として雇入れたのでは無い。それで勞働者は人格として資本の前に立つ時にいつでも反對に會ふことを覺悟して居らねばならぬ。

今日資本家の最もいやがるのは組合として横斷的に關係をつけることである。即ち階級意識が組合運動に加はることを恐れるのである。それで川崎造船所の如く縱斷組合が多く出來るのは資本家の爲めにはなるが、勞働運動の爲めには少しもならないので、資本家は相變らず多く餘剩價値をそれによつて發生せしめるのである。それで今日最も不都合なのは所謂事業主組合なるものを設けて眞の勞働組合を妨害することである。勞働者としては勞働組合を作つた積りで自らの良心を鈍らし實は資本家の爲めを圖つて居るのである。そして資本家側から云へば、勞働組合を作らした積りで、彼等自らの良心をも鈍らすのである。即ち互に良心を欺いて中途半端な組合を作つて居るのは實は資本の威力を懼れて居る結果である。この點から見ると日本の勞働運動は前途程遠しと云はざるを得無いのである。

勞働制度と組合組織

勞働制度と云ふのはこれまでの親分兒分の關係、現今の工場に行はれて居る、伍長制度、炭坑にある飯場制度などを云ふのであつてこの制度が勞働組合を組織するに最後に邪魔になるものである。

西洋でも伍長（Foreman）の位置に就て隨分議論があるが、或組合は伍長は資本家側につくものだとして一八八九年前まで米國の卷煙草工組合の如きは凡ての伍長を排斥したものであつた。然しその頃でも二人以下の人を使ふものは組合員に加入しても善かつたのである。一八九三年以後はそれが六人以下と云ふことになつて居る。然し今日でもまだ伍長級を排斥して居るのは（一）洋服裁縫工組合（二）鐵、銅鐵、錫工組合（三）煙草工組合、（四）印刷斷裁工組合（五）錫板工組合（六）金屬磨工組合、（七）綴衝器工組合、（八）鉛眞鍮工組合（九）帽子工組合（十）醸造工組合（十一）家具工組合等は、もし自ら手を下さ無いものであるならば勞働組合に屬せ無いことになつて居る。然し印刷工、寫眞印刻工大理石工業に於ては伍長は必ず組合に加入せねばならぬことになつて居る。（F.E. Wolfe: Admission to American Trade

Unions, P. 136)

この所謂『長』階級問題は日本に於ても一大問題であつて、友愛會の初期に於て、勞働組合に率先して加入したものはこの『長』階級で有つたが、友愛會のデモクラチックの精神が明白となり、反資本主義的の色彩が濃厚となると共に、伍長はその地位を自ら危むようになり、日本に於ては大正八年九月神戸川崎造船所のサボターヂュの如きは伍長以上を全部排除し、伍長心得六百餘名が結束して一萬六千人を團結させたのであつたが、その爲めに伍長以上は『反勞働組合』の行動を取るようになつたが、遂に大正九年一月東京市外大井町の園池鐵工所のストライキの時には伍長級を選擧することを會社に要求して之に成功した。之などは日本に於て如何に『長』階級問題が勞働組合運動の重大な問題となつて居るかを示すものである。今日でも勞働組合が伍長を中心にして出來て居るものは澤山ある。伍長一人を組合に入れるならば、その部下のものが命令的に五十なり百なり入れさゝるのである。然しその伍長が組合に反對したい場合にはまた命令的に組合をやめさせるので、結局は專制的勞働組合が出來るのである。然し伍長が組合員であれば會費を徴集するのでも非常に便であるけれども、伍長が反對である場合には、勞働組合は非常に困難な地位に立ち、會費を徴集して居ると、伍長は自分に對する反對運動でもして居るのでは無いかと心配して極力妨害するのである。

そんな風であるから、今日の『長』階級問題は勞働組合では一つの大問題である。たとひ、勞働組合が出來上つても、組合の實力を握つて居るものは『長』階級であつて、デモクラチックの思想が何にも役にたゝない。皆恐る恐る組合に出て居ると云ふような風である爲めに眞に勞働組合を發達させることが出來ないのである。

殊に之が土方などになると、この職工仲間の『長』階級が無い代りに、それより恐ろしい親分なるものが居る。大正九年二月五日に爆發した九州八幡製鐵所の罷工破りには、戸畑の親分が兒分數千人を率ゐて罷工を破らんとしたのであつたが、日本に於ける土工百萬人は全く、この親分組織になつて居る爲めに所謂國粹會なるものの成立を可能せしめるのであるが、この親分なるものがまだ工場や鑛山で幅をきかして居る間は、いくら産業組織が發達して勞働組合の必要が感ぜられるも駄目である。

親分とは要するに不勞所得や、餘剩價値で生息する資本家に買はれて居る私設警察と云ふことであるが、この私設警察は皆

通の警察の如く正義や人道を思は無いで、凡てが私利私慾を以て通し、それを權力で押通さうと云ふのであるから仕方が無いのである。然し今日の資本主義の時代にはまだこんなものが自分自らは善いことをして居る積りで居る。自分等は秩序の維持者の積りで居るから仕方が無いのである。要するに上に擧げて來たように凡て餘剩價値の少しの甘い汁でも嗅がされて居る伍長級以上のものなり、親分なり、納屋頭、飯場頭、室頭等は初めの中は勞働者の味方の積りで居るが、自分がもう不勞所得を吸ふことが出來ぬと思ふと、最後の段になつて謀叛者となるから、我等は餘程注意をし無くてはならぬし、勞働組合の事務の進捗がそれ等の潜勢的勢力で支配され破壞されるものであることをよく知つておかねばならないのである。友愛會關西勞働同盟の如き第二回組合に於て、工場の民主化の綱領の中に、『長』階級の選擧と云ふことをその一つの決議にして居る位であるから、今後この問題は餘程六ケ敷い問題になるであらうと思ふ。

組合經濟と組合心理

會員の收入　會員の收入は組合の成立に非常な影響がある。收入の多い會員は少し位いの金に困らないから會費も多く出すし、支拂にも善い。然し收入の惡い勞働者は會費を恐れて這入らない。米國では菓子工組合の入會費は二百弗から二百五十弗であり、シカゴ及セント・ルイスのエレベーター建築組合は五十弗の入會費を取つて居る。こんなにしてでも入會するものがあるのと（F.E. Wolfe: Admission to American Trade Unions, P. 26.27）日本のやうに僅か十錢の會費の値上げをしても會員が減るのとは餘程違ふが、收入の少ない勞働者を包含する勞働組合は英國あたりでも、一ケ月三十六錢位しか徵集し無くて、日本の諸勞働組合のように惠與金を廢してたゞ或一部分の勞働運動の爲めにその金を使用すると云ふものが多いのである。不景氣の時に組合員の減退するのは金の爲めである。それで紡績女工の如き收入の少ないものには組合費はどうしても割引せねば會員はどうしても增加するものでは無い。米國あたりでも、女工の入會金や會費は男子などより遙かに安く、或組合では半額にして居る所もある位である。即ち陶工組合、製紙工組合、製帽工組合等は女工に割引を與へ、裁縫工は半額として居る。日本でも友愛會の婦人部は女子の爲めの割引があり、大阪印刷工は半額を規定して居る。（F.E. Wolfe: Admission

to A.T.U.P. 91）

會員は殖えても會費の收まらないのは、日本も西洋も同じだと見えて、一九〇八年米國煙草工組合は五萬人から組合員があるのに約一割しか云ふことを聞かぬと報告してゐる。矢張一九〇八年鐵道列車乘組員組合は十萬の會員があるのに、會費を拂ふ者は、僅に一萬三千五百人だと報告して居るのを見ると如何に六ケ敷ものであるかゞわかる。この樣にして一時に組合員が殖えても何にも役に立たないものは澤山ある。之が主として會計に關係して居るので困つたものである。

會費能入率　會費の納入率は日本の勞働組合などでは實に惡いものである、友愛會などでは二割五分の不納はいつでも見て居るようである。それがまた月によつて違ひ、ストライキの月は成績が惡しく、特別の寄附金を募集するとその爲めに毎月規定の會費を納入し無いと云ふ有樣である。之は日本の勞働者が、資本主義的經營に慣れて居て、雜誌や新聞を無代價で資本家から貰ふ癖がある爲めに、勞働組合に這入れば、得するばかりで損することは無いと思ふことの大きな眞違から起るのも一つの原因である。非道い月になると八割五分の未納がある時がある。一體に冬期の納入は成績が惡いのである。

然し最近日本の勞働者も目醒めて來て、ストライキの場合に基本金を一度に集め得るようになつたことは面白い現象である。大正八年九月川崎造船所のサボターヂの時には凡ての勞働者が一日分の日給を支出した爲めに三萬五千圓の基本金が出來たのであつた。それで馘首職工を救濟する計企であつたのである。すると面白いもので、馘首されても一千圓も二千圓も貰へるとなると、我も我もと戰鬪的になつたと云ふのであるから面白いものである。之はその後園池鐵工所事件にも大阪鐵工所罷工の際にも實行されたが、多分日本の勞働運動の一つのレコードになつたことゝ思ふ。（五行缺）

惠與金と組合　勞働者を組合に繋ぎ止めるにはどうしても惠與金（ベネフヰート）制度が無くてはなら無い。その制度の經濟的組織に就ては心理的に研究する私に取つては直接必要では無いが、それが組合員の心理に影響するから私は見逃すことが出來ないのである。勞働組合と云ふものが兎に角凡ての勞働者を繋ぎ止めることになるとすれば、惠與金は兎に角勞働者を繋ぐには足るものである。勞働組合の初期に於ては色々なことをしなければ勞働者が集ら無い。それで、惠與金も、餘興入の演說會もやるのである。その中に勞働組合が出來上るのである。そうするとも

う惠與金無くとも自覺した勞働者のみで團結することが出來るのである。

餘興入の勞働演說會は日本だけかと思ふて居ると米國あたりにも勞働者を集める爲めに使つて居るようである。(Wolfe: Admission to A. T. U. P. 91) そんな風であるから日本でも大正七年の暮まではまだ餘興入の勞働演說會を開いて居た。ただ最近になつて勞働演說會だけで勞働者が集るようになつたのである。それで今日でも婦人勞働者を集める時にはまだ餘興を入れて居る處が多い。之は一つの工夫である。

惠與金は之よりは進歩して居るけれども惠與金が無くとも充分團結出來るので無ければ眞の自覺と云ふ可きでは無からう。然し最初の勞働組合が葬式組合や、相互扶助機關であつたことを思ふと、日本の友愛會の如く全く相互扶助を離れた組合があることは一段の進歩であるかも知れ無い。

之は直接の惠與金と云ふのでは無いけれども消費組合や購買組合も勞働者を組合に繫ぎ止めるに便利なものである。友愛會の中で最も大きな消費組合を持つて居るものは、播州相生の播磨造船所にあるものであるが、會員千五百人は凡て購買組合に這入つて、市價より一割乃至二割方安く凡てのものを買ふて居る。それで、妻君が勸めて組合に這入らすと云ふ有樣である。それでこんな恩惠的なことがあれば組合は人員だけは增すことは出來る。

然しどんな惠與金制度の不完備な組合でもストライキの爲めにだけは色々と準備してストライキ惠與金を貯へて居る。之は產業的勞働組合に於ても實行して居る所であつて、今日の所勞働組合の目的は最後の武器としてストライキをするより外に道が無いのであるから、彼等はストライキ基金を常に持つ必要がある。ストライキ基金は平常は別に示威にはならぬがいさと云ふ場合には組合の信用を大に增すものである。

(一行缺)

個人保護と組合心理　然し勞働者の多くはまだ幼稚である爲めに組合の精神を理解し無くて何でもかでも組合に持つて來るものである。それで、今日勞働組合は殆ど敎會以上に個人的保護の世話をしなければならない。病人、癈疾者保護、對資本家の凡ての問題、金錢貸借、その他凡ての問題を持つてくる。それで、組合の主務とか幹事の急しいことと云へば殆ど話にならない程である。家庭の小さいことまでをも持つてくる。それを一々世話をして居ると組合は餘程評判が善いのである。そし

て組合員は增加するのである。たゞ面白いことは景氣の善い時にはどんなことも持つて云つてくるものは少ないが、少し不景氣になると澤山それを云ふてくる。それで今日の不景氣で、凡ての組合はまた、惠與的設備をせねばならぬ必要が起つたし、個人的保護をもせねばならぬ樣になつた。

失業救濟と組合心理　個人的保護の中にも、失業救濟の如きは直接組合の職分として便利に出來るものであるが、日本の勞働者の間には緣を引いて、互に職業を紹介して居るから、勞働組合を通じてよりか、勞働組合員を通じて、職業の紹介をして居る者は頗る多くある。然し最も困るのは組合運動の爲めに馘首されて、失業する人々のことである。その爲めには組合は隨分苦心して奔走するのである。或時には東京から九州まで人をやつてその救濟に盡力をする。然し今日日本全國に連絡が取れて居るのは友愛會だけであるが、之が發達すれば、失業問題などでも比較的容易に解決出來ると思ふ。

失業が多い時には、勞働者は組合のことを餘り八釜敷云は無い。食ふ事が先づ第一であるから工場締付主義(closed Shop)を八釜敷云ふ勞働組合でも失業のない時には常時それを云は無くて、何處へでも勞働者が仕事にありつける所へ這入つて食へるだけのことをすることになつて居る。

工場締付と組合心理　勞働者がその賃銀や雇傭條件を維持する爲めに、工場を締付けて獨占するのであるが、もし勞働者の力が强くて、工場を締付け得るならば勞働者はその勞働に於ては思つた通りの經濟狀態を維持することが出來るのである。然し工場を獨占的に締付けるまでには色々な心理作用が行はれるものである。

工場締付の歷史は米國などでは三大時期をなして居る。

第一期（一七九四―一八〇七年）地方組合が工場締付に努力した時代

第二期（一八七〇―一九〇一年）地方組合の締付が全國的になる

第三期（一九〇一年より今日まで）その後の維持

最初の一七九四年に締付を斷行したのは米國に於ては印刷工であつた、その次が紡績工であつた。それが一八三五年には社會的に認められた。然し之は機械工業以來のことであつて、中世紀に於ては締付主義はギルドに於て殆ど一般的であつたと云つても善い。(Frank T. Stockton: The closed shop in American Trade Unions, P.33―57)

日本に於ては締付工場と云ふものが全く無いが、米國に於て締付工場及仕業には次のようなものがある。煉瓦積立工、石工、製帽、硝子瓶、レース製造、鉛管、石造建築、窓硝子工、レーザー職工、植字工、舞臺掛人夫は凡てが組合員である。その他のもので組織されて居る分率を示せば次の通りである。

理髪業	九五%
製本	九〇%
大工	九〇%
巻煙草工	九〇%
リスノグラフ活版工	八五%
仕立工組合	八〇%
鍛冶工	八〇%
ペンキ及壁紙貼工	七五%
農具工	七〇%
仲仕	六〇%
小賣店員	五〇%
市内電氣從業員	一五%

熟練職工程締付工場を多く設けることが出來るものである。(Weyforth: Organizability of Labour P.116) 然し締付と共に無理が出てくる。…………………………………………

……

然し或一部の論者の中には自由主義を唱へてこの工場締付主義に反對するものもあるようであるけれども理論から云へば少しもそれは徹底したものでは無い。……………………………………………………………………………………………………然し之から先は思想問題と經濟問題とが相聯絡して居るのであるから、私は社會思想即ち社會的輿論が組合心理に與ふる影響を研究しよう。（以下次號）

咬豆茶話

▲飛行家というのは、何處でも品性の下劣なものと相場が極まつてをるらしい。今回日伊一萬哩を飛んで來たローマ飛行家も、支那からは香しからぬ土産を持つくる、紅葉館では日本のマダムを泣かせる、精養軒では女給から散々な抗議を提出される、陸海軍の接待員からは苦い顔をせられる、殆んど前例にない味噌のつけかたらしい。

▲トコロで、それに輪をかけた大馬鹿モノは、某外交官の　夫人が衆人環座の前で、その飛行家に接吻したとのことだ。その名前だけは本人名譽のために暫くお預りとするが、何でもその夫人の親爺どのは、華族であるとか、ないとかのド豪いお仁だそうな。

▲接吻された飛行家はその場では一寸面喰つたか、イヤ〳〵それが正銘の貴婦人たることが判明して、サテは飛行家の訪問となり、外交團の問題となり、接伴員の憤慨となつた、サテ〳〵お暑いこと〳〵。

▲西洋でさへ、肉身の親子兄弟か、相愛の夫婆でなけりや、やらぬ接吻を、一面識位で大負けの接吻、イヤ大墮落した接吻をした貴婦人とは誰のこととダイ。

▲イヤ、モウ一人それ以上なのがある。これは某成金——成金といつてもモウ——中古成金——の令孃だが、試驗場の將校に大そうなノボセ方で、態々大阪クンダリまで出奔しての道伴れとある。何でも山の字が頭につく麻布邊に住んでおる大金持の秘藏娘だ。その令孃はそれ以來、邸内に監禁されたそうだ。某西洋人の曰く、日本ちや、八百屋の娘をだますより、令夫人、令孃の方がマア近道サ。

▲飛行家の曰く、日本ぐらい空中戰爭の恐ろしい國はない。地下室はなし、總ての家屋がマツチ箱見たいな木造だから、今茲に三人の飛行家が空中より爆彈を投ずるとすれば、東京全部は三時間で烏有に歸する。二三箇師團は減じてども、二三軍艦を減じてども、飛行機の完成と家屋の改造を急がねばならぬと。

▲味噌の序に、もう一つ大味噌をつけた話をやる。それはこうだ。増師案以來原と上原とは、犬猿啻ならずのお目出度い仲だが、參謀本部は撤兵とか、減兵とかになか〳〵耳を傾けない、國中は自巳擁護か、國議頭腦か知らぬが、本部と原との間に緩衝地帶をつくつてゐる。浦鹽司令部では、その何れに從つてよいか戸惑ひをする。松平政務部長は大井の命をオイソレとは諾はぬ。

▲搗てて加へて、海軍の方では又別箇の方策で歩いて行く。コウ改府の遣つた命令が三つも四つも出られては出先きの師團長や、參謀は敵を眼前に受けても、全く手も足も出ない。尼港事件はミンナそのダラ〳〵した氣分で孤立、籠城、慘殺と來たものだ、思へば氣の毒なのは護國の鬼となつた彼等六百名の國民である。對外問題の總てにダラ〳〵しておれば、總てがこの歸結で國の前途が思ひやられる。

▲當年取つて二十八の茂木惣兵衛君でさへ、財界の恐慌から七十四銀行が破綻したために、自身の家屋、全財産を投出して男らしい處決したではないか、六百名をムザ〳〵敵手に委した當局の罪、假令へその責任が陸軍であろうと、海軍であろうとそんなことは知つたことでない。皆なそれは原サンの對西伯利政策を誤つたのが源因だ、寧ろ男らしく此際責任を負ふべきであると某國儀は泣いて語つた。

性的差別待遇撤廢論（男女賃銀問題の研究）

山川菊榮

この論文は、ビアトリス、ウエッブ女史の Wages of Man & Woman: Should they be Equal? 本誌五月號河田氏論文參照の大意を紹介したもの。英國では戰時中婦人勞働者が激增し、在來習慣上男子の職業となつて來た職業に於ても、特に政府と組合と協定を遂げて女子を採用することゝなつた。然るに其節政府は男子に代用せらるゝ總ての婦人は、男子と同給を受くべきであると誓約したにも拘らず、其誓言は殆ど省られず、同一仕事に於ける男女の賃銀率は著しく相異した。そこで婦人側の輿論がやかましくなつたので、一九一八年九月、ロイド・ジョージは產業婦人に關する委員會を設置し、男子及び女子の賃銀率を支配すべき最良の原則を調査せしめた。此時ウエッブ女史は他の五名の男子と共に其委員に任ぜられたのであつたが、女史の意見は他の五名と相異した。玆に紹介するのは、其女史獨特の男女賃銀論である。但し此委員會の任務は飽まで社會の現狀に於て可能なる程度の賃銀支拂方法改良の研究に留まる、隨つて女史の考察も其範圍を踏み出さぬように努めたものであることは緒言の中にも斷つてある。要するに此論文の價値は、男女賃銀率の相異のいかに不道理にして有害であるかを最も明快に論破した點にある。

第一章　在來賃銀を決定し來れる諸原則

一、個人契約の原則　十九世紀の前半を支配した賃銀決定の最も有力な原則は、男女に拘らず、一切を市場の値切り合ひに放任し、一人一人、『需要供給』に伴ひ、傭主との個人契約を結ぶ所の、謂はゞ無原則の原則とも云ふべきものであつた。今日猶此原則は全然廢棄せらるゝに至らず、大戰勃發の當時に至るまで、英國婦人勞働者の大部分、及び數百萬の男子勞働者は此原則に支配せられて居たのであつた。然しながら、經驗の結果、斯の如き混亂狀態を放置しておく結果は、極度に劣惡なる勞働及び衞生狀態を誘致し、惹て生產上及び保健上社會一般に取て由由しき危險を醸すことが證明せられた。

二、最低條件の原則　そこで斯の如き危險を豫防する必要上、其れより以下の條件では、何人をも働かせてならぬといふ、最低勞働條件を決定し強制する思想が生れた。

此最低條件なるものは、第一に廿四時間繼續する休憩時間、第二作業上の保健及び災害防止設備、苦痛除去等の件、次に、幼少年勞働者の教育及び雇傭條件の規定、而して最後に最低賃銀の制定といふ順序で實施せられた。

最低勞働條件は、其原則に於ても、適用の場合に於ても、男女の間に差別を設けて居る。最初兒童の保護に限られた工場法は、其後婦人にも適用せらるゝに至つたが、男子に適用せられたのは、それより遙か後であつた。時間の制限は、久しく男子に適用せらるべきものでないと考へられて居た。而して法定の最低賃銀額は、男女に依て著しく相異し、女子は通例男子の八分五乃至四分三を支給されるに過ぎない。今日、時間や賃銀の點では、成年男子も女子及び少年同樣に法律の取締を受けて居るのであるが、猶一般に、女子に對しては、男子より遙かに複雜綿密な保護や制限が必要であるとせられて居る。女子に限る勞働時間及びオバータイムの制限、日曜就業及び夜業の禁止、鑛山の地下勞働及び或種の工業に於ける婦人雇傭禁止、産後四週間の勞働禁止等は、その實例である。のみならず、開戰後、兵器省が制定した多くの職工保護法規は、殆ど悉く婦人及び小兒にのみ適用せられ、其爲めに、婦人の勞働は、在來男子のみを傭つて居た工場では經驗したとの無い新たな負擔を、傭主及び納稅者に對して掛けるようになつたのである。

三、團體契約及び職業賃銀率の女子に對する影響

個人契約に依る其原則の賃銀協定に對する自發的防衛策として起つたものは、團體契約を以て之に代んとする目的をもつ勞働者の一致結合と、或職業又は或階級に屬する勞働者間に共通の最低條件決定とであつた。之は職業又は標準賃銀率とも云ふべきもので個々の勞働者の資格如何に拘らず、其職業に採用せられた以上、何人も其れ以下の條件で働くことは許されぬ。然し其れは單に最低條件たるに留まつて、人々が其能力に應じて、それ以上、遙かに多額の賃銀を受けることを妨げるものではない。之にも時間外勞働、夜業、特に困難又は不快なる仕事等に對する手當は別として、通例單に勞働時間を標準とするものと、出來高拂ひに依るものとの三種がある。

教師や官吏の如き精神勞働の場合も、能力や其時々の仕事の性質に拘らず、一定の標準に依て俸給制度の下に支拂を受けるが常である。其他醫師辯護士の如き自由業に於ても、謝禮の最低標準は一定して居る。

職業賃銀率を決定するものは、筋肉勞働の方面に於ては、主

として傭主と勞働者との間の經濟力の優劣であるが、此兩者の間の鬪爭は、勞働者の補充の難易や代用せらるべき生産物や生産過程の有無多少に依て常に影響せられて居るのである。が面白いことには、職業賃銀率を決定するのは、專ら經濟力の釣合ではなくて、政治上の壓迫や、習慣や慣例やが重大な勢力を有する點である。

職業賃銀率に基く賃銀協定法は、現在の狀態に於ては、女子の賃率を低からしむることを大に扶けて居る。婦人は男子ほどに團體契約の方法に訴へることを爲さず、傭主に政治的壓迫を加へることも無い。又生活費の騰貴に對する賃銀の値上げは、常に婦人に對しては不利な影響を及ぼした。久しい習慣から凡ての高給職業は男子の獨占とせられて來た上に、男子には家族扶養の義務あつて女子には其れは無しといふ口實も亦た、女子に不利の結果を齎らす爲めに利用せられた。そこで、全ての產業を通じて、男女の賃銀率は、別個のものとなるに至つたのである。

四、賃銀を物價に順應せしむる原則　既に最低賃銀及び職業賃銀率存在の目的を是認する以上、生活費の昂騰に伴ふ賃銀の增加は、當然の事としなければならぬ。所で戰爭中の經驗によると其割增の方法にも樣々あつて、高給者に厚いのもあれば薄給者に厚いのもあり、又地位の上下に關せず、總ての者に一樣に增額を行つたのもある。然るに凡ての場合に共通の特徵は、婦人勞働者は一般に男子より手當の支給が薄く時には全くそれに與かれなかつた一事である。之に對しては、或は婦人は親がかりの小遣取勞働等に過ぎぬとか、或は家族扶養の義務がないから、物價の騰貴は苦痛でないと說く者もあるが、どの道、物價が騰貴すれば、婦人の懷に入る賃銀も、購買力を減ずる點に於て男子の其れと異る筈がない。然るに彼等は、組合組織の不十分と、微力とに乘ぜられて、男子と同率の値上げを斷行されたことが殆ど無いのである。

五、家族扶養の義務に依て賃銀を決定する原則　傭主が勞働者の爲めに特に家族扶養料を支出することは稀有であるが、一九一四年、英國政府は兵士の家族保護の爲めに此方法を採用した。此際英國の半數の家族が其數と年齡とに應じて收入を得たのであるが、超えて一九一八年十二月、廢兵及び戰爭終熄に伴ふ失業勞働者一般に應じて此原則が應用せられた。此際には男女を問はず、勞働者が扶養すべき子供の爲めに特別手當が出たのであつた。同樣の手當は、戰時中諸官省及び地方官廳

に依ても支給せられたが、其場合には『所帯主』と獨身者とに依て、手當の率が相異した。然るに女子は此孰れの範疇よりからも除外せられ、男子は一人を扶養する毎に、其れだけ餘分の手當を受けたに拘らず、女子は遂に其れを受けなかつたのである。

然し家族の多少に依て扶養手當を支出するの意味でなく、一般の賃銀率を決定する原則は、遂に採用せられなかつたが、左樣いふことが問題となる毎に、それは常に婦人にとつては不利な結果を來した。即ち婦人は一般に家族扶養の義務なしといふ假定の下に、たとへ男子と同一業務に從事し、同一成績を擧げようとも、婦人の賃銀は。常に男子の其れより遙かに低いことが當然とせられて居た。之は筋肉勞働のみならず、大抵の職業に共通の現象で、敎師の如きに就ても、政府當局自ら、女子は其熱心に於て其能力に於て、決して男子に劣らないが、其職業生活は一時的で、男子の如く扶養の義務を負はぬが故に、俸給は少くて好いのだと公言して居る有樣である。

六、男子優先權の原則　婦人が殆ど總ての高給職業から除外されて居るのは、其等の仕事は神聖犯すべからさる男子の領土であるといふ假定の結果である。婦人が下婢又は身内の男子の附添たる以外獨立の賃銀勞働者となつたのは、僅かに十九世紀以後のことで、今日猶ほ彼等は多くの職業から除外されて居る。例へば辯護士や司法官の職務を始め、高級官吏にも採用されなければ、大學敎授、專門學校の校長などにも滅多に任ぜられない。筋肉勞働の方面に於ても、戰前婦人は收入多き職業に就くことをも、そういふ職業に必要な智識を收得することをも許されなかつたのである。精神、筋肉の兩方面に於て、專ら男子の利益のみが擁護せられて來た。十八世紀末葉以來、婦人の賃銀勞働者は殖える一方ではあつたが、綿業其他一二の職業に於ける外、婦人はいかに能力があらうとも、不熟練男工の最低級の者が從事する部門より外に入ることを許されなかつたのである。

傭主は常に女子の就職を歡迎するが、其れは標準的職業賃銀率を一般に低めんが爲めであつて、男女同給の原則に依り、職業を女子に開放せよといふ忠告を職工組合に與ふる者は殆ど無い。殊に多いのは、新しい機械の採用に依て工賃に變化を生じ、在來の男子の仕事に女子が採用されることゝなつた際には、女子は一層低廉な賃銀で傭はれる。又新に女子を採用する際に仕事を小分けしたり、機械の裝置に些々たる變更を與へたりす

ることを口實として、男子に代用される女子に同一賃銀を拂はぬことも珍らしくない。

然し男子の賃銀率に對するそれとは別に、婦人の就業が獨らす樣々の影響がある。其一は、一體在來の男工のみを用ゐた工場に女子が採用される時には、特に不潔、不健康、不愉快な仕事は、凡て男子のみの仕事となる點である。例へば夜業のある工場では、女子の夜業禁止の結果男子のみが之に當ることゝなるのである。

開戰までは産業上に於ける男女の職業分野は截然と區別せられ、男女が同種の仕事に從事し、又は同一物品を生産することは極めて稀であつた。斯樣に男女各々其就業方面を異にする結果、勞働時間や肉體又は精神的勞苦と比例する譯でもなく、又傭主に對する價値とも無關係に、男子賃銀率、女子賃銀率といふ別々のものが出來上つてしまつた。例へば、男教師と女教師とは、どちらが社會にとつて價値が多いかといふことは別に、一般に女教師の俸給が男教師の其れに劣るが如きは、男女賃銀勞働者間の通例である。

そこで婦人は單に婦人なるが故に、職業賃銀率の比較的高い職業よりは除外せらるゝに至り、男子の職業と女子の職業とは習慣的に別個のものとなり、且つ女子の職業賃銀率は、男女の努力や、其生産力や、社會的價値とは無關係に、決定的に男子の其れより低いことゝなつたのである。

七、就職者の資格を限定する原則　職業賃銀率の標準を嚴正に維持する必要に伴ふて、就職者の資格を限定する方則が廣く採用せらるゝに至つた。之は就職者が、少くとも或程度の能率を有せざる競爭者を排して、職業賃銀率を維持すると共に候補者間の競爭を賃銀の高低でなく、質の優劣に集中させるものである。一般に職工組合は此被傭者の資格制限を歡迎し、或種の職業に於ける法律上の資格限定をさへ要求した事が少くない。のみならず、組合は屢々『完全なる資格』即ち今日では時代遲れとなつて居る長年月の徒弟奉公の終了をさへ要求したりする。然るに此徒弟奉公は男子に限ることとなので、斯樣な經歷を重ずることは、勢ひ左樣いふ道を踏む折なき婦人の賃銀を低める一つの原因となつたのである。

八、同一仕事に對する同一賃銀の方則　同一仕事に對する同一給料といふことは今日流行の主張ではあるが、其內容に就ては殆ど人毎に解釋を異にするので、未だ一般に承認せられたる原則とすることは出來ない。第一の解釋に依れば、同一

仕事に對する同一報酬とは、當事者に對する、生理的及び精神的結果に關し、其仕事が本人から誅求する努力と犧牲とに應じて報酬に區別を附する、といふ意味である。然しながら、私の考へでは、勞働時間より以外に、其等を精確に計量すべき標準は無い。そこで之は結局仕事の種類に依て報酬額を一定する結果となるので、俸給生活をする多くの精神勞働者は、此原則に依て分配を受けて居る譯である。

第二の解釋は、此原則を以て量及び質に於て、同等なる生產物を生產することに對して、同一報酬を與ふるものとして居る。之は最も普通に行はれて居る解釋で、之に依れば、男女同給とは、男女に共通の請負賃銀率を採用する意味となる。

然るに傭主側の云分に依れば、斯樣な支拂方法は不滿足である。何故ならば、勞働者の賃銀だけが唯一の生產費用ではなく、工場の諸設備に要する費用も其中に含まれねばならぬ。然るに女工を使用する場合には、時間の制限があるので人數も多く要れば、種々の衛生及び保護の設備をしなければならぬので、生產費が男工のみの場合よりも遙かに高額に達する。隨つてたとへ同一能率を擧げ得るとしても、男女に同給を與へては引合はない。然し吾々は、男女工の生產費が同一でさへあれば喜んで女子を傭ふので、生產費用を同一ならしめんが爲めには、女工使用の際、男工の爲めには不必要な設備の爲めに要する費額を、賃銀で差引く外ない、とは資本家の唱へる所である。斯くて此種の傭主に隨へば、同一仕事に對する同一報酬とは、『同一價値に對する同一報酬』を意味することになるのである。

今一つ資本家側が、男女に依る請負賃銀率の相異を是とする理由がある。其れは、たとへ與へられたる仕事に對する男女の能率は同一であり、時には女子の方が優れて居ようも、大體として男子の方が臨時に融通が利く。例へば市街電車の車掌としての男女の價値は同一であつても、不慮の故障が生じた場合、男子の方が力業も出來れば機械の修繕も出來るので、女子より遙かに役に立つ事が多いと云ふのである。斯樣な人々は、『同一仕事に對する同一の報酬』とは、同一潜在價値を標準としての立言であると解して居るのである。

斯樣に『同一仕事に對する同一の報酬』といふ言葉は、取り樣次第でどうともなるのみならず、男女勞働者が精密に同一工程に從事することは極めて稀なので、此原則を實際に通用することは、一層困難となるのである。實際男女の就業方面には、

常に多少の相異あり、婦人を男子に代用する場合ですらも、工程又は機械装置に多少の變化を加へるのが常である。而して斯様な變化は、女子勞働の價値を低く見積りたがる資本家に有利な口實を與へ易く、時々は男女同給の要求を防止せんが爲めに、女子代用の節には、故ら工程や職工の配置の上に、さまで必要でもない變化を與へることさへある。俗に『仕事を貶す』といふのは此事で、資本家は斯して仕事の價値を低く見積り、賃銀を値切らうとするのである。

對外競爭に依つて賃銀を制限する原則　或論者は、對外競爭上の利便如何に依て決められなければならぬと主張する。即ち生產物の價格を支配するものは勞働の多少であるから、外國品に勝たんが爲めには、國內勞働者の賃銀を外國の同種製品の勞賃以下に留めねばならぬと云ふのである。此原則は勿論男女の賃銀に共通のものではあるが、實際上婦人の賃銀を法外に廉からしむる一の口實となつて居る。何故なら、資本家は特に低廉な勞力に依らなければ外國品に勝たれぬと云ひ、特に低廉な勞力と云へば、婦人の提供する其れに極つて居るのであるから。

然しながら、此內外勞賃の比較は、常に大膽な臆測に出發して居るので、決して精確な統計上の事實に基いて居る譯ではない。其證據には、外國の或職業の勞働者の賃銀が高いといふことが、曾て此國に於ける同種勞働者の賃銀値上げの理由にされたことはない。

而して外國の製品の廉い理由は賃銀の低廉か、生產力の豐富か、自然の利便か、設備の優秀か、經營の老巧か、將た又た資本家が少額の利益に甘んずる結果であるかは不問に附されて居る。結局之は商業的競爭の結果、低廉な勞賃を悅ぶ資本家側の口實にすぎず、而して法外に低廉な勞働は常に女子に依てのみ得らるゝが故に、斯くて女子は資本家の貪慾の犧牲に供せられて居る次第である。

九、利益分配法　個々の會社に於ける利益分配法は、實行されたり中止されたり色々である。が最近には一の會社に限らず、其產業全體の勞働者に亘る利益分配案が採用せられ、又は提出せられたりして居る。此原則を應用した一例は、生產物の賣價を標準として賃銀を高下する銑及び鋼鐵業の勞働仕拂方法である。最近には炭鑛夫組合の發案の如く、組合代表者を合同評議會に列せしめ、額面投資額に對する一定の利子を支拂つた上で、純益の全部を其產業に從事する勞働者全體に分配しよう

といふような要求もある。

利益分配法は男女に等しく適用されるものであらう。が之は男女報酬の不平等を一層甚しからしむるものであることを私は指摘して置かなければならない。何故なら、利益分配率は高給者に厚くして薄給者に薄いのを常とする以上、女子は薄給勞働者として、低率の分配に甘んぜねばならないからである。

戰爭の齎らしたる混亂狀態　大戰は英國勞働市場を混亂せしめ、男女の賃銀率は之に依て一大變動を蒙つた。『男子代用の女子は、男子と同一賃銀を受くべし』といふ政府の戰時契約が、或は實行せられ、或は無視せられた結果として、同じ女子又は男子勞働者同志の勞賃にも甚しき相異を來すに至り、男子賃銀率と女子賃銀率との間の明白な比率を取ることも出來なくなつてしまつたのである。

第二章　廢棄すべき原則と採用せらるべき原則

男女の賃銀率を決定する最良の原則如何といふに、其れは、吾々が實現を希望する未來の社會狀態如何に依て決せられる問題である。所で文明社會の第一の要求は、其社會として可能な最高の生活標準を、全ての人々に保障することである。生活標準といふ中には、勿論生命の維持が重大な要求を成して居るが、猶其上、健康や能率の保全に留まらず、個人的能力及び欲望を最大限度にまで發達し且つ滿足せしむるといふ意味での自由の獲得をも含めなければならぬ。

社會の總員に對する最高の生活標準維持の爲めには、生產力の豐富といふ事が、必須の要件となつて居る。故に此點をも吾々は十分考慮に容れなければならぬ。

次には分配の公平を期する點である。此爲めには、吾々は常に努力と收入との正當なる比例を保つ事を心懸けねばならぬ。

次には次代の國民の養成である。吾々は、親が何をして居ようと、子供は子供として、世間の通り相場より低い生活標準に甘んじさせる事は出來ない。

以上の假定を標準として、吾々は男子の賃銀と女子のそれとの關係を決定する原則を是非して行かうと思ふ。

一、個人契約の原則は廢棄せられざるべからず、一切を個人契約に放任する無原則の原則。即ち『需要供給』一點張りの契約法は廢せられなければならぬ。之は國民の適當なる生活標準を維持し、健康及び能率を保全する所以でもなければ、未來の國民の健全なる發達を扶くる道でもない。然し今日では此

は社會一般に是認せられず、次第に廢滅に歸しつゝある。

二、最低條件の原則は是認せられざるべからず

或程度の生活標準維持の爲めには、社會一般に最低勞働條件を規定することが最急務である。

所で其最低條件を、男女に依て異にすべき理由は全然無い。廿四時間中の一定時間を休養に充てる際、女子は男子より其時間が少くて好い道理はない。仕事場及び家庭に於ける保健、災害防止、不快除去の設備等に就て、女子の場合には男子よりも不完全であつて好いとは何人も云ひ得ない。また人各々その適する職業に就くに必要な教育の機會を、男子の獨占に委すべきでないことは分り切つて居る。

最後に賃銀の問題に就ては、女子は常に男子より低廉にて可とせられて居る。例へば通例女子は男子より小さく、體量も少いから、男子の五分四しか食物が要らぬと說く者がある。然し之は身長五尺五寸。體重九ストーンを境界として人間の食量を限定するよりも遙かに不道理な話である。最低賃銀制度は實際上食欲の相異まで勘定に入れたり、極端な例にまでも的確に添ふ譯には行かない。賃銀は單に食物のみならず、必要なる一切の入費、卽ち衣服、住居、書籍、新聞、旅行、娛樂、疾病等の費用をも含まねばならぬ。そこで其等を以て考慮に入れて見ると、廿一才の男子と廿一才の女子との間に健康と能率を維持するに必要な費用が大差あらうとは思はれない。假に女子は男子より食量が少いとしても、住居や被服には餘計金のかゝるのが常である。女子の方が、疾病缺勤等の爲めに餘計貯金の必要もある。書籍も新聞も、電車賃と等しく女子に限つて廉い譯ではない。故に以上の見地からすれば、法律が全ての婦人勞働者に保障すべき最低賃銀は、男女同額でなければならないとしか、私には考へられない。そこで殘るのは、家族扶養の義務の問題である。

三、職業賃銀率の原則は承認せられざるべからず

全國民の共通の最低條件は、何人をも其れ以下の生活に陷らしめぬといふ、最低の基礎條件を意味するに過ぎず、其金額が勞力又は凡ての勞働者が分配を受くべき權利ある一國の收入に比例し、適當なる又は望ましき程度のものであるか否やとは全然沒交涉の問題である。詰り之は凡ての人間に共通の、最低度の技術に對する最低額の生活費を意味するのであるから、教育の行屆いた文明社會に於ては、何等の技術にも習熟せず、何等特殊の職分にも適せずしして、斯かる最低生活費をしか得ぬ者は

例外に屬するの外ない。そこで最低賃銀率より以上の水準を保つ職業賃銀率の方則が、進歩的な社會には段々普及して來るのである。即ち其れは各職業毎に全國の一般的最低賃銀率よりは高い最低職業賃銀率を有し、斯くて同業者に共通の標準を保つことに依て、其制限の競爭を防止し、共同利害に基く一般的行動を容易ならしめることが出來るのである。實際個人契約の下に於けるが如く、個々の勞働者の雇傭條件が相異する時は、利害の一致を缺くが故に、到底强力に結合することが出來ないのである。

四、男女賃銀率の相異は除去せられざるべからず

或論者は職業賃銀率の必要は認めても、男女に依て其賃率に相異があるのを至當なりとする。女子に低廉な賃銀を支拂ふ習慣は、上に揭げたような經濟的ならざる理由の爲めに久しく根を張つて居た。男女賃銀率の相異は、本來男子の優先權を承認することゝ常に相伴ふて居る。職工組合が、女子が男子より低廉な賃銀で働くことを許す場合には、其れは常に習慣上男子の仕事となつて居る方面には、斷じて女子に於て染めさせない條件の下に於てゞある。

男女に依て請負賃銀率さへも異ることに就ても、經濟的の說明が與へられて居る。即ち傭主側は、或職業に於ては、女子は腕力、熟練、時間の嚴守、疾病の缺勤の度數等様々の點に於て、全體として男子より劣つて居る。時間は女三人で男二人に價せぬ事さへ珍らしからず、此故に女子を多く使用する工場は、男子を使用する其れより、場所を廣く取り、機械を多く要し、諸般の設備に費用が懸かると、主張する。成程之は或職業に於ては大部分事實である。然しながら其等の職業に於て女工の爲めに餘計費用を要するといふことは、同一仕事に對する男女の賃銀率を相異せしめねばならぬ理由とはならない。私は性に依て勞働者を分類し、個々の成員の優劣如何に拘らず、一概に女子は女子として法外に低廉な賃率に從はしむることが何故に正しいかを知ることが出來ない。殆ど全ての職業を通じて、少數の婦人が普通一般の男子より優秀な技術を發揮することは認められて居る。私は是等の優能婦人に、他の多數の不熟練な同僚の傍杖を喰はせねばならぬ必要を見ることが出來ない。性に依て賃率を異にするのは、身長五尺五寸、體重九ストーンを境界として、同じ仕事をする勞働者に異なる賃銀を給するに等しい。一人當りの費用の嵩む點から云へば、女子に限らず、男子でも不熟練な勞働者を傭ふ場合には同じことである。傭主は

常に、女工の爲めには特殊の保護施設や男工の助手が必要であるから、賃銀を高く拂ふことは出來ないと主張するが、左程世話の燒ける、能率の低い勞働者を傭ふのは資本家の勝手であるから、結句其樣いふことを云ふのも、賃銀を低めて置く口實に過ぎないのである。

　職工組合が、組合の關與し得る明白に決定せられた場合を除く外職業賃銀率の遞減を肯じないには、他に理由がある。一體職工の保護施設は、各工場に依て程度を異にし、其程度は傭主が勝手に決める所で、其施設の爲に果して何程の費用が掛つて居るかは、何人も確める權利をも機會をも持たない。工場內の各員が、每週果して賃銀の何割づゝを、食堂や、洗面所や、休憩室や、特に女工の場合にのみ必要だとされる機械の增設や助手や監督の雇人の爲めに割らねばならぬかは、到底精密に算定し難い。のみならず、或婦人達が特に或程度の保護や助力を必要とするからとて、全ての婦人から一樣に其爲めの費用をとり立てることは不公平である。所が實際、資本家は之を口實として、全ての婦人から給料の一割乃至二割を差引いて居るのである。

　同一能率を有する男女に對して、同一賃銀を支拂はぬ一つの理由としては、男子は受持の仕事以外、力業でも特殊の技術を要する仕事でも、又機械の修繕でもすることが出來るが、女子には其れが出來ないといふ論が行はれる。曾て男女昇降機手の賃銀の相異が質問された時、政府委員は上の如き理由を擧げたが、其後、男子昇降機手と雖も、故障のあつた際、決して機械に觸れてもならず、破損の箇所を修繕しようとしてもならぬ規定のあることが發見された事さへある。

　そこでかういふ結論に達することが出來る。もし左樣いふ不時の出來事に備へる技能が必要であり又は少くとも望ましい事であるならば、男女を問はず、全ての勞働者にそれを就職の一資格として要求し、そういふ能力のある者の中から就業員を採用すべきであるし、又それが必要な資格で無いならば――必要でない證據には、旣に其樣な能力の無い者を傭つて居るではないか――其不必要な資格を備へぬことを理由として、正當賃銀を拂はぬことは、非常な謬である。

　がこの男女賃銀率の相異を排斥せねばならぬ一層重大な理由は、そういふ相異は、自ら劣等勞働者の採用を促すことに依て社會全體の幸福や進步の上に必須の條件たる最大生產力の發揮を妨害する點である。即ち、性や、人種や宗敎の如何を問は

ず、凡て其職業に共通の最低賃銀率が維持せられる限りは、能率の如何が勞働者選擇の標準となり、隨つて法外に低廉な劣等勞働者の代りに、優れた勞働者が多く使用せられ、社會全體の生產能率が高まる譯であるが、其れに引換へて、性や人種の故に或人々には特別の賃銀率を以て宛てるとすれば、惡い其反對の結果が得られるのである。

男女に依る賃銀率の差別を非とする理由は、同時に勞働時間、衞生保健の設備等、凡て他の勞働條件をも男女に依て異にすることを非とする理由となる。工場法は勞働者を保護して、國民全體の能率を大に擧げはしたが、其れが未だ或產業、或地方、又は女子のみに限られて居る結果として、未だ十分の効を奏することが出來ない。勞働婦人委員會の多數意見は、婦人勞働者のみを保護すべき工場法の擴張を要求して居るが、私は其反對に、工場法の改良は、男女職工と同樣に保護するやうにされなければならぬと考へる者である。私は勞働者に對する最少限度の保護が、何故に男女に依て異ならねばならぬかを解することが出來ない。

或工程又は或職業は特に女子の健康に有害であるといふ說を、私は受容れることが出來ない。職工組合の役員は、單に危險の故を以て屢々斯々の『仕事は女子に不適當である』と斷定する。通例男子である醫者も、同じやうなことを唱へる。然し其危險が男子よりも女子の場合に必ず、そして一般的に大であるといふことが證明せられぬ限り、獨り女子をのみ其仕事から除外する道理はない。或危險なる職業に對して社會の爲すべき事は、其危險を最少限度に減ずべくあらゆる手段を執り且つ其犧牲に對して十分なる賠償の規定を設けた。然る後、性を問はず、自ら希望する者に其職業を開放することでなければならぬ。

又鉛業の如く、特に婦人の身體に有害であると認められて居る職業がある。然し私は、在來擧げられた證據では、一般に婦人が特に鉛毒を感受し易いのか、或は或婦人達が特に銳敏なる感受性を持て居たのか、不明であると思ふ。戰時中劑藥物取扱から得た經驗の結果、私は——そして之は工場醫となつて居た女醫達の意見でもある——そういふ場合に必要な對策は、婦人全體を其仕事から除外することでもなければ制限を加へることでさへもなく、工場醫が男女を問はず、從業員の健康と體質とを常に丁寧に注意深く觀察すること、而して特に感受性の强い者は、男子なると女子なるとに論なく、其仕事から遠ざける

ことであると信ずる者である。

五、賃銀を生活費の増減に順應せしむる原則は可

物價が騰貴する時には、賃銀は遲々として、然も僅少な比率で騰貴する。特に時日の點に於ても金額に於ても、最も組合組織の不十分な、そして薄給な勞働者ほど賃銀値上げの割が惡く、婦人が常に此仲間であることは爭はれない。物價騰貴に伴ふて賃銀の値上げが行はれない時には、勞働不安が昂じて、强い勞働者の間にはストライキが勃發し、弱い方面、——女子は之に屬する——に於ては生活程度の降下及び苦汗制度——極めて些少の賃銀にて、最も劣惡なる勞働狀態の下に長時間の作業を爲すを云ふ——が蔓延する。既に國民の最低生活費及び凡ての職業賃銀率が相當な程度に維持せらるゝ以上は、物價に伴ふ賃銀の高低に反對すべき理由はない。然しながら、これは生活費の變化以外、賃銀や俸給の増加を行ふてならぬといふ意味ではない。賃銀や俸給は生產費の一部分ではなく、全國產業の生產物の頒前と見らるべきである。隨つて單に生活費に準じて高低するに留まらず、生產力の許す限り十分に增加し、斯くて生活程度を高めて行かなければならないのである。

殘念ながら吾々は近き將來に於て、筋肉勞働者及び下級職員に對する相當の最低生活費及び職業賃銀率が規定されようとは信じない。そこで來るべき數年間は、物資の下落にも拘らず、賃銀特に勞働婦人の大部分が屬する薄給勞働者の賃銀を現在の儘に留めて置くことが、國民の利益であらうと考へる。

六、家族扶養の義務を標準とする原則は非なり

男女賃銀率の相異を是とする人々は、屢々男子には家族扶養の義務あつて、女子には之無しといふことを主張する。然しながら同じ男同士でも、獨身者と家族ある者とに依て賃銀に區別を附せらるゝことは無い。職工組合も組合中、獨身者と結婚者に依て別々の賃率を維持することを許さず、傭主も多勢の子供を有つ職工を特別に高い賃銀で傭ふ者ではない。英國全體で、十八才以上の男子にして一人乃至數人の子供を有する者は總數の五割にしか當つて居ない。然るに一人乃至數人の子供を(時には病夫をも)自ら扶養せねばならぬ婦人は、總數の五割位には達して居る。

男教師と女教師の俸給率の相異は、家族扶養の任を理由とされて居るが、其れが全く出任せの口實に過ぎない證據には、子供の多い男教師と子無しの男教師との間に何の區別もなく、獨身の男教師は、獨身又は家族扶養の任ある女教師よりも多くの

俸給を得て居ることに依て明かである。故に私は家族扶養の義務の有無及び多少に依て賃銀率を相異せしめ、且つ實際の扶養義務とは無關係な假定を基礎として女子賃銀率を低からしむることは、飽まで不正であると考へる。

七、男子優先權の原則は排せられざるべからず　凡ての仕事は、男女を問はず、それに適する者に開放せられなければならぬ。然るに或仕事を男子の獨占とすることは、女子中の適材を適所に置くことを妨げ、惹て社會の最大生産力を發揮する上に障害となるものであるから、之は斷然排されねばならぬ。性や身長や體重や人種や宗教に依て人間を大ざつぱに分類する結果は、必ず人各々の個人性を無視することゝなる。各人の適不適といふこと以外、如何なる職業に於ても候補者採否の標準たるべきものは無い筈である。

八、就職者の資格限定の原則は可なり　或職業に對する候補者に一定の資格又は修業の證書を要求する原則は、今日既に多くの自由業に於て行はれ、筋肉勞働の間にも次第に普及せられようとして居るが、これは將來總ての職業に、原則として採用せらるべきものであらう。資格の限定は、低廉にして劣等なる勞働者の寢食に依る職業賃銀率の攪亂を防ぎ、採用の際の不公平を除き、候補者の採否を能率の如何に依て決するが故に如何なる方面より見ても策の得たるものである。斯樣な資格限定の結果として、男も女も勢ひ何等かの職業に熟達することが必要となり、隨つて腕に覺えの無い不熟練勞働者は數を減ずる譯である。殊に斯樣な原則の普及に依て、最も利益を缺ける者は婦人である、一定の素養がなければ就職が不可能となる結果は、世間の兩親をして息子同樣、娘の敎育にも留意せしむるに至り、又女子自身職業を結婚までの一時のつなぎと見て、不熟練勞働者の賃銀に甘んずるような不幸な傾向を矯正することゝもなる。女子は勞働者としての能率が低くければ妻として母としての能率が高く、特殊の訓練を經て高級の勞働者となれば主婦として、親としての能率が下るものなどゝは、今更取上げる價値もない臆斷である。又斯樣な進歩的な資格限定は、男子に限られた舊式の長期の徒弟奉公などを就職の條件とする、時代遲れの不公平な資格制限を撤廢する最捷徑であらうと考へられる。

九、「同一仕事に對する同一報酬」の定義は、單に語義曖昧なるの故を以て廢するを可　私は上に此定義は確定的の内容を有せず、(一)同一努力乃至犧牲に對する同一報酬

の意味にも取られゝば、(二)同等の生産物に對する同一報酬とも取られ、又(三)傭主に取ての同一價値に對する同一報酬の意味にも解せられる等、取り樣次第でどうともなる事を述べて置いた。隨つて之は資本家に對して、各々勝手な解釋を下すことに依て女子に對する正當な支拂を拒む逃路を提供して居るものであるから、廢棄するを可とする。

一〇、利益分配案は不可なり　過去四分三世紀の間、利益分配案は屢々傭主等に依て提唱せられたが、遂に良好なる結果を見る事が出來なかつた。勞働者の反對論の理由は、第一に資本家の利益分配案は、常に公明を缺き、勞働者が拂込額を確かめることの出來ぬ額面投資額に準じて先づ規定の配當を爲し、幹部の俸給や手當の支拂、事業の發展や價格下落や積立金の爲めに差引く金額は、皆利益分配以前に處分されてしまひ、是等に就ては容喙を許さない。第二に、今日、事業から擧がる利益の大部分は、勞働者の勤勉や誠實に依るものではなくて、廉い原料の買込や、製品販賣の方法や、工場や、資本の運轉が其宜しきを得ることとの結果である。然るに勞働者の關與せぬ經營上の巧拙に基く利潤の多寡に依て勞働者の收入に高下あらしむる結果は、正當なる報酬の保障にて努力を要求することゝなる。第三に、更に一層根本的な反對の理由は、之が職業賃銀率を攪亂することである。利潤の大小は、資本家に取つては單純なる利益問題であつて、決して生死の問題ではない。然るに勞働者が日日のパンを資本家と同じく事業の浮沈に賭することは一大事である。最後に、勞働者は、一階級として利潤の製造を事業の目的とすることに對する反感を强めつゝあるのである。

一一、對外競爭を理由として賃銀を制限する原則は廢棄すべし　或資本家が他の競爭者と同一價格で商品を提供し得ないといふことは勞働者の賃銀を引下ぐべき何等の理由ともなるべきものではない。或外國品が同種の内國品より廉いのは、必ずしも勞賃の低廉故には限らず、資本の運轉や、機械の精緻や、株主が僅少の配當に甘んずることや、其他樣々の理由に基いて居るかも知れぬ。然るに確實なる證據も無しに、一概に勞働賃低廉の故と臆斷するのは資本家の我田引水である。もし勞働者を普通以下の條件で虐使しなければ外國と競爭が出來ぬとならば、さういふ不經濟な商品の生産は一切外國に讓つて、内國では、勞働者に相應な待遇を與へても引合ふ迄の生産上の便宜ある物品のみを製造すれば好いのである。

二、職業賃銀率を努力と必要とに一層よく比例せしむる新原則の採用を推奬す　私の見る所では、假に上述の如き諸原則、即ち全國の最低賃銀、職業賃銀率、生活に對する賃銀の順應、就職資格の制限等の方法が採用されたにせよ、それ丈けで今日の社會的不安が一掃せらるべきではない。私は第一章の終りに、戰後勞働者の收入率が高低度なき混亂狀態に陷つたことを述べた。然し此混亂狀態は戰爭前からあつたので、戰爭は只だ共れを一層激しくしたに過ぎない。同じ女子同士の間の賃銀の甚しき不平均なども、此一般混亂的狀態の一部に過ぎず、それは、男女を問はず、大多數の熟練勞働と不熟練勞働との間に橫はる相異と一致して行くのである。明かに熟練勞働の部に屬する男子獨占の職業間に於てさへ、鑄鐵工が農業勞働者の十分の賃銀を取るといふような不平均の事實が見出される。今日では男女工は、各々其性に依て分類せられず、熟練工、又は不熟練工として分類せられるようになつて來て居る。そこで單に男女賃銀率の間に橫たはる不公平を除くといふことよりも、男女を問はず一般に各部門の勞働者の賃銀率を一層公平な原則に依て規定することが急務である。仕事の種類に依て、人々の肉體的必要にも多少の相異はありもしようが、いかなる勞働者でも他人の十倍の食物を要する筈は無い。種々の部門に對する勞働者の住宅に對する要求は、各々違つても居ようが、家に必要な條件は子供に對する適當な環境をも包含する—一は、根本に於て相異するものではない。デモクラシーは、敎育及び風習の共通の標準を意味する。故に私は、職業賃銀率を一般的に調節する爲めには、今日法外に低い或種の賃銀率を從業員の努力と必要とに一層よく比例させねばならぬと考へる者である。

第三章　結論

一、女子賃銀率といふ特殊のものを一切廢棄して斷じて男女共通の賃銀率を採用する暁には、女子は能率の關係上、總ての收入多き職業より自然に除外せられ、甚ては一般に産業界から驅逐せらるゝことになりはすまいかといふ懸念を抱く者がある。然し私は此說を信ずることが出來ない。紡織業の如く、久しく多くの女子が男子と同率の賃銀を維持し來つた方面に於ては、女子從業員の比率は絕えず增加して居る。チヨツキ製造、刺繡、看護婦の如き比較的高給の職業に於ては、女子

は他の殆ど男子の獨占に歸せる職業に從事する男子よりも高率の收入を得て居る。過去二三十年の間に、米國では男女小學校敎員の俸給を略ぼ同率にしたが、其結果女敎員は減少する所か、却て激增したのであつた。英蘭及びウェールスに於て男女衞生監督官の俸給を略ぼ同一にした結果は、此職業に於ける女子の激增を見るに至つた。醫師の場合にも同斷であつた。

或職業に對して、男女孰れがより多く適當であるかを精確に考へることは困難である。隨つて同一賃銀率を採用する結果が其仕事に於ける男女の就業率に如何に影響するかを豫測することが出來ない。若し或職業に於ては、全體として男子の方が女子より適任であつた場合には、自然の勢として、從業員の大部分は男子に依て充たされることになるであらうが、然し男子の外の女子が、其職業に就くことにはなるであらうと思ふ。又一般的には女子に適する職業であつても、例外の男子が自己の天分に從つて其仕事に從事することもあり得べきである。斯樣に性に依て區別を設けず各自の個性に應じて職業の選擇を爲すことは、各個人としても、社會としても最大能率、最大生產力を發揮する必要上、極めて有利であるといはなければならない。

二、獨立の能力なき者に對する手當　係類の多少に依て賃銀に高低を附することは不可能である。如何となれば、傭主は勞働者の家族の負擔に比例してゞはなく能力に應じて之に支拂をするのであるから家族多き者と雖も、能力少き者は之を排し、獨身者と雖も優能なる者には高給を與へる。然るに、萬一家族の多寡に從つて收入を高低せねばならぬとすれば、資本家は自然勞銀低廉なる獨身者を選ぶ結果、職業賃銀率は攪亂せられ、係類ある者は失業に苦しみ、能力本位の原則が破壞されて社會も個人も甚しき損失を蒙ることになる。一體子供に限らず、老いたる親や不具疾病の兄弟乃至配偶者親戚等を扶養する負擔は、男女に依て相異する者ではない。而して之等を扶養する義務は、一に國家の負ふべき所であつて、決して之を個人の意思や責任に委ぬべきはない。又子供は、經濟的獨立が可能となるまで一定年限の間、國庫に依て扶養せらるべきで、現下の急激なる出生率の遞減を防ぎ。次代の國家の健全なる發達を望む限り左樣するの外は無いのである。

三、以上の結論を總括　すると大體左の數箇條に歸する。

(イ)、筋肉勞働と精神勞働とを問はず、男女雇傭條件の間に於ける現在の關係は、兩性の人格及び職業的能率に惡影響あり、且つ全國民の最大能率を發揮し、職業の進步の上に有害である。

（ロ）、法律又は習慣に依り、婦人を高給の職務、自由業及び熟練職業より除外する結果は、彼等を總ての職業の下層に於て男子又は女子同士互に競爭するに至らしめる。而して婦人は全體として扶養義務なく、その要求も少く、劣等の智力及び能力を有するに過ぎずとの口實の下に、通例男子より低率の賃銀を支拂はれるのである。是等の口實のうち、一として斯く懲罰せらるゝ婦人の全てに共通なものがある譯ではない。

（ハ）、商品の生産に關しては、女子は特殊の宗敎又は人種に屬する人々同樣、男子と別個の階級を形成する者では無い。社會は今や總ての性的制限を撤廢し、適材に對しては、性を問はず凡ての職業を開始し、同一資格を要求し、同一賃銀を支拂ふべき時期に達して居る。

（ニ）、『同一仕事に對する同一報酬』の定義は、其意味する所は正しいが、語義曖昧なるが故に、男女間の公平なる賃銀率の原則となり難い。

（ホ）、官業と民業、及び精神勞働と筋肉勞働の區別を問はず、總ての職業を通じて、傭主の代表團體と傭人の代表團體との間の協議により確定せる職業又は標準賃銀率を維持することが、總ての報酬制度の原則とならなければならぬ。其樣いふ職業又は標準賃銀率は、人種や宗敎や身長や體重の相異に依て異るべきでないと等しく、性に依て異る理由もないのである。

（ヘ）、最大生産力の發揮と種族保存の兩方の見地より見て、全國最低條件を法定し、少くとも休憩時間、敎育、衞生、及び生活費を定むべきこと、且つ其最低條件は男女に依て異つてはならぬこと、

（ト）、國民が子供を必要とする以上、賃銀とは別に、國庫に依る兒童扶養料の負擔が必要である。男子は一樣に家族扶養の義務あり、女子には其れなしと斷ずる假定は、二割五分乃至五割位の程度迄誤つて居る。而して若し賃銀を扶養の義務に準じさせねばならぬとなれば、現在の支拂制度は全然覆される。其れは團體契約とも兩立せず、勞働者が雇傭條件を一定するとも不可能にする。而して、既婚の男女及び人の親にとつて最も損害多き區別を設くることゝなるであらう。母態及び子供の手當の問題は、之を獨立の委員會の研究に委ぬることが急務である。

（チ）、大戰は獨り男女の賃銀の相異のみならず、總ての職業に亘つて賃銀及び俸給率に多大の變動を來し、高低の差を甚しからしめて、收支と努力と必要との間に緊密なる聯絡を缺く混亂狀態を强めた。之は單に社會的不安や不平の原因たるのみならず、生産上の妨害となるものである。故に社會の總ての階級を通じて、收入を努力と必要とに一層よく比例せしめることが必要であり、其將來産業上の最大生産力を發揮する爲めのみならず、市民の個性の最も大なる發展、及び種族の進歩の爲めに、生産物の一層公平なる分配法研究を目的とする王室委員會の設置を必要とする。

時事と社會

本號より本欄を設け、內外の時事問題思潮及社會現象の各方面に亘り、各專門の學者、評論家、及び當面の新人をして、嚴正率直、剴切深刻なる批判を乞ふことゝせり。

恐慌に對する一部の觀察

法學博士　堀江歸一

經濟順環期の學說

經濟順環期說は大陽黑點說と共に恐慌に關する一の學說として、餘程以前から認められて居り、一方に恐慌が或る時代に於ては、約十年目を期して、襲來したことの關係から、益々此種の學說に對する世人の信念を强からしむるに至つた。十年何個月目に必ず大陽に生ずる黑點が殖へ、其爲めに日光の光力を左右して、穀物收穫の狀況を支配し、結局其時に於て、恐慌の發生すると云ふ大陽黑點說も、恐慌に對する一ツの見方に違ひないが、同時に順環期說にも亦動かす可からさる根據がある。即ち經濟社會で好景氣と不景氣と相順環するのは、自然の約束であるが、好景氣と云ひ、不景氣と云ひ、決して一の經濟現象として永く續く可き譯のものではない。例へば恐慌の後を承けて商工業が沈衰すれば、其間に物價の低落するのは已むを得ざる所であるが、物價低落して、確定所得を收むる人々の生活が多少なりとも樂に爲れば自ら貯蓄を奬勵するであらうし、資產家階級の方でも、不景氣時代には、好景氣時代と違つて、奢侈の生活を制限することゝ爲るから、此方からも一國に於ける資本の蓄積を促すに至るのである。此時代が先づ三年餘もかゝり、蓄積された資本の金額も增加し、金利步合も低落するものとす

れば、事業界は決して何時までも恐慌後の惨憺たる、狀態に制せられて、沈衰して居る譯のものではない。低廉なる金利に乘じて、事業を起さうと云ふ事業家があれば、又金利さへ低廉であれば、如何なる事業を起しても、必ず探算上に於て引合う勘定と爲るので事業家は新事業の計畫に着手し、銀行業者も金利を引下げて、事業家に對する資金の融通を寛大にする。斯くて經濟社會に好景氣の時代が現出して、廣く其利益を社會全般に及ぼし、何人も好景氣の利益に眩惑して、顧みる所なきの狀態と爲る。是れで經濟社會が無事に納まれば、甚だ結構であるが好景氣時代が三年餘も續いて、商工業に活氣を催ほした極度には、必ず投機熱が起つて、其熱が甚だしきに至つた時に、恐慌と爲るのである。即ち且恐慌が起つて三年ばかりの不景氣が續き、次の三年餘が恢復時代で、此時を經てから三年餘の好景氣時代と爲り、其極點に至つて、恐慌と爲るのであつて。是れが經濟順環期說と云ふ名を以て認められ、又恐慌の約十年を一期として發生する、又發生した事實に對して、有力なる證明と爲つたのである、

恐慌は果して此學說通り約十年を一期として、襲來するものであるかどうか。十九世紀の前半から後半に至る數十年の間、英國を始め他の諸國に於て、略ぼ十年を一期として、恐慌の襲來を蒙つた當時には、此學說は有力なる事實上の確證を得た譯であつたが、近年諸國に起りつゝある事實に徵すると恐慌の定期的襲來は實現するを得ないやうである。我國の實際に就て考へても、明治二十三年に恐慌が起つて世間を騷がしたが、其次に恐慌に襲はれたのは、明治三十年であつて、七年の歲月を經過した時であり、其次には明治四十年の恐慌で、以前の恐慌から數へると、丁度滿十年に當つて何か經濟順環期說に符合して居るやうに考へられないでもないが、右二回の恐慌は何れも日淸日露兩戰爭の後に、好景氣の極度に行はれた反動として、起つたものであつて、其發生の十年目であつたのは、戰爭其ものが十年を一期として、行はれた偶然の結果に外ならない。若しも十年を一期として、我國にも恐慌が起る可きものであれば、我國は大正五年頃を以て、恐慌期としなければならぬ道理であるのに、其時は歐洲戰爭の影響を蒙つて、漸く不景氣を脫したに過ぎなかつた。而して其後三四年に亘る好景氣が續いて、今度の恐慌が襲來したのであつて、以前の恐慌から數へると、十數年の歲月を經過して居る。隨て十年を一期として。恐慌の發生すると云ふ學說は我國最近の事例には適用されないのである

恐慌と失業問題

外國殊に工業發達の顯著なる國に於て、恐慌が起れば、其影響は商工業に波及して、其沈衰を招き、斯くて失業者輩の出するに至ること〻爲る。何故に恐慌と失業との間に、斯くまでに因果の關係の密接なるものがあるのであるか、今其事情を見ると、工業の存立する所は必ず一の工業的都市が形成されて居る即ち一ツの都會には主要工業の外に、附屬工業があり、後者は附近の郊外にも及んで居り、都會は工場に非ざれば、勞働者の住宅のみで充されて居る。斯う云ふ工業都市に爲れば、其附近に農業地の存するが如きは稀有の例であつて、工業都市の需要する農產物は數百哩を距てた遠隔なる地方から輸送されるし、又工場都市に居住して、工業都市に住まつて居る勞働者は先祖代々の工業勞働者であつて、自分の從事する一ツの仕事以外には、就く可き何等の仕事を持たないのである。

斯の如き狀態の下に、恐慌が起り、幾多の事業が續々倒壞して、其使役しつ〻ある勞働者を解傭したならば、彼等は他に就く可き職業を得ざることの結果として、直に失業し、然も失業者が一市に群を成す爲めに、重大なる社會問題を惹起すに至るのである。日本でも關西や九州の純然たる工業都市に爲つたならば、恐慌の影響の一ツとして、失業問題は必らず斯る狀態で現はれ來るであらうが、今度私の視察した關東機業地では、恐慌の勞働者階級に及ぼす影響が全く異なつて居る。恐慌が勞働者の生活を脅かして居るの一事に就ては、論を俟たないが、是等の機業地に於て、勞働者は失業者と爲つて、永く生活上に困窮するかと云へば、必ずしもさうではない。機業地に於て、機業の爲めに勞働して居る者は二種類に區別される。一ツは機業者から絲を受取り、之を織つて、賃錢を受取る者即ち賃機制度の下に、勞働する者で、他の一ツは機業家の工場で勞働する者である。前者は幾ら機業が衰微して、賃錢が無くなつたとした所で、元來農家の家庭に居る者であるから、農業なり、養蠶業なり、牧畜業なり、夫れ〱の道に於ける仕事に從ひ、賃機業に從うほとの收入は得られないとしても、相當の收入を得ることが出來る譯である。機業家の工場に雇はれて居る勞働者が解雇された場合には、どうであるか。其處に失業問題が起るやうに考へられないでもないが、元來是等の勞働者は如何なる方面から集まつた者であるかと云ふに、多くは近在の農家の子女が農業に就くよりは、機業地に出て、工場勞働者に爲つた方が利益

であるから、次第に驅り集められたのである。隨つて機業地で失業すれば、決して機業地其ものに留まり、失業者として、他に職業を求めたり、又は困難なる生活を送る譯でなく、ドン／＼出身の農村に歸つて、農業に從事することゝ爲るである。斯う云ふ事實であるとすれば、我國では今日尙ほ農業と工業と相並び行はれて居る結果、一方の事業に起つた失業者を他の一方に收容するを難しとしない。殊に工業の行はれて居る一つの都會を圍繞して居るのは、農業地であるから、工業地との間に絕へず勞働者の移動が行はれて居り、農業の存立することは、工業地に於て起らんとする勞働に對する需要の激變に對して、一個の安全瓣たり得るのである。關東の機業の衰微は今日極點に達して居るのに拘はらず、勞働者の失業は左ほど酷い狀態に陷らない、是れは要するに前記の事情に基くものである。然し此事たる、畢竟我國工業組織の幼稚な爲めに生ずる偶然の結果であつて、何時まで此狀態に安んじて、失業問題に對する施設を怠るが如きは、大なる間違とせざるを得ない。

恐慌と銀行

今度の恐慌が銀行の過度に金融を緊縮させた爲めに起つたものであることは、疑なき事實であるが、地方に行つて、恐慌の事情を觀察すると、更に此感を深くせざるを得ない。一方には近年事業が好景氣の爲めに伸張し、生產も亦非常な勢で膨脹した。然るに之に對して地方銀行の金融上の實力は決して增進して居らず、東京の大銀行は必ずしも地方銀行を通じて、地方の事業家に金融上の援助を與へるだけに、聯絡を付けて居らない言葉を換へて云へば、地方には生產物は殖へたが、此殖へた物產を資本化するだけの金融上の實力が銀行に備はつて居らず、銀行の發達は產業の發達に比較して、僅に後れつゝあるの觀を免がれない。生產過剩と云ふことは、需要に對して、供給の過剩に爲つた狀態に外ならないが、私の見る所では、今後の恐慌は銀行の融通力に對して、生產の過剩と爲り、過剩と爲つた物資の固定したことを以て、一の原因となければならないと考へるのである。故に將來の問題としては、事業と金融機關との間に於ける關係を密接にし、地方に產出された物資を基礎として、手形が振出されたならば、此手形は啻に地方の銀行に於て消化されるのみならず、大都會の銀行に於て消化されるか、然らずんば大都會の銀行自ら地方銀行に金融上の援助を與へると云ふ筋道を付けなければならぬ。

然るに從來の有樣では、此邊の聯絡が甚だ不充分であるのみならず、大都會の銀行は地方に支店を設けると、其支店の蒐集した預金を遠く本店所在地に引上げて、之を運用するので、却て地方に於て運轉され可き資金の供給を不足させる傾がある。今日地方の生產業者が全然物資を所有して居らないならば、如何とも致しやうはないが、彼等は現に物資を持つて居り、然も其れを基礎として、銀行に就て資金の融通を仰がうとしても、目的を達することが出來ず、隨て次の季節に起る可き需要に應ずる生產にすら、着手し得ないと云ふのは、恐慌狀態の半面を示したものに、相違ないが、他の一面から考へれば、金融機關の停滯して、殆ど用を爲さゞることが、斯る結果を齎した一原因であることを否定するを得ない。如何にして都鄙金融上の關係を疏通させるか、如何にして生產物のある所に資金の供給を潤澤ならしめるか、經濟社會に變動の起ることや、起つた變動の他に影響を及ぼすことを緩和するの點から云つて、共に解決しなければならない問題であつて、私の如き是等の點に就ては差し當り日本銀行の活動することを必要とする。商品の價格は常に變動せざるを得ない。然も國民日常の必要品である以上は必ず或る底値なるものがある、此商品を代表する手形なり、證劵なりは、如何なる場合に於ても、或る價値を持つて居るのであつて、之に對しても尙ほ銀行が絕對に信用を與へないと云ふのは、銀行自ら信用取引を破壞するの嫌なきを得ない、地方銀行の資力に限りあつて、斯る所業を敢てするが已むを得ないとしたならば、中央銀行の如き進んで金融の衝に當る可きものであらうと思はれる。

金融政策統一の必要

吾人は從來通貨の膨脹に對して、非難を加へた。夫れは日本銀行が殊更に金利を低くして、過度に信用を膨脹させ、其結果として存立の基礎を有しない虛業を跋扈せしむるの弊があるからであつた。斯る信用の過度の膨脹が何時までも永續するものであれば兎に角必ず或る時期に停滯するのは必至の運命であつて、而して其時には膨脹の反動として、酷い打擊を蒙るに至ることも、必然の勢である。私は今度の關東の機業地を巡遊して最近の恐慌が政府の金融政策に對する方針の宜しきを得なかつた結果として反動來の影響から免かれ得べき當業者が却て之を蒙るに至つたことを認めた。卽ち昨年十一月頃から金融市場が概して緊縮し來つたので、當業者の間には、經濟社會の景氣も

最早や末であると云ふことを感じて、大分事業の手を縮め、取引を減じ、現金を回收し、徐に他日の變に處せんとする者が出て來たのである。若しも此儘に進んで行つたならば、經濟社會の景氣は自然に調節された道理であるに、政府は何と思つたか此一二月頃に爲つて、遽に樂觀說を皷吹し出した。是れで一旦收縮警戒の方針に向つた當業者の決心を緩めて、再び信用を過度に膨脹させ、結局今度の反動來に依て、大痛手を負はなければならないことゝ爲つたのである。卽ち政府が總選擧に臨んで世間の景氣を好くし、政府に對する輿望を盛ならしめる爲めに一旦引締めた金融を態々緩めたことが、餘程の害を爲した譯であつて、斯う考へると、原內閣は經濟社會に對して、自由放任どころか、積極的に害惡を爲して憚らざるものであると評し得られるのである。

外國貿易と恐慌

今度の恐慌は世界經濟を支配する現象から生じたものであると云ふ說もある。政府筋では斯う云ふ解釋を力說して、恐慌の不可抗力であることを辯明しやうと試みて居る。成る程世界諸國の經濟上の景氣は歐洲戰爭當時とは趣の異なつて居るのは、爭ふ可からざる事實であるが、諸外國にはまだ他國の物資を需要する相當の力はある。隨つて我國の諸事業が恐慌の影響を蒙つたと云ひながら、其產物で外國に輸出される場合には、或る程度まで恐慌の影響を緩和するを得た趣があつた。此事は我國經濟組織の將來から考へて、餘程注意す可き點である。一事業の產物が內國市場の可き販路として居るよりも、諸外國の市場を販路として居る方が事業經營の上に於て安全であるのは勿論であつて、國際間の全體に亙るやうな世界的恐慌が起つた場合かあれば兎に角、一部局に起つた恐慌に對しては、物資の販路が廣ければ廣いだけ、其影響が緩和されるのである。唯或る地方の如きは、折角物資の販路を外國に開きながら、近年我國に於て諸物資を通じて、生產費の高まつた爲に、販路の仲張意の如く爲らざることを嘆ずる向もあつた。是れは畢竟我國に於て從來調節す可き時に、經濟社會を調節することを怠り、放漫一天張りの經濟策を取つた結果であつて、若しも平生から今少し經濟の調節に力を致したならば、內に恐慌に襲はれると共に、外に貿易品の販路を失ふと云ふやうな內憂外患交々至ると云ふ狀況は之も避け得られたらうと想像するのである。

何れにしても一國孤立の狀態で、經濟上の生活を行ふが如き

は危險であつて、何等利する所はない。機業地は何れも獨逸染料の供給の杜絶したこと、之に代る可き優良品の外國から輸入されず、又内地に於て製造されないことに苦んで居る。一方に右に述べた如く、織物の輸出せらるゝ範圍狹く、又其數量の小なる爲めに、充分に恐慌の影響を緩和することが出來なかつた是等二ツの事實は何を吾人に敎へるかと云へば、詰り今後の經濟生活は飽くまで之を國際的にし、輸入も輸出も共に盛にしなければならぬことに外ならないのである。

恐慌不可避説の當否

恐慌は之を人間の身體に例を取つて云へば、病氣のやうなものであつて、多くの場合に於て、避け難いもの丶やうにも見へるが、人智が進み、公衆衛生や、個人衛生が發達して來れば、病氣其もの丶避けられるが如くに恐慌も亦之を回避するを得るのである。唯經濟社會に於て、商工業の局面に當つて居る者の行動をして其赴く所の自由に任せて置いたならば、恐慌は到底回避するを得ないと云はなければならぬ。何故かなれば、今日の經濟組織に於ては、個人の自由に重きを置くことの結果として、個人の利益と社會の利益とが必ずしも常に相一致することを望まれない。即ち或る種類の物資が製造される、或る方面に向つて、資本が放下されると云ふ場合に、是等の所業が個人の利益である以上は、之を爲すに就て、何等制限の加へられる所はないのであるが、是れが一方から考へれば、生産の過剩を來し、資本の固定を惹起す原因と爲るのである。若しも物資の生産される高が之に對する需要と正確に一致して居り、生産者の産出したゞけの物資は必ず消費者に需要される、生産者なり、商人の手元に殆ど物資の停滯するものがないとしたならば、どうであるか。又資本が極めて自由に流動する性質を持つて居り時に其一部が或る用途に固定したとしても、之を資本化して、流動させる道が備はつて居つたならば、恐慌の如きは、之を回避するを難しとしない道理であらう。

斯く論ずれば、恐慌を以て、資本主義的經濟組織の一産物とする一派の所説には、慥に根據の動かす可からざるものがある何等の規律なき生産、利己の欲求のみに驅られて居る生産是れが今日資本主義の下に律せられつゝある經濟組織の特徴であつて、人間の身體に就て云へば、斯う云ふ事は健康に任せて、暴飮暴食をするのと同じであつて、其結果として、腸胃加答兒や其他の症患を惹起するやうに、經濟社會にも恐慌の襲來を招く

ものと觀察される。さうすれば國家が經濟生活の中心と爲つて、生產に對し、資本の運用に對して、共に或る統制を加へたならば、生產過剩や、資本の固定から恐慌の惹起される弊害は餘程除き去られるものと認めなければならぬ。當業者の見込みとか投機とか云ふことは、經濟社會に活氣を與へ、刺戟を加へる働きには相違ないが、過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しで、個人の斯る利己的行動が發して、一步を誤まつた場合には、直に需要供給の調節を失して、恐慌の慘害に接せざるを得ない。稀に起る病弊として、吾人は之を看過す可きであらうか、夫れとも經濟組織を根本的に改造して、恐慌の根絕を期す可きであらうか私が一個の問題として、提唱せんと欲する所である。

「西にレニン、東に原敬」

室伏高信

一

私は議會制度が本質的に資本主義制度の一部分であるとは信じてゐない。議會は救濟の餘地のあるものである――ギルヅマンの言葉でいふと再解釋の餘地のあるものである――と考へてゐる。しかし議會の救濟は凡てのことの前に議會を階級的支配から解放することであると考へてゐるものである。從つて今日の議會――特に制限選擧のうへに立つてゐる日本の今日の議會は立派に資本主義制度の一部であると考へてゐるものである。否なこの點は私だけでなしに、政友會も憲政會も原敬もそしてこゝに一寸ばかり論じたいと思ふ永井柳太郞君も意識的または無意識的に同樣に考へてゐるであらうと思ふ。彼等が議會をもつて階級支配の機關である考へてゐればこそ普通選擧に反對するのである。普通選擧に反對することによつて資本主義のスポークスマンとしての彼等の立場を維持しようとするのである。この點は日日の議會における凡ての事實――議會に現はれてゐる法律案でも豫算案でも建議案でも彈劾案でも質問でも討論でもみな一としてこの事實を裏書きしてゐないものはない。そのうへに多數の議員は無能、無見識、そして奴隷精神の持主であるから各議員のパアソナリテイはどこにも現はれてはゐない。現はれてゐるものは原敬と加藤高明と、そして小さく犬養毅があるだけである。――議員の多數はダイゼルの機關だ。

二

しかしこの議會の現狀を最も劇的に演出したものは永井柳太郎君懲罰事件である。永井君が懲罰にされた理由は政友會を代表して鵜澤總明君が述べてゐるようである。その理由の一つ、最も重大な理由の一つは、永井君の演說中、西にニコライ・レニンあり、東に原敬ありといつたことであるそうである。無論このことは二人の人物比較ではない。また永井君のごとき見識家がまさかにレニンと原敬の人物を比較するほどに馬鹿げた眞似は致すまい。レニンはその主義の如何は別としても兎も角當代に於けるマルクス主義の透徹せる學者として幷に勞働者によつての革命の實現者として彼れの地位は歷史的であつて今後において彼れの事業が失敗に歸すことがあるにしても彼れの名と事業とは歷史上に抹殺することはできない。曾つて先年國民黨の植原悅二郎君が『犬養とロイド・ヂョーヂ』を比較したことのあつたのを記憶するが、それほど日本贔負の植原君であつてもまさかに『原敬とニコライ・レニン』といふ書物は書かないであらう。わが議會の『新人』永井柳太郎君は決して『原敬とニコライ・レニン』の著作者であるほどの不見識家ではなかつた。また永井君がこうした不見識家であつたなら植原君が『犬養毅とロイドヂョーヂ』の著者で國民黨に缺くべからざる人物となつたが如くに、永井君は政友會から感謝狀を送られたことだらう。少くとも次の選擧には政友會の望月幹事長（その時は別の人かも知れない）が選擧の宣傳に利用することであらう。しかし事態は永井君のために幸であつて、政友會のために不幸であつた。何となれば永井君の言葉の意味はレニンと原敬とがともに階級的專制をやつてゐるといふまでのことであつた。卽ちレニンは西にあつて勞働階級の專制を、原敬は東にあつて、ブルジョア專制をやつてゐるのだといふたに過ぎなかつたからである。そこで私どもに問題となつたのはどうしてこんなことが懲罰の理由となるかといふことである。

三

西にレニン、東に原敬、ともに階級專制をやつてゐるものだといふことは實は私も先月の『改造』で一寸書いておいたことである。誰れでもそう思つたであらう。階級專制をやつてゐるものが——少くとも鮮明且つ露骨にやつてゐるものがだん／＼少けなくなる今日の世界では、原敬のごとき人はこの方面においては立派な選手の一人である。自分でもそう思つてゐるであらう。思つてゐればこそ普通選擧に反對したり、普通選擧運動

に警官を五千人も出したり、治安警察法第十七條を固持したりあらゆる『名譽』ある行動をとつてゐるのである、この事實を事實として論じたのが永井君の演說であつた。だから原敬を初め政友會の二百餘人はみんな心の中では『尤もだ』と思つたに相違ないのである。それで何故に懲罰の原因となつたか、こゝに議會政治の自己矛盾があるのである。

四

議會は國民の代表者である。議會に多數黨を擁してゐる原內閣は國民の代表者である。新聞もまた輿論の代表者である――何といふ『國民の代表者』の多いことであらう！この威嚴ある『國民の代表者』を階級的專制政治家であるとするのは少くとも彼等にとつては自己免許の威嚴を傷けること決して少々でない。就中、この炎暑の氣候にフロツク、山高――紋付袴を穿いてまで『國民の代表者』としての威嚴を加へようとしつゝある壯嚴なる議會としては、永井君の素破拔きに憤慨するのも無理のない話である。――かくして私は思はず政友會の『同情者』となつてしまつた。しかし私の『同情』は遺憾ながら政友會にだけ値してゐることはできない。私の目には政友會も憲政會も同じ穴の狐である。永井君は政友會を普通選擧の反對者として攻擊して遺憾なく議會の『新人』振りを發揮されたが、私は永井君に問いたい。憲政會は何時普通選擧に贊成したかと。また問ひたい、永井君のごとき『新人』までが『獨立の生計』をもつを普通選擧の要素であると考へてゐるかと。また更に問ひたい日本一の富豪の女婿を特に女婿であるがゆえに總裁としてその指揮のもとにダイゼルの機關となつてゐる憲政會は階級專制の機關ではないかと。そして最後に永井君に問いたい、永井君は議會における演說を取消さないで『釋明』したが、もう一步進めて次のごとく『釋明』する考はないか『西にニコライ・レニンあり、東に原敬と加藤高明あり』と。こゝまで『釋明』してくれると議會の『新人』としての永井君は決して野次と暴行を『拍手喝采』の議會における『新人』であるばかりではなしに、院外においても立派な『新人』となることができるであらう。私は今の議會を眞面目くさつて論ずるほどの好奇心をもたない。ただ議會唯一の『新人』としてのわが永井柳太郎君が私の注文に從つて更に院外において『釋明』を附け加へることを希望するに止まる。

社會共存の倫理と臨時議會

永井柳太郎

一

新しき時代には新しき政治が起らねばならぬ。曾て國威發揚ど云ふことが政治家の理想であつた時代があつた。國威發揚の爲には個人の要求を無視し個性の權威の如きは措いて顧みなかつた。そこで如何に國家の領土が擴大し如何に國富が增進しても之に依つて個人が幸福となり、人民の空腹が滿されなければ、何を價するかと云ふ思想が起つて、所謂民權自由の運動となつた。然し民權自由の運動は勢ひ自由放任主義となり易い。自由放任主義は弱肉强食に陷り易い。此に於て再び國家の權力を以て各個人及各階級の生活を統制し弱肉强食を豫防すると共に社會共存の目的を遂げんとする傾向を生じた。曾て教授オルマレーは「政黨の歷史は其國の文明史に對する索引なり」と云つたことがあるが、全く至言である。此の變遷しゆく時代の思想にて又政治上の理想も異つて行くのであるから、我議會政治の如きも、著しく精神が停滯してゐると云ふ非難もあるが、之を議會開設當時の議會政治に現はれたる精神と比較すると、其議案を一睨するだけでも或程度迄は時代の進步に伴ふたと云へる。だから我帝國議會の議題となつたものを一睨して、維新以來文明史の索引となすことが出來ないではないが、併し此關係が今後も持續せられ得るものなりとせば、今日の議會政治は殆んど一の黎明期に遭遇してゐると思ふ。何故なれば、議會の周圍に於ける民衆の理想は、社會共存の倫理に基く新しき立法を要求してやまざるに拘らず、現在の議會は尙未だ弱肉强食時代の精神を脫せずして、院內の立法に現はるゝ精神と、院外の民衆の精神との間には非常なる懸隔が出來た。そして斯の如き懸隔の生じた場合は恰も水の高きより低きにつくを常とする如く、民衆の精神が必ず議會內の精神を征服する、そして議會に現はるる議案をして其時代に於ける文明史の索引たらしめなければやまないのが、歷史上に於て實證された大事實であるからである。

二

最近數年間に於ける我國民の政治的自覺は過去に於ける數十年の夫れに匹敵する。素より日本國民の思想は何等の深刻なる人生觀の上に立つてゐるとは云へぬ。曾て好んでトルストイを讀み、曾てニイチエに心醉し、曾てオイケンの哲學を賞揚し、獨逸が連戰連勝の時に方りては、トライチケの軍國主義を唱道し、獨逸が力屈して和を乞ふに及んでは、俄にウイルソンの民主々義に赴いた。民主々義は更に社會主義となり、社會主義から無政府主義と云ふ風に、絶へず歐米の思想の波動に追隨して恰も浮草の如く、夫から夫へと思想の流を渡り歩いたのであるから、彼の歐米人が自由平等友愛を憧憬する如き、深刻なる意味に於ける自由平等友愛の憧憬はない、然し此等の歐米諸國に於ける思想の波浪に漂ひつゝある中に、自から從來の日本人が自覺せざりし程度に深刻に個性の權威を自覺し、我等の祖先が理解し能はざる程度に深く人生の眞意義に徹底せんとする憧憬の生じたことは疑ひない。之れは啻に讀書階級のみならず、讀書階級に接近しつゝある、又讀書階級が、進んで指導せる勞働階級に迄波及し、今や時代の精神となり、之を實際政治上にも實現せねば止まざる勢ひとなつたことは爭はれぬ。此時代における立法の精神が社會共存の倫理に基づかねばならぬことは言ふ迄もないことであつて、今日の議會が此時代の精神を理解せざる所に、民衆對議會の衝突、議會政治對直接行動の暗流が渦卷き起るのである。今日の日本に於ては議會政治に對する不信任の聲が充滿してゐることは爭はれない。併し此不信任の聲は其思想の系統から二分することが出來る。一は議會政治は衆愚政治であつて、今日の如き議員は到底時代の精神を理解し、國政の中樞機關として任務を果すことは出來ぬ、政治は寧ろ少數の哲人が獨斷專行することを以て得策とする有意味の不信任論であるから、之は純然たる專制政治論であつて、貴族專制時代の遺物である。世界戰爭は或意味に於て總ての偶像を破壞した。如何なる大帝國も社會民政を主とせぬものは崩壞し如何なる傳統的權威と雖も民意に反する時は、其力を失ふものであると云ふことを實證した。露西亞や獨逸や墺國の崩壞は即ち社會民政を無視し民意に反する政治は如何に强大なる海陸軍を以てするも維持する能はざることを證明し、世界戰爭の生きた敎訓は、此種の專制論者の論據を獨りでに覆したのであるから、之は多く恐るゝに足らぬ。けれども、第二の議會不信任論、即ち今日の議會政治は大資本家及大地主階級が輿論尊重の假面を冠りて、實は階級專制を行はんとするものであるから

我等は今日の議會政治に依つて我等の生活上の要求を實現することは不可能であると云ふ勞働者階級の間に主として發生しつつある所謂議會政治否認論に至りては、世界戰後歐米諸國に於ける勞働者階級の勃興と共に、寧ろ益々蔓延せんとする傾向があるのである。故に此思想に對して議會政治は輿論政治の假面を冠ぶる階級專制に非ざることを實證するに足る各種の改造を行ふことが、議會政治の尊嚴を維持し、立憲政體の基礎を確立せんとする者の急務でなくてはならぬ。惜しい哉、今日の我が議會の中に、議會政治其物が此危險なる試練期に遭遇してゐることを自覺する者が少ない。是れ私が去る七月八日の質問演說に於て特に原總理大臣の反省を求めた所以である。

三

新らしき時代に適應すべき議會政治は其立法の精神をも亦全然新にせねばならぬ。私は今日に於ける議會の立法の精神は、少なくとも次の四種の權利を確認するを基礎とすべきであると信ずる。

第一は生存權の確認である。國家は國家夫れ自身として人類の文化に貢獻すべき特殊の目的を有する。併し夫れと同時に其國家に屬する各個人をして、性の男女に拘らず、又色の黑白を問はず、其生存の眞意義に徹底せしむるに必要なる均等の機會保護を與ふべき職分がある。國家と個人との關係は、恰も進軍しつゝある軍隊と其軍隊を組織する兵卒の如きものである。其兵卒が精神的にも肉體的にも、より多く强健であると云ふことは、其兵卒を以て組織する軍隊の戰鬪力が、より多く强大であると云ふことであつて、其兩者は互に他の爲めに手段となり、又目的となつて、共に『死』に對する抵抗性を增大するのであるそれと同じく各個人をして生存の眞意義に徹底せしむると云ふことが、自から國家の世界文化に對する貢獻と、國家自身の存在の理由となるのである。國家は國家自身の存在の爲めに、先づ其國家を組織する個人の生存權を確認せなければならぬ。玆に生存權とは、法律上のみならず、經濟上のことをも意味する。假りに法律上に於て殺人を嚴禁し、生命を保護するとしても、經濟上に於ける獨立がなくなれば、餓死するか病死するか、或は自ら進んで其生命を他人の使用に委ぬるが如き危險に陷るのである。故に今日に於ける立法は、先づ法律上のみならず、經濟上の生存權を確認するを根本とすべきで、或は最低賃銀制を定め、或は失業者救濟、施療救濟を行ふと云ふことは、當然此處か

ら出發するのである。

第二は勞働權の確認　である。假りに生存權を確認し國家が其經費を以て其經濟上の生存を、維持するとしても夫れが其人自身の勞働によるのでなく恰も今日の救貧院に於る貧民の如く公費にて扶養を受くるのであるならば、獨立の人格を兩立し得ないのであるから、決して各人の幸福とはならぬ。故に各個人の生存權を確認せんとすれば、勢ひ各個人をして獨立の生活を營むに足る勞働の機會を保障せねばならぬ。而して此勞働權の確認は、又勞働選擇權の確認を意味せねばならぬ。如何に勞働して獨立の生活を營む機會を得ても、それが自己の欲せざる勞働ならば、其勞働は奴隸の苦役と多く擇ぶ所がない。固より勞働者の中には、不心得の者が多くあつて、失業者を救ふ制度の有る國にては失業中は公費にて扶助を受け、生活の保證があるのに安じて、自己の意に適する勞働のないのを口實にして、徒食せんとする者も起る。けれども之れは歐洲諸國の失業者救濟法にも制定しある如く、監督官廳の取計らひによつて、適宜の地位に配置するヿは決して困難ではない。生存權及勞働權の確認が出來れば

第三に機會均等權　の確認である。ダーウインは『有機體の進化は自然淘汰による、自然淘汰は有機體相互の間に於ける生存競爭によりて決す、即ち其生存競爭の中に適者即ち優者生存し、不適者即ち劣者が滅ぶ』と云つてゐるが、それは今日の社會生活に無條件で適用出來ぬ。現に今日の日本に於ても、貴族の子は生れながらにして政治上の特權を有し、貴族院議員となつて自己に不利なる法律の通過を妨げるヿが出來る。平民の子は斯る種類の特權がない、又貧民の子は如何に體質が優良でも營養不良の爲め夭折し、富豪の子は如何に薄志弱行と雖も、尙父祖の遺産を繼承して社會の上流に位する、斯くの如き所謂優勝劣敗は、決して本人自身の優劣により決するに非ずして『本人以外の者』、又は『制度』の力にて決するのである。斯の如き社會に眞の優勝劣敗行はれ、文化的發達を見るヿは不可能であつて、之は其國の爲めにも、其人の爲めにも大なる不幸を意味する。故に此等の制度上に於ける積年の陋習を打破し、各人をして其生存の眞意義に徹底すべき均等の機會を與ふるヿが、眞の文化的發達の要諦である。

第四は自治權の確保　である、哲人ボークの言葉に『人は何れも四つの人格を有す、一は社會の見たる我也、二は親友の見たる我也、三は吾の見たる我也、四は神の見たる我也、此四つ

の人格は全く別人の如く異ると』云つてゐるが、之は頗る意味深長であると思ふ。如何に賢明な者でも、自己が自己の要求を知る如く、他人の要求を理解し得べき筈がない、如何に敏感な者でも自己が自己の小指の痛みを感ずる程度にだも他人が四肢を斷つの苦痛に同感し得ないものである。實に人は其人でなくては其人の要求を理解することは出來ぬ。故に親が愛情を以て子の爲めに計るも、子に滿足を與へず、却つて反抗を起すことあり老人が靑年の爲めに憂る所は、毫も靑年の憂ひにあらざるのみならず、却つて反感を挑發する。之れと等しく資本家階級は決して勞働階級の利害を完全に理解せず、勞働階級も亦資本階級夫れ自身の如く、其利害に明敏なる能はず、階級間には階級的反感、又は無知が常に存する、故に各個人にも各階級に對しても、其生活上の要求、其政治上の理想を訴ふべき均等の權利を與へることは、國家の個人に對する當然の義務であつて、此各個人各階級の自治權を承認せざる議會政治は、決して近世に於ける社會共存の倫理と一致せりとは云へぬ。此等の權利を確認することが近代立法の根本精神であつて今日の所謂民衆運動なるものは、議會をして此近代立法の根本精神を承認せしめんとする運動に外ならぬ、然るに今日の我が議會政治は、此近代立法の根本精神と全然背馳してゐる。之れが議會否認に對する運動の所謂危險思想の起る根據であつて、議會が其附與せられたる官權の力を以て、飽く迄も近代立法の根本精神を拒否するか、又は拒否する意なくとも、全然理解する能はざるか、又幸ひにして此精神を理解し、日本文化の索引となすに足る新時代の精神を宿したる、新しき立法を行ふかと云ふことによつて、議會政治の尊嚴を恢復し得るや否や、又所謂議會否認の運動が危險點に達するや否やが決せられる。私は今日の議會政治は、我國の議會開設以來最も大なる試練の危機に在んで居ると信ずる。

宗教革命問題

未來の宗教哲學に就て

柳宗悦

一

確實な知識はいつも『實有』の念が濃い時に榮えると余は思ふ『空無』の思想はいつも豊な想像を誘つたが、具體の念を吾吾から遠ざけてゐる。色即是空と觀じるにしては、西歐の人々には餘りに實有への愛着があつた、具體の世界への信頼があつた。物象は空ではなくして形體であつた。實際を愛した人々には『想像』の世界がその故郷であり得よう筈がない。確實な知識をと欲するのがその要求であつた。實有の念が吾々の心を物體に誘ひ、物體への注意は人々に自然科學を要求させた。科學は確實な知識による科學であつた。空觀や想像に心を育てる事を求めた東洋に自然科學が發達しなかつた事は極めて自然な結果であつた。科學は『實有』の念に共なつて必然西土に榮える運命があつたと余は思ふ。

確實な批判に基くと云ふ意味に於ての學問はかくして凡て西洋の人々の所有となつた。自然科學は云ふ迄もなく、組織ある研究による凡ての『學』は吾々に注意される事なく、西洋に於て著しい發達を遂げた。此科學の勃興が非常に新な文化の動因をなした科學的文明は啻に吾々の生活を變えたのみならず幾多の思想をさへ變更させた。東西の交通が又此文明によつて容易にせられてから、東洋にも驚く可き斯文化の襲來があつた。何れの國も多少なりその影響を受けない所はない、特に日本は早く又激しくその影響を受けた國であつた。最近此國に於て程西歐の文化が讃美せられた國はないであらう。在來の傳習に對す

る反抗が之に加擔して、西歐の文化は躊躇する事なく吾々の生活に入つた。若い時代は佛教に對する多くの執着なく、基教の信仰を喜び迎へた。今儒教の如きは只教室に於ての古典として吾々の間に想起される。それよりも一層多くの注意が科學に向けられた事は云ふ迄もない。殆ど全ての人々は學問に於て西歐に範をとる事に何等の躊躇を感じる事がなかつた。が之が一國の文化にとつて名譽な態度であるか否かは別として、かゝる自己に執着のない態度が所謂『急激な開化』を吾々の間に産んだ。人々は吾々が進歩的であると云ふ事を明かに承認した。此激變を思ふと吾々には殆ど過去の歴史が無いかの樣にさへ見える。

今日吾々の所有する學問が殆ど凡て西洋の學問であるのは云ふを俟たない。嚴密な意味で『學』を持たない吾々は、恐らくかかる事情を餘儀なくされてゐるのであらう。古來東洋に秩序ある學問が全く無かつたわけではない。支那朝鮮の天文學の如きはその時代としては誇るに足りる發達があつたであらう。印度の因明學の如きは寧ろ精細な知識に關する反省が吾々の間にあつた事をも告げてゐる。然し否定の眞理が豐になるにつれて『實有』に對する研究を追う心からは漸次離れて來る。物質への組織だつた研究は遂に榮えず、引いて科學的文明に非常な遲滯を來した。今日それを意識する吾々は新しい敬慕を西歐の學問に感ぜざるを得ないでゐる。吾々は西洋の學を追ひ、それを繼承し、出來得るなら同じ組識ある研究法を以てその學を更に發展せしめやうと志してゐる。物質に對する正確な知識を呼び覺ます上にも、亦物質文明の便宜を得るに對しても、之は取らねばならぬ吾々の態度として認められる。

余は玆に純正自然科學に對して、かゝる態度を批判する多くの意向を持たない。然し新しい學問の一つとして承認される宗教哲學に就て余は余の見解を述べる機會を得たく思ふ。

學としての宗教哲學が、他の學問と同じ樣に、西歐の所有である事は云ふ迄もない。東洋に於てはかゝる特殊な學としての部門がなかつた。故に今日吾々の間に於ての宗教哲學者は、殆ど否全く西洋に歴史を持つ宗教哲學の研究者として立つてゐるのである。それ等の人々は純に西洋の宗教哲學を繼承するが故に、多く東洋に省るべき宗教哲學があるとは考へない。又多少考へるにしても、西歐の思想の前にその價値を棄てる事に躊躇しない。從つてそれ等の人々が建設し發展させようと努力するものは、全く西洋の思想に生ひ立つた宗教哲學そのものである。彼等は之が唯一の客觀的な宗教的眞理に吾々を誘う道だと信じる

様である。然し果して今日のこの様な趨勢は正しいものであらうか。余は眞にそれを疑ふ一人である。

なべて學問はその研究法と題材とによつて、その內容が決定される。今日研究法と云へば科學的研究法に範をとらないものはない。宗教は科學的觀察による歷史學から又心理學から、又近くには社會學から考察された。然し純正科學と異る宗教哲學が、尙科學的研究法の外に深い內省的觀察を要するのは云ふ迄もない。科學的方法は普遍であるが、內省は寧ろ個性の特殊な深さによつて決定される。特に宗教の如き對象に於ては此必要が多いであらう。然し個性から滲み出される內省を要するなら、吾々はどうして內省の方法を迄、範を西洋にとらねばならないのであるか。果して東洋の冥想的思索は宗教哲學を發展さす上に於て無益であらうか。

此事は研究の題材を思ふ時益々明かにされるであらう。西洋の宗教哲學が、主として基教に現はれた經驗を取扱つてゐる事は事實である。吾々も亦題材をかゝるものにのみ求めて研究を進めるべきであらうか。果して東洋には異常な特殊な宗教的經驗がなかつたであらうか。又等しく近い經驗に於て特に深い境に入つた事實はないであらうか。東洋に現はれた幾多の宗教的經驗を反省する事は、新しい發展を未來の宗教哲學に寄與する事はないであらうか。又は東洋の思索によつて、却て西歐の思想の缺如を補ひ又は改造する場合がないであらうか。

抑も宗教哲學は信仰を人々に目覺まそうとする最後の希望を內に含むのであらう。人々は如何なる故に西洋のそのまゝな宗教哲學が直ちに吾々の所有にもなると思ふのであらうか。學としても之はその性質に於て自然科學とは異つてゐる西歐の思想そのまゝが直ちに普遍な思想たる事は出來ぬ。特に宗教に於て人はその人情や、血の奧に流れる性質に深く訴へる所があらねばならぬ。何故に學者は西洋の宗教哲學をそのまゝに發展さす事に於て、吾々の信仰を呼び覺まそうとするのであらうか。又かゝる態度によつてどうして吾々の固有の思索に正當な理解を持ち得ると思ふのであるか。

又ひるがへつて思ふならば、特に思想に關する事に於ては、將來東西の結合と云ふ事が、意味深い結果を持ち來すのではないかと思ふ。然るを特に重要な宗教に關する學問に於て、只一方の思潮のみを承認すると云ふ事は自然な態度たり得るであらうか。況んや此東洋に在つて東洋の思想を省みず、時としてはその價値をさへ否定する思想態度が、果して遠い根を吾々の心

に躍るであらうか。吾々の個性や特殊の思索を反省する事なく建設せられる思想は、永久な吾々の所得たり得るであらうか。自己の本性を傷ける事なく外來の思想を受け容れる事が、眞に吾々のとるべき態度ではないであらうか。西洋の宗教哲學は果して改變される必要なくして吾々の親しい所有となり得るであらうか。

人々は學としての宗教哲學が東洋になかつたと云ふ事を主張する。然し此事は事實であらうとも、之が直ちに東洋に深い宗教的眞理が思索されなかつたと云ふ意味にはならぬ。只それが組織的に學術として考究されなかつたと云ふ迄であらう。否、學問の上に宗教を安定せしめる必要がなかつた程、宗教はより深く吾々の性質に入りぬいてゐたとも思へるであらう。余はそう思ふ事がより眞に近い見方であらうかと思ふ、特に印度の人々の如き、どれだけ多く西歐の人々よりも宗教的な血を受けて生れてゐるであらう。宗教哲學はないにせよ、宗教的眞理が如何に深くそれ等の人々の信仰に握られてゐるであらう。彼等の豐な想像は甞て西歐の人々の夢にだに想はない深い思索に彼等を導き入れた事はないであらうか。宗教的眞諦に就て西歐の思想家が常により深く思索したと誰が云ひ切り得るであらう。若し云ひ切れないなら、どうして多くの暗示を東洋の宗教に受ける事をしないのであらうか。

物質的な米國を想ふ毎に余は此感を切に抱くのである。ジエームスの如きは眞に尊敬すべき思想家の一人であつたと余は思つてはゐるが、然し彼のとつた研究法が組織あり論理があり、新しい見方があり内省があつたと云ふ迄であつて、彼が取扱つた緊要な宗教的經驗の寧ろ豐な材料も、東洋の宗教的經驗のごく一部に過ぎはしないかとさへ余には思へるのである。

余は基督や又は偉大な基教徒の深い生活を忘れる者ではない。然し東洋にこそ盡きない宗教的經驗や思索があつたと余は想ふのである。否、學としての宗教哲學がなかつたにせよ、東洋の宗教は屢々宗教であり乍ら同時に宗教哲學であつた事を忘れるわけにはゆかぬ。思索の宗教が吾々に豐であるなら、何故それが今日の宗教哲學に意味を持ち來さないであらうか。果してそれ等の思索によつて一層の改造と發展とを期待する事が出來ないであらうか。西歐の宗教哲學をそのまゝに繼承して、そこに現はれる問題のみを問題とする事が、未來の東洋の宗教を救ふであらうか。又そこに討議せられた問題のみが眞の問題であつて、東洋の宗教的思索は決して新な根本的問題を呼び覺ます

事がないであらうか。如何なる大膽な發言が『ない』と云ひ切り得るであらう。

今日の宗教哲學の二個の大きな根柢は、實に希臘哲學と基教神學との二つである。之に哲學としての値を深めたのはカントを中心とする獨逸哲學であらう。換言すれば今日の宗教哲學は全く西洋哲學と基教神學との上に建設されてゐる事を知らねばならぬ。即ち凡ての東洋の宗教や思索は關與する處がないのである。否、時としてそれが取扱はれてゐる場合に於てすら、殆ど全くその價値を卑下した場合にのみ限られてゐる。果して東洋の宗教を等閑に附する事が正當な道であらうか。眞にそれによつて未來の宗教哲學を改造する餘地がないであらうか。果して多くの西歐の（又は日本の）宗教哲學者が云ふが如く、佛教の如きを眞の宗教でないと云つて棄て去るべきであらうか。特に思索に於て基教は佛教よりも卓越したと斷定し得るであらうか。余はしかく考へる事を甚だ不自然であり不正當であると思ふ。

二

特に思想を深めようとするならば、今後東西の兩洋が互の長を贈り互の缺を補佐する事が、特に緊要であらうと思ふ。今日迄ものゝ見方は一方を徹する事にのみ注がれてゐる。然し究竟な眞理が一面に限られてゐると思ふのは誤りである。眞理も圓相を畫くのである。『一』の眞の認識は互に違ふ事のない直線の一端を極める時に吾が所有となるのではない。或る一點が常に圓の上にある時、云ひ換へれば何處にも一端がない時、故に凡てが一端である時、眞に究竟な『一』を體得し得るのである。『余は物質を歌ふ、それは靈的であるが故に』とホイツトマンは歌つた。かゝる見方が眞の思想を産むのである。二而不二と觀じる時、『一』も亦『二』も眞に吾々に理解されるのである。余は特に未來の宗教的思想に於て此事が明かに認得されねばならぬと望むのである。

東西の人情や思索や文化が殆ど凡て對峙的關係にある事は誰も氣づくであらう。その間に例外がない事はない。然し著しい對比が吾々の前に現はれてゐる。想像と理性、直觀と理知、寂靜と能動、幻像と實在、無と有、内と外、心と體、如何なる攝理が此對比を東西に齎らしたのであらう。之は深く反省するに足りる出來事であると余は思ふ。未來綜合の『一』に吾々を導こうとして此分離が過去に與へられたと思ふのは、誤つた想像で

あらうか。とも角是等の二つの力が結ばれる時異常な結果が現はれると云ふ事を信じるのは、誤つた見方であらうか。

余は東西の宗教思想に於て、最も顯著な對比をなすものは、『絶對』に關する思想であると思ふ。抑も宗教哲學中の根本問題である『絶對』に就て人類は如何なる思索を持つたのであらう。一方に之を代表するのは、西歐の人々によつて理解せられ愛慕せられた神の（god）觀念である。然し之に對して一方に深く思索せられた者は東洋の人々によつて理解せられた神性（God head）の觀念であらうと思ふ。余の眼にうつる著しい事實は實にこれ等二個の對比である。神の觀念は最も深く且つ溫く西歐の地に生ひ立つたと余は思ふ。それはいつも『人格的』（'Personal'）な、親しい『父』'Father'としの神であつた。親しく吾々に語り吾々の爲に涙をもつ活きた神であつた。之に對して東洋で最も發達したものは、いつも超人格的な神性の觀念であつた。如何なる有限の相をも持たない至上の當體であつた。一方は『實在』する『有』としての神であるが、一方は『空』としての『無』としての究竟であつた。一方は活動の流れを代表するが、一方は靜な沈默を告げるのである。人々が冥想に心を沒するのも、凡ての汚瀆を拭ひ去つたその何ものもない寂靜に心を沈めたいからである。此區別は風俗や人情や藝術や、又は血の流れに迄深くしみ込まれてゐる。人々が神の熱い『愛』を說く時、吾々は寂しさの美しさを味はうと希つた。濃い彩や、澁い陰のうちにも各々の心が現はれてゐる。人々が道德的戰ひに生命を獻げる時、吾々は靜な默想に自らを見出し此世の歸趣を味ひつつあるのである。實に基教と佛教との對比はかゝる背景に圍まれ乍ら、吾々の前に浮び出てゐる。

多くの人々は此對比を見る時、一方を棄てゝ一方を撰ぶ道をとらうとする。實際が重んぜられる今日の風潮の中に、『無』の宗教が受け容れられないのは止み難い傾きとなつた。人々は東洋の宗教を只否定的であり消極的であると云ひ切る事を憚らない。此批判は常に淺く又た易く人々から受け容れられた。今日東洋の宗教が振はず、只西歐の思想が迎へられるのはかゝる批評によるからである。然し眞に『一』を求め、又『一』を味ひ、『二』に交る事が宗教の歸趣であるなら、更に又『二』の眞の認識が宗教哲學の最後を示すなら、一端を求めて、圓相を棄てるかゝる理解に滿足する事が出來るであらうか。

余は『無』の理解なき『有』の觀念は未だ二に因した考へに過ぎぬと思ふ。若し『動』がその內に『靜』を缺くならば、そ

れは決して『一』として理解せられた『動』ではないであらう。『靜』に對する『動』は眞の絶對な『動』とはならぬ。『無』なるものゝみ眞に『有』たり得るのである。眞の『一』は『動にして且つ靜』であらねばならぬ。裏面より云へば『動でもなく靜でもない』境に『一』の面目があるのである。余が敬慕するエリゲナが云つた樣に『創らず創られぬ』究竟の觀念を解せずしては、『創られず創る』神を知る事は出來ぬ。『無名』を知る時のみ『有名』の意が解かれるのである。眞に『多』を理解しようとするならば『一』に交る迄その思索を進めねばならぬ。人格的神の觀念が吾々に暗示する處が非常に深い樣に、空としての究竟を解せずしては、眞に神の絶對性を認得する事は出來ないであらう。基督教徒は、人格的要素を缺ぐとの理由で佛教の思想を輕視する樣であるが、それは僅か半面を見た考へに過ぎぬ。思索としての基督教神學は幾多の教示を佛教から受けねばならぬ。余は特にその空觀に於て深い反省を東洋の宗教に加へねばならぬと思ふ。

眞に此宇宙の至上の眞理を龍樹の如く又老子の如く深く考へぬいた人は少ないであらう。彼等の空觀や不言の教へを消極的等と評し去る淺薄さを再び重ねてはならぬ。彼等の思索には眞に犯し得ない深さがある。之と同時に吾々は三論宗や道教が人類の宗教として永く榮えなかつた理由をも忘れてはならぬ。基教の人格的神觀に就て吾々は特に厚い理解を持つ必要があらう。若し是等東西の思潮を内面から結び得たら、吾々は驚く可き眞理の所有者である幸福を受けるであらう。

人々は東洋の傳習的思想に對する只反感から、その價値を無益に棄てゝはならぬ。又深い批判をも經由する事なく基教のみがひとり宗教であるかの樣に思つてはならぬ。又宗教哲學と云へば、西洋の學そのまゝで充分であると思ふ如き稚愚を重ねてはならぬ。今後の宗教哲學は深く東洋思想を省る事によつて改造され發展する幸福を持たねばならぬ。文化はいつも『一』の理想に向つて進むであらう。もつと深く東西の宗教は矛盾する事なく内面から結合されねばならぬ。東洋に在つて東洋の思想を裏切る如きは、宗教の正當な本流に對する空しい反抗に等しいと余は思ふ。

西洋の人々にとつては、全く異邦の（Exotic）ものと云ふ感がある東洋の思想は、解し難く親しみ難い所があるであらう。それは宛ら密教の如くに外來の者に對して封じられた想ひがあるにちがひない。然し吾々の樣な特殊な時代に生れて、ない幼

時から西洋の文化を受け、然も血を東洋の流れに受けた者にとつてかゝる秘密が永へに封じられてゐるのではない。東西の思想を内から理解し、それを一つに結ぶ事によつて、未來の文明を創造する事は吾々に不可能であらうか。否、かゝる使命が吾々にはあると余は思ふのである。之は吾々に與へられた最も名譽ある任務である。余はその恩寵を空しくする事は出來ぬ。

　然し今日不幸にも日本での優れた宗教哲學者は、只西洋宗教哲學の繼承者であると云ふ資格を示すに止つてゐる。基教や西洋哲學には厚い同情があつても、殆ど凡ての人は東洋の思想には冷かである。從つてそれ等の人々に厚い理解を求める事は出來ぬ。否、それ等の人々から聞き得るのは屢々東洋宗教に對する誹謗の聲に過ぎない。

　余は以下の例證に於て禮を失するかを恐れるが、石原謙氏著『宗教哲學』の如きはその不幸な一例であると思ふ。此書は西洋の思想をよく咀嚼しそれを明晰な叙述に於て紹介した點に於て、入門の好著であると云ふ讃辭を受けるに足りる書であると余は想ふ。然し此書の價値は右の樣な意に於て認められる可きものであつて、之が東洋の人によつて書かれたと思ふ時、幾多の不滿の感が殘されてくる。著者は既に基教徒であるが故に佛教及他の東洋宗教には素養も少く經驗も持たないであらう。之は信仰の事であるが故に余は論ずる事を欲しない。然し何故かゝる資格を以て佛教を論ずる大膽を敢てしたのであらう。東洋宗教に關する誠に貧しい一章がその中に書かれてゐる。それは只佛教に對する先入の見方によつて、少しの執着もなくその價値を卑下し去つたと云ふに過ぎない。『かくて佛陀によつて純粹な宗教は未だ理解されなかつた』と著者は高言した。著者が如何に深く『純粹な宗教を理解してゐる』かを余は知らない。言葉の遊戯が如何に罪深いかを余は想はないわけにはゆかぬ余は此著書が西洋思想をよく咀嚼してゐる事を書いたが、然し不幸にもその咀嚼が西洋人の東洋思想に對する偏見に迄及んでゐる事を注意しなければならぬ。若し此本が匿名の著で外國文によつて書かれてゐるなら、誰も之が東洋の人によつて書かれたと思ふ者はないであらう。著者はその思想態度に於て殆ど獨逸の學風から外に出た事がない。之は一層その理解を特殊なものに限つてゐる。若しも宗教と云ふ事から著者が云つてゐる如く、眞に個性から溢れ出る活きた信仰の事實であるならば、余は此著書に於て餘りに著者の活きた信仰に逢う折を持たない。それは殆ど凡て他境に於て他人に於て考へられた宗教に過ぎな

い。吾々は現代の宗教哲學への入門として之を讀む事は出來る。然し未來の宗教哲學に對しての多くの暗示を求める事は出來ぬ。況んや東洋の人によつて書かれたと云ふ意味を玆に見出す事は出來ぬ。

余は未來の宗教哲學が東洋思想を深く反省する事によつて改造され發展する事を信じる一人である。否、寧ろかくする事に於てのみ、眞に究竟な眞理を捕へ得るのであると余は信じてゐる。余は幾多の未知の眞理が之によつて開發される事を疑はない。思索に豐な東洋思想は種々な西歐の思想に大きな暗示となるであらう。余は或る禪宗の修行者から、『自分には奇蹟の問題は聊かの苦にもならないが』と云つたのを聞いた事がある。余はその人が如何程深く奇蹟を解してゐるかを知らないが、かゝる言葉は時として眞相を語ると思ふ。多くの西歐の人々に解し難い幾多の基教上の難問が却て、東洋の人々の親しい所有になつてゐる場合があると思ふ。例へば余はヨハネの傳へた福音書の或思想を眞に註釋し得る者は却つて東洋の人々ではないかといつも思ふ。未來の正當な文化は東西の結合によつて果されねばならぬと云ふ余の信念が此感想を余に書かしたのである。何となればかゝる結合の根柢はいつも宗教の上に安泰されねばならぬ。東西が宗教のうちに融和する事が人類の運命とその幸福とを保證する最も確な道であると余は信じてゐる。

一九二〇・七・十七日朝二時半

精進の世界

――宗教改造と社會改造――

賀川豐彦

凡てを叫ぶ前に、先づ私は、合掌して、神に額づく。私の宗教改造は破壞に存せずして、禮拜に存する。禮拜を知らざる人々は何人と云へども、宗教改造を叫ぶ權利は無い。それはレニンであらうが、トロツキーであらうが、バザロツフ、カウツキー、マルクス、クロパトキン――之等禮拜を知らざる人々が社會改造の爲めに、宗教改造を叫んだところでそれは何の意味もないことである。

我を殺し、神を殺し、法を殺し、萬物を破壞し盡しても猶涅槃の世界は殘つて居る！　宗教は破壞の破壞に超越する。神の葬式を取り急ぐが善い、イエスも、釋迦も、ゾロアスターも火葬に附するが善い。パン！　パン！　物質の缺乏の外に何物の社會改造が無いと考ふるが善い。それでも物質に缺乏する生物が存在する以上、その生命に對す恐怖と爭鬪と迷信は殘るであらう。凡てを毀つても凡てを疑ふその認識主體は疑はれずして殘るであらう。信ずる心は、生きる心である。生命あるものは凡てを信ずる。生命と直觀とは同一時刻に同一軌道を進む。

この意味に於て、宗教は社會改造を超越して居るとも云へるのだ！

私に神を拜ませてくれ！　私は神を拜まずに居れ無い人間なのだ！　唯物的社會主義者と云ふ人々の中には、神も何にも禮拜せずして、刻々に變化する科學の假說を神よりも大事がる人人がある。それは至極便利だ。その人々がそれですむなら、それで善からう。私は宇宙の驚異と、生命の壯嚴に、自然と頭がさる。私は神なくして一日も生活が出來ない。私は神を信ずる。私は理屈で神を信ずるのでは無い。生命の爆發する所に、自己の創造せず自我の知らざる超越的勢力が私の生命そのものの中に覗き込んで居ることを知る。

私の心臟の鼓動――私の身體――入場料も支拂はず、額

みもしないのに、私はいつしか、地球表面の生命の劇曲の一主人公となつた。

私はそれが何人の仕業か知らない。然し生命を幾億千年地球上に生え上らしめて、凡ての天變地異を通じて、成長せしめて居る。獅子の爲めに羊が苦しみ、虎の爲めに野牛が倒れるかも知れ無い。それでも、生命はまだ延び上るのだ。生命は凡ての災厄より强い。どんなに押し付けても蹈み躪つても生命は生え上る。山に川に海に生命は充滿す。そして、生命は苦心もて、上に進む。生命は人間にまで生え上つて、自意識として進む。生命は人間の自意識の中に覗き込む――その爲めに私は、自意識が生命に覗き込んだのではないかとも考へて居る。兎に角生命には意識がある。生命は意識である。宇宙の生命は、宇宙の意識である。宇宙の意識は、宇宙の神である。私はその中に呼吸して居る。

生命を信ぜざる人と、生命を固形化して物質のみしか見ざる人には、私の云ふことがお可笑いかも知れ無い。然し私には、生命を固形化して、原子を神の如く禮拜する人々がお可笑くて仕方が無い。生命は延び上る！　その爲めに生命は時間の中に飛躍する。私はその生命の飛躍の跡を追ふ。或人は之を理想と呼ぶ。私は理想を追ふて進む。生命としての神は又理想としての神として示現する。

その理想の神は、たゞ生命と云ふことだけに於て絶對性を帶びて居る。理想は常に傾向として延びて行く。私は理想の内容を全部覲知しないかも知れぬ。然し進化の道程と傾向には人類の進路が、生命と愛と自由である位のことは知覺される。勿論それは絶對的のもので無いかも知れぬ。然し私は生命の能力の凡てを完成せねばならぬ。欲望としての理想を凡て私は追ひ求める。求め無ければ與へられるものでは無い。尋ねなければ會ふものでは無い。電氣を探して我等は電動機をさがしあてた！飛ぶことを要求して、我等は遂に空中に飛び上つた。我等は更に神たらんことを要求する！　笑ふな！　生命が欲望として覗き込んで居るのだ。延び上る生命は欲望によつて、未來の飛躍を豫見するのだ！　つまり欲望の小さいものは、神と生命の小さいものしか持つて居らぬと云ふ理屈だ！

私は大きな欲望を持つ！　私は餘剩價値の上に發生した金貨によつて、自分一人で一瞬間の夢を貪りたくない！　私は麥の如く地上に落ちる。そして、地上に落ちて、反つて、百倍の果を實る可きことを知つて居る。だから今日の宗教に改造すべき

ことがありとすれば、それは宗教が惡いことを教ゆべきでは無くして、宗教が無いことが惡いと云ふことを教ゆ可きだ！　つまり今日の宗教は宗教になつて居らないのだ。宗教は神たらんとする欲望なきものには不可解な事である。(今日の宗教主體の多くは國家であり、秩序であり幸福であり平安であつて神でない！)

社會改造者は神たらんとする。過去の宗教が與へ得なかつた、社會改造を企てて居る。それは貧富の懸隔を破壞し、人間に神の自由を與へんとして居る。人間が自由である爲めには、超越的壓制的神を自巳の上に立てることを許容しないと云ふ理由で、先づ第一に神を破壞する！

バクニンは、神の暗殺者の第一人者である。その弟子等は皆それに見習つた！　クロパトキンはその四大弟子の最大なものである。マルクスもその道に行つた。神はデモクラシーに反對する第一の砲壘であると科學的社會主義者は夢想した。

神が物質のような思想上の固形物であれば、私は彼等の說く處に少しも違存は無い。

然し、生命としての神は固形物では無い！　それは生命である！　それは意識として內在する――否意識の中に生命として內在する。「無」を夢想してもそれは、生命の上に建てたる「無」である。生命の外に我等は何者をも思考することが出來ない。生命卽神である。

それで神としても生命は、バクニンが考へた如く壓制者として思想の上に君臨するのでは無くして、永遠の父――生命の出生者、保護者、飼育者として、現れる。太陽の熱度も、海中のエマネチオンも、それは君主として壓制するのでは無くして、デモクラツトとして萬物に恩惠を投げる。生命は民主の民主である！　壓制者としての神は壓制者の思想の產物である。然し、生命としての神は嘗て壓制者であつたことが無い。萬物を產み、萬物に堪え、萬物を育てた――民主思想そのものまでも產んだのは、生命である。神である！

それで、マルクスの如く凡て萬物を固結化した物質の流動として考へることも誤りであれば、バクニンの如く、神を壓制者として見ることは誤つて居る。

マルクスは神を信ぜざることが、社會改造の近道であるかのように云ふた。唯心である爲めに、王と教會が奴隷の解放を常に邪魔する。で、唯心であることを中止することが、社會改造

の第一步であるように云ふた。

然し不幸にしてそれは眞理の凡てでは無い。社會の解放を邪魔するのは唯心では無い。又宗教では無い。眞に宗教的になり得ない處に社會の解放が邪魔せられるのである。良心の上に、宗教を建てた宗教が嘗て解放を邪魔したことがあるであらうか？　良心に妥協を生じた時に宗教の墮落が始まる。

「宗教」と稱する「社會」組織に墮落こそあれ、解放を欲する良心に――社會主義良心をも含みし墮落はあり得ないのである。マルクスは宗教は實社會の反影にしか過ぎ無いと云ふ。實社會とは何を指すのか？　差當りパンの生産の世界を指すと考へるらしい。卽ち、パンの生産の形式が宗教に反映したのだと云ふ。それで、生産の形式を變更すれば、宗教も改造出來ると考へるのが、彼の宗教改造論である。つまり彼によれば、宗教は實生活の附錄であつて、嘗て宗教が實生活を支配しないものであると考へる。

私はこの事實を凡て否定し去るものでは無い。然し私に不可解なことは、生産の形式が宗教に分出して行くと云ふ心理的過程そのものの存在することである。なぜパンの生産はパンの生産だけで止られないのか？　パンは「非パン」を産むと云ふ事實はどうして起つたか？　之は人間がパンのみにて又――パンの爲めのみに生きて居ら無い證據である。生産の形式が宗教を造る！　私はこの眞理を認める。然し何故生産から宗教が生れたか？　之はマルクスが知ら無い所である。然し私は之を知つて居る。卽ち人間はパン以上に成長したいのである。パンだけに止るならば寧ろ原子だけに止つたがよかつたのだ。パンを越え、肉を越えて、神にならんとする意志が生命の被造物の中にあるのだ。人はパンを食ふて生きる！　生きるものはパンで無くして、人間である！　そして人間はパンを消化にして神になりたい！　エバが墮落したのも、神の如くなりたかつたからだと云ふ。生命として動く神に、その神の內部に、更に新しき神を創りつゝある如く私には感ぜられる。否、神自身が成長するのでは無いのか！　生命は進化の形式を取つてゐると人間に感ぜられる。生命は意識の中に生え上り、自由の中に飛躍する日を待つものの如く感ぜられる。

それで、パンと原子だけを見て自由を慕ふ生命を見ざるものは生命としての神を見無い！　マルクス自身「生」――「産」――と云ふたが、生と云ひ、産と云ふものは何者ぞ、生と産とは生命そのもの行動そのものを除いて何か意味があるか？私の宗教

は、生産そのものが神であるのだ！　マルクスは生産の外に神があるように云ふたが、私の神は生産‖生命そのものの神である、創造者である、進化者である。マルクスの如く思想の神と行動の神を區別するのでは無い。

本源の生命に遡れば、生命即ち神である。今日の宗教が生命の外に神を尋ねるから、神が墮落して人間より下等なものになるのである。古代希臘の哲人は希臘の神々に就て『神々の如く墮落したものであれば、人間は神たることが望ましくない』と云ふて居るが、生命と良心の上に神を發見せず、過去の因襲にのみ生きる時に宗教は墮落する。即ち宗教が生命全體で無くして、生命より派出した一岐流にのみ掉さんとするときにそれはその岐路に囚はれて窒息するのである。

宗教はパン故に出來たものでは無い。パンは生命の爲めに又宗教は生命の爲めに出來た。それでパンと宗教はいつしか離る可らざるものとなつて、生命そのものを忘れて、パンから直に宗教に行つて墮落するのである。

我等は此種の宗教を破壞する。所謂社會の秩序と稱して、掠奪と餘剩價値の上に發生せしめた宗教の蛆虫を凡て破棄する。

それでも宗教が破壞されたのでは無い！　生命が破壞され無いのに、どうして宗教が破壞されるものか？　宗教とは生命と云ふことだ！　生命に深く徹底すればする程、宗教は噴水の如く湧いて來る。唯心とか唯物とか區別をつけてくれるな、兎に角生命は時間の上に——中に——噴火する。それが神だ！　私はそれを驚異と敬虔の念を持つて禮拜する。私がナザレの大工イエスを知つてから、一層その感念が強くなつた。生命は私の父である。内在する天の父である。私は神の子である。私は神の子であるから何人の奴隷でも無い——勿論、賃銀奴隷では無い！　それで私には勞働運動が即ち宗教である！　私は勞働者を崇拜する。凡ての神の子を禮拜する。私には死んだものだけを拜むことが出來ない。私は王を拜む心を以つて、生産者を拜む。

私の宗教的生命は此處にある！

私は敬虔の念を以つて凡てに近づく、傷められたるものの爲めにも十字架を負ひ、生命の回復が可能なることを信ずる。私の救と解脫は此處に存する。私はイエスと十字架の弟子である。

生命はパンの問題だけでは說け無い。合掌の心を持つものの

みが、その懐に這入つて行く。神を拜む心の改造は……だから……生命の全部を宗教に取り入れる人のみが申出す權利を持つ。で、之からは、科學も、哲學も、藝術も、産業も、凡ての凡てが、宗教となるのだ――たゞ、拜む心を捨てやらずして――

私は跪坐して、實在に默禱する。精進の世界は妙なる世界である。私は神に抱かれて、貧しい生活の中に悦んで居る。私は神を賴り行く。それで神は私を強いものにしてくれる。私は鐵棒を持つて、更に社會に突進する！（一九二〇・七・五）

宗教家の社會運動

法學博士　上田貞次郎

私は宗教に關して何も知らないが今の日本に偉大なる宗教家が現はれて來て社會運動に參加してくれたら何れ程結構な事だらうと常に思ふて居る。今の樣に色々のイズムスが代る〲出て來て吾々の頭を刺戟する時代には何か一層根本的なもの、一層超越した高い所に立つものを求めるのが當然である。哲學！それもよからう、併し人生は畢竟ロヂツクにあらず、理智は人間の全部にあらず。智識は實行の力を與へないのである。

一八三〇―五〇年の英國は十九世紀劈頭の大戰爭に勝つた、意氣揚々たる英國であつた。産業革命の先導者として『世界の工場』として宇内の商權を一手に握つた所の英國であつた。一代にして巨萬の富を成した所の大實業家が續々輩出したのである。けれども又幾百萬の貧民勞働者が簇生して普選を叫び、一般的同盟罷工を企て、暴動を起し、打壞し、放火、軍隊警察との衝突が日々の出來事であつた。青年時代の急進黨から一變して保守黨の首領となつた所のディスレリの言を借りていへば、當時の英國は相互に諒解すること能はざること熱帶人と寒帶人

の如き二個の國民——富英國と貧英國に分れて居た。富者は獨力奪闘の人、——『實業の日本』の皷吹しさうな人物であつた。彼等の信條は自由競爭主義の經濟學であつた。之に反して貧者は無識無分別で唯貧苦に逐はれ、不平に満つる所の群集であつた彼等の運動は好景氣の時には粗暴であつたが、不景氣の時には絶望的となつて一層危險性を帶びた。恐慌が來たから思想問題は下火になるといふ樣には行かないんである。

貧民勞働者の運動を指導した所の一人は米國に『新しき村』を建設せんと企てゝ、失敗して產を失つて、歸つた所のロバートオーウンであつた。全國各地に蜂起した所謂職工組合は忽ちにして大同團結を作つて產業界を乘り取らうといふ——今でいへばソヴィエットの直接行動の樣な騷ぎも度々やつた。けれども本來烏合の衆だからストライキと雖も到底成效しないのが多い。その結果が暴動になつて華族や成金の肝膽を寒からしめた。

それから此オーウェナイトの革命的社會主義と相並び、或は相結んで騷いだのがチャーチスト運動であつた。チャーチーストは普選を看板にして居たが、當時の普選運動者は殊更直接行動に反對して議會政治を主張するといふ譯でもなかつたので、チャーチストに暴動、掠奪、放火は附物であつた。

此時不世出の文豪カーライルは慨然として筆を取つて『チャーチズム』及『過去と現在』の二書を著した（近頃文學士石田憲次氏が『過去と現在』の譯を出された）。彼は普選運動を嘲つて『議會といふ井戸端會議に一人の辯士を出すことの權利の五萬分一』を得たところが何程の效あるぞといつた。彼は少くとも當時の民衆運動に望みを囑せなかつたのである。併しながら英國の實狀は到底其まゝには續き能はぬと考へた。中々所得稅の綜合課稅に反對などして居るべきでないと考へた。彼は華族舊富豪を徒手遊食の輩として攻擊し、又實業家新富豪を金錢勘定のみで人と人との關係を定めやうとする拜金宗素町人として攻擊した。彼は今の富豪が神を怖るゝこと昔の封建諸侯の如く其社會的地位を自覺して人民の爲めに殉ずるの精神を發揮すべきだと力說した。彼はアリストクラット——眞の意味に於ける溫情主義者であつた。プラトーを讀んだ紳士閥の人間には兎角烏合の衆の旗振りにはなれんのである。

カーライルは眞摯なる基督者であつたが、僧籍には居なかつた。僧籍から出て同樣の社會的說法をしたのはフレデリック、モリスや、キングスレーである。此人々は天下の形勢容易ならざ

るを直感した。其結果が所謂クリスチアンソシアリズムとなつた。基督は『汝の近隣を汝の如く愛せよ』と教へて居るのに、今の世は腕の世の中、金の世の中で、社會の解體するのも知らずに『自由競爭』の萬能を信じて居る。基督の法則は競爭、コンペチションではない、協力、コオペレーションである。

一八四八年四月十日、チャーチストが五百萬人の署名ありと號する請願書を持してロンドンに大示威運動を行はんと豫定した日の夜、何人とも知れず市中至る所に張紙をしたものがある。曰く『英國の勞働者よ、汝等は今社會から不當の取扱を受け居るといふ。如何にも其通りだ。其事は汝等の外にもよく知つたものが多勢ある。……彼等は汝等を愛する。それは何の求むる所もなく、唯汝は彼等の兄弟なるが故に愛するのである。……汝等は自由の國イギリスの民であらう。冷靜なれ、常識を用ひよ。徳なくして眞の自由あらんや。宗教なくして眞の科學あらんや。神を恐れ、同胞を愛せざるものに眞の勞働あらんや。……英國の勞働者よ、賢慮あれ、さらば汝は自由ならん、自由なるの資格あらん』と。こんなことが書いてあつた。キングスレーがやつたのだ。

基督教社會主義者は神の道を勞働者に教へんとしたのである。併し彼等は既成の教會の一般に取る様な態度は取らなかつた。即ち民衆は羊の如く、自分等は牧羊者の如しとは思はなかつた。民衆も亦人である、獨立自尊の人でなければならぬ。人をして人たらしむる爲めに導き教へるのであつた。神の前には人は皆人である、殊更哲人とか超人とかに生れ付いた人はないらしい。

『競爭』を本とする代りに『協力』を本とする所の産業組織は何んなものか。それはコオペラチブ、ソサイチー即ち産業組合であつた。其中でも特に生産組合こそは最もよき方法であつた。彼等はロンドンの洋服下請職工を糾合して自ら資本を與へて組合を作らしめた。職工は共同の工場に働かねばならぬ。併し賃銀の爲めに働くのでなくして自分の事業の爲めに働くのである。彼等は合議して工場の規則を作り、工場の支配人を互選して共同自治の組織を運轉すべきであつた。彼等は最早資本主、雇主を有たず、お互に雇主ともなつて仲よく事を共にすべきであつた。

此の如き組織は日比谷や芝山内の民衆大會から生れて來る譯に行かぬ。如何にも冷靜であり、常識に富み自由の本義をよく心得たものでなければ出來ない事である。寔に至難の事であ

る。けれども夫が出來れば社會は必ず改造されて一層住みよきものとなるに相違ない。近頃新思想家の說くナショナルギルドも畢竟是に外ならぬのではないか。

所が企業はやつて見ると中々六かしいものである。世間には單なる金主と實際の企業家とを混同して資本家と呼ぶ人が多いらしい。今の企業は資本家と勞働者でやつてゐる。資本家は遊ぶ人で勞働者は働く人だ。さすれば遊ぶ人など居ないでも働く人の多いのみで仕事は出來る筈だ。生產物の全部は勞働者が取る筈だ。といふ結論にもならう。併し幾十百萬の人を組合はして、部署を分ち、秩序を立て、能率高き生產に從事させるのは中々容易の仕事ではない。是が誰にも出來ることなら商業學校は入らぬのである。況や此仕事を勞働者の自治に依つて行はんとするは頗る難い。

勞働者の自治能力に絕大の信認を置いたのはアーメン臭い基督敎社會主義者のみではなかつた。ジョン、スチュアード、ミルの如き大經濟學者も同樣に生產組合の將來を樂觀して、やがて資本主義の企業は組合の企業に壓倒されるだらうと大膽な豫言をしたのであつた。（同氏經濟原論第四卷第七章）。けれども今までの所では生產組合は悉く失敗といふて差支ない。基督敎社會主義者の企圖も一二年の內に倒れてしまつた。

產業上のデモクラシー！ 產業上のセルフガヷーメント！是は貴い理想である。けれども至難の事である。吾人は制度を度視してはならぬ。けれども制度は人を救はず、人が人自身を救ふのである。基督敎社會主義者は去つて勞働者の敎育に力を用ひた。彼等の設けたウォーキングメンス、カレッヂは今英國に數多くある勞働者大學の元祖であつたらう。彼等の組合は失敗したが、勞働運動を基督化せんとの大目的は決して失敗しなかつた。社會主義の名を蛇蝎の如くに恐れ嫌つた英國の敎會は競ふて社會事業に指を染むるに至り、特に宗敎上の信仰を與へて人心の奧深き所に活動の源泉となるべき力を生ぜしめた。昔からの敎會に傳はつた慈善的溫情主義で、『分を守れ』とか、『足るを知れ』とか、いつた樣な、上流階級にのみ都合の好い、下層階級を奴隷化し、貧民化する樣な風潮を棄て、眞に向上の一路を示すことを宗敎の目的と爲すに至つたのは實に驚くべき變化にして、而かも基督敎社會主義者の蛹を作つたものである。彼の一町每に高きスパイヤーを屹たせて、朝夕に意味深げなる鐘のチャイムを送る所の、英國內幾千の敎會が、社會的運動——特に社會的敎育の爲めに努力するのを實見した人は、誰か彼のフ

レンドリー、ソサイチー共濟組合や、コオペラチヴ、ストア消費組合や、ツレード、ユニオン勞働組合杯の偉大なる發達が宗教家の力に負ふ所なしと言ひ得るぞ。而して英國改造の新思想は此等自發的組合の發達ありてこそ實際問題になるではないか。

社會の改造は難い、樂をしながら出來る事ではない。又樂をする爲めにやるのでもない。誰か今の世の中からデモクラシーとサボタージを混同するやうな浮薄な空氣を一掃して眞劒な氣分に歸らしむる者ぞ。教育家と宗教家は何うして居る。——特に資力、人力の豐富な各宗本山は何うして居る。

日蓮主義の大文化運動

田中智學

(一)

佛教も耶蘇教もない、今の日本で一番大切な事は、國民の全體が自分の國の日本を知ることだ、今の教育は日本人に日本を教へないで、先づ西洋を教へる、昔し何事にも支那を手本にしたと同じ事だ、佛教に熱中すれば印度を崇拜するに至り、儒佛を學べば、支那を崇拜する樣になる、斯くして日本國は、佛教で印度臭くなり、儒教で支那かぶれになり、今また西洋かぶれの爲めに、日夜に自國の特徴殊勝點を破壞して得々として居る、不思議な國民である、しかし斯く人眞似のすきなところに短所もあるが又長所もある、楠公の出た國に五右衛門も出た、乃木將軍を生んだ日本に幸徳秋水も出た、いかなるものも造り出す、強大な同化力がある點こそ、やがて世界の物文化を吸收し消化して、新らしき大文化を造るべき使命の存して居るところなのであらう、さうでなければ、こんな立派な國に餘りといへば、輕薄すぎた風俗である。

私は佛教信者であるけれども、第一に日本人としての立場からして、佛教が日本の名教であることを確信してこれに這入つた、天笠の教だの外教だのと考へるのは大違ひだ、佛教は佛教、印度は印度だ、儒教もその通りである、孔子は世界で尤も鮮明な德教主義者として、釋尊と同じく『日本國體』の讃說者である、基督の教へた天國も、その實は『日本國體』の事でなくてはならぬ、一切の聖人は悉く『日本國體』を宣傳し讃說し鼓吹し稱揚するために世に出た、名はその時その場合の都合によつて種々異りはあるが、『道』は必ず一つである、その道統の地上儼存境はこの日本であつて、『日本帝室』はこの道の護持者として世に統を垂れたのは、史實が之を證して餘りあるから、公平に考へて見れば、『日本といふ國は日本だけの日本であつて、世界の一大事を荷ふて建てられ傳へられて居るものであることを知り得るであらう、こんな事はイキナリに聞いては、ちよいと合點が行かないだらうが、マー我慢して一度ばだまされたと思つて私のいふ事を味つて考へて見て下さい、決して無理由無根據の事は言はない、日蓮上人が一代の心血を濺いだのも此解決唱導のためである、數には足らないが、私も今年で四十一年間鳥の啼かぬ日はあつても、私が之を高唱讃說しない日はない、自己の一切を捧げて此宣傳に全力を致し、『言論』『經營』『文章』『藝術』の諸方面に出入りして、何の機會でも逸しまいと奮鬪して居る、筆硯ばかりでも二萬頁以上に達して居る、これでも未だ言ひ盡せないほど、多量な理論も實證もある、が、要は世界の中に唯だ一つ、實際の力となつて存して居る『道』の傳へがある、それが『日本國體』だといふのである、釋尊も孔子も基督も皆悉くこれの宣傳者であり證明者である、日本の帝室と國民だけは、先天の因緣があつて、その國體の護持者なり、實行者であつて、それを體現して世界人類に示すべき天職があるのに、自覺を失つた結果、他に示すは扨置き、他から侮られ賤まれ嫌はれる損な情けない劣等性格に育てられて、反國體的人民となつて居るのは、原因はいろ／＼あるが、要するに『日本國體』の尊貴を忘れ、その國體の體現者たるべき尊榮の資格を失つたからのことである、共れを警醒しようといふのが『吾が日蓮主義』である、私のいふ日蓮主義といふことは、多くの點に於て、既成宗團と意識及び行動に於て大に異るところがある、隨て日蓮主義は命がけで弘めるが、吾等は坊さんではない、「田も耕せばソロバンも把る、ペンも持てばシヤベルも持つ、即ち『在家佛教』である、而して日蓮主義的處世者であるから、實

業に從事する、政治にも立入る。

（二）

金碧壯嚴の殿堂内に封じこまれ、三尺間口の佛壇の中にとゞこめられた佛教を、家庭的に社會的に國家的に解放して、活ける人世の意義とするのが、醒める信教者の唯一方針である、吾等は此意義に於て常に國民を警醒して居る。これ迄毎月『國柱新聞』と『毒鼓』を出して居るが、月一回ぐらゐで、此世の中は救へないと考へて、この九月から『天業民報』といふ日刊紙に改めて、何が何でも『日本國體』の眞意義を國民の全體から世界中までも及ぼして建國濟世の主義を貫徹したいと考へて居る、世人は日蓮聖人に依て、日本國體の眞意義を教へられたといふことを不思議がつて居るが、それは小いことに慣れて居て、大きいものに着眼せず、事物を褊小に解するためである、日蓮上人が佛教者であるといふ前に、先づ日本人であることを知らねばならぬ、上人は『承久』の亂に不審を起して、その解決の爲に佛道に入つたと曰はれて居るほどである、承久の亂は、北條義時の變で、日本國體の失脚史である。之を正すのは徹底した大義名分主義でなくてはならぬ、それは深遠の教理高妙の道法たる『法華經』を根據とした國體開顯論である。

（三）

『大義名分』に就て活きた適例は先頃貴族院の質問で花の咲いた『呂運亨事件』に原首相床次内相等の答辯が、不徹底だとか、不親切だとかで、大ゴタ〳〵した、又諸新聞も政府の處置を非難して盛んに攻擊したが、どうやら『恐悚』の一言で埒があいたそうだが、私はこれに就ても少しく變つた考へをもつて居る、それは日蓮主義の立場から判定して行くと、時の當路者の失態とばかりでなく、一體の國論が間違つて居るのである。元來國の教育が間違つて居るから、こんな事が出來たのである、即ち國家が『大義名分』の觀念を崇ばないから來つた過失であつて、とりひ政府者ばかりではない、議會でも議員でも新聞記者でも學者でも教育家でも、總じて同じ病にかゝつて居るのである、『大義名分』といふことを空想と考へた教育、『大義名分』を舊思想ぐらゐに早合點した政治、これが産んだ『呂運亨事件』であるが、實は何事にも其缺陷は祟つて、日夜に國民を惡化しつゝあるのだが、辛きことを蓼葉に習うの格で、ウカ〳〵氣がつかずに居たのであるが、その積累し結晶しかけたのが、呂運

事問題となつて現はれたのである。

議會での質問には、『朝憲紊亂者であるのに、なぜ招待した、爾ういふ不逞の徒に禁苑を拜觀させるといふことは不都合だ』といふことが主要點として、これに對する當局者の辯明は、『是は罪跡がないから罪人でない』といふことと、『聘んだら心も折れて懷くであらうといふ婆心からだ』といふに在る、この議論だけでは問題の決が、『彼れを罪人と見るや告や』に在る、罪人でないとしたら、朝憲紊亂者といはれなくなる、さらば之を招からうが、禁苑を拜觀させやうが、別段問題にするには及ばないことになる、卽ち『大きなお世話だ』といふ場である、若し之を法律上の罪人としないまでも、明かに道德の罪人ではないかといふことになると、これは事が可なり面倒になる、道德の準備が違へば善惡がアベコベになることもある、況や道德と成ると背後に『思想』が伴うから、猶更議會畠のものでないことになる、今の教育で養はれた人は、『すべて同一類型で育つて來て居るから、こんな事になると、いつても徹底しないのが常だ。

（四）

道德でも法律でも政治でも、國を爲むる事は必ず主義がなくてはならぬ。今の日本はこの主義を缺いて居る、國に主義がない、否國そのものは有るのだが、國家經綸の衝に當るものが之を知らない、隨て用ひない守らない、之を以て世を治めやうとしない、先帝昇大以後、ます〳〵此傾向が甚だしい、曾て『倫敦タイムス』が豫言した通り、『明治大帝以後の日本は、必ず民主思想の勃興によつて、國體觀念が漸々稀薄になるであらう』との推斷は、不幸にして段々的中して來て居るやうだ、卽ち日本建國の根本國是ともいふべき一大主義を顧みないで、その日〳〵風に靡く浮草の如き浮薄な觀念を以て、法律も、政治も、道德も、扱はれて居る、國家は災難である。

『一つのものを解て多數に手分しよう』といふ主義には、名も分も要らない『多くものを一つに統べて各々にその所を得せしめようといふ主義には、必ず名と分とが要る卽ち名義と分限である、秩序を整理する上の約束である、その約束をみんなで守るから萬事が整頓されて行くのである。

（五）

就くべきに就き、離るべきに離る、爲すべきを爲し、爲すべからざるを爲さゞる、之を『義』といふ、義は『宜』なりと言

つて、その宣言に從ふの謂である、この『名』はこれに銘じ的この『分』はこれに關するといふことを、徹底的に將た決定的に又全部的に、些の異途異念のない様にその義意を定めるから之を『大義』といふのである、故に『大義名分』とは秩序を維持する思想觀念の表現として、これが經國上に應用されて行く時『主義』となる、卽ち『大義名分』を主張として、この標準で國を率ひて行く、これは前に言つた、多數を一つに統べる意匠の流義は、是非とも此『大義名分』主義でなくてはならぬ、而して日本といふ國は、世界中に成り代つて此方面を受持つべき先天の使命を有した國だから、どの國にも掛け構ひのない卓然たる態度で、神代からちやんと『一君萬臣』の組織で國を建て、その大組織の中に、あらゆる道德も政治も盛り込んで、世界のいろ／＼の亂れの最後を始末づけるべく『君臣道』の正義精粹を確立して、その大時節の來らんことを待て居るのである、それゆえ此日本に於ては、政治でも道德でも、この目安を外れたら最後、一切の智慧も學問も皆國害になつてしまふ。

古に於てこの事を確知體認したのは、釋尊と天照大神と武神天皇と聖德太子と日蓮上人と、及び聖統傳持の列聖である、釋尊は法華經に於て之を豫言し、天照大神と神武天皇は、國土に就て之を實行せられ、聖德太子は文教政治の上に之を祖述せられ日蓮上人は『世界的大宗教』として之を宣傳された、法華經に示された原則は

『十方佛土ノ中ニハ唯一乘ノ法ノミアリテ、二モナク亦三モナシ』

と言はれて、大義名分を原理的に示し、又

『是法ハ法位ニ住シテ世間ノ相常住ナリ』

と、之が原則を教へてある、卽ち法位に住するといふ條件より、世間の相の常住は來るとある『常住』とは安定の義である『法位』とは眞理である、無理に依住せされば、一切萬物の安定はないといふのが原則である、此大眞理を生のまゝに現出したのが、世界の中に唯一つ、この日本國であるから、これを『眞理の見本』として『法華經の國』といふのである卽ち『大義名分』の家元なのである、所詮は大義名分といふことを閑却すれば亂れないですむものまで紊れて來る、故に世を治め國を整理するには是非とも文を標準としなければならぬ。

（六）

『名分』は約束である、手形である。これが紊れたら、各人の

目安とする義理が違うから、事物が顚倒するに至るのである。醫師の藥局で毒のレテルを誤つたらどうだ、色が似て居るからとて、『キニーネ』の罎に若し誤つて『モルヒネ』を容れて置いたらどうだ、大騷動が起るであらう、前年横濱で、『コレラが流行した時、役所から消毒用の劇藥を戶ごとに配達して來たのを或る職人の宅で留守をして居る其家の女房が、『精錡水』のビンへ入れて貰つて置いた所が、亭主が歸つて來て、途中で眼が痛んだからといふので棚を見ると『精錡水』のビンがある、もう無いと思つたらまだ有つたのかと、イキナリに其れを眼に注したところが、俄かに眼が腫れ痛んで苦んで居たのを女房が見付けて、『あゝ其れは違う！ 今日實はこれ〳〵で』と話したが、既に遲い、この人は遂に片眼を潰してしまつたといふ話があつて、ビンのレツテルは卽ち『精錡水』の約束である此レツテルの中には精錡水といふ眼藥が這入つて居ると信じたのも約束である、然るにあの家の細君が違ツたものを容れだ時に、その趣をビンに明記して注意をしなかつたのは、精錡水の約束を無視し、新らたに自已の假りに入たものゝ約束をも無視し主人の約束心を反古にさせて、潰れない筈の眼の約束にも背いて盲目にしてしまつた、さりとて此女房が敵意があつて、亭主の眼をつぶしてやらうと思つてした事では無論ない、全くの過失である、過失ではあるが、その災害の結果は敵害以上の悲慘事である、名分を紊した祟りは、すべて斯ういふ次第のものである。

眼藥のビンに毒藥を入れた樣な今の思想敎育政治の失態は、どこぞへ何かの祟りが出ずには居ない『名分』なぞは小さい淺いと早合點して、却て其範圍を窮屈がつて努めて其れから脫出し樣として居る、又居る又その脫出することを自由思想と心得て居る、約束から離れて、自分の自由意志で萬事を纏めようと考へたら、其れは此上もない無理だ『手形』でも『小切手』でも、名あて違ひのものから金を受取ることが出來ようか、記載の金高以外を受取り得られようか、そこが約束ではないか、酒屋の看板を目安に酒を買ひに行く、是れ双方の約束である、この約束がグツ〳〵であつたりアベコベであつたりしたら萬事は齟齬するばかりである、齟齬の産む所は必ず亂れである、故に日蓮上人は

『一切事ニ亘リテ名ハ大切ナリ』

と訓へられてある、又『たとひ善なりとも義分ゐたれりとも、先づ名を忌むべし』とも『賊軍の旗は官兵さすことなし』とも指南されて居る、眞に萬古不朽の名訓である。

呂運亨が朝鮮獨立假政府の外務次官だとかいふ事は日本の今の法律で、これが直ちに罪人であるかないかは、今の人たちの手製の法律だから、吾々には判らないぜ。法律上では多分罪人でないのであらう、少くとも時の司法大臣たる原敬氏が、之を罪人でないと考へて招いたとすれば、法律上犯罪人ならざるものと見て置かう、しかし國家は法律ばかりでは立たない、それより大い深い高いものがある、『それは道』である、卽ち建國の主義である、國體である、文を標準として法律でも何でも造るのでなければ、日本の法律でない事になる、日本建國の主義は、前にもいふ通り『大義名分』を骨肉として居る、それは日本國それ自身が日本國を維持するためばかりでなく、世界の最高文化を維持する職責上、この强大な支持柱が必要なのである、故に健全な國家精神からいへば、卽ち大義名分論から言へば、日本天皇の統治に對して反抗する所の思想や議論は反逆思想であり反逆論である、その行爲は卽ち反逆的行爲である、焼打をしたり干戈を執つて反抗したりしないうちは、之を反逆行爲と認めないとか、隨て文を犯罪行爲としないとかいふことは、要するに法律上の座談であつて、治國の要道とは別である、否、關係ありとしても、其れは部分的關係であつて全部ではないその法律以上の高い深い標準から見て之を斷ずることを爲さなかつた事は、政府の誤りであるが、是は政友會とか原内閣とかの失政でなくして、今の人々の共通した誤解である、貴族院でも衆議院でも總じて今の地皮上に顯はれて居る國論民論は悉くこの大義名分を度外した敎養の中に人となつた連中だから、獨り原君や床次君を怪むにあたらない、名分論が極度になると親孝行の曾參が、或る時旅行して『勝母』といふ邑に懸つたら、子として母に勝つといふ名は甚だ不祥であるから通らないと言つて車をかへしたといふ話しがある、墨子は強い音樂亡國論者であるところから、これも旅行の際『朝歌』といふ村を見て、歌といふ名が忌はしいといふので、そこを通過せなかつたといふ、これ等は莫迦々々しいことの樣に考へられる、が、精神は斯くありてこそ『節操』の堅きを證し得るのである、曾て以前、『ロシヤ』の事を魯國と書いて居たが、彼の公使は『魯』の字『オロカ』の訓あるを知つてから、自國の體面に關するといふので抗議を申し込んで、とう〳〵『露』といふ字に換へさせた今の日本人よりエライと思ふ、先年米國に世界博覽會が開かれた際に、『日本の某商人が出品するに付て、その出品物を送るに差出人をニッポン東京』云々として遣つたら、米國の官憲

がニッポンといふ國はない、ジャパンだらうと日本官憲へ照會したので、いかにも左様であると答へた、そして其商人に書直せと命じた、ところが此商人は、頑として承引しない、吾國はニッポンであつて決してジャパンではない、慣例がどうあらうとも、それは慣例が間違つて居るので、自分は自分の國號を誤りのまゝに用ゐるのは死んでもイヤだと言つて遂に出品を廢めたとかいふ話がある、少しく名分論の香ひがする、此頃或る書籍を見たら、著者の序分に年號を書さずして、單に西洋紀元のみを署してある、これでも日本人であらうか、こんな紊亂を矯正し得ない様な無生命な法律を製造して居る國家だから、反逆思想者を招待して御馳走をしたり、禁苑の拜觀をさせたりする様な奇怪な現象を見るに至るのである、やりそうな事であり、ありそうな事である。

（七）

日本の文字は、縱にすれば『下行文字』、横にすれば『左行文字』で、右から左へと書いて行くことになつて居る、然るを西洋の眞似をして、ヤタラに左に書きたがる、帳簿か、圖面などの如き特別の形式あるものはトニカク、當然右から書いて何等差支のない場合でもワザト左から書いてあるのがある、右から書くときまつた國風を、勝手に左から書のは、明かに約束違反である、右なら右、左なら左ときめないと、約束がグラツクから、其れが爲めに思はない間違が出來る、左が必ずわるいといふのではない、右からでも左からでも勝手放題に書くといふことを捨置く制度が、悪いといふのだ、尠くとも國を治める心持ちのない行方だといふのだ、右左り不定の悪風習ある今日、電車の中から、市中の看板を見るにも、ちよいと判らないのがある、一旦『店髮理』と讀んで、その讀みちかひに心ずき、次に『理髮店』と讀み直すぐらゐは、大した亂暴も來たさないが、お産があつて『寺西信』といふ産婆を呼びに行くとて、近所の『信西寺』といふお寺へ飛び込んだとか、『稻門屋』といふ旅館が、カナで『イナカドヤ』と横に看板を出して置いたら、旅人が讀み違へて、『ヤドガナイ』とよんで泊れないものと思つて外へ往つたなどの滑稽がある、まだ其の位の事は、どうでも可いとして軍事行動の際に、敵味方とわかれた海軍の大演習などで『三笠』と『相模』と、カナで『ミカサ』と『サカミ』と記してある艦名を、若し『みぎひだり』勝手の習慣を捨て置いたら、敵味方の大間違を生ずるであらう、斯ういふ合點し易いところに

も、『大義名分』のイヤと言はれない要義は存して居るのである。

昔しは此大義名分をやかましく言つた、恐らく治國の要領これを大事としだからであらう、水戸の光圀は『孟子』を斥つて革命思想の書とした、國史を讀んでも光秀が河を渡つて初めて反逆の志を將士に發表した『有名な吾が敵本能寺に在り』の一句はは音を出して讀むことを禁じたといふ事だ、さればこそ勤王の志士は光圀の主義に私淑して居る、水戸の『大日本史』は、神功皇后を歷代から除き、大友皇子を『天皇大友』として皇位に數へた（明治になりて弘文天皇と追謚）ほどあつて、皇位の正潤とか、君臣の分とか、いふことは甚だ闡明された樣である、家康の血統に、この名分論者が出たのは全く國體の靈奇と學問のお蔭である、同じ流れの一人で、可なり幕府張りの松平定信（樂翁）でも、京都の御料地に、所司代が建てた『禁裡御料』といふ木標を這はけしからんと言つて、只單に『御料』と改めさせたなどいふ事は、あとで聞いて胸がすく樣だ、紀州家でも水戸でも、一種傳統的に勤王主義を持つて居たのは。正しく『大義名分論』の薫化で、それが性情訓育としては、この兩藩の祖がいづれもお萬夫人（おまんの方）の血を享けて、强烈なる日蓮主義の信念的感化の影響であらうとも思はれる、後に此光圀の裔孫に、松平賴該の如き、强烈深信なる日蓮主義の碩學を出したのも參考とすきであらう。

日蓮上人の大義名分は、最深根基を開顯して、世間の大光明とされた『三大秘法は』その根本原圖である、この教化の反應は此土の教主を貶して、他土の佛を崇拜する教行を、悉く『教義非分』として斥け、こんな教に魂を求めるから非國が亂れて下剋上の惑亂を醸すのであると破されて『天に二日なく國に二王なし』の主義を高唱し、世界統一の本尊に天照八幡を勸請して、『大義名分の眞理形』を示し、蒙古調伏の曼荼羅には、中央に『聖天子金輪大王』と日本天皇を祝福したり、北條義時の三上皇配流を、『世界未曾有の不思議となし、非國體思想の第一記錄と呼び。『予はその不審を晴らさん爲に佛教の學問に志した』とまで言はれ、義時を反逆者のうちに入れた、これは正しく、『大義名分』から來つた判定である、日蓮上人は賴朝に對しては、非常に高い同情を有して居られたにも拘らず、一たび安德天皇に抗した理由を以て、ヤヘリ反逆者のうちに算へて居られる、故に日蓮聖人の感化餘烈は、開展普及して勤王思想となつ居る、南朝時代の諸勤王家に日蓮主義者の多いのや、光圀等の

名分主義など皆直接又は間接の影響を受けて居る、足利尊氏の族縁からして世に北朝寺とさへ傳へられた京都本圀寺の三位日靜が南朝の遺孤たる護良親王の一子楞厳麿を保護して、（妙法坊日叡上人）尊氏兄弟の毒刃を避けた史實の如き、近くは元亨の舊勳を追賞して先頃男爵を授けられた南部氏の如き（身延開基南部六郎實長の裔）、皆この餘波である、只殘念な事には、中古學風頽亂して其精要を失ひ、全くあられもない迷信的低級宗教に伍して、其本來の面目を亡した爲め、今に猶その眞相が世に認められずに居るのはいかんとも切齒の至りに堪へないが、それは途中から生じた病であつて、日蓮主義そのものゝ眞相ではない、今の世は短刀直入に此眞に觸れて素性の正しい信念教義を把持し、直ちに世の紛訌を解くべく道破提唱しなければならない。

誠に國を治めんとおもふものは、何事よりも先づ此名分大義の教養を國民に與ふべく、その教育點眼しその施政を匡正しなければならぬ、善を弉めることゝ惡を化することの外に、教育も政治もない、文武百般の制は畢竟その附屬である、殊に政治の要として、其積極的部面を『弉善事業』と爲し、其消極的部面を『滅惡事業』と爲すのが課本でなくてはならぬ、屁理窟や功利のイキサツを以て、政論とか政治とかを考へて居ては大變な違ひである。

（八）

大義名分を骨子として立てらるべき『根本國是』は、第一に『君臣觀念』『忠孝思想』に集中して、諸般の施設をする、今の人が忠孝と聞くと、すぐに舊思想だの、舊道德だのと早合點をするのは、つまり『忠孝』といふことを善く知らないから來る淺膚の盲批判で、學問思想の士としては恥づべきことである。又君臣道德と言つても、彼の御馬前切腹主義や、勞資協調によく引張り出される、主從的溫情主義などと同級のものと考へたら大違ひ、この日本の君臣道德といふことは、支那にも印度にも西洋にもどこにもない最大最深の道義觀念であつて、日本國體の眞意が十分に理解されない間は、とても解らない大きな深い且つ今の世では一番新しい思想である、而して、この『君臣道德』といふ大思想が、世界の最後を解決すべき最大文化であつて、今の樣な世界各國の大混亂が、亂れに亂れ揉みに揉んでいよ〳〵、鼻を衝いた時、人間の落着きどころが那處かにないものかとなつて、始めて全世界に光輝を放つて、あゝでもない

斯うでもないの成れの果てが、腹の底から目醒めて、人を整理するの道、國を整理するの道それは一君萬民の形式と精神でなくてはならぬといふことを暁るのである、恐らく米國などで一番先きにこれに氣付くかも知れない、獨逸、伊太利これにつぎ英佛これにつぎ、支那は最後かも知れない。

（九）

デモクラシーの原則として『國は民のものだ』と云ふ考から萬事民衆本位とするといふことは、いろ〳〵の特權階級が我儘をするからといふので、その覊絆を脱して民の幸福を計らうといふのに在る、それはいかなる場合でも、當然の要求である。また此主張要求があつたればこそ、惡政は倒れ文化は盛んになつたのである、佛國革命はデモクラシーの基本である、故に特權階級の虐政とか横暴とかいふことがあつて、始めてデモクラシーの必要が起つて來たことは、病があつて藥の價値の生じた様なものである、然るに日本では古來特權階級が我儘をやつたことはいうこともあるが、これは人民同志の中であつたので、帝室は少しも之に關らない、蘇我氏でも、藤原氏でも、平氏でも。源氏でも降て北條、足利、豐臣、徳川、是等みな臣なり勝手を働いたが、いづれも人民側であつて、君主側でない、日本の君主は、天照大神以來代々一つの家範があつて、少しも頽づしたことがない、民からグッ〳〵言はれるどころでない、民に率先して徳教文化を開發して民の利や國の益を興すことに汲々として居られる、神武天皇でも崇神天皇でも日本武尊でも、神功皇后でも、應神天皇でも、仁徳天皇でも聖徳太子でも、歴代の帝室は皆一貫して天照大神の盛徳洪業を心とし誓ひとして居る、そのお蔭で開けた國だ、そのお蔭で發達した文化だ、そのお蔭で育つた國民だ、どこの國にも類例がない、故に日本ではむかしから今も、猶この後の後の世でも、斷じて民から君主に反抗がましい要求を持ち出す必要がない、帝室の方が民を本位として國政を料理して居られるのであるから、人民の方で何も『民主主義』だの『民本主義』だのと騒ぐ必要がない、偶まに國民に面白からぬ施政があつたとすればそれは、官吏とか富者とかの特殊階級の罪であるから、これに對して『君民相對』の意味の民主とも民本とかを主張すべき謂れがない、若しその特殊階級に對しての反抗ならばそれは、『君民相對』の民本でなくして、『吏民相對』の民本であらねばならぬ、『貴族』に對する民本ならば、『貴賤相對』の民本であらねばならぬ、若し富者に

對する民本ならば『貧富相對』の民本であらねばならぬ、さればとて貴族に對しての『賤本主義』富者に對しての『貧本主義』、かうして見て億兆の民といふ國民が、官吏に虐げられるとか、貴族に壓迫されるとか、富者にやり込められるとかいふ場合に於ける、その賤者なり貧者なり平民なりに對する、唯一の身方は誰れかといふと、いつも帝室である、それが日本國體の性質上そうなる仕組みに出來て居る、その先天の國是に背くものは必ず亡びる、蘇我氏も源氏も平氏も、皆その覇業を失つて居る、いつでもその失う時は必ず尊王論の鋒先に掛つて斃れる。帝室はいつも卓然として、是等の葛藤外に超絶して居る、而して官僚でも貴族でも富者でも、帝室が人民を遇する意義と一致せざる、我儘の考をもつて國民に臨めば、それは國民の敵である前に、先づ帝室の敵である、故に此三者も帝室の主義を體して、能く國民を遇する時、これは國民と同じく帝室の盛德の中に溶しこんで一つものになるから、何の隔離も反抗もないことになる、要は國體と一致した考と行爲とが、君民一致のまことの姿であり心であるから、君主も國民も、同時に齊しく國體といふ大精神の中へ融解一如しての『君民一致』である、その『國體』とは『道』である、道を服膺することに於て融一するのである、それを先帝は敕教中に『拳々服膺して咸その德を一にせんことを庶幾ふ』と仰せられたのである、眞に徹底した『君民一致』である。

民を離れた君があれば其れは、孤立の君である、それと同じく君を離れた民があれば、其れは亂離の民である、まことの君は民を離れない、まことの民は君と離れない但道も民も考へない君主は、それはまことの君ではない、只ある時に力が強くあつて、他の弱いものを壓倒して其れを奪つた掠奪者である、世界古今の君主は、大約それの階級である、偶ま善政を布いて民の反抗を受けないものは、要するに妥協的苟安であつて、一時的位地である、『天壤無窮』の皇祚などは夢にも言はれない又思はれない。

（十）

西洋の民本思想を、無理に日本へ持來て騒ぐのは、西洋の事のみ知つて、日本の事を知らないのである、西洋は徹底的民主主義であるのが至當である、尤も西洋はかりでない、支那でも印度でも、實は『民主國』であるのが當然だ、それといふのは、まことの君主といふものを有せざる國なり民であるからである。

世界の中に唯一つ、この日本だけに天から地を貫いて世界人間の中心として、文教、光榮、道義、威力、の一切を惣人類に成り代りて、傳へもし持ちもし弘めもし行ひもした、人間で一番舊い〳〵、一番貫い正しい家といふものが、吾等人類の誇りとして、又正義人類の代表者として、人間の世の中に儼然存在して居るといふ事が、どうして世界人類の一番き大い問題にならずに居よう、日本中の學者といふ學者、政治家といふ政治家は、先これからして研究して、之を世界に提供して遣らねばならぬ、然るを何ぞや、骨を折ッて世界の吸殼の舊思想を、今更らしく事新らしげに振り廻して、無智の民を煽動し、淺薄短慮の徒を使嗾して、日夜に破國の因縁を植えるとは、いかんとも馬鹿〳〵しい話ではないか。

日本の成立から見ると、西洋は此『君主組織』といふものが健全でない、元來が病的である、隨て貴族富豪等が、この病帶にからんで共に病的になつて、人民を酷虐したそれに對抗するために、デモクラシーの思想が發達して、それが對病療法の効を奏して立憲開明の文化が榮えた、それの荒療治が革命である、荒くても柔くても斯る病現象に對して　、いつも革命的でならなくてはならぬ、然るに日本へこれを生のまゝで持來るとなると、少しお待ち下さい、大にお門が違つて居る、日本では曾て以て立君立國の體性に於て病的現象を示したことがない。』天に對しても地に對しても、人に對しても此の悖戾反眞の振舞なきのみならず、常に天と德を一つにするといふ積極的意義に於て、道を行ひ德を立てて居る、理想的君主にして、民の所依地なり代表なりである、これ有るが故に民貴く、これ有るが故に民正しく、これ有るが故に民安くあるのである、反抗は扨置き、ます〳〵その君德を發揮しなければならぬ、君主の德を大にすればするほど、民の光が大きくなるのである、君は民の根據であると共に其性命である民の全部を沒入しても大きくせねばならぬ、沒入すればするほど、民は大きくなり明かになるのである此處へお構ひなしに、泥つきのまゝ西洋の對症療法に用ゐたデモクラシーを持ち來て騷ぐのは、健康者に劇藥を服させる樣なものである、日本どころではない、世界の將來は、必ずこの『君主道』によッて最後の整理をつけなければならぬ、運命を有して居る、之を科學的に說明すれば、恐らく世界第一の學問となるであらう。

斯の『君主主義』は、日本の爲めばかりでなく、世界の紛亂を片付ける取つときの大思想大事實として、日本に獻生し日本に

成長して、今に來るべき其時を待て居るのであるから、日本に生を受けたもの丶義務として、是非ともこれを滿足に發達長表して、人類に寄與しなければならぬ、これに就て何よりも必要な扱ひ方が、この『大義名分生義』である、この花は『大義名分』といふフレームで育ち、この車は『大義名分』といふ機關車で動くのである、故にこれを沒却した政治や敎育は、直接には日本の大本を危くし、關接には世界の闇に燈を與へないのである、呂運亨が罪ありや無しやなど、それを招いて甘心を買ふの、吾々忠良の人民にさへ拜觀を許るさない禁苑を、事もなげに其汚れたる足に踏ませたなどいふことは、あまりに問題が鮮明すぎて言議を挾むのさへ氣がとがめる、但し一國敎表の根本に於て、此『大義名分主義』を閑却した祟りが暴露して、か丶る奇現象を呈した事に氣が着かずに、一二人者の失態を責めても、それは抑も末の末だ。

『大義名分』の事實的精華は、日本の『君臣道』で、それが『日本國體』を形にあらはしたものである、此形ちに世界は整理されて、眞平和は來るのである、故に『日本國體』といふことは、世界的立稱である、日蓮上人は法華經を人類思想の統一點とし日本國を世界人類の統一境とし、此二大事實因緣を世界的に唱導開說して、萬年救護の『大文化運動』を興した、これが吾等の主張して居る日蓮主義である。

釋迦と基督とマルクス

魯庵生

（一）

私は全くの門外漢だから宗敎改革といふやうな難かしい問題を論ずる事は出來ない。且研究をしないばかりでなく宗敎界の現情にも餘り通じてゐないから恁ういふ問題に容喙する資格が無い。唯私は宗敎を奉じてゐないでも格別不安に脅かされる事

も無く、偶然或る疑惑に迷ふ事があつても現時の宗教に由て我々の疑惑が解決されやうとは少しも豫期してゐないと斷言し得るほど夫程今日の宗教は我々には學術的興味以外には無用となつてゐる。又實際我々に信仰を燃やさせ安心を與へるだけの威力に缺けてをる。

(二)

私は今でこそ宗教界に餘り接してゐないが、青年時代に或る短時期間教會學校に在籍してゐた爲め多くの外國宣教師の指導を受け日本の牧師にも亦誘掖され、求道者として日課的に聖書を讀み且殆んど連日說教を聽かされた。が、内外教師の人格や學問には推服し教會の事業にも亦同感したが、肝腎の教理其物はイツマデ經つても私には混沌たるケオスであつたから、數年基督教會に親んでゐたが到頭洗禮を受けなかつた。夫故今でも基督教界の先輩間には知己を持つてゐる。シゲ〳〵往來しないでも時折は其人達の論文を讀み或は親しく靈感の叫を聽く事もある。基督教徒たる知人の中には私を教會へ行かない信徒と思つてゐるものさへある。

が、私は基督教の神を認めないんだから信徒でも何でも無いが、眞に神を認めて洗禮を授かつた立派な信徒であり乍ら段々教會と疎遠となり終には事實上に教會を脫籍してゐる者が日に益々多いのは何故だらう。ドコの教會でも調べて御覽なさい。日曜日に集まるのは教會在籍者の五分一乃至八分の一、甚だしいのは一割以下しか集まらない處がある。中には何年間にも顏を見せないで、信徒である乎無い乎が分らぬ者さへある。寺の檀家の音信不通になつてゐるのも珍らしくないが、基督教會の信徒の不眞面目さは恐らく夫以上だらう。尤も西洋でも教會參りは信仰の爲めよりは社交の爲めで、殊に亞米利加あたりでは教會に由ては恰も倶樂部の如くなつてるさうだが、恁うなつたのは一體牧師の罪乎、信徒の罪乎、ドチラにしても基督教其物の權威の失墜である。若し信徒の腹の底を遠慮なく暴け出したら信徒は魯か教役者自身の中にさへ眞に基督教を信じてゐるものが何人あるか疑はしい。

(三)

宗教家の立場から云へば、宗教を奉じないものが多數であるよりは最つと恐るべく憂ふべきは是等の無宗教者が無宗教を少しも苦とも思はず又格別不思議がりもしないで公然と無宗教と

公言して憚らざる事だ。が、我々とても宗教の無いのを平氣でゐるわけでは決して無い。時には宗教の無い賴り無さ心細さをシミ／＼と感じる事がある。夫故に基督教以外の聖典や法話や語錄の類をも屢々涉獵するが信仰が智慧の門から入つて得られるもので無いのは一冊は一冊を重ねる毎に益々經驗する。宗教に關する學術的興味が生ずれば生ずるほど信仰は反比例に愈々遠ざかつて了う。所詮我々の仰望するは神學の批評でも聖典の考證でも無くして我々迷へるものを化度して與れる活きた聖者だが、活きた聖者を仰ぐ事が迚も出來ないとなると宗教なんぞは無くても好いといふやうな氣がする。之が恐ろしい事だ。が、其の恐ろしい事に最早馴れ切つてをる。多くの傳道者は屢々我々に對して何事も熱心でなければ得られるもので無いから一生懸命になつて信仰を求めろと云ふ。が、專念に神を祈り念佛を誦するといふやうな信仰三昧境は信仰以前に得られるものでは無い。我々は自ら信仰開を拓する事が出來ない機根の劣弱と恥ずるが、我々の弛けた心に鞭撻を與へて與れる人は無い。我々はリバイバルの幻想や救世軍の太鼓で心靈の火を燃やすものでは無い。

(四)

基督教も傳來當初の教師達は皆異教者を濟ふが爲めには命を投げ出すを辭さない敬虔な覺悟を持つてゐた。隨つて信徒も心からの信仰に燃えてゐた。最初に渡來した監督ウキリヤムス以下の五宣教師は昔しの切支丹の破天連に負けない殉教的精神を持つてゐた。が、其以後の外國宣教師は皆月給を貯めに來る職業的傳道者ばかりであるから信徒も語學の實習を目的とするものや讃美歌を面白がるものばかりが集まつた。神學校も亦他の學校へ行く學資の無いものばかりが入學して、卒業當座だけは傳道に從事してゐても能く／＼の無能者でない限りはイツの間にか逃出して轉職すると直ぐ基督教を忘れて了う。最初の五宣教師及び札幌のクラーク及び熊本のジエーンス等の門下たる少數先覺株を除いて教界に踏留まつてゐる教師は何人有爲乎。縱令教界を去つても信仰を持つてれば尙だしもだが、信仰さへも棄てゝ政治や實業の泥の中に潰つて、中には破廉恥罪を犯したものさへ少なくない。確かレッシングだと思つた、眞の基督教徒は教會の外にあると云つたが、日本の基督教界の現狀は實に此の如くである。

が、此沈滯は啻にプロテスタント派ばかりではない。加特立派も希臘教會も皆同じだ。佛教となると一千年來國家の保護を受け、殊に德川政府となつてから切支丹鎮壓の國策上一層手厚く保護された爲めに益々職業的安易に馴れての今日其の沈滯萎靡は基督教に比べて更に一更其だしいものがある。基督教の方は宗教其物は振はないでも社會的方面には可成活動して相當の成績を擧げてをる。が、佛教の方は葬式と墓場の番をするだけで何もしてゐない。此頃は社會的事業に手を伸ばしてゐるが、基督教徒の眞似をするだけだから惣ての仕事が死んでをる。佛教が僅に氣を吐いてるは學術的方面で、我々も是等の學術的研究には深く敬意を拂つてゐるが、此種の文化史的研究は學術上には如何に重大であるにしろ活きた宗教的運動には何物をも寄與してゐない。言換へれば佛教は既に研究的骨董となつてゐる多くのお寺の本尊が國寶となつてる如くに佛教其物が保存を研究される國寶であつて、我々の活きた靈とは全く交渉の無いものである。

(五)

見渡した處宗教界には基督教界にも佛教界にも崇嚴な宗教的儀式や該博な學問は有るが眞に迷へる羊を牧する敬虔な高德な善知識が無い。消極的に獨りを愼む持戒勸行の清僧といふやうなものは田舍の教會やお寺を尋ねたら有るかも知れぬが、此の汎濫した思想の大洪水に拔手を切つて溺るゝ子を救ふの勇猛心と金剛不壞の大信仰を持つてる傑僧は無い。況してや慈悲の手は猛虎をも愛撫して飼猫の如くし惡鬼をも化導して、小兒の如くする聖者を望むは壺河に魚を尋ね沙漠に花を求めるよりも更に困難である。

が、宗教の振はないのは啻に高德の善知識や大慈悲の聖者が無いばかりでなく、根本の宗教其物が二千年以前のもので現代の我々を化導するには力が足りなくなつてゐるのでは無からうか知らん。どんなものにしろ二千年は昔か一千年前のもので今猶ほ生氣を持つてるものがあるだらう乎。如何に釋迦や基督が三世見通しの大聖人でも其遺經が二千年後の人間までを濟度する威力が有らうとは到底想像されない。少くも其威力が幾分か稀薄になつてる事は爭はれない。

(六)

之に就き憶出したは、誰だつたか忘れたが、將來の新宗教を開

くものは釋迦や基督だけでは駄目だ、釋迦や基督にカントとニユートンを摻交ぜた大人格者でなければ現代人を敎化する事は迚も出來ないと云つた人があつた。が、現代の精神的脅威は產業革命に原因する經濟的不安が大に與かつてるのだから、釋迦基督にカント、ニユートンを摻交ぜただけではマダ現代人を濟ふに不足してをる。少も之に加ふるにマルクスを以てしなければ以て現代人を濟ふに足るの新宗敎を作る事は出來ないと思ふ。

（七）

一體基督敎にしろ佛敎にしろ哲學もあり道德もあり形而上の要件は一と通り備はつてゐるが唯科學と經濟とに缺けてをる。二千年前の宗敎だから缺けてるのが當然だが、此遺漏が現代人を敎化するに頗る薄弱なる大原因である。科學に認承されない奇蹟が近代人の信仰を妨ぐる防材となつてるのは誰も屢々云ふが近代人の惱みとなつてる經濟的不安に就ても亦佛敎や基督敎は解決は愚か慰安をすら與へてゐない。二千年前の社會には貧富が問題とならないほど經濟組織が單純であつたからだらうが、今日は大に事情が異なつてをる。一方に金持は怠け放題に怠けて惡い事をしてゐても一生榮華に暮してゐるに引かへて、一方の貧乏人はイクラ正直にセツセと稼いでゐても親代々碌々喰ふとが來ないといふは當に前世の約束だといふやうな事で諦められやう乎。生活の脅迫が今日ほど烈しくなかつた時なら貧乏も苦にならずに神佛の利益を祈つてゐられたらうが、稼げば稼ぐほど愈々虐げられる今日のやうな世の中では神や佛が有りや無しやと疑ひたくなる方が寧ろ當然であらう。

（八）

私は曾て屢々考へた。今日の道德では善人になればなるほど益々貧乏する。生活的壓迫の少かつた時代なら貧乏に安心する事が出來ないではないが、貧富が一切を評價する今の時勢では善事をすればするほど貧乏になる道德を疑ひたくなるのが當然の結果である。夫故に善事をすれば同時に金持となれるといふやうに經濟的考察を加味した新道德說を高唱する必要があると考へて、其見地から一時二宮尊德に傾倒した事があつた。が、尊德の敎育に從ふ時は經濟的に伯夷叔齊となる外無いので勢ひ生存競爭の潮流に逆行する。獨りを潔くする事は出來ても以て衆人を指導する事は出來ない。尊德時代に於ては或は此の如き消極的經濟說も世を濟ふに足りたかも知らんが、今日の競爭激

甚なる時代に報德主義を持出すは恰も火繩筒を以て機關銃と闘ふやうなものだ。尊德論は問題外だから好い加減にして置くが左に右く道德に經濟説を加味したのは尊德の卓見で、宗教も亦現代の惱みを濟ふには經濟的考察を缺いては全く無力である。

（九）

夫に就て考ふべきは目下問題となつてる大本教である。渠等の出鱈目の豫言や豆藏然たる奇蹟は論ずるに足りないが、見免すべからざるは渠等の共産的實行である。此の世の中に人間の持つてるものは一つも無いので、皆神からの預かり物であるから神の物は神へ返さねばならぬといふ思想は天理教も大本教も同樣で、言ひ方こそ非科學的であるが疑ひも無い共産主義である。シカモ渠等は評論家や學者のやうに唯だ説法するだけでなくして着々實行してをる。クロポトキンのクの字を云つても直ぐ朝憲紊亂などゝ騒ぐ當局者はナゼ巨萬の富を全部艮の金神さまに捧げて續々綾部に轉住するものがある此の奇怪の共産教を今まで不問に附して閑却してゐたらう乎、

多くの人は豫言や奇蹟のサイキカル方面をのみ研究してゐるが大本教が意外な知識階級や學生などを頻りに收攬するは啻だ豫言や奇蹟ばかりの力では無いので、共産主義的信條が與かつて大に力があると思ふ。聞く處に由ると大本教の信者は八十萬人、天理教の信者は二百數十萬人あるさうだ。二教を合して三百萬人の共産主義的宗教歸依者が熱心に働いてゐるといふ事は深く考ふべき事だ。大本教がイカサマと迷信の結合であつて、宗教としては誠にタワイの無いものであつても、同じ迷信とイカサマの結晶たる他の金光樣や穴守樣と異なつて多くの知識分子を吸收したのは此の經濟的教旨が意外の力を持つてる事を深く考へなければならない。

（十）

シカモ此の宗教的保護色に蔽はれてゐる經濟的信條が極めて矯激な思想である事は一層深く考慮しなければならない。唯之を迷信とのみ種々看過して此方面の考察を閑却するは人心の機微が意外な個處に伏在するを忘れた短見である。佛教や基督教が振はないのは靈魂だけ救へば宗教の能事は畢れりとし、生活はドウでも肉體は餓死しても靈魂は濟ひ得られるものと思つてゐるからだ。苟くも今後の宗教に就て考ふるものは此の人心の機微を洞察して先づ靈魂を濟ふ前に靈魂を保全する肉體を如何にして濟ふべきかと考へなければならない。

大本教と迷信現象の批判

大本教と天理教

文學博士 谷本富

一

過日雑誌『改造』同人の某氏が態々當芦屋の山莊に、根氣强う一日に三度も累ねて枉駕されたが、生憎當日は早朝より外出して居らず、夜半過ぎて漸く歸宅したので、面會することが出來なかつたのは、失敬且つ殘念に思つて居る。而して終に家人までへの申殘しに據ると、それは外でもない、大本教その他迷信的宗教に關する高見を聽きたい、どうか成るべく丁寧に一個の長篇として起稿して貰ひたいと云ふのであつた。成る程これは如何にも面白い所望だと感じざるを得ない。併しそれにしても大本教を始めとして、その他何を指してか知らんが、迷信的宗教と一概に呼ばれるのは、少々腑に落ち難い所がある。知らず大本教果して迷信的宗教なるか、天理教果して迷信的宗教なるか、金光教果して迷信的宗教なるか、然り彼等は恐らく孰も迷信的宗教であらう。然かもそれだからと云つて、基督教は迷信的宗教ではないと言へるか、佛教は迷信的宗教でないと言へるか、否神道や神社大多數の由緒傳説類は皆迷信的でないと言へるか。大本教や天理教が迷信的宗教ならば、佛教も神道も乃至基督教亦概ね迷信的宗教ではなからうか、それは畢竟五十歩百歩の差で、只自家をのみ揚げて他を抑へて仕舞ふ譯には行くまいと考へるが、どんなものだらう。

蓋し若し夫のオーギユスト・コントの言ふ如くならば、古往

今來人智の進歩は總じて三段の順序を追うて居る樣で、最初野蠻未開から半開の時代は宗教的神學的學問が非常に盛に行はれて居たのが、一轉して人文の稍發達すると共に、哲學的形而上學的學問に思を凝す時代と成り、それが更に一轉して近世文明開化の世と成るに伴れて、次第々々に經驗的と成り實驗的と成り終に科學萬能の現代を作出した譯である。從つて又若し現代の所謂科學的見地から看下したならば、大本教や天理教は言ふに及ばず、佛教も神道も乃至基督教も大概非科學であり反科學であつて、一括して迷信と呼ばるゝことを免れまい。只議論の餘地の存する所は科學以外哲學や宗教の存在は悉く拒否するは速斷であらう、否非科學や反科學の外に又別に超科學の廣大なる乾坤はありはしないかと云ふ事で、若しそれがあるとすれば神道も活きやう、佛教も活きやう、基督教も活きやう。それと共に大本教も天理教も乃至其の他の金光教とか黒住教とか種々雜多のものも亦各々活きて行かう。神道や佛教や乃至基督教や昔から在るものと、其の他の近頃新に出來たものとの相違は、實際は只年所閲歴の差であるかも知れぬ。されば自分は大本教や天理教などを頭ごなしに迷信的宗教と呼做するには反對で、それは寧ろ新興的宗教といふ名で以て取扱はれるのが至當であらうと考へる。それは或は英語でならばヘレシー、獨逸語ならばケッツェライなどと呼ばれやう。異端とか邪教とか云ふところである。それは固より敢て差支ない。併し異端と謂ひ邪教と謂ふのは、孰も舊來既成の者から言ふので、其實は只新奇なものと云ふに過ぎぬ。新奇だからとて一概に輕侮し排斥するのは、それは例の保守癖で、習慣の奴隷と成つて居る爲めである。自分共の樣に常に進歩發展を旨とする者から見ると、異端邪教亦徒に排斥すべきにあらず、寧ろ大異端たり大邪教たり、結局大々的新奇のものゝ躍出あらんことを、日夜切望して已まない次第である。

請ふいさゝか卑近の譬喩を以て說明するの餘裕を與へて貰ひたい。凡そ世間には同じ華族でも、新華族と謂ふと何だか箔が薄くて、後光が弱い樣な感じがする。併しよく考へて見ると、今の所謂舊華族別して大名華族でムると威張つて居るものゝ、其の多分は三四百年の昔、豐臣秀吉なり徳川家康なりに取立てられたものに外ならぬのである。第一の秀吉が足輕草履取りの微賤から起つた事は周知の史實で、その點では伊藤博文も前後好一致である。博文の養嗣の博邦公や庶子の文吉男が秀次たり秀賴たらざるは、全く時勢の變化で、本人等の知つた事ではな

い。明治の悪辣政治家大浦兼武といふ奴の様な奴は、悪運強く巡査から立身して子爵に成つたので、アッヤ巡査ちや／＼と貶す者があるが、併し侯爵蜂須賀家を大威張りに威張つてゐる國主大名の巨魁も、先祖は野武士と謂へば稍聞えも好いが、實は追剝斬取りの盜賊であつたと『繪本太閤記』などには隱さず書いてあるではないか。公爵徳川家と謂へば征夷大將軍で、實際大君として久しく日本の政權を掌握して居たもの、その系圖を尋ねると清和源氏で、南朝の忠臣新田義貞の家と血脈が續いて居ると云ふ樣だが、實は眞赤な嘘で、何でも僅に東海道筋の神職の家から出たものだと云ふ事である。公爵島津家が源頼朝の遠裔と云ふのも亦嘘らしく、實は近衞家の家來筋に過ぎぬと聞いた。公爵毛利家は假に大江廣元の後だとしても、廣元と今の子爵金子堅太郎とは大した違はあるまい。否更に溯つて舊公卿の祖先を調べるにしても、亦案外な事が多々あるであらう。此等新華族よりも一層輕侮せられるものは成金である。大倉、鈴木内田、山下等諸家が孰も衷心から尊敬せられるにはまだ遠い樣だが、併し藤田とか岩崎とか云ふと早大分尊敬せられて來た樣であり、三井鴻池乃至住友などと成ると、誰人も敢て輕侮する者はあるまい。併し藤田や岩崎は共に是れ明治初年の成金で、而かも隨分種々惡評があつた樣である事は、今でも少しく年を取つた人は誰も承知であらう。三井鴻池乃至住友なども亦皆當年の成金で、恐らく同時代には色々と惡い噂もあつた事であらう。舊來既成の佛教や神道と近時新興の大本教や天理教との對照に、亦偏に是れと似たものだと合點されたい。

二

斯樣な次第で天理教なども實は長い間非常な迫害を受けた樣で、教祖中山みき子といふ婆さんは、何でも數十度拘留監禁せられたと云ふ事である。蓋し道の迫害は古來内外いづれの所でも、新説新教即ち所謂異端邪教には免れ難い約束と思はれる。併しそれは若し果して相應に根柢のあるものであつたならば、何時かは乾度繁昌するに極つて居る。之れも吾が國にしても、神道禊教即ち昔の吐菩加美講の開祖井上正鐵なども、舊幕府から隨分迫害せられた樣であり、又富士講などの沿革にも相應に迫害の跡は存して居る。それは遠く役行者の末路を想出させやう。佛教の方でも親鸞聖人や日蓮聖人の生活は、固より決して平穩無事ではなかつた。併し其の開いた宗門はそれ／＼傑出して繁昌して居るのを見ると、思半に過ぎやう。耶蘇基督は十字

架上で磔刑に處せられた丈け、夫だけ其の教義は最廣く繁昌して居るではないか。否釋迦如來とても當時の婆羅門から受けた迫害は決して尠少ではなかつたらしく、一時は諸國に遁竄して難を避けた樣である。只自分の竊に遺憾に思つたのは、夫の天理教の連中がどうにかして一日も早く公認され獨立したいと焦つて、前後色々の似而者學者などを雇うて、從來の神道家の所說などと辻褄の合う樣に作り直さうとした事である。山中重太郎とか中西牛郎とかいふ面々は、道の天理教の合理化に多大の盡力をした樣に聞及んで居る。而して一面には例の古賀廉造なぞいふ粗大の豪傑を利用して、甘く當局者に取り入り、喰はすに利を以てしたかどうかは判然とは承知しないが、とにかく終に首尾好く公認せられ獨立する迄に漕ぎ附けた樣な次第である。それは教會内は勿論世間でも一般に天理教の進步向上の樣に看て大に喜び且つ譽めて居たらしい。然かも當初獨立公認出願の際にも自分獨り丈けは何んだ詰らない事をするものだなたとへ迷信と謂はれやうが謂はれまいが、公認されやうがされまいがそんな事には毫も頓着せず、飽迄も教祖の初めて教へた儘に固執し主張し、非難迫害に屈せず撓まず、十分辛抱して遣り通すが好いと、中央公論か何かの發問に應じて書き與へた事がある。

爾來早く二十餘年を經過して居るが、近年は追々同教の人々と相識る事が多く成りて來て、大和丹波市の所謂御地場に於ける神殿新築落成式にも招れて列席したこともある。併し自分の意見は固より毫も渝る所はない。自分は今も尚ほ天理教徒中の年寄つた重立つた人々が、兎角に迷信呼ばりせられ危險視せられることを恐れ憚つて、世間の評判に氣兼をし、別して官僚閥族の鼻息を窺うて合理化よりは寧ろ俗化に營々とし汲々として居る事を、腑甲斐なく思つて居る。たとへ迷信と呼ばれ、社會主義ぢや共產主義ぢやと看られても怯めず憶せず、教祖の初めての教へ通りに貫徹遂行して、以て眞に世界の立直立替に貢獻せねばならぬ筈と考へて居る。幸に此の意見は極少數ながら年少氣銳の而かし教育あり新知識ある教徒からは、暗に共鳴されて居るらしいで、竊に賴もしく思はんでもない。

大本教とても亦同樣であらう。抑、大本教なるものゝ稍廣く知られ出してからは、まだ十年には滿たない樣であるが、特に世間一般の注意を惹いたのは兩三年來の事で、自分自身も亦實は昨年初夏北海道へ出講の途中、某所で非役の一陸軍將官が目下大本教に凝り固つて居ると云ふ噂を耳にして、其處に多大の興味を感じ出したのである。それがやがて又京都府の警察部で

の調査に出つて一層面白く成つて來たが、今春以來は附近の神戸市は神に因緣の厚き土地だと云ふことで、大擧宣傳に着手して居る樣であり、延いて彼處此處で其の長髮に網代笠を戴いた異樣奇態の風をした隊伍に出合ふ事がある。旗や幟は勿論、笠にまでも手拭にまでも、皇道大本敎と麗々と大書した所は、如何にも壯快で、何となく夫の西南戰爭前に於ける熊本の神風連などいふ頑固黨を偲ばせるからおかしい。

尤も自分は今日迄まだ丹波の綾部なる本宮に參詣したことはない。從つて敎祖敎主その外の人々にも面識はないが、同敎今日の隆盛を致した大策士文學士淺野和三郎は十數年前一度吾が京都の僑居を過ぎられた事がある樣に記憶する。但し爾來杳として音問を通ぜず、面貌さへ漠として覺えて居ない。ところが不思議な事には、數日前偶々京都へ上る用事があつて、午前十時に當芦屋驛から汽車に乘込むと、この日二等のボギー車は非常に寂寞で、一隅に白の制服を着けた小官吏一人と三四の乘客があつた外には、中央近く四人連の一組を見たのみである。而かも此の四人組は例の長髮な所から、フト好奇心をそゝり、わざとその近くに座を占めて、それとなく徐に人相や風采擧動を觀望した。其の一人は年頃は四十前後の婦人で、髮は男子同樣長く延ばし結うては居らず。身には綾綸子の稻妻形の地紋ある白衣を着し、上に黑紹の袂布を羽織つて居る。背は餘り高くなく、中肉中脊で、固より格別美人と云ふ譯でもなく、品格氣高いとは申せないが、眉は稍薄けれども齒は飽迄も白くて、天然の儘に揃つて居る樣であり、眼瞼は一重で、眼皮は稍釣り上り何となく物すごく、顏色の蒼白な所は稍狂人に近くヒステリーの高度なものと看たは僻目か。或は草冊子にある瀧夜叉姫の野生的なものと謂へるが、それより寧ろ昔の何式部と謂つた女巫の型と謂つた方が適當であらう。而して該婦人と相並んで向ひ合つて同じ薄い膝掛けの上に座つて居る男子は、確に其の連添ひ卽ち所夫と判ずる外ないが、年齡は五十恰好で、脊は高いが別に品もなく、只極めて好々爺の樣で、女房に頤使せられ唯々として奉仕して居るといふ態で、色々辨當や荷物の事を親しう辨じて居た。服裝も極質素で、薄黃の絹紬か何かの單衣鐵色か何かの絽の羽織を着けて居るに過ぎぬ。而して此の男は長髮ではなかつた樣に覺えて居るのも妙だ。その傍の一人は年頃三十五六で、風采の立派な鬚のある好漢であり、一寸芝居で出て來る宮本武藏とでも謂つて好からうし、他の一人はそれより若く、まだ二十代の靑年と看たが、兩人共に着衣は同じく薄黃の絹紬

無地で、同じ樣な袴を着けて居るが、前者の羽織は黒紬であつて、後者のそれは黒木綿であつたのを見ると、自ら其處に職位の階級を表さはれたて居るやうに想はれた。

四人共に行儀は迫に惡くはない。別して婦人は頗る鷹揚に構へて、成る丈け低聲に話す樣で、詞數も太だ少い。黒木綿の青年は格別恭しく其前に身を少屈して、丁寧に何かと他宗教とも別に強いて爭はない積りだ、との事など述べて居たが、黒紬の好漢は稍々離れて終始獨り沈默を守つて居た。而して所夫と見た方の男は、婦人の低聲を耳近く寄せて聽取り、右申した樣に、何かと世話を燒いて居た。やがて大阪驛に着くと、辨當を買込れたが、孰も並辨當で差別はない。而して正午近く成つてから食事をする態度も、亦迫に行儀が調つて居り、辨當箱の取り片付から、更に行李中より携帶の菓子菓物など取り出し、白紙に載せて黒紬黒木綿の人々にも頒ち、夫婦亦仲好くさも甘さうに食して居る樣子は、當世紳士淑女など云ふ成り上り者の遠く及ばざる所と深く感服した。

汽車がやがて京都驛に着いたので倉皇下車すると、うつかりして居る間に、一行の姿を見失つたが、それは出口を出でなくて直ぐに同じ步廊を他の方向へ步んで丹波行の列車に乘込んだものと推察する。勿論驛内には格段出迎へといふ風の連中は見えなんだ樣である。此に於て自分は前後を思ひ合せて、件の婦人は或は、大本教祖出口直子の末子たる純子で二代目と仰がれて居る者でありはしないだらうか。從つて叉其の連添らしい男は、純子の養子として教主といふいかめしい名を持つて居る王仁三郎氏ではあるまいか。其他の者は固より知れやう筈もないが、何はともあれ若しさうだとすれば、之れに大和の丹波市で間近く見た天理教の幼帥なる管長中山正善や其の母の未亡人玉枝夫人などとは雲泥の相違で、天理教祖の一族は早く已に華族風に化しつゝる事は掩ひ難い。蓋し是れは自然當然の歸化的現象であらう。尤も教祖の中山みき子と他の出口直子とは身分家柄に既に多大の相違があつたと云ふことも、認めなければならぬ。

三

偖大本教に對する政府の態度は昨今に及んで更に嚴重に成りつゝあるとの事で、何でも近頃臺灣總督府では斷然是を禁止し尙ほ內務省へも其の取締方を稟請したといふ樣に、新聞紙上に見えて居た見が、果してどうか十分承知しない。それにしても昨

十二日は年中行事として教主王仁三郎氏以下、七百五十名の衆は雨を衝いて風波を物とせず、播摩灘の一孤島たる神島へ、海上二里を乘り附けて參詣した樣である。而して一面には又其の本據地たる綾部に於て近々堂々と皇道大本教の講習會を開催するとの記事も見た。只夫の同教固有の鎭魂精神法は弊害續出との非難に遠慮して、早く當分は見合せに決したと云ふのは、未だ眞僞如何を審にしない。吾それよりも驚く事は、過日來京都市發行の吾が國唯一の宗教日刊新聞たる『中外日報』に聯載しつゝある其の筋の取調書に據ると、教義上の要點に關し教主王仁三郎氏と會長淺野學士とは事々物々意見を異にし、王仁三郎氏は何事も頗る折れて下手に出やうとするに拘らず、淺野學士の方は傲岸で、正々堂々其の平素の主張を曲げぬらしく、其處に一宗分裂の萠しが見えて居ることで、自分は竊に同教前途の爲にこれを惜しまざるを得ない。蓋しそれといふのも畢竟教祖教主の一家が一日も早く公認を希望して居るからで、而かも又王仁三郎なる人が果して自分の過日汽車中で看た人であるならば、その人格がとても強固なる態度に出づることを許さないのだとも想はれる。乃ち試に王仁三郎氏と淺野學士との爭端を列擧して見やう。

第一、綾部町を帝都と云ふは如何との問に對して、王仁三郎氏は世界大戰亂の起つた場合、日本が外敵に中斷せられ、東京が危くなるから、京都が帝都と成り、從つて綾部は御避難場即ち行在所になると信じ、萬一の時の用意にもと、堅實なる志士を養成することに掛つて居ると答へ、又淺野學士は日本對世界の大戰は、周圍の狀況上內地戰であつて「東京は元の○○になる」と神諭にある所から見ると、長くも陛下は京都御遷都より、續いて綾部町に御遷りなる場合もあると、私は信じますと論じて居る。之れを要するに所謂御筆先には「綾部はみやことなる」とか又は「十里四方は宮　の內」とかあるさうで、帝都と解し或は地形の狹隘に失するより、常識上行在所又は御避難所と云ふ風に解するらしい。而かもそれさへ王仁三郎氏は最後に之れを取消したさうである。

第二に所謂世の立替に關しても、淺野學士の方では、「御筆先」の通り、三千年以前より神の仕組で既定せられて居る事を主張するに對し、王仁三郎氏は三千年と謂ふのは單に太古からといふ意味に止り、だん／＼と世が進步改善されることを謂ふ迄で三千年前から豫め仕組ましたものだと解くのは嘘です。御筆先にもなし、私も信じません。從つて所謂立替立直の準備として

王政復古卽ち明治維新を始め、其の他の戰爭や事變が神の仕組として行はれたのと說くのも、全く間違で、それは後から色々と考へて理窟を付けたのであります。又唐と日本との戰爭と謂ふことも、豫言と謂へば豫言、偶然と謂へば偶然であります、と陳述したさうな。

第三に所謂立替後の狀況如何に就いて、淺野學士は世界は十二ケ國に分かれ、各國大統領の樣な者を置くが、其の上に立つ唯一君主として世界の統治權を掌握遊ばされるのは、畏くも吾が日本國の天皇陛下にまします。勿論これは立憲制である。而してそれと共に祭政一致卽ち神政は確實に復古し、天皇の下には祭務と政務との兩長官があつて補弼し奉り、大連と大臣とが一人宛出來る譯で、國郡町村にも亦それ〲此の二方向が設備せらるゝこととなります。斯くて經濟狀態は先づ私有財產制の撤廢であります。卽ち明治維新の際に於ける藩籍奉還と同樣の手續で、廣く全階級に及ぼさるゝ譯で、而後ち又改めて靈的階級に應じて陛下より永久に貸與せられる事。然かも土地賣買の如きは無論禁止せられるのであります。將又貨幣制度も百事整頓の曉には廢止せられ、物品の有無を交換すべき制度が官制さるる筈で、從つて交通機關等は無料になります。尙ほ職業は世襲と成り、萬世一系は上皇室を首め奉り、下人民に及びます。而して服裝は其の階級と職業とに依つて固定し、一切の流行を禁止する樣に成ります、と述べて居る。

之れに對して王仁三郎氏の方では、最初は略ぼこれと同樣の事を陳述して居るが、後には全然誤解であつたことを悟つたと自白し、御筆先には私有財產制度の廢止、世界大家族實現の事は一つも書いてありません。只「神も佛事も人民も富んで暮す樣に成るぞ」とあるばかりです。將又神の世に成ると謂ふ事も單に神代の樣に純朴な精神の人ばかりになると云ふことで、それを未開時代に還る樣に誤解したのです。職業の世襲に關しても亦御筆先には「天下大名士を拵へて萬劫末代續かすとある」を誤解したのだと云ふ風に、答辯したさうである。

第四に御筆先卽ち敎祖に憑りての神諭は約壹萬部ありと稱せられて居るが、王仁三郎氏の傳述に依れば、明治二十五年の御筆先なりとして『神靈界』その他の印刷物に由つて發表したものは、實はそれと同じ原本が存在するものでなく凡て神諭を發刊したのは、大正六年二月以後で、其印刷の原稿を作る時に、年月日と組立等を敎祖にお尋ねして書いたので、敎祖は御筆先と口と兩方で神諭を出すと言はれて居ます。例へば露國と戰が

ある云々の部分は明治二十九年の御筆先であつて、明治二十五年の御筆先には唐と日本との戰ある云々とのみあつたのを、二つ一所に合せて、明治二十五年舊正月の神諭として出したのでありますと言ひ、凡て御筆先は私のみが解いて世間に發表すべき筈であるのを、ウツカリして居て、私以外の者に解説させたり、又著述して居るのを傍觀して無言で過ごしたのは、全く私の失策で、神樣に對して申譯がありません。今後は私が全責任を帶びて、神示の通り實行する決心を致しました。既に發刊した部分について誤つて居る所は全部改めますと云ひ、在來のものは或る點から觀れば淺野教であると公言し、宣傳の內容並に方法は殆んと皆淺野和三郞等の言動に依つたものぢやと辯解して居るのは、大に驚かざるを得ない。

最後に大本教の一大特色たる鎭魂歸神の法に就いても、淺野學士は人から教へたものではないから神授の秘法であると高調し、此法をば非常に尊重して居る樣だが、王仁三郞氏は、之れに對して、意外にも教祖は元來鎭魂歸神の法は御存知ありませず、そこへ私が明治卅二年に綾部へ參りまして、參考の爲に之れを行つて見ました所が、結果が面白くないから、教祖に叱られて、現に御筆先にも「悪いから止せ」といふ事が何回も出て居ます。併し私は之れを行はなければ神の道は判らないと思つて居りましたが、結局止めました。從つて是れは素より神傳の秘法でもなく又神意でもありませぬと答辯したのは、愈ゝ驚かざるを得ない。

自分は今茲に敢て王仁三郞氏と淺野學士との善惡優劣を批判しやうとは毫も考へて居らぬ。併し若し大本教が果して王仁三郞氏の言ふ通りだとしたらば、實は大本教はもはや格別取り立てゝ言ふ程のものではなく、自ら絶滅して仕舞ふ樣に思はれて笑止千萬である。自分は大本教たるものが未來如何程詰らないものだとしても、それは又餘りに情ない仕方で、寧ろ王仁三郞氏の小人的心術態度は、到底一宗一派の教主の何のと威張る丈けの資格なく素質ないものと判斷を下さざるを得ない。知らず淺野學士は今後どんな態度に出るであらうか、敢て刮目して待つて居やう。

四

此の御筆先といふ風のものは、大本教にも天理教にもある。固より概ね荒唐無稽なものではあらうが、併し總じて宗教の開祖など云ふものは、皆或は天啓とか夢告とか何とか謂つて居ら

ぬものはなく、否更に一歩を進めて、其の已證に出ると稱するものも、實は彼自身の想像臆斷に出たものでなければ、大概は爾前の教說や何かを繼承して、多少變道し、其處に一機軸を案出したものに過ぎぬ。それは吾が國固有の神典や古史にも隨分其の例の多い事で、神憑など云ふ事は固より決して珍らしくない。否佛教上にしても亦遠き釋迦の昔は勿論、吾が國中古以來の諸高僧にも多々ある事は、一々反復するに暇ない程だと謂つて好からう。別して基督教のバイブルには格別に澤山ある。然り而して純科學の立場から觀たらば、何も新興の大本教や天理教に於けるものは不正邪惡で、舊來の宗教にあるものは正善であると云ふべき理由はない。孰も皆同一範疇に屬する筈で、褒貶することは許すまい。豫言なども亦バイブルには非常に澤山の事例がある樣だが、吾が國にも亦古來其の類は少いとしない。特にそれは古今内外共に敵國來冦大戰勃發祖國危急の警告樣のものが多い樣で、現に夫の日蓮聖人の『立正安國論』や何かも亦其の著明の一例だと考へられるではないか。果して然らば此處にも亦何も新興の大本教や天理教などは誇らぬ、昔から在來のものは獨り立派であるとは、公平無私の第三者には申されなからう。

尤も中山みき子や出口直子などは、元來無學文盲の田舍婆だから、信用するに足らないと云ふかも知らんが、それも古來神憑など云ふものは、多くは却て無智無邪氣の者にあることは許さなければならない事實で、基督が曾て天國の門は只嬰兒にのみ開かるべしと云つたのは、自ら意味深長なるものがあらう。新約全書の四福音の記者は勿論、十二使徒とても皆恐く教育あり素養ある立派の學者であつたとは謂へまい。親鸞聖人が自ら卑下して愚禿と謂はれ、日蓮聖人がわざと吾は是れ旃陀羅の子なりと謙抑されたのは、意味が深長である。釋迦が印度の王族であり、基督が猶太の大工の子であると云ふ事は、固より毫も佛耶兩教の正邪善惡を沙汰する標準とはなるまいではなからうか大本教や天理教が色々學者達の補助を藉つて漸く仕上げられたと云ふ事も、亦何も別に輕蔑の種とは成らぬ。舊神道の祝詞なども年所を閲して漸く成立したものだと云ふ事は、近頃段々學問上の研究報告がある樣であり、記紀二典にしても現に『古事記』は稗田阿禮の傳誦する所を、太安麿が適宜筆述したのであり、『日本記』の方は舍人親王を總裁に仰いで、和漢幾多の學者文士が編纂に從事し、添削潤色頗る力を用いたものであることは言ふに及ばない。佛教の諸典も固より釋迦自身の著述ではな

く、幾回か所謂結集が行はれて、漸く纒つたもので、剰へ譌經と稱するものさへ澤山ある。若し夫漢譯に至つては同一原本にしても代々譯文を迥に異にして居るものは、屈指に暇なからう。古既に然りとすれば、今が獨り惡いと云ふ道理はない。要は內容如何にあるが、さうなると又佛敎などには古來堂々護國經と尊重されて居る『仁王經』などの七難消滅の功德などは、每々評論した通り、種々の點でおかしい事は掩い難からう。

　天理敎の本尊は元來は天輪王命やら天理王命やら一寸分り惡くいが、孰にしてもその元は佛敎に出たらしく、勿論吾が神代記や神名帳にはそんな名前は見えない。現に同敎では當初は南無てんりわうのみことと唱へて居たらしい。將又十柱の神とかの事も、最初から言はんでもないが、それは全然同敎特有のものであつた事は、同敎の創世記とも謂ふべき今は秘本の『一萬白龍』(?)か何かで見た樣に記憶する。然かも今日同敎の敎典では天理王命は總名で、實は吾が神代十柱の神々を一括したものと神道風に解して居る。是れは大方例の合理化俗化にある曲說であらう。天理王命ならば天理王命で毫も差支ない、日本の神社の由緒などを調べて見ても隨分色々の神が續々出現して居る遠慮には及ばぬ。神名などもどうでも信ずる儘に差支ない。その點で大本敎の方は初から國常立尊が敎祖出口直子に神憑つたのだとするから、一歩吾が國有の神道に近いと誇られるかも知らぬ。併しそれも敎祖自身は寧ろ多くは例の艮之金神を口にしたらしい。這の金神と謂ふのは由來支那の道敎の祀る所で、干戈衰亂水旱瘟疫を掌る荒振る神で、各々國では吉備眞備や阿部晴明などの時から陰陽道に於て頻に尊重し、延いて今尙ほ民間俗信仰の對象と成つて居る事が夥しいとすると、思半に過ぎやう。

　天理敎では格別疾病の事に重きを置き、一切の病源皆心の塵埃に由ると云ふ說明で、それは確に佛敎の臭味を帶びて居る。或は當時有名の修驗者市兵衛倩郡の暗示もあるか知れぬ。何はともあれ從來同敎に入信の徑路は疾病に由るものが、十中八九の多きに居る事は故中山新次郎管長の直話だそうな。從つて同敎の機關雜誌『道の友』を繙くと、重患難病乃至難產の輕治の實例が色々と載つて居る。又天理敎にも無論色々な御筆先があり世界の立替立直を理想とし、丹波市の御地場をやがて甘露臺の建築さるゝ所として居る樣が、その豫言とか神諭とかは大本敎のそれに較べると、頗る簡短素朴で多岐的であることは、猶ほデルフヒーのオレークルの如き趣きがある。然かるに大本敎の

御筆先は概して平明で冗漫で、而かも毫も餘裕が無い。そこで天理教の人々に言はせると、同教のは神の言で、大本教のは人の詞だなどと云ふさうなが、それは我田引水と謂はれても仕方なからう。倘ほ天理教と大本教との關係に就いては、大本教の方では天理教や金光教や黒住教などは、孰も大本教興隆の先驅に過ぎず。その證據は現に天理教祖の中山みき子は天保九年十月の御筆先に、今より八十五年後には、此の地上の世界が全部破壞するが、谷間の淸き水で全く洗ひ出られ、結構なる神代となると豫言して居るのは、大本教に大正十一年に世界大變動を高調する神諭と符節を合はす如く、所謂谷間の淸水とは丹波の谷間から水の御鏡が顯現すると云ふことで、やがて大本教の事を指したのだなど言つて居ると云ふのは、固より得手勝手である。但し斯んな我田引水の爭は古來神佛兩教の間にも多かつたし、又同じ佛教内でも宗派間には片腹痛いものがあつて日蓮宗徒の自慢我慢には今倘ほおかしくなるものがある。否更に公平に論斷したらば、寧ろ今日の大本教の構成には暗に天理教に種を借つた跡が歴然たる樣だとへ言やう。知らずそれは夫の金神樂拜など民間宗教の共通根柢か何かある譯でもあらうか。

五

勿論新舊孰れを問はず、宗教上の所談は純科學者の立場から觀たらば變なものが多いに極つて居る。併し事實は事實、說明は說明で、如何に科學者とても亦悉く事實を否定する譯には行くまい。彼等の任務は寧ろ實驗に徴して相應の說明を下すにあらう。此に於てか近頃は所謂變態心理學上から之れを說明しやうとする傾向が多く行はれて居る樣で、現に吾が國でも變態心理專門の文學士中村古峽氏は近く綾部に出掛けて行つて、親く實驗を施すとの噂も聞いた。倘ほ西洋には例へば米人カッテン氏の『基督教の心理的顯象』(Cutten—The Psychological Henomena of Chsistianity. 1909.)は、一切の宗教的心理顯象を例の潜在意識に由つて說明せんとし、拙者大學講義全集第三輯の『宗教々育原論』(大日本圖書株式會社出版大正五年)の宗教的生活の心理の一章は多くこれに據つて書いた。然かもその後又佛人ジョアル氏の『靈智的及び超常的顯象』(Joire—Psychical and Safernosmal Phenowens. Trans by Wright. 1916)を讀むと、更に幾多の面白い珍奇な例證があつて、而して著者は終に尋常以上の特別官能を立てゝ、僅に之れを說明する事が出來るとして居る。吾が國でも先年念射の問題が喧しく藤原理學士の手で巧に其の假面を剝ぎ去つた時も、遂に男爵山川理學博士

などは何も最初から詐偽手段の摘發を目的とした筈ではなく、只飽迄も理學者として事實の如何を精確に調査しやうとした迄であると言はれたのは　吾が意を得て居る。不幸これが爲に折角の福來友吉博士などは、一時何となく中途で蹉跌した樣で、誠にお氣毒であつたが、昨今は眞言宗に歸依して、新に活動の舞臺を開始せんとして居られるのは、おめでたいと申さうか。序に大本敎の淺野學士に語を寄せるが、君は吾が國從來の學界や思想界にて往々見受ける樣な腰の弱いものとなる莫れ。此段は憚ながら斯く申す拙者の理が非でも君に懇囑する所で座る。

諸人も定めて承知の事であらうが、今日の最進歩した基督新敎は早く已に成るべく一切の迷信を排斥し、專ら道德的倫理的宗敎たらん事を期して居る樣ではあるが、併し現に米國邊には又夙にクリスチアン・サイエンスなるものがあつて、紐育の大都の眞中で非常に盛に行はれて居ることを看よ。將又例のキリアズムや、ミレナリズムの基督再臨說は當初第一二世紀頃に一時行はれたのは勿論、中世にも亦往々類似の事あり、第十九世紀の初にもアルヴイング等に由りて更に燃え上つた樣だが、今回の世界大戰中も亦頻に唱道された樣で、吾が國でも內村鑑三氏などが最熱心に皷吹されて居た事は、尙ほ耳朶に新しく存して居るだらう。想ふにクリスチアン・サイエンスは尙ほ天理敎の如く基督再臨說は猶ほ大本敎の如きものでなからうか。蓋し是れは或は人情の自然に出でゝ已むを得ない事かとも考へられる。從つて一時迫害された天理敎も旣に公認されたとすると、大本敎も亦十分辛抱さへすれば、今後三十年內には又乾度公認されやう。然り而してその頃に成ると吾が國で最有力の宗敎は基督敎、眞宗、天理敎並に大本敎などで、それに加へて淨土宗日蓮宗眞言宗曹洞宗などが依然榮えやう。自覺の何のと徒に屁理窟を並べ立てる諸宗派は、學說とし又少數者の修養的道業としての外には、活宗敎としては存續し難からうと、是れは去る一昨十日神戶市基督敎靑年會館に於ける佛敎大學兵庫縣友會主催の新文化運動の大會に臨んで喝破し去つた所である。筆記は追々『中外日報』に揭げる筈だから、此の論文と對照せらるれば幸甚である。

最後に一言したいことは、自分は斯樣に申したからとて「何も天理敎なり大本敎なりに隨喜渴仰するものでないと云ふ事である。中山みき子果して何物ぞ。出口直子果して何者ぞ。出口直子の大本敎は金神崇拜の一種で、他の金光敎なども亦然り。天理王命とても肖た樣なものたるに過ぎぬ。出口直子が常に舊

曆を喋々し、　又其の世の立替後の狀態に大名ぢやの士ぢやのを云々する所は、只是れ一種田舍婆の保守癖の發露に外あるまい。又其の歐化主義を斥け、極端に汎日本主義を押立てやうとする所は、前にも言つた通り、熊本の神風連などを聯想するが尙ほ聞く所では、這の大本敎の成立には薩摩の神道家本田親德とかいふ人が陰に與つて功あり、同人は舊水戸藩の會澤正志の流を汲んで居た者だとすると、其の所謂尊王攘夷一流で偏狹固陋なことも故ありと知れる。爾來陸海軍將校の古手などが比較的に多く大本敎に歸入すると云ふのも、亦彼等の尙武的で血を見ることを好む蠻臭に由る所が少くはないだらうか。淺野氏は這に學士だけあつて大分大膽に遣り廻さうとする所は、固より王仁三郎氏などとは同日の談ではないが、仄聞すれば、早く基督敎であつたと云ふに、さりとは又何たる尙古癖の甚しい者ぞ危險云々は別問題として、同じく世の立替立直を言ふならば、何故に社會主義でもを堂々と皷吹しないのか。自分とても亦固より尊王愛國の心は十分にある。併し眞に日本國の前途を考へると、それは皇室を推戴しつゝ純乎たるデモクラシーを行ふ外はないと信じて、年來筆舌に頻に皷吹して居り、最近も『現代思潮と敎育の改造』(大正九年同文館)を出したことは、周知の事實であらう。將又眞に世の立替立直を言はんとするならば、本年劈頭の大詔にも仰せられたる通り、何故に國際聯盟世界平和の事を高調しないのか。自分はそれが寧ろ眞に日新の皇道に合するもので、頑冥固陋の神道家などの口にするものは、失敬ながら兎角現代の時勢に合せて、第一明治維新の五ヶ條の御誓文に悖戾する所が少くなからうと考へる。因に大本敎の御筆先の中には「世界を審判すべき御魂は東から出て來るぞや、此の御方は日の出の守護となるから、世界中に神德が輝く神の世と成るぞ」とあるなども、或は寧ろ米國大統領ウィルソン閣下の國際聯盟世界平和の主張だと解く樣にしたらば、大詔の聖旨にも合して、大いに氣が利いて居ると思つたに、さりとは殘念千萬である。何はともあれ歐米先進國では理否は暫く措き、今や現に色々な社會改造の現代的運動が熾盛であるに拘らず、吾が國では依然として變挺な異端邪敎視せられる新興的にして而かも古風な宗敎か何かでお茶を濁して居るのは時代後れも甚しいと謂へる。蓋しそれと云ふのも、一面には舊來既成の諸宗敎が多くは因循姑息で、意氣地がないのと、一面には言路今尙ほ壅塞して、思想悉く自由ならず、運動常に束縛されたる爲めだと思ふと、前途尙ほ遼遠なる哉と浩嘆長大息する噫(七・一二夜)

改造を要求さる可き皇道大本

佛教大學教授
文學士　石神徳門

たしか大正五年の夏の始めであつたかと一知己に伴はれて綾部に遊び皇道大本の教祖出口直子刀自に面謁するの光榮に浴した。これは今にして思へばまことに得がたき機會であつた。當時の自分は所謂搖籃中にある原始宗教の模型を見るより以上何等の期待をも希望をも持たなかつたのであるが、其後散見する新聞の雜報はいつの間にか擴大されて來て、かゝる事象に無頓着なりし人々はこゝに始めて驚異の眼を聳つるに至つた樣であるが、余輩にしても當時を追想して多少の感慨なき能はざる者である。彼教に從へばこそ綾部は日本の高天原、世界の神都であらうが我等凡常の眼には依然として鬼棲む大江山に程近き丹波の片田舍に過ぎないのである。然も其處に住める紙屑買のお直が口を通して幾千萬の信徒をして無上の靈地と思はしめ、多くの識あり位あり財ある人をしてかくまでも引寄する力あるは抑いかなる動因に基づくのであらうか。そこには若干の理由がなくてはかなはない。余輩は先づ其教義の骨子を捕へ、而してそが何故に現代に於てかばかり勢力を得るに至つたかを概觀するであらう。

大本教理の中核たる思想は余輩の見を以てすれば惟神道と鎭魂の二である。惟神の道は實に我邦神道の中心觀念であつて改めて云ふ迄もなく至忠、至誠の信仰である、こゝに忠とは畏敬忠順を、至誠とは一切の德本を意味する。鎭魂は遊離の遊魂を招いて心性の中樞に鎭安することを指す。かくて此二個の根本信條は獨り此教に止まらず、神道一般否或意味に於ては一切の宗教に共通なるものでなければならぬ。然も惟神と鎭魂との對象は何者ぞやとの問題が生ずる、兩者の價値はこの問題の解答を俟ちて始めて決定されねばならない。若しも惟一神教であるならば因より何等の疑なきところであるが我邦神道の如く多數の

神祇を並奉する場合にあつては先づ以てこの事から解決してからねばならぬ。事實に於て在來の神道教義は此解釋によりて幾多の分裂と變遷とを吾人の前に呈示したのである。斯くて此分裂變遷を溯尋することは殆んど我邦神祇史其者の全部となるのである。試みに大本教が或場合に師事した古神道を例とすれば惟神の對象は天照大神であつて此際この宇宙の統理者たる實在者となつて居る。從て萬象は此根元に發しそれによりて成るとして固有の宇宙觀と人生觀とを建立したのである。黑住教の如きかゝる系統上に立つ優秀なる教理なることは周ねく知らるる通りである。

然も此際云ふ天照大神は明かに見らるゝ如く宇宙の實在であつて神話史上の神格と大に異なるところあるを忘れてはならない。大本教とは此實體を天之御中主神と國常立命とし此二神を本迹の關係に置いて居るかと思はしめる。彼等の聖典と大本教說明との間に多少符に落ちぬところがあるが大體より見てこれ亦古神道系の一分派と見てさまたげないであろう。

次に彼等の鎭魂はこの實在神の元靈と其所產たる個體靈との對立から生ずるが、これを理解するためには勢我邦古代に於ける魂魄思想につきて一言せねばならぬ。記紀に見ゆる如く我邦では古くから人間の靈魂を其機能に從つて和魂、荒魂に分つて居る。前者は顯、動、仁、和、の作用を營み後者は幽、靜、勇、猛、の作用を司る。兩者相助けて一人格を構成するのであるが、其均衡を失するに依つて人性の缺陷が生じために種々なる罪惡を產出するのである。大本に特有なる思想に從へば此二靈の配合は本來元靈の指導に依るものなるも往々にして曲靈の誘惑するありて邪路に迷ふのである。之によれば彼等が人性には曲直二靈の並存を信ずることが分る。彼等の直靈とは元靈の分身たる諸種の產土神であつて曲靈とは一切の邪靈なる精靈である。かゝる曲靈に迷はされて生ずる個人靈魂の不當なる混迷を匡正し是等を正しき位置に歸し其靈能を完全に發揚せしむるを鎭魂と云ふのである。

かく見來れば大本の教義は神道一般の教義上より別奇なき頗る穩和なる形態と云はねばならぬ。然も何故にこれを以て世人は疑惑の眼を以て見るのであろうか。何等かの議すべきものが其間に潛むで居ないであろうか。かゝる見地の下に近時に於ける此教の行動を觀察すれば果して豫想せる或者を發見するに至つたのである。第一に教義解釋につきて吾人は彼等教徒のなす

ところは大に教祖の態度と間隔を生じて居ることを注意しなければならぬ、少くとも余輩は親しく教祖に面謁せる者として確信を持つてかく立言し得るものである。大本教義の根原は飽くまでも其神諭卽ち御筆先の純正なる紹述を出でてはならぬ。然もとは實際に於て出口、淺野二氏に依て大なる改鑄を受けては居ないか。

彼等の聖典たる筆先は廿八箇年の間に教祖が神憑の內に自働書記せるもので數千部堆積されて居ると云ふから是を讀破しなければ充分なる立言は出來ないわけであるが人々の掌に引用するところより推測すれば其神諭の內容は極めて平明である、實際教祖が神憑以前の教養に徵して爾く高遠なる哲理があるべき筈はない。要は國常立命を人類の救世主とし一切の罪惡を改心して正しき人民となれ、現代の社會は腐敗墮落の極なるが故に必ず一大改造卽世の立替を要すると云ふのである。而もこの立替、立直しは必らず神威を以て完成さるべくかくて始めて人類の永久平和時代たる松の代が來ると云ふ。斯る莊嚴なる使命を傳へむが爲めに彼教祖が生れたのである。いま一二の例を擧げる曰く『神官坪の內大地の高天原の神屋敷、この屋敷から艮へ落ち居た神が元のところへ立ちかへり世の中の人の身魂あらためをして人民を助けたいのが望でや、世界の宮を建てるから村中の人家持て退いて下されよのいてくれねば燒いてしまふぞ』又云ふ『艮の金神國常立尊、若姫岐美尊變性男子の御靈が出口の神と現はれ直の肉體を藉りて明治廿五年からガンジリ卷にしてをいて辛い御用を命じたぞよ。出口直に書した筆先は世の本を創造えた國常立尊が體內へ這入りて書くのであるからチットもまちがひの無い事ばかりであるぞよ。世界をコシラえた時から其儘にくたいのある生神がばけて世界中の事を隅々まで水も漏らぬやうにあらためかしてありての二度目の世の建替であるから、此世初りてから未たない大業なことであるぞよ。これまでの世は世を持たねばならん誠のいき神を世に押込めて天地が動いても世を持つことの出來ん素盞嗚尊を出して政治を致して居りながらさつぱり世が逆樣にかへりて居りたのであるから三千世界を本のしぐみ通りに捩戻して、世を持つ身魂に世を持たして天下泰平に世を治めるのであるぞよ。中略今の政治のやりかたは一から十まで僞で固めた其場のがれのやりかたであるから此世がさつぱり暗雲で世の亂かたと申すものは神からは目を開けて見られん醜るしきさまになりて昔の元からきまりた誠の神の道がなくなりてしまふて人民の通る道もないやうに世が下

りて居るぞよ。下略』。いかに彼が受けた金光の神戒や天理教祖の筆先と類似せるかを見よ。彼此稍異なるとこは終末歎的豫言思想が濃厚にして廣大なる慈愛の光に依に依る日常行事の箴言に乏しきことであらう。

以上が純撲なる教祖が建立した教義の大體である。彼が靈感を記載せる片言隻語はもとより何等の修飾を經ないものであるが替一替し來れば無限の感興を生ずるのであつて、之を以て神人の語と稱するも敢て不可なきものがある。尙且彼教祖が神の口としての態度は頗る尊いものがある。彼女が余輩に物語りし時其純一無我の容姿は轉た追慕に堪へないものがあつた。其際に曰く『神様のことは學ではわかりませんでな。この事ばかりは理ではゆきません。私も神様の仰しやる旨をたゞ書せていたゞくばかりで、皆樣に御詞を讀で聞かせて貰うていますのや。それでもなかなか其思召は千が一も領會するとは出來ません』と何たる敬虔の態度ぞや。此態度こそ大本信仰の根本的態度でなければならぬ。

然るに此純一無雅の信條はいかに祖述展開されたであろうか、吾人の疑義はこれから生ずるのである。實際大本の教義は數衍者の手に依つて大いに改修されて居る。第一に出口王仁三郎氏に依りて鎭魂歸神法と言靈學なるものがしきりに唱道さる。出口氏は其前半生に於ていかなる訓練を經たかは深く知られて居ないが本田親德と稱する人の思想を餘程承けて居るといふことである。本田氏は思ふに多少の陰陽道的混入要素を含む復古神道に對する人ではなかつたであらうか。まだ深くこの點の探求を試みないが出口氏の思想を通じて覗へばかく推定さる。この鎭魂の作法は教祖はあまり喜ばなかつたと傳へらるゝがさもありなんと思はしめる節がある。出口氏がこれを唱道したのは筆先の人の『身魂改めをして人民を助けたいのが望みぢや』との意に基いたのであらうが。其作法は遠く饒速日命以來行はれ來つたところ、近く大成教に於て鎭魂性神と稱するものと出口氏等の云ふところと何等本質上の相違はない。唯吾人の頗る奇異に感ずるのは其鎭魂の作法が餘りに原始的であつて到底識者の間に是認を得べからざることである。彼等の說くところに依れば人間には正副二體の守護神があつて日常一切の行動を指導する。其正は產土神其他の神靈の生邪以來憑り來れるもの、副は天狗狐狸の類である。それは天理の公我と人欲の私我とを具象化せりと見れば一應はすむにしても餘りにしても其原始的なるに驚くのである　歴たる知識階級の人々が平然として

之に甘んずると云ふに至つては殆んど言ふところを知らぬことである。何とか一層善良なる考案はないものであらうか、若このまゝに置くならば稻荷下ろしと毫も擇ぶところはない。大本の人々は或心理學者が鎭魂は催眠術なりと云つたのをひどく氣にして居る樣であるが、催眠ならばまだしも、狐下しと同一視されたら尚更大變ではないか。而て又かくの如きものを以て幽顯貫通の鎭魂であると考へたら大なる誤謬である。之を一種の精神療法と視るならば多少の價値がないでもあるまいがそれも極めて低級なものである。

それと共に彼等の間に云はるゝ歸神の經驗も亦危いものである。二三回の鎭魂に依て直ちに超自然界に遊び神靈に接することを得と稱するのであるが、かゝる超自然的經驗は一種の神秘的經驗であるかも知れないが宗教的價値を之に付することは躊躇せねばならぬ。何となれば斯る經驗は往々にしてとりとめもなき幻影に過ぎないものであるからである。現に彼等の間に聞く神靈界の消息は吾人にとりては精神病者に見ると全く同一なる無稽の幻想談が多いのである。人間の精神生活で正常と異常とを混交する程恐るべきことはない。當人はかゝる場合恍惚無我の境に逍遙するの悅を持つであらうが、此世界の外に立つ周圍の人々こそ非常なる迷惑である。更に重大なることは宗教上の神秘は決して異常の現象を意味するのでないと云ふことである。こは寧ろ正常現象として追及すべき限界外を指すのである。從つて認識智の範圍内に於て易々領會し得べき事象を故意に異常の現象に依て說明し以て神秘的の解釋となすが如きは常識の沙汰でないと云はねばならぬ。

次に言靈學とは何であるか。原始時代から人間の言語に靈能ありとし之を神聖視する信仰が世界の到處に存在する。印度のかゝる信仰は聲字實相論となり現に密教の内に繼承されて居るが、我邦でも古くから言靈の信仰があつた『敷島の倭の國は言靈の所佐國ぞ眞福くありてこそ』とあるの類で近くは神理教に『本教は高祖天照國照彦火明櫛玉饒速日命の遺教を奉じ言靈を明かにし一向壽念天在諸神の無量不測の妙靈顯幽無二、天然固有の理法を遵奉し人心の安立を得せしめ』云云と云へるもこれである。大本のは之を承けたのであるや否やを知らないが、少くとも彼以前にかゝる教理ありしことは注意に値する。

以上の如く大本教は教理の釋義につきてもこれを神道教理史に照らせば何等獨創の見地を見ることが出來ない。いま其消息

を尙一層具體的に提示すれば其敎理の精髓たる惟神の道は復古神道に鎭魂は大成敎に言靈は神理敎に於て旣に見るところであり、更に最も近き先行者たる天理敎に夥しき類同を見る、其お筆先と云ひ、其世界立替と云ふが如き、其敎の發源地を日本若くは世界の中心とするが如き比々皆然りである。唯異なるところは彼にありては其神樂歌に『病むよりつらいことはない』『すべて病は心より』と云へるを極度に演繹して疾病の治療に於て一世を風靡するに至つたに反して、これは主として精神其者の病態を匡正するに專念する點にある。

彼の預言の如きも爾餘の諸宗敎近くは天理敎に見るところと大なる相異はなく至つて漠然たるものであるが敎理の宣傳者が故意に之を膨脹するところが大本の特異點であらう。何が故に膨張と云ふか凡そ預言は個人及び國家の艱步に當りて其赴くべきところを指示して、强き希望を與ゆるを其旨趣とするので極めて漠然たるを常とする。これが文字通り具體的に解釋さるゝは寧ろ宗敎にあらずして一の職業である、我邦にも多く見るト筮の如きは其一例であつて周易の原本的意義とは大に趣を異にして居る。然も奇なるは大本敎に於て此宗敎に附帶する預言のト筮的効果を主張し以て其宣傳の方便とすることである。日露戰爭を預言せりとか、大正十一年に立直しがありとか云ふことの如きはそが當るにもせよ當らぬにもせよ宗敎として何等の意味をなさないものである、況んや其預言も實はお筆先に明記するところにあらずして往々宣傳者が適中を衒ふために改竄せるの跡歷然として存せりと云ふに至つては、まことに神意を冒瀆するの甚しきものと云はねばならぬ。かくの如きは獨り信仰上の問題に止まらず、實に道義上の問題ではないか。

かく見來れば大本敎なるものは其敎理に於て別奇なく其宣傳に於て聊か眞實を缺くものすら看出さるゝに關せず何故に爾く喧囂されるのであらうか。このことが却つて眞乎の一問題であるかも知れない。これにつきては色々の立場から種々なる原因が考へられるであらうが。最も主要なるものは近時の思想混亂である。殊に民族精神の根基や國民道德の中核に對しては深刻なる洞察と根本的なる確信を缺むとする焦慮が一層大なるものがある、此時に當つて民族に固有なる宗敎の立脚地よりこの缺陷を指摘し、而も民族精神の根本の概念に依て之を救治すと呼ばれるは確かに一に福音であらう。特に精神科學的訓練に乏しき物質を對象とし又は尊卑何れにせよ筋肉上の勞務に與かりし

者が大旱の雲霓を望むが如く一齊に之に歸入したのは怪むに足らない。且つや這般經濟界の轉變内に一上一下せる冒險的の事業者が之に赴いたのも亦自然の成行と云はねばならない。然も是等の人々は果して所期の願望を充分に充たすことが出來たであらうか。余輩は現代の既成宗教が其當然の責務を忘れて意外なる方面に努力の燒點を設けこれがために眞面目なる民衆の歸仰にそむきつゝあるあるを知るが、然るに拘はらず今見る如き粗笨なるものよりは遙かに卓越せる或者を有しつゝあるを知る。信仰は因より自由であらうが今少しく眞摯であつて貰ひたいのである。

凡そ宗教と學術は何れも天地の公道を宣揚するものであるから苟くも公明を失しては其價値はない。從つて是正されざる教説の強辯や、いかゞわしき經驗の膨脹は一日も其存在を許してはならない。大本の教がかくあると云ふでもなく、又大本に何等の利害も感興もなき身ながら國家民衆のためかゝる見地から大本が教祖の純一に歸りあらゆる不純を一洗して惟神の一義に止まらんことを要求する。鎭魂も言靈學も教祖に於ては無かつた筈である。況んや某々淺卑の輩に依てなさるゝ世界觀人生觀の如き今一々批判するの煩に堪へないのである。

尙最後に一言せざる可らざるは彼等の信條十則である、其中には奉信すべき神祇とそれ等に依る宇宙の生成と神人の關係がかなり詳細に列擧されて居るが、其内容に至つては實に哲學、道德、政治、科學其他一切文化現象の根元が包括されて居る。彼等はこれを以て既成宗教に超出する所以となすのであらうが余輩は却つて其原始的宗教たるの特色をこゝに遺憾なく發露せるものと見るのである。勿論宗教的要求は全人性の要求を統齊するにあるが故に其發生の初期には一々の要求が遊離的に並有したであらうが、人間の内面的生活が有機的に發展すると共に其派生的要求は夫々分化發展して其中核のみを殘して他は各々分化し以て特有の機能を完成するに至つたのである。醫術、卜筮、律法、自然學乃至哲學等はかくして宗教より脫化したのである。近く我邦神道の發展に見るに全く同一であつて其混沌たる神話的搖籃時代より儒佛哲學による體系化の過程を通じて最後に固有の惟神道に到達して、こゝに一切の不純要素は僅かに迷信として憐れなる殘骸を留むるのみである。殊に注意すべきは我邦神道の發達に於ける祭政の分離である。何れの宗教にも見る宗教と政治との混合狀態より比較的早代に脫出したりしことは顯著なる事實であつて、彼の宮中神器の遷奉されし事蹟は

實に此發達の過程を認識する事を出來事である。然るに神道の末流に出でし大本教が皇道大本を唱道するに當つて此發達の過程を逆行したのは余輩の最も理解に苦しむところである。かく我神道發達の理路を無視する態度は其神學にも等しく現はれて居る。古事記に見ゆる天之御中主神が果して彼の言ふ通りの意味にて一靈四魂三元八力の大元靈でありや否やは未だ一般に許されざる事實である。其他の諸神格に對する見解の間にも同様の論調が見らるゝ。又人間の靈魂が悉く神の分靈なるや否や、産土神と守護神とが果して人間の保護指導に任じ得べきや否や、今少しく合理的なる説明を要する。若しかくの如くならずむば綾部の本宮をして地上の高天原たらしめ、天地神祇がかんつどひして神律を議定し、古今東西の諸教を歸一して金甌無缺の皇道を樹立せしめるには足らないのである。余輩をして忌憚なく云はしむるならば、人々はかゝる不充分なる神學を組織するに先ちて今少しく神諭の理想に耽り、神ながらなる至純至誠を以て民衆を導くべきである。芳烈なるルーテルの信念を傷けたものは其對立たる舊教の手でなくして餘りに組織を急いだメランヒトンの神學其者ではなかつたか。彼を思ひ此を想ふ時余輩は知らず識らず、次の如く叫ぶ。

大本教よ其大本に歸れ。

銀鈴の如き教祖の聲は我等の耳にあるではないか。ともあれ余輩は混亂せる思想界に産聲を擧げたる可憐の宗教がよく邪道に陷ることなく健全なる發達を就げむことを、惟神道のため又日本のために希求して止まない者である。嚴烈なる國常立尊の神威を冒瀆せる罪は余輩の甘んじて受けむとするところである矣。

（九、七、十三）

文化現象としての大本教

文學士　伊藤猷典

批判の根本問題―所謂御神諭―鎭魂歸神―神觀宇宙觀等―現代文化の缺陥暴露―學校教育及び社會教育の改造。

批判の根本問題。 宗教は價値の世界と現實の世界とを統一し得て初めて存在の價値がある。此處にいふ價値の世界とは論理的要求に對する眞、道德的要求に對する善、感性的要求に對する美の世界である。されば現代における文化現象としての宗教は現代文化の眞善美の規範に照しこれと矛盾せざるのみならず更に之を統一し、全人格的の要求を充分に滿足するものでなければならない。宗教の正逆は一に之に依て判ぜられる。例令特殊の人の全人格的要求を滿すとも、一般人の見て論理的に僞であり、道德的に惡であるものを含まば之を迷信と呼ぶに憚らぬ。今問題とする大本教は吾人の此の價値的要求を充分に滿足するや否や。以下所謂神諭、鎭魂歸神等につき逐次に檢覈せん。

所謂神諭。 吾人が一家内に局る時は言働も亦家内的となり、一國の廟堂に立つ時は言働も亦國家大となる。同様に例令無學の老婦と雖も身神界にある時は言働も亦神靈的に表はる。故に教祖が神靈に接してなしたるものは神諭としての價値を認めねばならない。けれども之が理解は同一の境に達したるものにして初めて爲し得るものなる故に之が解釋に關しては細心の注意を要する。其人にあらずして徒らに改訂修補して「神諭」と銘打つて出す者あらば神を冒瀆し人を欺瞞するものと云はねばならぬ。然るに世人を驚かしたる日淸、日露世界大戰を明治二十五年に豫告したと稱する如きものを初めとして所謂「御筆先卽ち神諭トシテ印刷物ニテ發刊セルモノハ同一ノ原本アルニアラズ或ハ内容ノ相關聯スルモノヲ取捨シ或ハ彼我ヲ按排シ以テ適宜ニ年號ヲ附シテ出版シタルモノ」（京都府廳調査）たるに於ては其既に眞と稱することを得ず、當事者は世人を欺瞞する道德上の惡人と言はねばならぬ。殊に京都府の調査ありて後一年を經て出版せる「大本教の批判」と銘打たる書の中に著者渡邊靜夫なるものが前記日淸日露世界大戰の豫言に關し「日淸戰爭に先つこと三年以前、日露戰爭に先つ事實に拾數年以前に屬してゐるなほ此の神諭に於て今次の世界的大戰爭迄が豫告警告されてあつたのは神の靈覺眞に驚くべきものである。此の神諭の原本は現に大本教に嚴存されて居て決して後日の改作でない事は其御筆先を見れば一目瞭然たるものである」（同書一九一―一九二頁）と記するに到ては綾部なる神國では之を論理上眞と呼

び道德上善と呼ぶならんも吾人は之を僞と呼び惡と呼ぶのである。

又百歩を讓て所謂神諭が悉く眞とするも、其の中にある豫言の期日を明記せる如きは、又其の內容の明確なる如きは賣卜者のなす仕事で眞の宗敎家の仕事ではない。眞の宗敎的豫言なるものは道德的に墜落せるものを覺醒し、元氣の沮喪せるものに恢復を促す如き類のもので內容又漠たるが常であるからである。

由之觀是、所謂神諭なるものは眞の寫しでなく內容又賣卜者に類するものあるに於ては現代文化現象としての神諭として價値なきものといはねばならぬ。

鎭〇歸神の法。　神人合一の手段として鎭魂歸神の法が他の諸宗敎に比し簡易の點を以て「大本敎の一大特色」と稱するも、宗敎の文化的價値は其の方法の難易よりも價値的要求に適ふや否やにある。昨年の京都府の調査の際に出口が自白せる言によれば「開祖ハ元來鎭魂歸神ノ法ハ御存知アリマセヌ、ソコヘ私ガ明治三十二年ニ綾部ヘ參リマシテ參考ノ爲ニ之ヲ行フテ見マシタ結果ガ面白クナイノデ開祖ニ叱ラレテ御筆先ニモ『惡イカラ止セ』ト謂フコトガ何回モ出テ居リマス」「開祖ハ之ヲ非難シ反對シ『稻荷下ゲナドト誤解サレ名ヲ汚ス基トナル』ト筆先ニモ在リマシテ私ハ廢止シテ居リマシタガ淺野氏ガ復活シタノデアツテ近時ハ大ニ之ヲ變ヘテ中止スル計畫ニシタイノデアリマス尙開祖ハ『早ク廢止セヌト神ガ役人ノ口ヲ藉リテ廢サスゾヨ』ト申サレマシタ」とある。評價に値しなき事は自明の事である。尙之を繼續するとすれば敎祖に對し不信の徒と云はねばならぬ。

神觀宇宙觀等。　寫眞にある如きあれの神が世の神等を崇拜する點より見れば劣等自然敎であり。天御中主神高御屋巢神、神御巢神國常立尊等を擔ぎ出す所は神話的宗敎と云へるであらふ。勿論神の內容は主觀によりて異なるが故に發達せる高等な諸宗敎哲學說の內容を加味して如何樣にも解脫し得るも、既に一般に認められたる槪念の內包外延を變じて他の概念の內包外延を持ち來す事は避けねばならない、ランプてふ槪念の確定せる今日に其の同一名辭中に電燈てふもの迄も取入れる事の不當なると同樣である。之れ吾人の思考經濟の要求の然らしむる處である。宇宙觀に於て「至仁至愛の全智全能に座しませば第一に大地を造り二に太陽を造り三に太陰を造り之に靈魂と靈力と體とを賦與し給ひ天照大神をして太陽を守らしめ給ひ大國常立



尊をして大地を守らしめ、月の大神をして大陰を守らしめ給ふ」（裏の神諭）といふに至つては詩としてなれば兎に角現代の天文學を眞とする限り之を僞と斷ぜねばならない。

現代文化の缺陷暴露。 上述の如く彼の所謂神諭、鎭魂歸神、神觀等大本教の特色と稱するものに於て吾人の價値的要求を滿足しなきもの多々あるを以て前記の規範に照して判する時之を迷信と斷言するを憚からず而も斯かる迷信に信者の日々に增加するは何故か、今其の主なるものを擧ぐれば（イ）一寸先きは暗と信ぜしに大本教にては十年二十年先きの事の豫言してある爲めに好奇心を馳らせられた事。（ロ）無意識の狀態にて教養なき老婆が筆を走らせし事。同じく無意識狀態にて狐、狸八幡太郎などいふを不思議に感じた事。（ハ）教養あるの士で煩鎖な議論に飽きてゐたのが神の啓示に依憑する事の直接にして簡易なるに驚いた事。（ニ）俗的生活に内心忸怩たりしものが信徒等の超世間的生活の神々しさに感激した事等であるまいか。而して「帝都が京都になり綾部が御避難所になる」「職業が世襲となり」「明治二十五年に日清日露世界大戰迄が豫言された」などいふ事を信ずるのは宗教的豫言の眞意味を知らざる事を暴露するにあらざるか。「我は八幡太郎なり」と怒鳴つて金龍殿の中を飛び廻つたり「狐の靈」や「狸の靈」が人體内に入るなどゝいふ



事に就くのは神の内容や靈的生活の眞意を解しなき無智を暴露するものでなきか。神の啓示の簡易に驚きしものは概念の知の外に直覺の知のある事、三段論法の外に一段論法ある事を知らざりしを暴露せるものにあらざるか。信徒の超世間的の生活に感激したものは從來彼等の全人格としての敎養の足らざりし事を暴露せるにあらざるか。若し此の缺陷暴露が眞とすれば之が敎養の道を講ぜねばならない。

學校敎育、社會敎育の改造。 余は學校當事者に望む。修身書第四。同第六卷、「迷信を避けよ」の所で自働書記や、催眠現象が決して神秘でなき事を、更に野蠻未開地に於て行はるゝ憑靈等の諸種の迷信をも敎へられん事を。高等小學讀本卷四ペスタロッチーの處で「彼は眞に人を愛せり而して眞に人を愛するの道は善く之を敎育するにあるを信じたり此の愛情と信念を以て終始一貫心身を捧げて敎育の爲に盡力せしなり」といふ上に彼の妻の死んだ時に聖書を妻の胸に當て「此の泉からワシとオマヘは勇氣と力と平和を得た」といつた事にも觸れてほしい。宗派的の爭の起るを恐るゝの餘り彼の一生の行動の中核をなしたものを逸するのは所謂畫龍點睛を逸したものでないか。學校内に於て宗派的に亘るは元より害があるが、不可不と不許不を統一するの作用ある超越者に就て概念を敎ゆる事は蠶豆の花瓣の數や、猫の舌の形を敎ゆるよりも一層必要ではあるまいか。特に中等學校に於ては眞善美の價値を統一する、全人格的の要求を滿足する如きものを與ふる必要なきか。小西博士を顧問に持つ立命館中學を初め二三の中等學校で廣義の哲學の敎へられつゝあるは吾人の意を強くするものである。

宗敎が學校より除外されたる現代に於ては宗敎家は勿論一般社會敎育の任にあるものは此の點に留意すべきは勿論である。

吾人は今大本敎を批判するに當り現代文化の缺陷を顧みて之が改造を切に望むものである。(七月十二日稿)

寫眞説明

大本敎祖出口直子筆跡

ゆわのかみ
あれのかみ
あめのかみ
かぜのかみ
じしんのかみ
にどめのよのたてかえ

でだちなほ六十八さいめいじ三十六子
のしがつ十いにち
のこら
ずのこ
んじん
にどめのよのたてかえ

滑稽なる鎭魂歸神と憑靈

文學士　中村古峽

大本教が大なる迷信であり邪教であることは、今更改めて言ふを須ひぬ。此迷信を如何にして勦滅し、此邪教を如何にして正道に導かんかは、蓋し思想界の大難事である。併し之が掃蕩の手段に至つては、又自ら他に其の適當な方法と、適當な時機とがあるであらう。余は只平素攻究するところの心理學上の見地よりして、大本教が何故に迷信であり、又何故に邪教であるかの理由を説明し得れば夫れで足りるのである。

大本教の鎭魂歸神法

大本教では其の所謂『鎭魂歸神法』なるものを、『神授の秘法』だと云つて尊重してゐる。そして此の秘法にさへ據るならば、邪靈でも守護神でも天狗でも野狐でも、およそ憑靈と云ふ憑靈が瞬くのうちに其の正體を現はすは勿論、天と地とをひつくりかへすことすら出來るやうなことを云ひ觸らしてゐる。聞く處によると、狸が穴に隱れてどうしても其の姿を見せない時、獵師は穴の口で唐辛子を燻すと云ふことである。大本教の鎭魂歸神法が憑靈に於けるは、丁度此の唐辛子のいぶしが、狸に於けると同様の効力を有するものらしい。信者が隨喜の涙を流すのも宜なるかなと領かれる。さて此の調法な鎭魂歸神法とは、果してどんなことを意味してゐるのであるか。例の淺野氏著『皇道大本略説』には次のやうに説明してゐる。

鎭魂法にありては、一切の妄想を除去し、感覺を蕩盡し、意念を斷滅し、一意我が靈魂の宇宙の大元靈天之御中主神の許に到ることを期す。令義解に之を解して曰く、「鎭は安也、人之陽氣曰魂。言招離遊之運魂。留身體乃中府。故謂之鎭魂。」之を要するに、鎭魂は靈魂の保安、休養、集中、努力等を主眼とし、靜的狀態に在りて運轉活動の準備をなす。歸神法は、又神懸りと云ふ。鎭魂にて養はれたる靈魂が動的狀態に

移りて幽冥に通じ、以て神通力を發揮するを主眼とす。其最高力を發揮するは、即ち神と人、本分靈と分靈と感合する場合なるが、皆通は吾人の守護神の發動にかゝる。守護神が正しければ正神界に通じ、邪なれば邪神界に通ず。歸神の利益得失輕重大小は、一にかゝりて此の守護神に在りと云ふも妨げず。

隨分と俗物の喜びさうな神秘的荒唐的の文字を羅列して、古文書の引用までしてはゐるが、要するに鎭魂法とは、一切の雜念の休止したと無念無想の精神狀態を得るのが主眼であつて、又歸神法とは、其の無念無想の精神狀態が或る暗示（自發的のこともあり又他發的のこともある）に逢着して活動狀態に移るのを主眼としてゐることは、一目して瞭然たる事實である。即ち現今の心理學の用語を以て之を云ふならば、鎭魂法に由つて得たる精神狀態は、虛心狀態（Absentmindedness）若しくは催眠狀態（Hypnotism）であつて、歸神法に所謂『神懸り』とは、前記の虛心狀態若しくは催眠狀態が或る暗示を受けて盛んに活動した狀態に外ならないのである。斯う云ふと、大本敎の連中は直ぐ血眼になつて、『我等の行ふ鎭魂歸神法は、苟くも神授の秘法である！催眠術などゝ一緒にされて堪るものか』と絕叫するのである。例の淺野氏著『皇道大本略說』にもこんな一節がある。

世人やゝもすれば、鎭魂歸神法を以て世間にありふれたる催眠術、幻術、妖術、稻荷降し、交靈術などと同様のものと誤信し、神聖不可犯の天授の神法を捕へて却て有害危險人を惑はし、世を傷け、奇を好み、巧を弄するものとなす。皆小智、輕斷、早合點、上滑べりの妄論のみ、と。

迷信者にでなければ容易に發見することの出來ない鼻息の荒さである。借問す、彼等は果して催眠術を研究したことがあるだらうか。否研究はさておき、彼等は果して催眠心理の一頁でものぞいたことがあるだらうか。知りもしないことを如何にも知つたか振りに高慢チキな口を利くのが迷信者に共通な特色であつて而も此處が愚民共の惑されるところである。余が此の論文の冐頭に於て、迷信者は概ね獨斷で無反省で、自負誇大の念に強いから、果して何を云ひ出し又何をしでかすか分らないと云つたのは此の類の事である。證據をお目にかけるとしよう。

大正八年一月十五日の『神靈界』に、淺野氏が自己の『入信の徑路』を語つてゐる中に斯う云ふ一節がある。

『尤も五年許り前に、催眠術を見たことはあつたが唯不思議な事だと感じただけで、說明を聞いても一向腑に落ちなかつた』と。又最

近大本教主出口王仁三郎が、京都府警察部で取調べを受けた際に、

「鎭魂法と催眠術との區別は私にも明瞭に判りませぬが、鎭魂法が催眠術の進歩したものか、又は催眠術が鎭魂法の進歩したものかは知りませぬ」

と自白してゐる。催眠術を見て不思議がつたり、鎭魂法と催眠術との異同さへ分らぬと自白する徒輩が、いくら大聲を上げて、我等の行ふ鎭魂歸神法は催眠術ぢやない、天授の神法だ、天授の神法だ、と盛んに神法呼はりをしたところで、其れは只無智な人間がおどかされる以外に、何等の權威をも認められないのである。『小智、輕斷、早合點、上滑べりの妄論』とは却てお手前のことであつたのだ。誠に笑止千萬と云ふ外はない。

さて大本教で行ふ鎭魂法は、在來或る一派の神道や、又は眞言宗法華宗などで行はれ來つた加持祈禱なるものと大同小異である。余の見たところに依つて其の方法の大略を紹介すると、先づ被術者は施術者（大本教ではこれを記約に倣つて審神者と呼んでゐる）の前方適宜の處に座を占め、右足の拇趾を左足の拇趾に輕く重ねて姿勢正しく端座する。それから左手の小指を外にして兩手の各指を交互に組合せ、左の拇指は右の拇指の上に載せてこれを胸の中程に着ける。そして兩の食指だけを長く伸ばす。だから其の手附は一寸見ると忍術使ひなどが九字を切る時の手附に似てゐる。此の姿勢を整へると共に、被術者は兩眼を輕く閉ぢ、成るべく心を靜めて無念無想の境地に入るべき準備を取るのである。

其時審神者も亦被術者と同樣に手を組み、被術者の顏をじつと見詰めながら、兩肺に深く息を吸ひ込み同時に自己の組合せた手を頭上に高くさし上げ『ウーン』と氣張つて三四回も氣合を注ぎかける。それがため審神者の顏は眞紅になつて、非常に物々しい面構へとなる。やがて氣合を終ると審神者は、極めて嚴かな口調で以て、

一—二—三—四—五—六—七—八—九

十—百—千—萬（神代音のよみ方だと云ふ）

を、ゆつくりと嚴肅な調子で五回ほど繰返す、（多人數の被術者が同時に施術を受ける時には、鎭魂法を行ふ際に審神者が石笛を吹くことがある。此の石笛と云ふのは、云はゞ審神者の鑑札のやうなもので、之が又極めて迷信的のものである。新に一人の審神者が殖える場合には、必ず奇蹟的に天然自然のまま

の石笛が神樣から突然授かるのだと云ふ。現に誰其の石笛は何某神社の後庭で授かつたの、又誰某の石笛は某地の湖畔で授かつたなど〻眞面目になつて書いたり話したりして居る。人知れずこつそりと其處へ落しておいた神樣は、定めし後向きになつてペロリと舌を出してゐることだらう。さうすると大抵の被術者は其組合せた手が自然に振動を起して來る。(手の振動する理由はあとで說明する)若し又被術者の手がなほ振動を起さない時は、審神者は再び氣合を掛け直して、例の『一(ヒト)——二(フタ)——三(ミイ)——四(ヨー)…』を繰返す。そして被術者の手の振動するまでこれを繼續する。一たび被術者の手が振動して來ると、審神者はいよ〳〵神懸りの始まつて來た兆侯だと鑑定する。そして其の被術者に向つて徐々に樣々の問をかける。——

『一寸お伺ひいたしますが、お出ましになりました方はどなた樣で入られますか』とか、又は、

『貴方を此處へ引き寄せた方はどなた樣ですか』とか、或は又、

『お前に憑つてゐる者は何だ。お前の病氣を引起したものは何だ』とか、其時と場合の必要に應じて、いろいろな問を出すのである。其の時若し被術者の方で、『私は知りません』とか『分りません』とか答へたならば、審神者は更に被術者に向つて、

『自分の頭で答へてはいけない。自分は只單に傍觀して居れ』など〻云ふ。若し又被術者の方で何等の答もしない時には、審神者は更に被術者に向つて、

『ウシトラノコンジン』(艮の金神の義)と云ふ九語を、一語一語繰返させる。(これは單に緘默せる被術者に對する發語の誘導手段に過ぎないのだから、必ずしも此の九語に限らない。言葉は何と云はせても諧い。或は單に『聲は出る』と暗示するだけでもよいのであるが、こんな處にまでわざわざ教祖のお筆先に必ず出て來る『艮の金神』と云ふ言葉を撰擇して來て勿體付けた處は、何處までも無智な迷信者を有難がらせるやうに仕組が出來てゐる。)それから後、再び『ウーンウーン』と氣合をかけて、又『一(ヒト)——二(フタ)——三(ミイ)——四(ヨー)…』を繰返し、更に『貴方はどなたで入らせられますか。』『お前に憑いてゐる者は何者だ』などと問をかけると、精神統一の深くなつた被術者などは、或は『天狗』とか『白狐』とか云ひ出して來るのである。

讀者の中で、多少でも催眠心理を研究された方があるならば以上の記述を見たゞけでも、既に大本教の鎭魂歸神法なるものは、其の形式及び精神內容に於て、全然催眠術と同一のものであることを容易に理解されるであらう。卽ち(一)先づ被術者

を靜坐瞑目させて、或は厳かに氣合を注ぎ、或は靜に石笛を吹き、或は『一——二——三——四…』の神代言葉を一種の節調を附して幾度も繰返す等の如きは、かの舊式の催眠術に於て或は懐中時計の音を聞かせ、或は滴水の音を聞かせ、或は單調なる音樂、讀經等を聽かせなどして人を催眠狀態に導く（余はこれをかの凝視法に對して諦聽法と名づけてゐる）のと全く同理で、つまり被術者の聽覺に單調なる刺戟を與へて、虚心狀態又は催眠狀態を誘導するものである。次に（二）被術者の手が自然に振動して來るのは、これは生理的にも由るが主として心理的の原因に基く。生理的の方は話が少々面倒になつて、且つ此處には殆ど關係がないから省かう。心理的には、以前に他人の手の振動してゐるのを見た經驗や、若しくは人から其の事實を聞いたことなどが暗示となつて、觀念運動を誘發したのである。大本敎の信者達にも分るやうに今一度嚙みくだいて云ふならば、『此處に斯うして默坐して鎭魂式を受けてゐると、今に神樣か憑靈かゞ懸つて來て、自分の手が自然に動き出す』と、意識的に又は無意識的に思つてゐるから其の觀念が終に運動となつて現はれるのである。（無論觀念の弱い時には現はれないこともある）それは丁度天狗と云ふことを強く考へてゐると、いつか知らぬ間に額が仰向き、又何か胸に屈托があると、無意識に火箸で灰に其の事を書き記してゐるのと同理である。靜座法で身體が動搖するのも、法華の信者が題目と共に踊り出すのも皆同じである。大本敎の連中は自分達の鎭魂法だけを祭り上げて、靜坐法のフラ／＼踊りなど惡體をついてゐるが、靜坐法がフラ／＼踊りなら鎭魂法もフラ／＼踊りである。何も其の間に異つたところはない。此の如く萬事に只自分獨りだけをえらしとするのは、迷信者に共通な特徴であつて、大本敎の慣用語を借りて云ふなら、彼等の頭が既に一種の邪靈に憑かれてゐる證據である。而も此の邪靈はお手前の鎭魂歸神法では一向に退散しないのみか、益々增長するのだから始末にいけない。次に（三）被術者が審神者の問に應じて、『吾は白狐である』とか『天狗である』とか云ひ出すのは、これ又暗示に基く人格變換に外ならぬ。何が暗示かと云ふと、『人間には必ず憑物がある』とか、『病氣はすべて憑物の仕業だ』などゝ大袈裟に云ひ觸らしてゐる大本敎の根本的迷信が其の暗示になつてゐるのである。これを見て眞實の天狗や白狐の靈が出たなどゝ考ふるに至つては、最早正氣の沙汰ではない。これは單なる人格變換に過ぎない。其の證據は余が次節に於て說明を試みやうとする處である。

大本教の所謂憑靈

綾部滯在の第二日目の午後、余は初めて、例の八釜しい大本教の金龍殿に詣で丶、淺野文學士の講話の席に侍べつた。四十八疊敷の拜殿、正面は神壇になつてゐて、その前に卓子と黑板とが据ゑてある。神壇の上の欄間には、中央に大きな龍の畫、右には大本教信條、左には大本教信徒誓約を書いた細長い額が並んでゐて、左右の欄間にも『敬神尊皇愛國』『金輪王、』『天下布道、』『皇風度萬國、』『聖壽無疆』等の大きな諸額が懸けられてある。信條と信徒誓約の二額面は、莊重謹嚴の文字に滿ちてゐたが、畏れ多いから筆記して來ることを憚かつた。

參拜聽講者、男子は余を加へて三十餘名、女子は五六名であつた。是等の參拜者の大部分は、金龍殿の奥庭の方からぞろ〳〵と出て來た。宿舍めいたところがあるらしい。流石に天狗や狐狸、蛇、蟇等の亡者に憑かれてゐる人々だけあつて、顏色の惡いこと夥しい。中には思ひなしか、狐そつくりの面相をした者も三四人はあつた。

三時十五分淺野氏登壇、前日の講話の續きとして、大本教と他の教會との異なる點を、約九ケ條に分つて講演された。余は久し振りで學生の氣分になつて、其の要點をノートに一々書き取つた。九ケ條の要領は左の如くである。

（一）開祖が儼として生存し、毎日生きたる經典を出してゐること。（ところが大正七年十一月六日教祖は死んだ。そこで生きたる經典——即ちお筆先——も止んだ譯だ。）

（二）教主も盛に活動し、大本教の生きたる經典を百年千年の後までも繼續すること。（ところが近頃の『神靈界』に出てゐる『神諭』は大部分は二セ物である。これは次節で詳論する）

（三）神人合一して仕事をして行くこと。

（四）神界に於ても人界に於ても、常に實行の中心點たること

（五）かんながらの道を實現すること。

（六）天下の諸教說を取つて歸一すること。

（七）世界大家族制度の組織を編制すること。

（八）土地の占有を撤廢すること。

（九）神及び神界に對する觀念が他教と大に異なること。

中にも神界の組織に至つては、淺野氏の講話が細に涉り微を極め、殆ど見て來たやうな話であつたが、固より荒唐無稽で、玆に批評の限りではない。

右の講話は、三時十五分から四時五十五分まで續いた。それが終つて、愈々例の鎭魂歸神法が始まつた。

約四十人の參拜者が、各自に適宜の間隔を置いて、八人づ丶五列に座を占めた。審神者は總て丶五六名。一人一列を監督す

る。余は獨り列をはなれて傍観者の位置を取つた。續て淺野氏の石笛で鎮魂法が初まる。審神者は何れも眞紅になつて、ウーン、ウーンと氣合を入れて、それから例のヒト、フタ、ミー、ヨー、の神代音を始める。暫くして被術者の手があちこちで顫動する。それを見ると審神者は、手の動いてゐる人の前まで行つて、更に氣合を入れ直し、ヒト、フタ、ミー、ヨーを繰返し頻りに被術者を追究して、憑物の正體を現出せしめようと努力するが、生憎憑物は一人も出ない。大本教の持論によると、人間には必ず何か憑物――正靈か、邪靈か、守護神か、狐狸の靈か――が憑いてゐるのである。そして其の憑物は、神授の秘法たる鎮魂歸神法に由ると、必ず發現すると云ふことである。さすれば此處に並み居る四十人が四十人共、皆何等かの憑物を現出しなければならぬ筈だ。然るに此の有様は何事であらう。審神者が焦れば焦るほど、益々憑物は引込んでゐるではないか。狐そつくりの面相をした被術者でさへ、まだ其の正體を現はさずにゐる。此處に至つては、神授の秘法も實に拙劣極まるものだと云はざるを得ない。――若し余をして此際審神者たらしめば、大きなことを云ふやうだが、余は是等の四十人中の確かに半數までは、忽ち人格變換を喚起させて、狐でも狸でも、餘でも、鼬でも、何でも信者の所望通りの憑物を、現出させて見せることが、出來たであらう。

大本教の審神者達は、自ら催眠術を行つてゐながら、催眠術だと云ふことを知らない。却つて神授の秘法だなど〻云つて威張り散らしてゐる。從つて彼等は、催眠心理の智識などは鵜の毛も持たない。此處に於てか、いつまでも斯う云ふ拙劣な技術を繰返して、あたら神授の秘法も物笑ひの種に委せられるのである。

專門に亘つた話は成るべく避けたい積りであつたが、話の順序としてつい云はなければならなくなつた。大本教の審神者達は、被術者の手さへ顫動すると、それでもう神懸りが始まつたのだから、憑物はすぐ出るものと心得てゐるやうだが、これは極めて淺はかな考へである。勿論多勢の信者の中には、暗示感受性が非常に强く、容易に人格變換を起して、鎮魂式を受けるや否や、忽ち猛烈に其の所謂憑物を現出する者もあらう。又一人が容易く憑物を現出したがために、其の現象が忽ち滿座に感染して、多勢の被術者が片つ端からとん〳〵拍子に憑物を現出することもあらう。否それどころか、未だ鎮魂式を受けざるに先だち、審神者の顏を見ただけで、既に人格變換を起すものも

若干はあるに相違ない。こんなことは催眠術に於ては有勝ちのことである。けれどもこれを以てすべての場合を律しようとするのは、偶々以て自己の無識を表白するに過ぎない。即ち余が列座した日の鎭魂式のやうに、何等の獲物をも得ることとなくして、ベッの惡い光景を演ずることが多いのである。

暫く專門的の話に入るが、同じく被術者の手が顫動したからとて、其人の精神狀態は決して一樣でない。單に淺微な虛心狀態の者もあらうし、又非常に深度の催眠狀態の者もある。手の顫へるのは、極めて淺い狀態に於ても現はれる現象だが、憑物の飛び出す人格變換はずつと深い狀態でなければ出ない現象である。人或は、被術者がまだ眼も閉ぢないのに直ぐ憑物が饒舌り出したから、決して深い狀態ではないと云つたり、又自分の本來の意識は明瞭であるのに、腹の底から知らず〳〵憑物の言葉か咽喉にこみ上げて來るから、自分は決して催眠狀態でもない。憑物と自分とは全然別物だなど丶主張する者もあるやうだが、共に催眠心理を知らぬ者の言である。暗示感受性の強烈な人なら、倏忽の間に、而も開目のま丶でも非常に深い催眠狀態に入ることが出來るし、之と反對に、暗示感受性の微弱な人ならば、百時間かゝつても、極めて淺い虛心狀態を逡巡してゐるだけに止まる。又自分の意識の鮮明不鮮明は、決して催眠の淺深の尺度にはならぬものである。こんなことを委しく云つてゐると、一部の著述を要することになるから、好い加減にして先に進まう。

右の如くだから、單に手が顫動し始めたからとて決して直ぐ人格變換が行へるとは限らぬ。心理的には其間に餘程の間隔が横はる。此の間隔は學者に由つて種々に分類されてゐるが、余は便宜上これを七階段に分けてゐる。さうして、たとへ一度には人格變換の現はれない人でも、ある方法に由り右の七階段を一段一段と催眠の深さを進めて、漸次に第七段目まで誘導する時は、的確に人格變換を起させることが出來るのである。故に若し大本敎の審神者にして此の原理に通曉する人があるなら、今少しは手際よく被術者の憑物を活躍させて、一層多數の信者を集め得たに相違ないのである。尤も斯うなると、彼等が今まで眞實の憑物だと信じてゐたのが、單なる暗示に基く人格變換だと云ふことが明瞭に判るから、世界の大立替が始まる前に、先づ彼等の思想の立替が始まつて、少くとも良心の麻痺しない者なら、終には尻に帆をかけて綾部を逃げ出さなければならなくなるであらう。

丁度此處に適切な實例が一つ現ばれた。右の鎭魂法が始まつてから約廿四五分も經つて、余はもう憑物の光景は終に見られないものと、内心大に失望してゐると、後れ馳せに野狐が一匹飛び出した。それは淺野氏の審神に依つて、漸く正體を現はしたのである。余は其時の被術者と審神者との問答を、一句も漏らさず、ちやんとノートに取つて置いた。

被術者は前列から二列目の余に近い側の方に座つてゐた廿一二歳の男子であつた。先刻から頻りに手が顫動してゐるので、既に二三度も他の審神者に依つて詰問されたのであつたが、此時まで尻尾を見せなかつたのである。

淺野氏は先づ斯う切り出した。

「お前には何が憑つてゐるか？」

被術者の答へがない。淺野氏は例の發語の誘導法として、『ウシトラノコンジン』を云はせる。被術者が微かなる聲音でそれを繰返す。

淺野氏、更に出直して、

「お前には何か憑つてゐる者があるだらう。有るなら有ると云へ。さあ早く云へ。」

此時被術者、「ア……ル」と微かに答ふ。手が顫へながら答へるのだから、其の聲も顫へる。

淺野氏は安心したかのやうに、而もまだ何處かに氣懸りがあるかのやうな淋しい笑を含んで、

「その者は何者だ。名があるだらう。」

「ア……ル」

「何と云ふものだ。狐か。」

「キ……ツ……ネ」

「さうか。何年前から憑つたのだ。」

「ヒ……チ……ネ……ン」

「狐の種類は何だ。野狐か。」

「ノ……ギ……ツ……ネ」

「身體はあるか。無いだらう」

「ナ……イ」

「さうだらう。何年前に死んだのだ。」

「ハ……チ……ネ……ン」

「新らしいな。此の身體の外に憑いた者は無いか。」

「ナ……イ」

「ぢや、死んで直ぐ此の身體に憑いたんだな。――病氣を起したことがあるか。」

「ア……ル」

「何病だ」

「シ……ン……ソ……ウ」

「馬鹿な奴だ。改心すれば許すが、改心せぬと許さぬぞ。」

「カ……イ……シ……ン……ス……ル」

「もう決して又と憑いてはならぬぞ。」

「ツ……カ……ナ……イ」

「よし、そんなら許してやる。さあ靜まれ！」

此處に於て被術者は沈默した。

多勢の審神者がウン／＼と唸つて、漸く狩り出されたのが此の野狐一匹であつた。泰山鳴動して鼠一匹とは此の事であらう。

未だ一度も異常な精神現象に出會つた事のない純粹の素人は、こんな現象を見ただけでも、或は驚くかも知れないが、少しく此の方面の智識を持つた者には、此の憑物は、決して眞の憑物ではなくて、單に暗示に由つて誘はれた人格變換に過ぎないことが、直ちに看破されるに相違ない。第一に、審神者が此際被術者に向つて投ずるところの問の言葉は、悉く誘導的若しくは教唆的であるごとに注意しなければならぬ。例へば、『何と云ふ者だ、狐か』と問へば『キツネ』と答へるし、『狐の種類は何だ、野狐か』と問ふから『ノギツネ』と答へる。其の外、『名は有るだらう。有るなら云へ』と問ふから『アル』と答へ、『身體は有るか、無いだらう』と問ふから『ナイ』と答へるやうなものである。斯る問の出し方は、問者に於て既に豫め相手の答語の內容を規定してゐるものであつて、余はこれを誘導的暗示若しくは教唆的暗示と名ける。故に若し此際此の同じ被術者に向つて、『いやお前の憑物は野狐ぢやない、天狗だらう』と云へば、必ず『テング』と答へるに定つてゐるし、更に又『いや天狗でもなかつた、狸だらう』と云へば、屹度又『タヌキ』と答へるに相違ないのである。即ち相手の憑物は、被術者の問の出し方一つに由つて、何にでも任意に移動させられるのである。これを見ても大本教などで信じてゐた憑物は、單に其人の精神作用だけであつて、決して他から狐だの、天狗だの、狸だのゝ靈が飛び込んで來てゐるものでないと云ふことが分るのである。

尤も中には審神者の問に反して、或ひは審神者がまだ問を出さないうちに、憑物自身が名乘を上げて、滔滔とまくし立てゝ來て、一見した處では如何しても眞正の憑物としか見えないやうなものもあるに相違ないが、それとても充分嚴密に精査して見れば、其の被術者が何等かの自己暗示又は他發暗示に由つて彼自身の精神作用でさう云ふ憑物を作り上げてゐるのであつて決して第三者が他から彼れの身體に入り込んで來たのでないと云ふことが、必ず實證され得るのである。

昔時人智のまだ開けなかつた時には、雷は雲の上で赤鬼が太鼓を叩いて駈け廻つてゐるもの、地震は地の底で大きな鯰が、頭を振つたり尻尾を動かしたりしてゐるものと信じてゐた。今でも田舍の山の中へ入つて行くと、爺さんや婆さんはまだ斯う

信じてゐる。又子供や田舍者が初めて蓄音機を聞いた時には、其れが機械の作用で聲を發するとはどうしても信ぜられず、恰度小さな人間が何處かに潜んでゐるに違ひないと思つて、喇叭の中を覗いて見たり、箱の中を探して見たりするものである。大本教の連中が、單に暗示で誘導され得る、十把一束げの平凡な人格變換の現象に驚いて、やれ狐が憑つたの狸が憑いたのと騒いでゐるのは、丁度子供や田舍者が地震や雷や蓄音機に對する考へと同一である。其無智に基づくことは云ふまでもない。

臺灣に旅行中なりし中村文學士歸京以來非常に多忙の爲め起稿の時を得ず止むなく同氏主宰變態心理に發表せられたる大本教研究中の一部を好個の資料として乞ふて抄載の快諾を得たり（編者）

新刊紹介

■**ロシア俚諺集**（昇曙夢氏編）ロシア國民の詩的創造力と華麗なる空想とは、ロシア文學の各方面に於て表明されて居るのであるが、就中俚諺に至りてはロシア國民の長き觀察と經驗より來れる眞理の表白であつて同時にロシアの民衆文學の中最も多く實世間的であり處世的である。從て本書はロシア國民の人生觀研究の好資料であると共に各自の處世訓として裨益する處が尠くない（定價金貳圓大倉書店發行）

■**謠曲名所めぐり**（谷口梨花氏著）旅行記者として有名なる氏が謠曲に歌れたる各名所を各線別に案內したものにして謠曲に趣味を有するものは勿論一般旅行家に採り興味ある讀ものである（定價金壹圓六拾錢博文館發行）

■**米國旅行案內**（上村知清氏著）著者は久しく北米の地にありて操觚の業に携りつゝありし人、其記す處懇切にして殊に桑港を中心とせる地方に於て最も詳說す、蓋し好個の旅行案內記たり（定價金貳圓參拾錢新光堂發行）

■**現世樂園**（高須梅溪著）是れ著者一流の叙情詩であり散文詩である、現世樂園、近松の女性、平家の女性、羅眞人の話、夜の五丈原、水都、銀の皿、渚澄山より、熱海の春夕、食後、春愁、太陽の子等、何れもとり〳〵に興味深く、詩趣溢るゝを覺ゆる、（定價金壹圓五拾錢麹町區飯田町一ノ二天祐社）

■**苦の世界**（宇野浩二著）大正八年中最も傑れたる作品として、「藏の中」と共に一躍筆者が文壇の檣に乗り出す動機となつたのは本篇である、其暢達せる筆致を以て、深刻に人生の一面を凝視しヒステリーの女主人公をして縦横自在に活躍せしむる筆者の手腕は、何と云つても最近文壇の一大收穫である、長篇三百頁に亘る、片々たる作品集と其選を異にしてゐる（定價金貳圓牛込區横寺町聚英閣）

■**クロポトキンの經濟學說**（中山啓譯）本書はクロポトキンの『田園・工場・製造所』の全譯で、クロポトキンの思想を最も具體的に代表するものである。クロポトキンの無政府主義思想は本書と『相互扶助論』とが二つの土臺石をなして、出來上つてゐるされば無政府共産主義を研究せんとするものは『相互扶助論』を讀むと共に、本書をも併せ讀まねばならぬ。產業社會が過化する結果共産主義が成立するを暗示したもので斯學唯一の著書と云つても良い。（定價金參圓八拾錢芝區三田書房）

■**この身のまゝを**（山中峰太郎氏著）獄を出て外數篇の著者最近の勞作を收めたるもの、再生の民が過去一年半に亘る特異の生活に對し、厳肅なる氣持ちを以て凝視せるところに強き何者かの暗示がある（定價貳圓八拾錢南北社發行）

■**奈落の人々**（和氣律次郎譯）野聲の呼聲の原著者として、最近著しく、我讀書界に知られたるジャツクロンドンの著を譯せるもの彼が倫敦のイースイ・エンドに入り込みドン底生活に親しみ乍ら現制度に對し鋭き批判を下せるものにして彼の著者中價値ある傑作である。（定價金壹圓五拾錢叢文閣發行）

■**ロシア革命實記**（茅原退二郎氏譯）トロツキイの著プレス・リトウスクに至る露西亞革命史の反譯にして、變轉極りなき露西亞革命の經過が面白く書かれて居る（定價壹圓六拾錢日本評論社發行）

■**指導能力と筋肉勞働**（宮地武夫氏譯）マロックの社會主義の檢討を譯したるものにして一讀すべき好資料たるを失はぬ。（定價金貳圓五拾錢佐藤出版部發行）

■**印度の佛教美術**（文學博士松本文三郎著）本書は印度に於ける佛教美術の變遷ではなく、寧ろ印度に創つた佛教藝術が如何に東洋諸國に渡來し、如何なる變化を蒙つたかを明かにしたもので、東洋藝術の淵源を究めんとする士は、必ず此に求めねばならぬ、先づ印度の政治社會及宗教を研究し、進んで建築、彫刻、繪畫の諸門に亘り、鮮麗なる寫眞入りにて詳細に說明して居る、此種研究の代表的著書として推すべきもの也（定價四圓小石川區原町丙午出版社）

■**古代希臘の思想と文藝**（文學士山原三郎氏著）歐洲の思想及文藝の源泉として、又猶太の宗教、羅馬の法律及亞剌比亞の科學と共に近世文化の四大要素として今尚世界を支配せる希臘の思想と文藝とを、眞摯なる態度にて史的研究を爲せるもの蓋し歐洲思想史研究の好資料たり。（定價金貳圓八拾錢博文館發行）

■**古代印度の傳說と神話**（文學士和田徹城氏著）傳說の寶庫とも謂ふべき古代印度に於ける神話と傳說とを蒐めたるもの、マハアバアラタ物語、不死の甘露、マヌと洪水以下何れも興味深き讀物である（定價壹圓八拾錢博文館發行）

■**改造の歐洲より**（加藤直士氏著）大阪每日及東京日日特派員として戰亂前より巴里會議終了に至る五ヶ年間歐洲に在り常に卓拔の觀察を以て淸新正確の報導を齎らせる氏が其兩紙上に發表する論文集にして必讀すべし（定價金貳圓五拾錢實業之日本社發行）

■**ラシヤメンの父**（鈴木泉三郎氏著）ラシヤメンの父、幸福、美しき白痴の死、敗れし騎士、群盲、八幡屋の娘の五篇の力作を蒐めたる氏の戲曲集なり（定價壹圓五拾錢玄文社發行）

■**爭鬪**（和多律次郎氏譯）ジョン・ゴルスウオーシイの戲曲爭鬪を譯せるもの、現世界の大なる惱みである勞働と資本との爭鬪に對し意味深き暗示を與へる（定價金壹圓四拾錢叢文閣）

■**改造中の歐洲を旅行して**（石川半山氏著）曩きに萬朝報記者として歐洲諸國を遍歷し其目擊せる氏の感想である（定價金壹圓五拾錢南北社發行）



社會講談
富藏の復讐

白柳秀湖

藤十郎の身邊に銳い町方の眼が光つて居ることは夢にも知らぬ唐草の富藏は、養父の太左衞門が老ひさらばへて加賀の淺香川に病むときき、三百兩の金を懷にすると其夜の中に江戶を立出で中仙道から信州路へと只管に途を急いで、加賀は百萬石のお城下へと志した。富藏が江戶を立つと間もなく尾張尾藤十郎は町奉行池田播磨守の手に捕へられ、吟味の結果、牛込見附の源吾殺しも、江戶城の金藏破りも自分の所爲に相違ないと、其犯罪の徑路を逐一白狀に及んだけれども、共犯者の詮議に對しては固く口を緘んで一言も發しない。其處で藤十郎は一時入牢を申付けられ、同類の檢擧には當時江戶で有名な坂本町の豐吉といふものが之に任じ、金藏付役人の屋敷に奉公をした仲間小者の身元、素性を仔細に取調べて見る、野州犬塚の産れで、永井主膳正の邸に奉公したことのある唐草の富藏といふものが怪しいといふことになり、段々と搜索の結果足がついて加賀の淺香川に於いて召捕りになるといふのであるが、本說には溯つて富藏の生ひ立ちから、彼が小山の牢内に於いて實父の仇討をするといふ一條を述べて見度いと思ふ。

（一）富藏の生ひ立ち

舞臺は二十年ほど後に戻つて、世は文政と云つた頃、下野國寒川郡小山在犬塚村といふ所に、太左衞門といふ博奕打の親分があつて、近郷近在に名を知られて居たが、此人至つて慈悲の心深く、寄邊なき不幸の人を憫み、懇ろに遠來の客をもてなし、堅氣の百姓、町人には毛筋ほどの迷惑もかけなかつたので、犬塚の親分、犬塚の太左衞門さんと持て囃され、近郷近在の人氣は素晴らしいものであつた。處が此太左衞門が或る日、所用あつて藤井村といふ所に行つた歸途、折からの吹雪に行惱んだ二十四五の若い小綺麗な女が、乳呑兒を懷に入れて、小橋の畔に倒れて居るのを見付け、介抱をして連れかへり、段々樣子をきくと、此女は江戸の淺草田原町三丁目に小間物問屋を渡世にして居る重助の女房おまつといふもので、その懷に抱いて居たのが、當時三歳の富藏であつた。富藏の實父重助は佐野に得意先があつて、度々江戸と佐野との間を往復して居たが、昨年の暮れ、取引のことで、佐野から二三ヶ所の得意先を廻つて來ると云つて家を出たぎり、何時まで待つても戻つて來ない。手紙を出しても、飛脚を出してもかいくれ行方が分らず、彼是一年足らず待ち暮したが何の便りもないので、もとより小さい小間物商人の資産と云つてはなし、女の手一つで店も張切れなくなつたので、家主と相談の上、店を疊んで夫の行方を尋ねようと、佐野の得意先といふのを目當てに、富藏を懷にして家をさまよひ出たとのことであつた。

太左衞門はおまつの身上話をきいてひどく氣の毒に感じ、親切に母子のものをいたはつて自分の家に止置き、子分を諸方に走らせ、重助の行方を尋ねることについていろ〳〵力をそへて見たが、佐野の得意先では重助がその年の暮れに掛金を受取つて歸つたといひ、受取りの證文などを出して見せたが、それ以上の消息は知れやうもない。兎角する中に一年二年は夢の如く消え、おまつも今は重助の無事について全く思ひあきらめねばならぬこと〻なつた。さうして、たよるべき親戚とてもない身の、年こそ違へ、いつとなしに太左衞門の面倒を見ること〻なつてしまつた。一たびは身を切るやうな日光颪に吹きさらされ、小山在の雪に踏迷つて、母もろとも路傍に凍え死なうとした富藏も、太左衞門の實父も及ばぬ溫情にはぐくまれて、何事も知らずにヌク〳〵と育つた。

（二）富藏の初戀

五年とゆき、十年と暮れて富藏もいつの間にやら立派な若いものになつた。太左衛門は我子にも增して富藏を可愛がり、遊人でこそあれ、元服をするまでには手習もさせる、劍術も仕込む、もとより利發者の富藏であるから、一を聞いて十を知り、太左衛門の志をついで、只管に我身の行ひを愼んだので、男振りはよし、氣前はよし、犬塚の若親分、犬塚の貸元と其人氣は、親の太左衛門にも增して素晴らしいものであつた。

處が犬塚村から二里半ばかり距てた藤井村といふ所に萬右衛門といふ素性のよくない貸元があつて、太左衛門の人氣を猜むこと甚しく、何とぞして太左衛門にケチを付け、その人氣を奪つてやらうと、久しく機會を覘つて居たが、太左衛門には苟めの隙もない。ちやうど富藏が十七の夏、藤井村に八幡の祭禮があつて、富藏が何心なく一人でそれに參詣すると、境内の水茶屋で計らずも萬右衛門と勘太といふ子分とに出會ひ、僅かなことを云ひがゝりに衆人環視の中で散散に辱しめられた。此勘太といふのはもと太左衛門の子分であつたが、おまつが太左衛門方に身を寄せると間もなく其色香に迷ひ、戀の叶はぬ意趣晴らしに太左衛門を捨てゝ、日頃から仲のよくない萬右衛門方に走つたものである。

富藏は辱められて仕返しの決心をした。平常から事を好まぬ太左衛門も富藏の心事を見拔いては壯烈な語を以て富藏を激勵した。富藏は、母と養父とにそれとなく永の暇乞をして勇ましく家を出た。さうして其夜、藤井村の觀音堂に萬右衛門と勘太との歸途を待ち伏せ、油斷を見濟まして、見事に二人を仕とめた。

處が、此觀音堂で富藏は計らずも宇都宮の呉服屋幸手屋幸兵衛といふものゝ一人娘おみねといふ美人が、小山の御用聞きで良民からゲジ〱のやうに嫌はれて居る、嘉藏といふものの爲に辱められやうとする所を救つた。おみねは八幡の祭りについて宇都宮から小山の親類、幸手屋茂兵衛方へ客に來て居たものである。萬右衛門と勘太とを手にかけて江戸へ走らうといふ富藏は、ちやうど幸ひと娘の手を取り、夜をこめて宇都宮まで落延び、無事に娘を幸手屋幸兵衛の手に

引渡した。

幸兵衛は娘の危難を救つて吳れた恩人富藏への義理立てに、萬右衛門一件の餘熱がさめるまでと、富藏を引とめて其奥座敷に匿つた。若い同志はいつしか戀に陷つておみねは只ならぬ身となつた。

小山の嘉藏は間もなく怨敵の富藏が宇都宮の幸手屋に匿はれて居ることを嗅ぎ付けた。八州警察の威光を笠に著る御用聞きに睨まれては、弱い町人の店は所詮行立たなかつた。小山の嘉藏は此手で宿々の町家を脅かし、容姿よき娘をあさつては幾人かその操を汚した。白羽の矢は幸手屋にも立つた。殊に富藏といふ怨敵を匿つて居るといふ惡しみが加はつては、その迫害が一層激しく且つ露骨であつた。

富藏は一夜、幸兵衛に訣別の意を告げた。幸兵衛は富藏の人となりを察し、其夜、更めて娘のおみねを富藏に妻はせた。富藏も幸兵衛の志に感じ、自身の素性を打明け、江戸へ出たら、それを機會に遊人の足を洗ひ、實父重助の志をついで立派な商人になり、其上でおみねを引取りますと盟ひ、すべてを幸兵衛に託し、夜のしら／＼明けに宇都宮を拔出した。おみねの愁歎はいふまでもない。幸兵衛は百兩の金を婿引出として富藏に餞した。

嘉藏の犬は早くも之を嗅ぎ知つた。富藏の提灯が宇都宮を離れて雀の宮の松並木に差かゝつた時、捕手は礫の如く前後左右から飛びかゝつて富藏を組伏せた。嘉藏は富藏の懷から百兩の旅費を奪つた後、怨敵として散々に辱めた。さうして萬右衛門殺しの罪を言立てに、ヂリ／＼と命を奪ふ目的で、小山の脇見與左衛門の假牢に抛込んでしまつた。

（三）不斷の戒嚴令

德川氏は江戸開府以來、關八州の警察には特に心を用ゐ、その將軍の直轄地であると、譜代大名の領地であるとに拘らず、一切の警察權をあげて勘定奉行の手に委ね、苟もお膝元の警察上、不穩である、危險であると睨んだものは理も非も言はせない。片端から縛り上げて牢に抛込んでしまつた。之を今日の語で申せば、關八州は戒嚴令不斷の施行地で

勘定奉行の手先といふものは、岡引、目あかしの末に至るまで、人民を威し付け、人民を縛り上げるのは將軍家の命令である。公方樣の御爲であるといふ考へを持つて居た。八州の手先にかゝつては何んな學者でも何んな辯者でも敵はない。辯解があるなら奉行所で申立てよ、己れ達は唯將軍家の命令によつて人を縛りさへすればよいのだ。縛つて牢內へ抛込さへすればよいのだと云ふ、之が江戶府內、及び八州警察の精神であつた。博徒、浪人、山賊、夜盜、如何なる命知らずのあぶれ者も御用の提灯の動く處、緋房の十手のきらめく處、頭へ上つて恐れおのゝいた。處が此八州警察の驚くべき權柄は、その手先となつて働く岡引、目あかしの徒によつて、逆に善良なる人民を苦しめるの具となつた。さうして其因襲の久しき、彼等下級警吏の殘忍性は實にパルチザン以上であつた。

殊に幕府の末に及んでは、此惡い習慣が段々に募つて、之等の下級警吏が、將軍の威光を笠に良民を苦しめたことゝいふものは實に非常なものであつた。それでも上に立つ役人は少しも此弊害を改めようとはしない。只モウ其日暮しと事勿れ主義で、人殺しでもあるとか、大名の長局へ泥棒でも這入るとかすると急に焦立つて加役を責める。加役は上役から叱られた腹立紛れに岡引を責める。岡引は御用聞きを呼んで當り散らすと云つたやうな譯で、平生無頓淡から袖の下を受けて榮耀榮華を極めて居る岡引どもは、ソレといつて急に手を下す譯にも行かない所から、罪も咎もない良民をフン縛つて拷問にかけ、無理非道の下に罪に落して自分の責任をのがれることばかり考へたものである。

それに此頃から長崎や、浦賀や、蝦夷へ時々黑船が現はれて世の中が何となく騷々しく、眞面目に日本の事を心配するものは、居ても起つても居られぬやうな心持ちで、何うしたら此國を夷狄の辱めから救ふことが出來ようかと、寄々意見を鬪はす眞面目な武士もないではなかつたが、上役人に於いては何うしたものか酷く之を忌み嫌ひ、右のやうな人柄の惡い岡引や、御用聞きに吩咐けて、蒼蠅く其擧動を注意させたものである。

處がもとより泥棒や巾着切りから上前をはねて、妾を圍つたり、贅澤をしてゐる加役や岡引のことであるから立派な學者でも、眞面目な武士でも見さかひはない。上役から何某を注意せよと云はるれば理も非もない。それは直ぐに謀叛

人であるとして、隨分理不盡な取扱ひ方をしたものである。それも正直に一生懸命で注意をし過ぎて間違が起つたといふなら未だしも、尊王攘夷を唱へる奴の取締りばかりは幾ら骨を折つても百にもならぬといふので、何うかして自分の受持區域からそれを追拂つてしまひ度いものと、それは〳〵さま〴〵な苦心をしたものである。

浪人なれば劍術の指南をして居るとか、軍學の教授をしてゐるとかいふ其出入先へ行つて、其處の迷惑になるやうなことをいふ。家主をおどかして店立てを食はせる　浪人は忽ち衣食の途を失つて、他に轉居をすると今度は又ぞろ其地の岡引が邪魔にして店立てを食はせる。一度彼等に睨まれたが最後、廣い世界に五尺の身體の置所がないといふ始末、昔の岡引、御用聞きなどいふものは斯ういふことをして善良な人民を苦しめたものである。富藏はそやつの甚だしいのに引かゝつた。

（四）犯罪の大學

不憫なのは富藏、是から足を洗つて堅氣な商賣人になり、實父重助の名跡を立てゝ、おみねにも安心をさせ、養父太左衛門にも御恩返しをしようと固く決心して、只管に道を急ぐ其途中、嘉藏の爲に捕へられて理も非もなしに小山の假牢へ投げ込まれてしまつた。

『旦那新入りで御座えやす。』

富藏は突込まれると暗い板の間に座つてゐた。亡者のやうな一人が、やゝ高い所に薄い蒲團を敷いて、その上に胡床をかいてゐる髯の茫々と生えた月代(さかやき)を長く延した、眼のギロリと光る見るからに恐ろしい男に向つて叮嚀に報告をする。

『さうか。何んな野郎だ。』

『へエ、未だカラツキシ若(わか)え野郎で御座えやす。』

『ソリヤ剛勢だ。若え野郎なりや活氣があつて、是から寒氣に向ふと足をぬくめて貰ふにも都合が好いや。それに二人きりぢや話も盡きて面白くねえ。』
『大きにさうで御座えやす……オイ新米!!』
『へエ。』
『之が此處の名主様だ。早く御挨拶を申上げろ。いろ〳〵御世話にならなきやならねえんだ。』
『へエ旦那!! 私は犬塚の富藏と申しまして此近在のものでございます。何うか宜しく御願ひ申します。』
『ウム、ヨシ〳〵却々好い男振りだナ、喰ひ込んだのは今度が初めてか。』
『初めてゞ御座います。何も存じませんから何うか宜しく御指圖を願ひます。』
『ナーニ之が江戸の大牢か何かで大勢居ちや些とばかり面倒だが、三人ばかりぢや何も云ふことはねえ、マア心安くして暮せよ。』
『有り難う存じます。』
『時に言ひおくれたが、己れは粟田の庄九郎と云つて上州のものだ。富藏とやら、手前も今から斯んな暗い所へ來るやうぢや、末頼母しいものだ。追つ付け好い惡黨になるだらう。早く出世をして仲間に兄イと立てられるやうになつたが好いぜ。』
『有り難う存じます。』
富藏は茲に始めて恐ろしい暗黑の世界を見た。さうして我ながら我運命の奇しきに驚いた。
『それから其處に居るのは鳥山の三吉と云つて、若えが却々イケ圖々しい野郎だ。』
『旦那!!戯言いつちやいけませんぜ、然う見えても私ア放火が二ツ三ツに、レコばかりです。旦那のやうに凄いんぢやありませんよ。』

三吉と呼ばれたのは、レコといひながら指で鍵を拵へて見せる。

『アハヽヽヽさう怒るな。マア何でも好いぢやねえか、新しいのが入りや世間の事が知れて恁んな樂しみなことはねえ、二人きりぢや話も盡きてしまつて、朝から晩まで互の面ばかり睨み合つてゐる。これもアンマリ好いものぢやねえからナア。』

富藏が入牢して二日目のことであつた。名主の庄九郎と島山の三吉とは、サモ待ち兼ねたといつたやうな調子で、交る〳〵富藏に世間話をせがんだ。

『富!!是から手前娑婆の話をして聞かすんだぜ。己達ア、モウ話の種が盡きて飽々してゐる所なんだ。』

『先づ聞き度えのは手前何うして喰ひ込んだ。優しい顏をして柄にもねえ惡い事をしたんだナ。』

『イヽエ、私ア別に惡い事つてした覺えはありませんが、此處の御用聞きをして居る嘉藏つてえ野郎に女の事で恨まれたんで……』

『ナニ女の事で……ウムそいつア面白さうだ、話せ〳〵。』

富藏は其處で一わたり養父太左衛門と、萬右衛門との睨合ひから、八幡祭りの夜、藤井村の觀音堂で、萬右衛門と子分の勘太とを斬つた經緯を話して聽かせると庄九郎は今更のやうに驚いて、

『面に似合はねえ、剛え事をしやがつたナア、併し手前その細腕でよくも二人まで遣付けやがつたナ。』

『ナーニ野郎共が喰ひ醉つて居やがつたもんですから、後から飛びかゝつて滅多斬りに遣付けてしまつたんです。』

三吉も今更のやうに驚いて、『それぢや手前は立派な兇状持ちだ。何うです旦那、恐ろしい度胸ぢやありませんか。此の分で行つたら今に好い惡黨になりませう。』

『却々油斷のならねえ靑二才だナア。それから何うした。』

『それから辻堂の所で一休みして居ると、其處へ十七八の縹緻の好い娘をフン縛つて猿轡を食ませ、それを引つ擔いで

來た奴があります。私がソツと見て居るとは知らず、二人の男は娘を其所へ下し、何かコソ〳〵話をして居ましたが、其内に一人の奴が親分を呼んで來ると云つて行つてしまひました。其親分といふのが私を愢んだ所へ抛込みやがつた小山の嘉藏の野郎で御座います。處がその一人の奴が嘉藏の所へ知らせに行つた留守中に、殘つた一人の奴が、親切ごかしに娘の縄を解き猿轡を外して、いたはつて居ましたが、其奴も太え野郎で、嘉藏を出し拔いてその娘をなぐさんで了はうとかゝりましたので……」

（五）色氣の話、食氣の話

かくて話が漸く佳境に入ると、二人はさながら飢えたものが食を求めるやうにして、それからそれへと際どい戀の徑路を尋ねるので、富藏もいつの間にか釣込まれて細かくおみねとのうれしい首尾を打明け、幸兵衛の情深い取扱ひから嘉藏の外道奴が邪魔に這入つた顛末まで殘らず話してきかせた。

すると、此時まで默つて凝乎ときいて居た梁田の庄九郎は、徐かに組んだ腕を解いて、

『ウム、始終の樣子は聞いて居たが、富藏なら年は若えし氣は利いて居るし、娘の惚れたといふのも嘘ぢやあるめえ。コリヤ大方娘の方から惚れたんだらう。』

『へ……何うも恐れ入ります。實は私も一旦は斷つたんですが……』

『富藏宜い加減にしねえか。』

三吉は口を入れた。庄九郎はなほ語を續けた。

『さうか。それぢや手前はその色の遺恨で嘉藏の野郎に叩き込まれたんだナ。さうすると此牢はチト長いかも知れねえぜ。』

『さうで御座います。今年ア、マア御牢内で暮すものとあきらめて居ります。』

『マア〳〵仕方がねえ。散々に娯みをした後だア。併し富藏や。』

『ヘエ。』

『好い氣になつてアンマリ人を殺すなよ。何でも人を殺すと長え正月が出來ねえから……』

『ヘエ、有り難う存じます。』

牢内ではモウ娑婆戀しの一點張り、それも落ちは大抵色氣か食氣かで、思ふ存分に女と食物の話をして憂さを晴らしてゐる。その中に段々日が短くなつて、四人には何よりも恐ろしい冬がやつて來た。

（六）冬來る、冬來る

十二月に入つては身を切るやうな日光おろしが遠慮なしに板の隙から吹込んで、牢内はさながら八寒地獄の苦しみ、三吉は庄九郎を犇と抱きかゝへ、富藏は裾から二人の足を暖めて三人が石のやうに固まつて寢るけれども、夜は恐ろしい寒さで、容易に眠られない。それに戀しい〳〵日の光は見ず、さらぬだに短い冬の日の此處では夜ばかりの世界に住むやうである。

『三吉今日は一體何日だつたナア。』

『何でも十二月の六日か、七日で御座えせう。』

『ア、モウ二十日ばかりで今年も暮れるか。チト新入りでもあれば好いがナア。久しぶりで娑婆の話でも聞きてえもんだ。』

其晩富藏は來し方、行末の事が氣にかゝつて何うしても眠られなかつた。ツイぞ氣にかけた事もない實父の顔が牢の小さい窓から中を覗き込んで居るやうな氣がして、不思議に胸騷ぎがした。

『何の馬鹿な、己れは三歳の時に親父に別れたまゝ顔も知らねえのに何で親父の顔が分るもんぢやねえ、假に今此處へ

迷つて出て來たとしてもそれが何の化物だか見分けがつくもんか。馬鹿々々しい。』

恁んな取り止めもないことを思ひ續けながらウト／＼としたかと思ふと、錐で揉まれるやうな恐ろしい寒さに夢も破られて、又、うつゝの我に返る。

『オヤおかしいぞ、又實父重助の夢を見た。夢は五臓の疲れといふが、見るなら犬塚の親父の夢か、宇都宮のアレの事でも見さうなものぢやねえか。それに今はマザ／＼と重助の顔を見た。如何に夢が取り止めもないとはいへ、何も三歳の時に分れた親父の顔を恁う度々見るといふのはチトおかしいぞ、それに、今見た親父の顔はマザ／＼と眼に殘つて居るオヽ氣味が惡い。アンナ顔で睨まれちや幾ら親父でもやり切れない。モウ間もなく夜があけるだらうから眠らないで居るとしよう。』

富藏は寒さと恐ろしさとに顫へながら、牢名主の足を抱へて、暗い窓の方を見まいと一心になつて羽目板の隅に身をかゞめた。

急に名主の庄九郎が何事かものにおびえてひどく魘され出した。ウーム、ウームとしきりにうなつて居たが、その苦しみ方があまり激しいので富藏はモウ默つて見て居られなくなつた。

『オイ兄イ!!烏山の兄イ、旦那がひどく魘されて居るぢやねえか。オイ兄イ!!』

富藏は先づ烏山の三吉を呼んだが何うしたものか、一向に返事がない。

『何うしたてえんだらう。アンナに眠られねえ／＼ツてコボして居た兄イが、今日に限つて死んだやうに寢て居らア。此寒さによくも寢られたもんだナア。』

とひとり言を云ひながら、富藏はムツクリと起きて庄九郎の枕もとへ廻り、

『旦那々々!!　名主さん!!　ひどく魘されるぢやありませんか。』

『ウーム、ウーム。』

『名主さん!!　氣をお付けなさい。ア、苦しさうに汗をビツショリかいて居なさる。』

庄九郎は漸くのことで氣が付いたらしく、寢返りを打つとモツクリ起上つて、

『ア、恐ろしい、富藏か。』

『ヘエ、アンマリ魘されてお居でなさるから一寸氣をつけてあげました。何か惡い夢でも御覧なすつたのですか。』

『ア、苦しい。何だか一向に取り止めもねえが、酷く苦しい夢を見た。』

『風邪を引いちやいけませんから、早く汗をお拭きなせえ。』

『オ、さうするとしよう。』

富藏は後へ廻り、お仕着せの袖で首筋の汗を拭いてやる。

『己ア今寢て居て囈語(うはこと)を云やしなかつたか。』

『只モウ魘されてお居でなすつたばかりで、何も仰しやつた様子は御座いません。』

『モウ直に夜が明けるだらうナ。』

『ヘエ、今しがた一番鷄が鳴いたやうで御座います、恁う寒くちや夜の明けるのが何よりの樂しみで御座いますナ。』

『さうよ。早く日の目を見度えものだ。何うだい。今日に限つて三吉の野郎はまた馬鹿によく寢て居くさるちやねえか。』

『ホントニさうで御座います。』

凍てつくやうな寺の鐘と一處に朝が來た。

『ア、有り難え、モウ明るくなるぞ。併しそれにしちや馬鹿に暗いちやねえか。富藏外(そと)を見ねえか。』

『宜しう御座います。オイ兄イ一寸肩を貸して呉んな。』

(七) 窓外は雪

窓から空は見えないが、天井と羽目の隙に少さい穴があつて、そこから宿場裏(しゆくばうら)の廣々とした野を見ることが出來る。三人は牢番の眼を盗んで、此處から交る〴〵青い草木や、青い空の色を覗くことを何よりの樂しみとしてゐる。光は人間の生みの親である。終始顏を見て居ては氣もつかぬが、一旦別れて會はれぬとなると何んな無知な人間でも馬鹿にそれが戀しくなる。

　富藏は例によつて三吉の肩車に乘つた。

『何うだい。好い天氣か。』

『ヤアいけねえ〱旦那!! 駄目で御座いますよ。』

『日は當りさうもねえか。』

『日が當る處か、今にもチラホラやつて來さうな空合で御座いますよ。』

『雪か。』

『ヘエ。オヤ!! ア、旦那!! モウ降つて居ますよ。』

　富藏はガッカリしたといつた樣な調子で三吉の肩から下りた。庄九郎は急に何か思出したやうに、

『時に三吉、今日は十二月の何日になるかナア。』

『ヘ、、、、旦那!!昨日も同じことお聽きになりましたねエ。十二月の六日か、七日で御座えますよ。』

『昨日きいたか知らねえが、昨日と今日ぢや百年も經つて居るやうな氣がすらア。富!!手前ハツキリしたことを知らねえか。』

『昨日牢番が、十二月の七日だと云つて居りましたから、今日は確かな處、十二月の八日で御座います。』

『ナニ、十二月の八日だと!!ヤッパり八日か……』

名主の庄九郎は驚いたやうに云つて天井を見つめた儘、ウームと押默つてしまつた。富藏は昨夜の魘され方といひ、今朝の様子といひ、庄九郎奴、餘程何うかして居やがる、少し變だワイと氣がついた。

『旦那!!十二月の八日なら何うかしましたのですか。』

『ナーニ何うもしやしねえが、今日はちやうど親父の命日だ。』

『さうで御座いますか。』

話はそれだけで濟んだが、午后になると粉雪は綿をむしつて投げるやうに大きくなつてポタリ〳〵と窓の格子に落ちて來た。

ヒユーと音がして日光颪が野を吹きまくると天井の隙から、白いものが、ヒラ〳〵と舞ひ込んで、冷めたいお仕着せの袖に消える。

『よく降るナア。』

『何うだい外の靜かなことは、此大雪で人ツ子一人通らねえと見え、宛然夜中のやうじやねえか。』

『ホントに寂しいナア。』

『何でも好いから早く春になつて欲しいものだが……』

三人は恁んなことを云ひながら脊中をピッタリと合せて、小鳥のやうにうづくまる、先刻から綿のやうに落ちる窓の雪をヂッと見つめて居た庄九郎はウッカリして

『雪の降り方までが、ちやうど恁んなだつた。』

と口走る。富藏は素早く聞き咎めて

『それは何時の事でございますか。名主さんエ、何でも面白い話があつたら、さう獨りで考へて居ねえで、聞かしてお

呉んなさい。』

『話しても好いが、恁んな日にや止しにしよう。』

『何故ですか。』

『だつてモウ直に日も暮れるし、第一寒くなつて仕方があるめえ。』

『イヽエ寒い方が結構です。手に汗を握るやうなお話でもきいて居たら此寒さが些とは凌げませう。』

三吉も賛成した。

『ホントにそれが好い。旦那には何か凄いことがありそうだ。チヤンと人相に出て居ます。』

『ナーニ手前達のいふほど凄いことをして來たといふ譯でもねえが、折角さういふなら寒さ凌ぎに一つ素敵に凄い話をしてやるとしようか。』

『何うぞ御願ひ申します。』

『ちやうど雪の降り方までが恁んな日で、而も十二月の八日であつた。』

『へエ。』

『今からちやうど十五年ばかり前に、中仙道鴻の巣の宿を立つて、雪の中をアノ熊谷堤にかゝつたことがある。その時は江戸から故郷の梁田へ歸る途中だ。』

庄九郎はしめやかに語り續けた。彼が住みなれた上州の梁田を見捨てゝ江戸へ高飛びしたのは、ちやうど二十三の春であつた。フトした博奕の間違ひから、一人二人に怪我を負はせ、仕方なしに江戸へ出て長屋の部屋に轉がつて居る中大層人に可愛がられ、段々梁田の兄イとか梁田の親分とか云はれる様になると、トン／＼拍子に好い目が出て五六百兩程も溜め込んだ。處が人間といふものは弱いもので、兎角故郷のことが忘じ難く、一度故郷へ錦を飾りたいと思つたまではよかつたが、何うせ國へ歸るならこの金を千と二千と纏まつたものにしたいと思つたのが間違ひで、折角溜めた其

金を一時にドッと取られてしまつた。而もそれがちやうど其年の暮であつた。仕方がないから明日まで二百兩貸して呉れと貸元へ申込むと、其時は彼も未だ親分で通つて居たから、貸元は何も云はずに貸して呉れた。取られた金を早く一時に取返したいものと今度はそれを一度に張つた處が、運悪く又きれいに取られて了つた。彼は茫然宿屋の部屋を出て途々考へて見たがモ何うにも恁うにも仕方がねえ。何うなるものか、此上は野宿をしても、一度故郷の梁田へ立歸り、又出直して運試しをしようと、僅か殘つた金を懐に其儘ブラリと江戸を出で、一日置いて、鴻の巣の宿へ着いたのがちやうど十二月の七日の夕方であつた。

「鴻の巣の岩井平九郎といふ宿屋へ泊つた處が、其晩からチラ〳〵降り出した。」

「雪ですかエ。」

「ウム、日も同じ、空合も同じだ。……ア、明日は雪の道を行かなけりやならねえと思つて居ると、其晩相宿になつたのが江戸は淺草の田原町の旅小間物屋の重助といふ男。」

「エツ、名主さん!!それぢや江戸淺草の旅小間物重助といふ人が、其夜の相宿で御座いましたか。」

富藏の顔色は變つた。

「ウム、富!!! 手前その重助てえのを知つて居るのか。」

「イエナニ、知つて居るといふ譯ぢやありませんが、アンマリ旦那の話が面白いので、ツイ實が入つてしまひました。オヽ寒い!!!」

「さうか、その重助といふのが江戸田原町で妻子もある。佐野の赤城の得意先へ、其前の年の夏から滯つてゐる掛金を取りにゆく途中サ。」

「ヘエ。成程。」

「すると其重助といふ奴が、此分ぢや明日は恐ろしい雪になるらしいが、何うか一處に行つてくれと云ふ、此方も寂し

いから丁度幸ひと二人連立つて鴻の巣の宿を立ち、やがてアノ熊谷の堤へ差しかゝつた。』

(八) 未だ見ぬ父親

日は暮れたが、外は雪明りで月夜のやうに明るい、寒さはヒシ〳〵と身にせまる。三人は石のやうに固くなつて、ピツタリと背中合せに坐つた。

『重助さん!!! 是から名高い熊谷堤だ、道が惡いから氣をつけて行きねえよと已れがいふと有り難う存じます。お蔭樣で思はず知らず足が進みます、旅は道連れといふのは此事で、此大雪に一人では却々歩けるものぢやありませんと云ひながら後からドボ〳〵とついて來た。』

富藏はヂツと眼を閉ぢて庄九郎の話をきゝながら、十五年以前、熊谷堤の雪の中をトボトボとして行惱んでゐる二人の旅人の姿を見た。さうして其一人は何時の間にか昨宵まぼろしのやうに暗の中に見た未だ見ぬ父の姿となつて現はれた。庄九郎は平氣で話をすゝめて居る。

『堤の中程まで來たかと思ふと急に風が吹き募つてヒユー〳〵といふ大吹雪、それが遠慮なしに笠の下から吹き込む寒さつたらない。オヽ寒いと云つて足も進み兼ねたる折も折、その重助といふ男が急にバツタリ雪の中に倒れてウームと苦しむ樣子、何うしたのだときくと寒さが餘りはげしいので持病の癪が起りましたと眼を白黑させてゐる。』

『難儀だナア』

『待ちねえよ。緣あつて恁う道連れになつたからにや、他人とは思はねえ。サア差し込む所は何處だ。押へてやらうとグツと懷へ手を差込むと途端にコツリと手に當つたのが蛇の蛙を呑んだやうな胴卷。』

『ウーム。』

『アヽ此金さへありやモウ一度江戸の長屋へ取つて返し、元の梁田の庄九郎で取られた金も取返すことが出來るかと思

へば、我にもあらず、その胴卷に手が掛つた。』

『成る程ナア。オイ富藏幾ら寒いたつてソンナ胴ぶるひをするねえ。景氣が惡いぢやねえか。』

三吉は庄九郎の話に合槌を打ちながら云つた。

『己れの方ぢや夢中で掴つたのだが、重助の方ぢや一生懸命だ。貴方何をなさいます。之は私の金ぢやございません。他の人から頼まれて佐野の赤城のお得意まで持つて行く金で御座いますといふから、イヤ重助さん決して騒ぎなさるな、己れは人の物をフン奪るやうなソンナ惡人ぢやねえ。濟まねえが些との間此金を己れに貸して呉んねえ。梁田の庄九郎ともあらう者が、今赤裸でふるへながら國へ歸るか、それとも立派に錦を飾るかといふ境目だ。何うか此庄九郎を生かすと思つて些との間何も云はず、此金を貸して呉んねえと事を分けて頼んで見たが、先は夢中で耳にも入れない。それぢや貴方は泥棒かと云やがつた其一言で、エヽ儘よ、モウ是までだといふ氣になつた。』

『へー。』

『手前の方から泥棒と云はれちやもう仕方がねえ。何うでも貸せねえ金ならば、殺してなりと借りて見せるからさう思へと腰の長脇差をスラリと引拔いた。』

暗くなるにつれて、雪は牡丹の花のやうに大きく、狹い扉の間から窓へポタリ〳〵と落ちかゝる。庄九郎は險しい眼を移して、物におびへるやうに一寸窓の外を見たが。

『降るは〳〵、ちやうど十五年前の今日の大雪と降方までが同じだ。ア、恐ろしい、アノ時のけしきが今眼の前に見えるやうだ……此方が拔いたのを見ると、重助の野郎奴、眞蒼になつてふるへ出し、ア、何うぞ御免なすつて下さいまし。江戸には女房もあり、可愛い盛りの悴も待つて居ります。それかと云つて人樣から預かつた此大金を何うして貴方にお渡し申すことが出來ませう。どうぞ不便だと思つて見遁して下さいましと掌を合せて拜みやがつた。』

『オヽ寒い。アンマリ寒いので首筋から雪の塊が飛込むやうな氣がします。ヤイ富藏!!! 手前モツト此方へ寄つて、名主

さんとピッタリ肩の合ふやうにして居ろ。』

『もとより脅す積りで拔いた脇差だ。重助の樣子を見ちや流石に不便と思はねでもなかつたが、莖を握つたからにや仕事をしねえ譯にやいかねえ。是でも金は貸せねえかと、型のやうに長いヤツを重助の鼻の先へグッと突出した。』

『へー。』

『處が素人といふものは仕方のねえものだ。刀を鼻の先へ突き付けられるとカッと逆せ上つてしまひ、アレーと黄色い聲をあげながら、夢中でソイツを摑みやがつた。而も兩手で力一ぱいにしがみ付きやがつたから己れも驚いた。ヤイ危ねえ。そんな事をしやがつて指が切れてしまふぢやねえかと云つてやり度いは山々だが、此方も凄く出た所だから、さうも云はれず、グッと引く機みに十本の指がバラバラと落ちてしまつた。アヽ今思出してもゾッとする。處が重助の野郎はモウ血迷つて居る。アレー、人殺しイと生姜のやうな手を振りあげて喚鳴りやがる。モウ恁うなつちや仕方がねえ。何うぞ勘忍してくんねえ、重助どんと、心で念佛を唱へながら大袈裟に浴せかけた。』

（九）懺悔の功徳か睡たい

小山の寺の鐘が、陰にこもつて遠く四ツを打つた。

『ホー、今日は雪の故か大變に鐘の鳴るのが遠いぢやねえか。モウ四ツだナ。剛勢話に實が入つた。何時になく眠氣がさして來たぞ。有り難え。牢內ぢや眠られるほどうれしい事はねえ。』

『アーお藤さんで私も今日は夜の更けるのを忘れました。聞いてゐてもゾク／＼する。富川どうだ面白い話ぢやねえか。』

『さうよナア。旦那え、面白いお話を聽かしてお與んなすつて有り難う存じます。』

『アハヽヽヽ、モウ恁んな話は止めよう／＼、何だか雪の降る日は陰氣でいけねえ……時に今日は不思議に睡たい

ナ。』

『ちや旦那早く横におなんなせえ。面白いお話を聴かして戴いたお禮に今日はミッチリ足を揉めませう。』

『さうか、それぢや濟まねえが、又裾へ廻つて貰ふとしようか。ア、睡い〳〵此寒いのに宛然引入れられるやうだ。久しく胸に疊んで置いたことをスッカリ懺悔してしまつた故かナア。』

『名主さん!!!　お風邪を召すといけませんよ。』

『ウム、手前達も風邪を引かねえやうに氣を付けろ!!!』

富藏は現在實父の仇の庄九郎を犇と抱きかゝへながら齒を喰ひしばつて口惜しさを怺へた。ア、恐ろしい事をしやがつた。シテ見ると己れの實父を殺したのは全く此庄九郎で、阿母が己れをかゝへて難儀をしたのも此奴の爲め、己れは未だ二つの時で實父の顏は知らねえが、昨宵からの夢見といひ、今又此奴の話といひ、こりやテッキリ實父の重助が行く所へ行かれねえで、迷つてゐるに違えねえ。ア、恐ろしい執念だ。ヨシ、今夜は寢息を窺つて、實父の無念を晴らさにや置かれねえ。然うして現在仇の足を揉めてゐるといふのも、今暫くの間だ。勘忍して下さい實父さんと心の中に念じながら、眠つたふりをして、夜の更けるのを待つて居る。

かくとは夢にも知らぬ梁田の庄九郎、今夜に限つて何うしたものかグウ〳〵と前後不覺に寢入つて居る、九ツの鐘をきいてムックリ頭を擡げた犬塚の富藏、ソッと四邊を見廻して獨言のやうに云つた。

『ア、寒いナア。雪といふ奴は何んな小さな穴からでも飛込んで來やがる。オーイ兄イ。烏山の兄イ。』

富藏は獨言のやうに云つて呼んで見たが返事がないので、今度は少し大きい聲で、

『三吉!!!　オー兄イ。』

『…………』

『よく寢て居やがるナア。名主さん、旦那ヱ。』

『…………』
『旦那!! 名主さん!!!』
『…………』
『ア、この寒さに二人ともよく寝てらア。』
と云ひながら、ソッと裾を這出した犬塚の富藏、十八才の若年ながら親の仇の庄九郎を絞め殺さうと、拔足差足二人の枕もとへ忍び寄らうとした時、煎餅蒲團に半分顏を埋めて居た烏山の三吉が、
『富!!……オイ富!!!』
流石の富藏もギョッとして立ちすくんでしまつた。
『誰だイ。』
『誰でもねえ三吉だ。』
『兄イお前今迄よく寢て居たぢやねえか。』
『馬鹿を云ふなイ。手前の樣子が變だから氣を付けて居た所なんだ。手前一體何をする氣だ。』
『何もするんぢやねえ。雪隱へ行く所だ。』
『嘘を吐け!!! 暗くたつて此三吉にやよく分るぞ。手前此名主をヤツ付けようてえんだらう。』
『ナニ!!!』
『さう騷ぐな。一寸耳を貸せ!!!』
烏山の三吉はコツソリ蒲團の中を拔出して富藏の傍へ寄り、耳へ口を寄せて小聲になり、
『先刻名主から熊谷堤の一件をきいた時、手前後向きになつてゐてコツソリ淚を押へて居たらう。己アそれをチラと見て、へ、アこりやテツキリ譯があると睨んで居た。重助といふナア手前の實父と承知したが何うだ富藏!!!』

『ウム三吉!!! お前にさう覺られたからにゃ仕方がねえ。小間物屋の重助と云ふナア全く已れの實父で、三歳の時に別れた切り、碌々顔も知らねえんだが、此野郎奴、問はず語りにスッカリ白状してしまやがつた。』

『ウム、已れも此奴ア餘程の惡黨だと思つて居た。けれども手前一人ぢやチット手に餘らア。已れが腕を貸してやるからヤッ付けろ!!!』

『ぢやお前、已れを助けてくれるといふのか。』

『袖振り合ふも他生の縁といふことがあらア、這入つて來た其時から妙に氣が合つて、何だか死別れた弟にでも會つて居るやうな氣がしてならなかつた。富!! 心配するな、烏山の三吉が引受けてキット本望遂げさせてやらア。』

『兄イ何にも云はねえ、コレだ。』

富藏は暗の中に掌を合せて三吉を拜んだ。さうして清い美しい涙がハラ〳〵と地獄の板の間に流れた。

友情は地獄のどん底にもあつた。

(十) 道中が物語

『富!!! 何を女々しい。泣いてゐる所ぢやねえ。手前早くお仕着せの袖を引裂いて首を縊めろ!!! 已らア力任せに野郎の睾丸を握つてやる。』

『ヨシ來た。』

十分に諜合せた二人は、やがて庄九郎の枕許と裾とに立分れ、ソレといふ聲を合圖に、富藏は首を縊める、三吉は睾丸を握り潰す。死んだやうになつて眠つて居た所であるから堪らない。梁田の庄九郎はウーームと虚空を掴んだまゝ眼を白黒させて、聲も立て得ず死んでしまつた。

『何うだ富藏!!!』

『お陰でうまく行つた。』

『己れのいふ通りにすりや造作はねえだらう。』

『ウム、思つたよりは樂だつた。併し此奴が起きてゐた日にや、却々己れ達が逆蜻蛉を切つたつて敵ひつこはねえんだ。寢て居るといふものはタアイないものだナア。』

『感心して居る所ぢやねえ。富!!! グズ〳〵して居て番人にでも見付かつちや形なしだ。サア、是から破牢の手傳ひをしろ!!! 己れがヤワな所をチャンと見付けて置いた。』

『合點だ。』

二人はそれから縁の下へ潜込んで便所の羽目板を剝がし、降りしきる雪に紛れて脇見與左衛門の役宅の高塀を乘越し、田と云はず、畑と云はず一目散に突切つて本街道へ飛出し、上州街道の追分まで來た時には寒さも何も忘れて、背中にはビツショリ汗をかいてゐた。

『サア富!!! 此所は上州街道の追分だ。』

『兄貴お前何方へ行く。』

『己らア是から上州へ出て信州路へかゝり、越後を廻つて餘熱(ほとぼり)の冷めた時分に歸つて來る積りだ。』

『さうか。己らア豫ての望みで江戸へ行く。』

『大切なお上の囚人を殺して破牢したと云やア罪が重い、輕くつて打首、尋常に行つても磔殺はきまつてらア。それにつけても富!!! 江戸へ行つたら氣を付けて隨分身體を大切にしろ、又ヘマな事をして喰ひ込んぢや詰らねえぜ。』

『分れに一杯やりてえ處だが、此場合仕方がねえ、兄貴!!! 己らアお前の親切は忘れねえよ。』

『泣くない。富や、何でも命は大切だぞ。命があつたら又遇はれらア。』

『ア、、それぢや是で分れるとしようか。』

『達者で暮せ!!!。』

『兄貴!!! 道中が物騒だから氣をつけて行きなせえ。』强盜、殺人、破獄の大惡人にもその道中に物騒はあつた。



お七吉三

村松梢風

一

吉三郎は、願行寺門前の八百屋の前迄來た時、ふとある事を思ひ出した。

其の界隈は、此の春丸山本妙寺から出た火事ですつかり燒き拂はれた以來まだほんとに家が建ち揃つてゐなかつた。普請の出來上つた家が、五六軒も續いてゐるかと思ふと、大勢職人がは入つて建て前を急いでゐる家がある。さうかと思ふと、未だに板圍ひの儘抛つてある處などもあつた。だから何んだか町に落ち着きがないのだが、其の代り何處となしから活氣付いてゐた。

しかし、吉三郎の頭にはなんにもそんな感じは無かつた。彼はその時迄ほんとにぼんやりして歩いてゐたのだつた。藍微塵の袷を着て平絎の帶を腰つ骨のところで結んで、着物と同じ色けの少し荒い辨慶縞の襟の擦れた袢纒を引つ掛けてゐたが、何んだか其の容子が寒さうな恰好だつた。彼は一遍其の前を通り過ぎやうとしたのを又後戻りして、兩方の拳を懷へ入れて野藏を拵らへながら、一寸體を前屈みにして八百屋の店の奥の方を覗き込んで見た。店には小僧が一人床几に腰を掛けてゐるだけだつた。『一寸寄つて見ようかしら』と吉三郎は思つた。吉祥寺の門番をしてゐる彼の親父の引きで、彼は此の春から半歳ばかり小石川の圓乘寺といふ寺へ庭男に住み込んで働いてゐたのだつた。すると、火事で燒け出された此の八百屋の家族が矢張り、其の寺へ來てゐたので、彼は皆と懇意になつた。此家の主の太郎兵衛と圓乘寺の住職とは、可成り近い俗緣の間柄だといふ事だつた。

『今日は。皆さんお内かね』と、彼は小僧に向つて慣れ慣れしく聲を掛けた。だが、それは新規に置れた小僧と見えて彼の識らない顏だつた。

『旦那もおかみさんもお留守です』と、小僧は起ちもせずに言つた。

『ぢやあ何は…お七さんはおいでなさるかへ』

『お孃さんなら内にゐますが、何か御用ですか』風體が惡いからだらう、小僧なりにも迂散臭さうな眼つきをして、無愛想な言ひ方をするのだつた。

吉三郎は一寸忌ま〳〵しい氣持がしたが、相手が小僧だと思ふと張り合ひ拔けがして、態とにこ〳〵して見せた。

『さうか、ぢやあお七さんにちよいとお目に掛かつて行かうかな』

彼はかう言つて小僧には眼を與れずズン〳〵八百屋の店へ這入つて行つた。小僧は默つて彼の姿を見てゐた。土間が裏口迄拔けてゐて、店と奥との境には暖簾が掛かつてゐた。其處へ來てから初めて吉三郎は懐から手を出して、片方の手で暖簾を拂ひ上げるやうにしながら這入つた。茶の間の長火鉢の側に、お七が向うむきに坐つてゐた。彼女は何か考へ事でもしてゐると見えて火鉢の緣に肱を掛けてぼんやりした容子で、人の這入つて來たのも氣が付かなかつた。黄八丈の着物の襟の中から、結綿に髮を上げた人形の首のやうに華車なのがぬけ出して少し右の方へ傾いてゐた。紅い帶の端が二つ、だらりと垂れて疊の上を這つてゐた。

『美しいな』吉三郎はさう思つて何時迄も眺めてゐたいやうな氣がした。

『もし、御免なせへまし』

彼がかう聲を掛けると、お七はおどかされたやうに後を振り向いた。彼女は、一寸見た時は吉三郎を見忘れてでもゐるやうだつたが、直ぐ

『おや。吉三さんぢやないの』と向き直つてにつこり笑ひながら言つた。

『へい、吉三で御座えます。どうも暫らくで御座いましたね』と吉三郎は小腰を屈めて言つた。

『ほんとにお久し振りですねえ』お七は自分の敷いてゐた座布團を裏返して夫れへ出して『まあお掛けなさいまし』

『有難う御座んす、なにね、お前を通りましたから、小僧さんに訊いて見ると旦那もおかみさんもお留守だと言ふから、夫れ

ちやあお嬢さんにだけもちよいとお目に掛かつて行かうと思ひましてね』

『さうですか、まあよく寄つてお呉んなすつたこと。兎に角お掛けなさいましな』

『ちやあ、ちよいとお邪魔をさして頂きませうか』

　吉三郎は座布團を脇へ押し除けて上り端へ腰を卸した。お七は莨盆へ火を入れて遣つたり、出殻の番茶を汲んで出したりした。

『どうぞお構ひ下さいますな。』吉三郎は懐から莨入れを出して一ぷく吸ひ付けながらジロ／＼家の中を見廻して『どうも結構な御普請ですな、木口は良し間取りは良し……お宅様なざあ十分な事がお出來なさるから。是れが眞個の焼け肥りといふやつで、お住まひなさるにも嘸氣持が宜ろしいでせう』

『いいえ、家ぢや餘所様のやうに構はない方ですから。それにね、裏の方なぞは藏でも何でもまだ半分しか出來て居ないんですから、汚くて仕方がありません。でもお父つあんはあの通り呑氣な人ですから、來年の事にしやうつて言つてるんです』

『左様ですか。なに、物さいあれア普請なぞは何時でも出來る事ですから』と言つて吉三郎は卑しく追従笑ひをした。

　お七はふと思ひ出したやうに

『吉三さん、お前近頃何處においでなの？』

『あつしですか。圓乘寺からお暇を頂きましてからずつと親父の處に居候をして居りやすが、どうも旨え仕事が無くて困りやしたよ』

『さう？　でも圓乘寺へは偶には行くだらうね。』

『へい、葬ひでもある時にやあ手傳ひに行きやすよ。』

　圓乘寺といふ言葉から吉三郎は直ぐに他の事を聯想して眼で笑ひながら

『お嬢さんは、圓乘寺へはしよつちうお出掛けで御座んせうね』

『いいえ、あたし家へ歸つて來てから一遍も行かないの』

『へえー。何故入らつしやらないんです？』

『でも、お父つあんが遣つて呉れないんですもの――』

　とお七は何故だか溜め息をつくやうに言ひ方をした。吉三郎には其の譯が分つてゐるから可笑しくて仕方がなかつた。彼は一寸此の娘に揶揄つて見たいやうな氣持になつた。

『さうですかい……それぢやあ嘸向う様でも焦れておいでなさるだらう――』

『おや、向うの人つて誰れの事？』お七は脅やかされたやうな

眼付をして吉三郎の顔を見た。

『誰れつて、極つてるぢやあ有りませんか。いくらお前さんが綺麗だつてそんなに幾たりも待つてる人は有りやあしますめへ』

『あれさ、あたしには、何の事だか解らないんだもの――』

『ぢやあ申しますよ。宜敷う御座んすか。そら、お小姓の山田佐兵衛さんが、嘸お前さんに會ひたがつてゐるだらうと言ふ事さ』と、吉三郎はずばりと言つて、ニタニタと笑つた。

『まあ――』

とお七は急所を突かれたやうにまご／＼して、眞紅な顔をした。そして、意地の悪い吉三郎の視線がじつと自分に灑がれてゐるのに氣が付くと、兩方の袖で顔を覆つて遁げやうとして起ち掛けた。吉三郎は兩方の手を長く前へ差し伸べて、『まあ／＼』と言つたやうに押し止めながら、

『何もお隱しなさる事アありませんよ。あつしあ圓乘寺にゐた時分、疾うから氣が付いて居りやしたのさ。だが、誰れにも喋りやあしませんから御安心なせえまし。』

お七は遁げる譯にもいかなくなつて、默つて下を向いて袂の端を拈つて見たり、掌を擦り合はせて見たりしてゐた。耳が、陽を受けたやうに紅く燃えてゐた。顔を見ただけでは、十五歳の娘らしい初々しさだが、胸だの腿のあたりの肉の張りが、一人前の女を思はせるのだつた。吉三郎は、ふと妙に唆られるやうな氣持になつた。

『吉三さん、お前佐兵衛様にお目に掛る事があるの？』お七はチラッと吉三郎の顔を見て言つた、

『へい。圓乘寺へ行けばちよい／＼お顔は見るんですがね……ねえ、お嬢さん、若し山田さんに御用がおあんなさるなら、何時でもあつしがお使を致しやすよ。何も御遠慮なさるにやあ及びませんからね』と、吉三郎は頼母しさうに言つた。

『さう――？』お七は暫らく躊躇してゐた末に『あの、あたしあの方に手紙を差し上げ度いと思ふんですが、お前屆けてお呉れだらうか？』

『お易い事です。そんな事で御座えましたら、今日直ぐにも行つて參りまさあ。何んなら此處に待つて居りやすから、今直ぐに手紙をお書きなせえまし』

『さう……。でも何んだかお氣の毒ですから』

『そんな御斟酌が要るものですか、どうせ遊んでゐる躰で御座えますもの』

『ちやあ吉三さん、濟まないけれど一寸待つて下さいな、直ぐですから』

『さあ〳〵御綴りお書きなせえまし』

お七は急に元氣づいた顏をして、イソ〳〵した容子で奥の間へ行つた。吉三郎は其の姿を見送つてゐたが、ペロリと舌を出して首をすくめた。

『馬鹿にしてやがる』と彼は聞えないやうに呟いた。それでも是れでまづなにがしかの小遣錢に有り付いたと思ふと有難かつた。まつたく、此の頃のやうに霜枯れて來ては、百の錢でも飛び付き度いやうな氣になる。此の間細川の部屋で取られたのがケチの付き始めで、ブマの仕通しだ。もう七八日といふもの碌に酒の匂ひも嗅いだ事がない。酒どころか、浮つかりすると莨さへのめない始末だ。『貧乏人の悴にや生まれたくないものだ』と彼は毎でも思ふ。奥の間で手紙を書いてゐるお七の姿が眼さきにチラ付いた。けれども、それはどうも仕樣の無いもののやうな氣がした。『色氣よりやあ慾が先きだ――』彼は所在無さに莨を喫かしながら取り留めの無い考に耽つてゐた。

『どうもお待たせ致しました』と言つてお七が戻つて來た。

吉三郎は漸く眼が醒めたやうな氣持になつて、煙管をポンと叩いて莨入れを懷へねぢ込んだ。

『お出來になりやしたかね』と彼は愛相笑ひをして迎へた。

お七は、顏を紅らめて逡巡しながら吉三郎の側へすり寄つて來て、書いて來た文を袂から出した。

『ぢやあ、吃度お頼み申しますよ。あの……是はほんの尠しですけど』

かう言つて、今度は帶の間から紙に拈つた物を撮み出して、文と一緒に吉三郎の手に渡した。

『濟みませんねえ、そんな御心配に預かつちやあ――だが、折角ですから頂戴致しやせうよ』

吉三郎は手の上の重味を引いて見ながら、うはの空でかう言つた。

二

吉三郎は、錢が無くなると八百屋へ出掛けて行つてお七から幾許か取つた。そして、其の文を圓乘寺の山田左兵衛に屆けてやると、又向うからも幾許か與れた。

『飛んだ旨い錢儲けをめつけたわい』と彼は思つた。

けども、そうして取る錢だけでは、一度か二度酒を呑むと直

無くなつてしまつた。そして、不相變一文無しでゐる日の方が大部分だつた。正月が來ても、それは同じ事だつた。否、寧ろ其の狀態は去年よりもずつと惡くなつて來た。といふ譯は、彼の親父が暮れからずつと引き續いて疝氣で床に就いてゐるからだつた。無論ふだんだつて、寺の門番風情の親父をいたぶつた處で高の知れた事だし、だから親父の處は、いつも錢の無い時だけ轉がり込んで寢泊りする場所に極めてゐるのだが、それでも親は馬鹿なものだ、何の彼のと小言は言ふやうなものの、飯時が來れば飯を食はして呉れるし、偶には煙草錢くらゐの强請りもきいたのだつたが、此の頃のやうな有樣では全くどうにも仕方が無い。お袋は彼が幼少の時分に死んで夫れ以來後添ひも無く、又彼の外には子といふものを持たぬ親父は、こんな時悴以外に世話をして貰ふ可き身寄りも無いのだつた。處が其の吉三郎が近頃一向寄り付かないので、門前の花屋の婆さんや娘の厄介になつて親父は寢てゐるのだつた。『そんな處へ歸つて行つたつて仕方が無い。又、一文無しぢやあ歸れもしない』と、吉三郎は煎餅布團に包まつて寢てゐる齡寄つた親父の姿を眼に浮かべては思ふのだつた。

『何かで、みつちり錢を儲け度いものだ――』と、彼はしよつちう考へた。

が、そんな旨い仕事は何處を探したつて轉がつてゐさうもなかつた。偶に小博奕でもして幾許か儲けることがあつても、そんな物は燒け石に水だつた。それでも儲かればいいが、大概取られる方が多かつた。で矢つ張り幾許かでも正確に錢になるといふ口は、八百屋の娘の色文の使ひをして遣る事だつた。しかし、其の八百屋の娘とても、高が十六の小娘の事だから、さうさう金を持つてゐる筈もなかつた。一番最初の時は、一分呉れて、其の後は毎も二朱づつだつたが、近頃ではどうかすると、一朱しか包んでない事がある。其の場で紙を開いて見て、中味が少いと彼は厭な顏をした。

『ねえお七さん。あつしだつて好き好んで色文の使ひ奴をする譯ぢやアありませんからね』なぞと彼はツケ〱厭味を言つた。

さうは言ふものの、相手が齡がいかないのだからどうも已むを得なかつた。『こんな事ぢやあ全く莫迦々々しい』と彼はしまひに考へて來た。

『だが待てよ。相手は何しろ今評判の小町娘だ。あれ程の娘の秘密を握つてゐて、而も是れ迄にして取り入つてもあるのだから、何んとか夫れを種にして大儲けの工夫がありさうなものだ

がなあ――』

彼は悪黨らしい氣持になつてさう考へて見た。

或日吉三郎はお七に向つてこんな事を言つた。

『もしお嬢さんへ、あなたは嘸山田さんに會ひ度いと思ひなさるだらうね』

『それあお目に掛かり度いのよ』と、近頃ではお七も羞かみもせず思ひ餘つてゐるやうな言ひ方をするのだつた。

『さうで御座んせうとも。あつしもね、どうかして一遍會はせて上げたいとは思つてるんだが、どうも是ればかしはあつしの力に及びませんのでね――。だが、山田さんの方でも頻りに會ひがたつてゐましたよ』

『まあ左兵衛様が、お前にそんな事仰しやつたの』

『へい、就いちやお可笑しな事があるんです。此間も山田さんが眞面目な顔をして、お七どのの家がもう一度火事で焼けて呉れればいいつて申した事です。なんと笑はせるぢやあ御座いませんか』

『おや、火事で焼ければ何故いいのだらう』

『何故つてあなた、お宅が火事に遇へば、又圓乘寺へお立退きになるでせう。さうなれば自由に會へるぢやあ御座いませんか』

『ほんとにさうですねえ。さう聞いて見れば、あたしも火事があればいいと思ひますよ――』

お七はかう言つて、そんな場合を空想してゐるやうな眼つきをした。

吉三郎はお七に會ふと火事の話ばかり聞かせた。何處其處の町が何軒焼けた事の、それが粗々火だとか、或ひは附け火だが下手人が出ないとか言つた風に――。さういふ話がお七の心を非常に強く動かしてゐた。最初のうちは單に架空的に我家の火事で焼けた場合を想像して見るに止どまつてゐたのが、此の頃ではさうした不慮の出來事を眞劍に期待してゐるらしい様子が吉三郎にはよく分つてゐた。そこで彼はかう言つてお七を説いた。

『ねえお嬢さん、當てもない火事をぺんぺんと待つてたつて仕方がありません。それより埒よく山田さんに會へる法をあつしが教へて上げませうか』

『それあどんな事するの？』

『どんな事つて……實あ大きな聲ぢやあ言へませんがね……あなたが御自分で此の家へ火を附けるんです。これさ……何も話しを聞いたぐらゐでそんなに驚くこたアありません。何知れつ

こありませんよ。もしも知れたら知れたで、あづしが罪を脊負つて出て上げまさあね、御安心なせへまし……ほら、裏に澤山鉋屑がありやせう、あれをためてウンと油を掛けてね、物干しへ登つてそいつを屋根裏へ突つ込んでちよいと火を付けるだけの事です、造作も無え事でさあ……それも大概お宅だけで揉み潰しちまふから、罪にあなりますめへよ。家なんて物は金さいあれば直ぐ新らしく出來るもんだから構ふもんですか。……ねえ悪い事あ言ひませんから、度胸をさだめてさうなせへましよ。約束した男に會ふために家を燒くんですもの。神樣だつて罸を當てる氣遣ひありませんからね……」

三

八百屋が火事だ――といふと、吉三郎は直ぐ樣驅け出した。まだ火は格別燃え上つてはゐなかつた。彼は八百屋の店へ飛び込んで行つた時、出遇頭に、太郎兵衛夫婦が各々大きな風呂敷包みをひつちよつて、娘の手を曳きながら奥からよろよろした足取りで出て來た。

『旦那、飛んだ事で。お手傳ひに參りやした』と、吉三郎は大きな聲で呶鳴つた。

『おう、吉三さんか、よく來てお呉んなすつた。何分お願み申します』

太郎兵衛は吉三郎の方に向つてかう言つて、慌てふためきながら娘と女房を引つ張り出すやうにして表の方へ飛び出した。お七は、擦れ違ひざまにチラと吉三郎の顔を見た。彼女は全く蒼白な顔をして、髪がこわれ掛けて、そして氣違ひのやうに上ずつた眼つきをしてゐた。そんな事には頓着なく、吉三郎は驀地に奥へ飛び込んで行つた。

茶の間でも座敷の方でも足の踏み場も無いくらゐ一面に物が散らばつてゐた。火が既に天井裏へ廻つたと見えて、大風の吹くやうな音が頭の上で聞こえて、處々から眞赤な焰がペロペロ燃え出したり、眞黒い煙が激しく渦を卷いて噴き出したりしてゐた。もう愚圖々々しては居られなかつた。吉三郎は咄嗟の間に其處ら中を見廻して、眞先きに日頃から眼を付けてゐた用簞笥に飛び掛かつた。大切な物は出して行つたと見えて、嚴丈な金具の附いた引き出しが殘らず引き抜かれてゐて、其の中の二つ三つは疊の上へ抛り出してあつた。それでも彼は念の爲めに片つ端から引き出しの中の物を疊の上へぶち撒けて改めて見た。すると、太郎兵衛が見落して行つたとみえて、一つの引き出し

を引つくり返した時、帳面だの反古のやうな物の下から、ずつしり重味のある大きな革財布が出て來た。『占めたッ』と彼は飛び上るやうに叫んで、それを懷へ捻ぢ込むが否や、今度は向きを變へて簞笥の方へ突進した。矢張り此の方の引き出しも亂暴に引つ張り出されて、目ぼしい品は持ち出されて餘程空虚になつてゐたが、殘つた物を彼は手當り次第に摑み出して有り合ふ風呂敷へウんと包み込んだ。其の時横鬢へ燒けるやうな風が吹つ掛けて來たので吃驚して頭の上を見ると、天井の眞中に大きな穴が明いて、其處から恐ろしい勢ひで火を噴き出してゐた。

『これつは堪まらない』彼は慌てふためいて風呂敷包みを首に掛けるとよろよろ蹣跚きながら二歩三歩あるき出したが、不圖、座敷の隅に脫ぎ捨ててある紅い派手な模様の衣類に眼を付けた。それはお七がふだんに着る長襦袢だつた。可成り古びてもゐたし、別段金目な物とも思はれないのに、何んと思つたか彼は驅け寄つてそれを拾ひ上げて小脇へ抱え込んで、表をさして走り出た。黑煙が背後から追つ掛けて來て彼の體を隱して仕舞つた。彼は煙に咽せながら、轉げたり這つたりして、漸うの事で店の方迄出て來た。

往來には、人や提灯が群がり集まつてゐた。屋根へ梯子を掛けて火消が猿のやうな敏捷さで登つて行つたりした。其の混雜の中を、吉三郎は突き當つたり突き飛ばされたりしがら一生懸命驅け拔けた。漸うすこし靜かになつたのでやれやれと思ふ途端に、今度は不意に向ふから澤山提灯が走つて來て、馬の蹄の音だの大勢の人の驅けて來る足音が高く響いた。其の名々の提灯に記された『御用』といふ字が眼に這入ると吉三郎は『はッ』とした、本能的に邊りを見廻して、とある家の軒下へ驅け込んで天水桶の蔭へ身を隱した。間もなく其の一隊が彼の前を通り過ぎようとした。

『止まれ』と馬上の人が高い聲で叫んだ。馬も、人も、ぴたりと足を停めた。

『彼處に怪しい者が居るやうぢや。取り調べて見い』と馬上の人は吉三郎の居る方へ提灯をさし向けて再び言つた。

徒の者が五六人バラバラと吉三郎の側へ馳せ寄つて來た。

『何者だ』

『へい、私は何も怪しい者ぢやあ御座いません。火事場の手傳ひに參つた者で御座ります、へい』と言ひながら吉三郎は蟇が這ひ出すやうな恰好をして天水桶の蔭から出た。

『怪しい者でない――？然らば何故御用の提灯を見て隱れたの

だ』
『いえ・・・決して隱れたのなんのと、そ、そんな譯ぢやあ御座いません。實は・・・餘り息切れがしてなりませんので、一寸此處で休むでゐたので御座ります』
『全體、其の荷物は何處迄持つて行くのだ』
『さ、是れは・・・その』
　吉三郎が返答に窮した様子を見ると、馬上の役人は鋭い調子で言つた。
『迂論な奴ぢや、召し捕りませい』
『御用だ、神妙に致せ！』と、捕手が二三人飛び掛かつて來た。
『め、滅相な、私は何も、惡い事をした覺えは御座いません』と、吉三郎は兩手を擧げて救ひを求めるやうな恰好をした。
　けれども捕手は用捨無く吉三郎を引つ捕へて、後手に縛り上げた。

四

　吉三郎は、盜賊改役中山勘解由の白洲へ引き出された。
『本郷駒込吉祥寺門番吉兵衛悴吉三郎、面を上げろ』
　さう言はれても吉三郎はもとのやうに頭を下げてゐた、が、相手の聲に依つて、今日自分を調べる役人は火事の晩馬上で見廻りに來た人と同じ人である事を知つた。それが中山勘解由だつた事も聞いてゐた。
『其方、去る正月廿八日の夜、本郷追分願行寺門前八百屋渡世太郎兵衛方へ付け火を致し、混雜に取り紛れ衣類金銀を盜み取つたに相違あるまい。現場に於て召し捕られし上からは如何程陳ずるとも無益ぢや。上に手數を掛けぬやう有體に白狀致せ』と奉行が言つた。
　彼は、今日迄にもう幾度びも與力の手で調べられたのだつた。其の都度彼は『火事場で盜みは致しましたが、付け火をした覺えは御座りませぬ』とばかり言ひ張つて來た。それが爲め、拷問にも數回掛けられた。然し、さういふ辯解が全く無益である事は彼にも分つて來た。何故かと言ふと、役人の方では一概に彼が付け火をしたものと信じ切つて居るのだし、又事實さう思はれるのが當然でもあるのだから、何れにしても眞の下手人が表へ出て來ない以上は、付け火をしたのが全く彼ではなかつたといふ事を證據立てる事が出來ないからだ。第一躰が續かない。白狀しなくともいい加減な時分に責め殺されてしまふ。・・・

然し、若し事實を白狀して見たところで、矢つ張り命は助からない。人を唆のかして付け火をさせた者は、付け火をした本人と同罪に行はれる事は無論である。おまけにさうなると、自分だけでなく、お七の命まで失くなるのだ『それではお七が可愛相だ』と彼は思つた。『私が付けましたと言つて仕舞へばお七は助かるのだから……』

美しいお七の顏が眼に浮んだ。それは彼が生まれて初めて經驗した懷かしいものだつた。お七の事を考へると、絶望的にいぢけて仕舞つてゐる彼の魂が柔らかな溫かい手で撫でられたやうにほのぼのとなつた。お七に對するさういふ感じは、牢獄の中で起き臥しをするやうになつてから初めて彼の意識に上つて來たのだつた。

『俺はお七に惚れてゐたのだ——』彼は初めて自身の眞個の心を掴んだやうな氣がした。彼はお七に對して非常な懷かしさを覺えた。そして、愛するもののために、自分の身を捧げて遣り度いやうな氣がした。

『然し、俺一人が罪を引き受けて死んでしまつたらあとはどうなるだらう。お七は誰れかの女房になるに極まつてゐるではないか。今度も家が焼けた後で八百屋の者は圓乘寺へ行つてゐるのかも知れない、そしてお七は戀ひ焦れてゐた山田といふ小姓に會つて、自分が付け火をした事も忘れて夢中になつてゐるのだかも知れない——』

かう思ふと、彼は直ぐに劇しい嫉妬を感じた。お七を、自分以外の男の手に殘して置いて、自分だけが死んで行く事はどうしても堪へられない事だつた。夫れくらゐならば寧ろ、どれ程お七には怨まれようとも、彼女をも自分と一緒に冥土へ連れて行つて仕舞ふ方が遙かに死後の滿足が得られさうな氣がした。

『どうしようか……』と、彼は最後迄思ひ惑つた。

『こりや吉三郎、何故速かに申し立てぬ。所詮遁れぬ處ぢや。又しても痛め吟味に及ばぬうち、潔く白狀致すが其方のためであらうぞ』と、奉行は諭すやうな調子で言つた。

『へい……今日はもう何も彼も申し上げて仕舞はふと思つて居りましたので。實は、私が……』と言ひ掛けて吉三郎は躊躇した。憐みを乞うてゐるやうなお七の顏が睫の先きに現はれてゐた。

『付け火を致せしに相違ないと申すか』

吉三郎の腦裡には暗黑な死後の世界が映つた。其處へたつた一人で行く寂しさを彼は思つた。

『いえ私が勸めましたので……火を付けたのは八百屋の娘のお七で御座ります』

と、吉三郎は言つて仕舞つた。さう言つて仕舞つた後で、彼は取り返しの付かぬ事をしたやうな氣持がしてワナ〳〵慄へ出した。

それから一時ばかり經つと吉三郎は再び白洲へ引き出された。すると其處へ、お七が父親の太郎兵衛だの町名主に附き添はれて這入つて來たのだつた。吉三郎は飢えて飛び付くやうな氣持でお七を見た。まるで死んだ人間のやうな顔をして、父親に助けられながら漸うの事で白洲へ這入つて來たお七の姿を見た時、彼は初めてお七を自分の物にして眺めたやうな氣がした。其の弱々しさが譬へよう無く美しさを增してゐるやうなお七の肉躰を、自分の意志の下に亡ぼしてしまふといふ事が、彼の胸に殘忍性を帶びた快感を喚り立てた。お七と一緒に殺される事を想像すると、恐ろしかつた死といふ事さへ何となく華やかな事のやうに感じられて來た。『是れ程の美しい女と一緒に殺されるのだつたら、死んでも少しも後悔する處は無い』と彼は心から思つた。

お七の調べは埒も無く濟んで仕舞つた。彼女は最初から唯おののいでゐるばかりで、奉行の訊問に對しても殆んど一言の答へも出なかつた。最後に、

『其方が付け火を致せしといふ事、確とそれに相違無いか』と奉行が念を押がすと

『は、はい……』とお七は絕え入るやうな聲で答へて、白洲の上へ泣き倒れた。

彼女は下役の者に手を執られて、口書へ爪印を捺した。

五

死の宣告を受けた後の吉三郎の心は不思議なくらゐ長閑だつた。娑婆に有つてゐた未練も、考へて見れば皆どうでもいい事のやうに思はれた。貧乏人の子に生まれて、物心が付き始めるから散々腹苦勞をして、漸と一人前になつた處でちつとも良い事が廻つて來るぢやあない。面白くも可笑しくもないのに人からは毛蟲のやうに嫌はれて、それで草履の切れつぱしみたいに安く扱はれて、何時迄娑婆を塞げてゐたつて仕方がない。どうせ一遍は死ぬ躰ぢやないかといふ氣になつた。とは言ふものの夫れも畢竟お七と一緒に死ねると思ふからだつた。お七と並ん

で火焙りになつたら江戸中どんなに評判をする事だらうと彼は思つた。極惡無道と罵られようが、人非人と蔑すまれやうが本望だ。さうして世間の奴等をあツと言はせて遣るだけでも小氣味がいい……。だが、お七は嘸自分を怨んでゐるだらう。幾ら怨まれたつて構はない。どれ程怨まうが、憎まうが、嫌はふがお七はもうこつちの物だ……。彼は。厭がる女を無理往生に捻ち伏せて仕舞つた時のやうな氣持がした。

吉三郎の魂は、暗欝な牢屋の中から舞ひ出して、お七の幻を相手に狂ひ廻つた。

或日、吉三郎は牢名主の口から意外な話を聞いた。それは斯ういふ次第だつた。

彼とお七の事件は今江戸中を震駭する程の大評判になつてゐるのだと牢名主は先づ言つた。そして誰一人としてお七に同情を寄せぬ者は無いのだとも言つた。處で、今度の調べの濟んだ後で中山勘解由から老中迄お七吉三郎兩名を火焙りに行ふ可き旨の伺ひ書を出した。老中方も、名々心中お七を憐んで助けて遣り度いと思つた事だが、一旦白狀した以上儼とした國法を曲げる事も出來まいと考へた。其の時、土井大炊頭利勝が中山勘解由を呼び出して、『古から今に至る迄、かゝる少女の火を付けた例は無い。大法を犯した者である以上如何にも火焙りは當然であらう。が、然し乍ら、萬一斯樣な事が國外へも聞こえるならば寔に我代の瑕瑾である。科人を庇ふ譯ではないが、斯かる少女を火焙りに行つたと言つては國の恥辱と心得る。就いては渠は十六歳と申したとの事であるが、萬一何かの誤りであつて寔は十五歳以下であるならば、罪を減じて遠島位に處するが至當であらうから、能く此の段を今一應吟味致させるが宜ろしからう』と言つた。奉行は委細畏つて退いたが、直ぐ樣お七の兩親や町名主其の他隣家の者等を役所へ呼び出して、お七の年齡に就いて申し誤りは無いかと言つて訊ねた。『お七が此の度の仕方を見るに誠に大人の心とは思はれぬ、大方子供心で前後の辨へ無く致した事であらう。本人は十六歳と申したが、能く〱有躰に申せ、大切の場合、其方共迄が公邊へ對し間違ひ或ひは僞りを申し立てるに於ては[illegible]庭曲事であらうぞ』と嚴しく言ふのだつた。

『恐れ入つて御座ります。如何にも仰せの通り實は此の女は當年十四歳で御座ります、其の仔細は、身分の輕い者の事故何方へか御奉公に差し出し度いと存じました[illegible]の少い者はお用ゐ

が無いと聞きまして、先般或るお邸へお目見得に出ました節殊更十六歳に相成るやう申立てました處から、此の度びも大方た樣なつもりで十六歳と申上げたので御座りませうが、全くは十四歳に相違御座りませぬと』一同の者が答へた。そして、人別帳にも確かに十四歳と認めてあると言つて町名主が保證したので、お七は輕い遠島位に行はれる事になつて、目下の處奉行の計らひで牢から出て、家老の中山獨といふ人の許に預けられて十分手當を加へられて居るといふのだつた。

『好い女にやあ兎角お慈みが掛かるものよ。それに引きかへ手前なんざあ何處迄も憎まれ役で、今に燒き殺されなきあならないのだが、自業自得たあ言ひながら考へて見れば莫迦氣た話だなあ』と最後に牢名主は恐れむやうな嘲けるやうな口振りで言ふのだつた。

其の話は、吉三郎に取つては晴天の霹靂にも等しかつた。お七が此の世へ生き殘つてゐるのに、自分一人が殺されてどうしよう。生活の目的を奪はれた人間に生の意義が無くなるが如くに、彼自身の死といふ事も、お七といふ相手を失つたら其處に何の意義も見出せなくなるのだ。

『お七を殺さないでどうするものか』彼は、お七を自分の思ひ通りにしなければ死んでも死に切れないと思つた。彼女に對する執着が強くなればなるほど、彼は一層執念深くさう思つた。

お七を再び死地に陷れて遣るには、彼女が確かに十五歳以上の女であるといふ證據を擧げて遣るに限ると彼は考へた。そして、彼は偶然或事を思ひ出した。彼は惡魔のやうな笑をもらした。

奉行の前へ出て彼はかう言つた。

『恐れ乍らお奉行樣へ伺ひます　同じ科人にお仕置に重い輕いのありますのはどういふ譯で御座りまするか？』

『それは其の方何を指して言ふのぢや』

『さればで御座ります。承はれば、此の度びお七ばかり罪をお免しなされますとの事、どういふ譯だか私には合點が參らぬので御座ります。──へん、お奉行樣だなんて御大層な事を言つたつて、美い女なら付け火をしても命を助けようと言ふんだから、依怙贔屓なものだなあ』

『默れ、不屆者めが。天下の御政道を預る奉行に何しに依怙の沙汰の有る可きか、汝如きに言ひ聞かすは無益に似たれど、これよつく聞け。七の命を免すは彼が未だ十五歳に達せぬからぢや。汝如き大惡人に騙されて我家へ火を付けしといふも、

子供心の愚かにて前後を辨へぬ所爲と申すもの、夫れ故御法に依て罪を減じられるのぢや』

『是れは又妙な事を承はりました。現在お七が當人の口から十六だと申して居りましたのに、何時の間に二つも三つも若くなつたので御座ります？』

『最初十六歳と申せしは誤りにて誠は十四歳であると、彼の兩親はじめ所の名主も申し立てて居るのぢやわい』

『はゝゝは、斯んな時親だの町内の人間の言ふ事が當てになるものぢやあ御座いません。たとへ誰れが何と申しましても、お七が確かに十六だといふ證據があるので御座ります』

『何證據がある？　然らば夫れを出して見よ』と奉行は浮つかり吊り込まれて言つた。

『宜敷う御座ります。では其の前に、谷中の感應寺にお七が上げた額が御座りますから夫れをお取り寄せが願ひ度う御座ります。』

直ぐ樣奉行所から感應寺へ人が走つて、其の額を白洲へ持つて來た。それはお七が十一歳の時、娘自慢の兩親がお七に書かせて上げた額であつた。額には「常在靈鷲山法華最大一」と認めてあつて、其の下に「延寶四年春二月本郷七女十一歳筆」と名前が入れてあつた。

『どうで御座ります？　延寶四年に十一歳の女なら、四五六七とそれから天和元二で都合六年、今年が丁度十六になる筈ぢやあ御座いませんか』と、吉三郎は態を見ろといふやうな顏をして言つた。

それから間もなく、お七吉三郎のふたりは同時に鈴ヶ森の刑場で火焙りの刑に行はれた。ふたり並んで高い柱の上にくゝし付けられて、めい〳〵の下には薪が山のやうに積み上げられた。

竹矢來の周圍には黒山のやうに見物が集まつてゐた。そして聲をあげて泣きわめいたり、口々に吉三郎を罵つたりして止まなかつた。然し吉三郎の耳には、そんなものは風の吹くほどにしか感じなかつた。裾の方から火が燃え上つて來始めた時、彼は一寸横を向いてお七の方を見た。お七の躰はすでに半分まで火炎に包まれてゐた。死無垢の死裝束を着て洗ひ髪をうしろに垂れてゐるお七の顏へ炎が紅く映つてゐた。それは彼が今迄見たお七の姿の中で一番美しいものだつた。吉三郎は滿足げな微笑を漏らして眼を閉ぢた。



一人の處女

德田秋聲

一

「お品ちやんを西山のお嫁さんに何うでせうか。」

原田が妻の辰子から、そんなことを言はれてゐたのは、大分前からのことであつたが、彼自身はちよつと其に乘りかねるやうな氣がしてゐたので、最初はたゞ「駄目だらう」と言つて取りあげやうともしなかつた。

勿論不幸な姪の品子を妻の辰子の弟に配することは、可也大きな問題について自己の意見らしいものを發表した彼女の殆んど初めての言でもあるうへに、始終心にかゝつてゐた自分の姪—引いては其の母である彼の姉に取つて、望んでもない幸運なので、彼としては彼女の意を了解しないではゐられなかつた。のみならず、提言に對して多少の感謝を拂はない譯にいかなかつた。彼女自身の目が年を取るにつれて、幾分周圍にも開けて來たのだとも感ぜられた。

辰子の弟の西山は、その頃も暫く東京に來てゐたが、二三日前にまた山國の寺へ歸つて行つた。十四の時、まだ肩揚のとれない少年であつた彼が、東京の或宗教大學附屬の中學へ來たのは十四五年も前のことであつたが、二三年以前此の大學を出る

と間もなく、突然師の死去に遭つて、急遽田舍へ歸つてから、寂しい山國の町を離れたところにある可也大きな其のお寺に坐ることになつた。寺に坐ることは、彼としては豫定の事實であつたが、何うかすると彼は自分の運命づけられた生活に不安を感じがちであつた。或期間は、そのお寺におさまる前に、もつと深い禪的修業と學問的研究に進みたい熱望が劇しく燃え立つてゐたが、或期間にはまた信仰心が動搖しはじめて、藝術や世間的な享樂の方へ氣分が傾いて行つた。勿論彼は盛大な入山式を擧げると同時に、寺格を進めたりなどして、年の少いにしては相當に事務的の才もあつたし、檀徒の崇敬をも得てゐた。たとひ宗教の社會的威力が疑はれるにしても、寺に坐つた以上は然うした方が何かにつけて便誼だと思はれたからであつたが、時とすると廣い禪房が堪へがたいほど鬱陶しいものに思はれた。彼は時とすると、二驛ほど先きにある繁華な町の方へ出て行つた。その町から然う遠くもない溫泉場の方へも遊びに行つた。さうして二三日酒の香などに親しんで、僧房へ歸ると、何かしら不安な苛責を感じて、急いで偶像の前に跪いたが、しかし僧院生活の寂しさと、青春の惱みは一層彼の氣分を憂鬱にした。

この頃も宗門の用事で、彼はしばらく東京へ出てゐたが、その序に自分の氣分を落着かせるやうな手廻りの道具や新刊の冊子、帽子とか外套とか、食料品だとかいふやうな物を買ひ調へた。田舍で聞かれない音樂をも聽いた。都會の酒の匂をも嗅いだ。しかし其のなかで最も痛切な用向きはといへば、彼は或人から周旋してもらふことになつた緣談についての見合といふことであつた。これまで彼は二度もそんな女を見た。彼の親類になる下町の方の或木綿問屋が見立てゝくれたのや、これも商人である彼の實兄夫婦が撰んでくれたのが其であつたが、前者は少し年を取りすぎてゐるので、取決めたあとで彼から拒絕し、後者は女の母親が遠い田舍へやることに不同意であつた。

今度も彼の希望は裏切られた。それは女が、寺と社會とを結びつけたり、周圍の敎化に働いたりしやうとしてゐる彼の新らしい企圖を助けるとか、又は相當に智識階級の多い檀徒の婦人連などゝ交際したりするには、餘り敎養がなさ過ぎるといふのも一つの不滿であつたが、それは彼の敎育によつて補ふことができるとしても、周旋者がまるで彼の結婚の

意味を理解してくれないことが、彼に厭氣を差させた。

「あゝいふ連中は駄目なもんですね。私たち若いものゝ氣持を少しも汲んでくれないで、何か物質的の慾望で女を誘引しやうとするのですから。」

彼はさういつて、滯留の少し長びいたことに悔ひと不安を感じながら、急いで歸山して行つたが、原田夫婦にも其の問題は、可也面倒なこととして考へられてゐた。で、最近に效性のない父を失つたりなどして、これも餘りに頼りにならない母親と途方にくれてゐるらしく想像される原田の姪の品子が、彼の配偶者として辰子によつて撰ばれた譯であつた。

「西山の考では、どうせさうちやんとした人が來さうな筈もないから、二三年東京で學校へも出したり、誰か佛教の方で人格のある人の宅にあづけて、宗教家の生活といふものを呑込ませてから結婚式を擧げたいといふのですから、品ちやんをもらふにしても、今が今といふことにはならないんですけれど、さうすれば品ちやんにも仕合せだらうと思ひますわ。」

さうして辰子は色々自分の思つてゐることを原田に話した。原田の姉―品子の母のためにも好いし、自分の子供たちの前途に取つても然うしておけば身内同志の弟夫婦に何かしら力になつてもらへるやうな氣がしてゐた。

しかし原田自身はまたこんなことをも思はずにゐられなかつた。經典が一科の學問として研究されるにしても、宗教としての佛教は次第に社會から離れて行かれるであらうし、數多い大きな伽藍もやがて廢滅の非運を見るであらう。そこからは萬分一にも新しい生命は湧き起らぬであらう。廣汎な佛教思想が學者の研究に可也大きな對象物として殘されるやうな、多くの古い寺院は建築や壁畫によつて、單に美術上の資料として、相當の有難味を保つに過ぎないであらうと。勿論それは今の結婚問題と結びつけて考へる必要のないことかも知れなかつたが、それにしても姪を田舍のお寺へやることには、彼女のためにも多少の不安があつたし、弟のためにも氣の毒のやうに感ぜられた。原田は子供の教育などについて、全然能力をかいでゐる姉夫婦の手に育つた姪を常々不憫に思つてはゐたが、それほどの自信がなかつた。

それで其の話はいつも其儘になつてゐたが、此頃になつて彼は遽かに乘出して來た。

或日原田は、可也前後を顧慮したのち、品子を上京させるやうに、姉へ手紙を書いた。「その後何う變つたか知らないが、縹緻は悪い方ぢやない。」原田はそんな事を言ひながら、二三年前に田舍で見た品子の様子を、說明したりなどした。

二

十一月の初めに、上京するといふ葉書が姉から來たので、その日に辰子は時間を見計つて、停車場へ迎へに行つた。勿論品子が來ることゝばかり信じて樂しんでゐた。

もう黃昏であつた。原田は結婚問題が何うなるにしても、この機會に唯一人の不幸な姉の娘である品子を東京に迎へることのできるのを、何かしら嬉しく思つてゐた。[illegible]弟に若も不適當なら、その時はまた自分の力で何等かの方針で、彼女の前途を拓いてやらうと考へてゐた。品子は彼女の父親に似て、切長な目と、締のいゝ口と、眞直な鼻とをもつてゐた。その上すらりとした背恰好でもあつた。去年の冬父が窒扶斯で死んだとき、原田は品子の暗い氣持のにじみ出たやうな手紙に接して、早速病院の費用などを送つてやつたが、母子の將來については、考慮を費す遑もなかつた。品子の一番の兄も其の次ぎの兄も、久しい以前原田の家へ來てゐて、一番目は一科の技術を習ひ、次ぎの兄は不幸な生理的缺陷のあるところから、原田が才能を愛してゐたにかゝはらず、長く傍におくこともできなかつた。彼等は懶墮な父親によつて殘された負債のために、長く住んで來た家からも離れなければならなかつた。品子は母と一緒に、父が以前傭はれてゐた家の分家に、結婚の面倒をも見るといふ親切な約束で引取られることになつたことは、原田の耳にも傳はつてゐた。原田が品子を呼寄せるのを躊躇したのも、その爲めであつた。しかし今はそこを出てゐた。

原田はまた四年前に喪つた娘の死によつて生じた家庭の大なる缺陷と、今も繪具か何かのにじんだやうに胸に殘つてゐる悲しみを、品子によつて幾分打消すことができるやうな感じがしてゐた。素質さへよければ、亡兒について考へ

てゐたものを、若しくは死んでから思ひついたものを、殘らず彼女に寄與しても惜しくはないとさへ思つた。

今彼はそんなことを心に描きながら、彼女が辰子と一緒に來るのを待つてゐた。緣の板敷に冬の日がてら〳〵と差してゐて、眞珠色をした空が、白い花の殘つた山茶花の枝葉の間から望まれた。すると十二時近い頃に、誰か玄關口へ入つて來る音がしたので、病氣でしばらく學校を休んでゐた女の子が出て行くと、誰か女の客らしいので、原田が机の前を離れて覗いてみると、それが姉であつた。原田は驚きの目を見張つた。

「あんた一人？」

「わたし一人や。」

「僕の手紙を見て。」

「それも見ました。」

二ツ三ツ語を交へてから、彼女は長い汽車の旅をして來た樣子もなく、バスケツトを一つ提げてさも氣輕さうに上つて來た。そして一別以來の口誼をお互に取交した。「僕は品子が一緒か一人かで來ることとばかり思つてゐたんだが、品子は何うして來なかつたんです。」原田は少し苛々した氣分で言つた。「そのこともお話せんと解りませんが、私の來たのは家に少し面倒なことが起つて……。」彼女は品子が一緒に來なかつたことについて、分明した辨明がしにくいと言つた風で幾分困惑の色を示したが、そんな事についてはとかく思慮のルーズに流れがちな性質なので、原田の其の場合の不滿を一層募らせるばかりであつた。

十四か五で慈愛ぶかい母や兄たちの傍を離れて、良人に寄りかゝり限りであつた彼女は、小さい時分に比較的しつかりしてゐた頭腦を何時か惡くしてゐた。その上最初の姙娠後健を害ねて、里親の家で預かつて、長く病院通ひをしたりしたことは、原田の記憶にも殘つてゐた。最近良人が職を離れてからも、家政や子女の教育などについて全然能力を欠いてゐるかと思はれるほど、意力自分一己の意志として何一つ働きかけたことはなかつた。物質上の打算などを曾てしたとの

ない大風な母親の手から極度に寛容な良人の手に渡されて、それなりに彼女はぼんやり年を取つて來た。原田には生活意識の希薄な其の人の好さが、自分の家で逢つてみると、また一層分明して來たやうに思れて、何かにつけて能く自我的な神經も働けば、氣力も俊烈な上の姉や、意地張の強かつた勝氣な妻などに比べて、何となく生温い春風が吹いてゐるやうな感じがした。彼はさういふ風で出て來た姉を妻に逢はせることを、さう不快には思はなかつた。

「それで其の事件といふのは。」

「哲二が少し不都合なことをしたのですがね。」

そして彼女は今西京にゐる二男が、親類の骨董品などを持出して行つたために、それの賠償について原田の力を假りに來たのだと云ふ事實を話した。弟嫁のないうちに、早くそれを話しておきたと云ふ風であつた。

「哲二はそんな事をするかね。」原田は失望の色を浮べながら呟いてゐた。

「それも私が惡いのですがね。たしかに幅物のあつたことは、京都へ歸る前の晩に荷造をしてゐたとき、ちらと見たのだけれど……。」

「何故それを咎めなかつたんかな。さういふとは子供のために反つて不親切になりますよ。」原田は言つたが、それ以上責めることは氣毒に思はれた。

「まあ然し可い。この話は何うにでもなる。」そして彼は金の額などを聞いた。

「哲二には此春、洋服がないので勤口が見つかつても出ることができないと言つて來たから、少し金を送つてやつたんだが……。」原田は獨語のやうに言つて「あれが好くなつてくれないでは、貴女も困るだらうと思つたからね。それに兄よりか才能もあるんだが、さう云ふ風では困るな。」

「何分少し情愛のない方さかえ。」

「それも躾方がわるかつたんだ。」原田は嘆息するやうに言つたが、彼の父の大酒飲の弟と共通點を、哲二がもつてゐる

やうにさへ思はれた。

「まあ然し、そんなとを云つたつて爲方がない。それよりも己は品子に用事があつたんだが……。」

そして原田はまた彼自身の用件を、さつと說明した。

姉は默つて聽いてゐた。

「それあ結構なお話やけれど。」

「どんな風かしら。しばらく見ないが……。」原田は首を傾げながら、品子の現狀について知らうとした。

彼女の話によると、最近品子も彼女自身も、引取られてゐた其の富豪の屋敷を出るまでに、可也複雜した事情があつた。しかし結局はその主人の夫人が、賣色あがりのヒステリーなので、主人が品子を愛すれば愛するほど、居づらくなつたと云ふやうな話であつた。

「貞二郎さんのお話では、お茶や花や、女に必要なことは一切仕込むから緣につかせるまで委してくれといふ事でしたけれど、居てみると矢張然ういふ譯にもいかんやうなことで、それも奥さんの身分が身分だから、僻みが强いからや。何しろ貞二郎さんも、今ではあの人を家に入れたのを、少し後悔してゐる風や。」

彼はそんな事を話した。原田は暗い目をしてゐた。そして「そんな風ぢや困るな。」と呟いてゐたが、そこに何か暗い蔭が品子にさしてゐるやうな氣がされなくもなかつた。

姉の話によると、その貞次郎の本家と、その又本家の男爵家で經營してゐる會社の實務に、主腦の一人として働いてゐる原田の兄の槇村夫婦に、品子は甚い憤りと詰責の辭を浴びせられたうへ、貞二郎の夫人から暇を貰つて、引退いたといふのであつたが、事件の內容は原田には分明しかねた。

「何か品子の品行について、兄の怒を買つたのかね。」

「さあそんな事はないやうや。」

そこへ辰子が晴々した顏をして歸つて來た。

「まあ、隨分搜しましたわ。」辰子は賑やかな聲を立てゝ座敷へ入つて來たが、同時に、「お品ちやんは何うなすつて？」

と、原田と姉の顏を見比べた。

「品子は來ないんだと。」

「おや、然うですか。」辰子はがつかりしたやうに、ぺたりと其處にすわつた。

三

原田夫婦は毎日品子の來るのを待つてゐた。原田は品子母子の同棲してゐる、品子の從兄（と言つても品子の叔父さんと言つた方が適當な年輩で）へあてゝ、品子を至急立たせるやうにと、手紙を書いたのであつた。

勿論其の手段を取る前に、品子の自決を促すべく彼女へも手紙を書いたのであつたが、品子からは其を拒んで來た。何故それを拒むかは、彼にも判りかねたが、最近哲二に言はれて、自分の生きる道を求めるべく京都へ出て行つて態々したことなどが、彼女の心を臆病にしたらしく想像された。

おかあさんは餘りお長いやうですが、用事がすみ次第早く歸つてきて下さい。松山でもみんな母さんの呑氣なのに驚いてゐますよ。

品子の手紙には、逆様にそんな督促がしてあつた。勿論東京へ出ることは、若し出るにしても、もつと後のことにしたいと言ふのであつた。

「をかしな奴だね。」原田は悟かしさうに言つてゐた。自分の意志のまゝになる筈であつた姪に――自分より外に、彼女について苦慮を費してゐるものもあらうとは思へない品子に、そんな蟠りがあるのが、じれつたくて爲方がなかつた。

彼は或日は妻とともに姉をつれて、淺草などへ遊びに行つたりした。横濱へもやつた。横濱には彼女の亡つた夫の弟

が、四五年前に大阪から移り住んでゐた。

「あゝ云ふ風だから、家にゐてもらつても可いんだけれど、あれぢや東京で暮せさうもないね。」原田は蔭で辰子と話した。

「姉さんが一番お氣の毒のやうですから、少しはお世話をしてあげても可いんですわ。ですけれど、こつちからお勸めして、それだけの事ができないやうだと困りますね。ほんとうに好い方ですね。私も何か貴方の古いものでもあげやうと思つてますけれど、姉さんのやうに身扮を構はないのも困るですね。あんな物を一つぶらんと提げてね。政一があのバスケットを見て、くす／＼笑つてゐるんですよ。」

そして彼女はその古いバスケットをもつて、姉の入つて來る樣子をしながら、一人で笑ひこけてゐた。

原田も爲方なしに笑つてゐたが、目に涙がにじんだ。

「着物はなか／＼物のいゝ糸織なんですけれど、羽織が承知しないんです。あれを反對にしたら何うでせうね。」

「さういふことは、まるで無頓着なんだね。親父（姉の良人）は身上のいゝ時代でも、ごつ／＼した木綿より外着なかつた。」

姉は横濱へ行つたきり、幾日も／＼歸つて來なかつた。それがまた原田の氣をいらつかせた。

「お品ちやんがその間に出てくるかも知れないから、着き次第横濱の番地だけ知らして下さいと、あれほどお願ひしておいたのにね。さう云ふことが、きちやんとしないやうですね。」辰子もさう言つてゐた。

すると其のうち葉書が來て、風邪を引いて少し長くなつたが、そのうち歸るからと云ふ彼女の義弟からの消息があつて、それから二三日たつて、其の家の細君に娘がついて、淺草などを見せてから、姉を送つて來た。原田はその人達に初めて顏を合した。のみならず姉の義弟とは、小い時から一二度逢つたきりであつた。彼は大阪で機械鍛冶の工場をもつて、可也有福に暮してゐたが、酒色のためなどで工場が荒れたところで、どこともなく姿を隱した。彼が横濱に於け

る居所の知れたのは、十年も經つてからであつた。眼鏡などをかけた。五十恰好の細君は、其の間生家へ歸つて三人の子供を育てながら、良人の居所の知れるのを待つてゐた苦勞談などを、瀟洒した調子で話してゐた。
「主人も一度お伺ひしたいと申してはをりますが、迚もお話が合はないだらうと申しまして……。」彼女は口を窄めて笑つた。
とにかく此の人によつて、其の一家が締括られてゐることは明かであつた。
辰子は心ばかりの款待をして、初對面の人達を寛がせやうと力めてゐた。原田は品子を呼寄せることについて少しばかり話をしかけたが、それは問題にならなかつた。
姉の一家のことについて、横濱で色々の話のあつたことを姉が話しだしたのは、母子の人達が歸つてからであつた。
「主人は私等に横濱へ來いといふのやけれど」姉は辰子に勸められて、皿に殘つた鮨などを食べながら言つた。
「兄の方も、礦山などにゐても爲方がないから、横濱へ來て、もつと收入の多いところへ勤めたら何うやと言ふのや。それに品子を一番目のお嫁にもらひたいといふ相談もありました。」
原田は妻と顏を見合せた。
「やつぱりね。」辰子は白けたやうな表情で呟いた。
「貴女は何と言つたんです。」原田は姉に訊いた。
「本人の心持一つだから、今が今お返辭をする譯にはいかんと言ふてはおいた。」
「僕の方で云々の話があると、其事を言つてなければよかつた。」
「けど、こちらの話も何うなるか判らんのやし、第一あの人達は餘り感心せん。」
そして彼女は其人達が、勞働者階級の親分株であることや、生活氣分の餘りお上品でないことなどを話した。
「お嫁にもらふ以上は、お化粧ばかりして遊んでゐられても困るから、やはり何處かへ勤めてもらふとにするとか言ふ

てやつた。それはそれでも可いけれど、人柄がちよつと下るやうで……。」

そして彼女はそん事を知りたがる辰子の問ひに答へて、暮し向きの様子や、子供たちの狀態を感じたまゝに報告してゐた。

それにしても姉の一家について、心から心配してくれるものは、彼等より外にないと思はれた。

四

品子の從兄にあてた原田の手紙によつて、品子の出て來たのは、それから三四日たつてからであつた。

或日の午前に、彼女は出迎へた母親と一緒に原田の部屋へ入つて來た。兩三年前に見たときよりは、又一層丈が伸びて、若竹のやうに手足がすらりとしてゐた。少し薄い髮を銀杏返しのやうなものに結つて、荒いお召の着物に羽織を着てゐた。

「お母さんが色々お世話になつて……。」品子はにこ〳〵してゐる、原田の前に無邪氣な仔馬のやうな風で、取飾りもなく挨拶した。勿論初めて見る叔母さんの方へもお辭儀をした。

その第一印象は、原田を可也な樂觀に導いた。のみならず彼は淡い一種の感激をさへ覺えた。たゞ頬骨が少し高いやうなのが、氣になるだけであつた。

「色だつて黝くはないぢやないか。」原田は辰子に言つた。

「え」と、辰子は寂しい微笑を浮べてゐたが、彼女にして見れば、原田が少し調子づいてゐるやうにも思はれたし、死んだ愛嬢のことをも想出さずにはゐられなかつた。

不思議なことには、少しおくれて入つて來た姉と一緒に、五ツばかりの女の子が、品子に呼ばれておづ〳〵入つて來たことであつた。

「これは何處の子？」原田は訊いた。

品子の說明によると、少女は原田が現に書信を往復した品子の從兄の細君の姉の子であつた。そして其の從兄の細君も細君の姉も、兩りながら品子の父の妹の子であつた。勿論從兄夫婦は近親結婚であつた。

「愛ちやんこゝへおいで。そして小父さんにお辭儀なさい。」品子はその子を劬はるやうに言つた。

愛ちやんはちよつと原田の前に坐つてお辭儀をしたが、母や兄弟たちの傍を離れて、遠い都會でこんな人達の家に客となつたことに、勿論何の懷しさも悅びをも感ずる筈がなかつた。で、泣きもしなかつたが、目には哀愁の影が見えた。

原田は少女の母や、その叉母をよく知つてゐた。家は以前、町で仲買などをしてゐたが、其後零落して少女の伯父は原田の家から神田の法律學校へ、最後の一年か一年半かを通つたこともあつた。總て誰によらず、前途をもつた若いものは、時日の長短こそあれ、大抵原田の家に足を止めた。原田は善く世話をしたといふ方ではなかつたけれど、それを拒みはしなかつた。可惜なことには、さう大した質の好いものがなかつた。それは確かにさうであつた。

原田は困惑を感じたが謎をかけられたやうに感じもした。

「何うしてそんな小いものなんか連れて來たんだ。」原田は詰るやうに訊いた。

品子はたゞ笑つてゐたが、姉も何にも言はずに部屋の入口に坐つてゐた。

「今度は品ちやんの一身上について相談があつて、それでわざ〳〵呼寄せたんだ。言はずとも知れたことだが、品ちやんももう十九だらう。」

品子は少し紅くなつて、やつぱり笑つてゐた。

「何の年です。」辰子が傍から訊いた。

品子は默つて俛いてゐた。

「十九だと寅かしら。」辰子は呟いてゐた。そして、「さう言へば姉さんも寅ですね。」

「え、二人とも。けれど私の寅は駄目や。」姉は言つてゐた。

「とにかく當分家にゐることにならうと思ふのに、そんな足手絡ひがあつては困るね。子供があつては其處からそこへも出られないからね。」

「さうですね」と、辰子も太息まじりに言つて、「お子さんが可哀さうですわ。家には子供が多勢あるから好いやうなもんですけれど、それでもお母さんの傍でなくちやね。」

「濱村につれて行きますから可うござんす。」品子は言つた。濱村は少女の伯父の家であつた。

「濱村だつて困るだらう。夜分に泣出しでもしたら何うするんだ。」

「濱村には此の子の從兄が一人來てゐるのやさかえ。」

そして品子は、原田が音信を往復した彼女の從兄の子が一人、近頃此濱村の方へもらはれて來てゐることを話した。

「それにしても、そんな小さいものを附けてよこした理由が解らんね。」原田は首を傾げた。

「眞實ですね。いくら汽車がたゞと言つて、ちと氣輕すぎましたね。」辰子も腑におちかねた風であつた。

「そんな譯ぢやないけれど、私もすぐ歸るつもりでしたから。」品子は困窘の科で、細長い手で髮を撫ぜなどしてゐた。

少女は品子にぴつたり寄添つて坐つたまゝ、比較的平氣でゐた。

「何うして今まで出遊つてゐたんだ。東京へ來るのが、何うしてさう厭だつたんだ。」原田は一氣に訊いた。

「厭といふわけぢやないけれど……。」

「それぢや手數をかけないで、早く出てこなくちや可けないぢやないか、伯父さんの家へ來るのに、誰も故障を言ふ筈もないんだからね。」

品子はやつぱり笑つてゐた。

「品ちやんも疲れたでせう。」辰子は傍から慰めるやうに言つて、「お話はまた寛りがよござんすよ。品ちやん彼方へ來ー

着物をおぬぎなさい。貴女もあすこでお遊びなさい。お友達が澤山ゐますよ。」と、子供を誘つて行つた。
品子も姉も次へ立つた。
「まあ何うしたと言ふんでせうねあんな小い子供なぞつれて來て。」辰子は氣の毒さうに笑つて「田舍の人つて、案外暢氣なものね。私には迚もできない。」
「爲方がない。」原田は苦笑を浮べながら、しかし元氣づいて、「西山へ早速電報を打たうぢやないか。出てくるやうに。多分氣に入るだらうと思ふ。」
「え、どうぞ……直ぐ出てくるでせうよ」と辰子は應へたが、原田が期待したほど彼女は調子づかなかつた。
原田にはそれが飽足りなかつた。
「で、お前はどう思ふ。」
「何をです。何う思ふつて、別に……大變結構ぢやありませんか。」
「けど、あれなら好いとか惡いとか。で、また、お前の考へ一つで……姉さんさへよければ可いと、西山も言つてゐたんだからね。」原田は少し焦燥氣味になつて來た。
「それあ然うですけれど、今初めて着いたばかしですもの。」辰子は薄笑をしてゐた。
「それあ然うだらうが、お前達が見て、餘り感服しないやうなら、西山を呼寄せる必要もあるまいと思ふから、訊くんだよ。」原田は押して言つた。
「私はいいと思ひますけれど、共にしてももつと何うかしなければね。何といつたつて樣子が田舍ですもの。」
「勿論さうさ。それに何一つ仕込んでもないんだし、なかなか容易ぢやないよ。相當に氣も利いてるやうに思つたけれど、それも何うだかな。物質上の事だけだつて大變なんだ。まさか西山に一切負擔させるといふ譯にもいかんのだらう。」

「それあ西山が持つと言つてゐました。けれど、品ちやんが行くと言ふか何うだか。まあ少し様子を見たら可いでせう。」

それで原田は時を移さず、西山へ電報を打つことにした。

五

原田は或日品子を傍へ呼んで、彼女の縁について概略話して聞せた。

原田は他の甥たちの場合にも、これまで然うであつたとほりに、品子をも辰子まかせにしてはおけなかつた。うまく氣に入ると好いのだが、ちよいとした氣持ばかりで……それは多智な彼女としては、可也鋭敏なもので、鋭い嗅覺か何かで物を嗅ぎ分けるやうな感覺的な慧さはもつてゐたが、根帶が淺いから間違ひ易い場合もあるので、若し氣に入らないとなると、お世辭にも好い顔をすることができないやうな性質の女なので、原田は始終不安を感じがちであつた。

勿論たゞ其だけのことで——謂はゞ彼女が「私あの子は氣に入つた」と言はないだけのことで、そしてそれには相當の理由もあることだつたが、原田は何となく辰子が品子を理解してくれないやうな氣がした。

辰子にしてみれば、品子を自分の手に投げかけておいて、原田自身は傍觀者の地位にあつて貰ひたかつた。さうしないと仕事が爲難いと云ふ氣がした。何か世帶のことを教へるにしても、原田が目をちろ／＼させて、品子をよりか寧ろ自分を監視してゐたのでは、氣がさして何にもできないと思はれた。原田がそれほど彼女を馬鹿にしてゐるとは思へないにしても、年を取るにつれて、原田が何かに氣のつくやうになつたことは爭はれなかつた。寛容にもなつたし、諦めの氣持も見えたが、それと同時に、辰子自身が總てを自分の考へどほりにすることが、何かひどく危險なことのやうに思はれた。子供の知識のめき／＼發達してくれることなど見聽きしてゐると、自分が今までやつて來たことの愚かしさが、可恐しいやうな氣がした。

しかし彼女はさう怖れてばかりもゐられなかつた。殊に品子のことなぞには、相當の自信も働いて、彼女は彼女なりに自分の氣持で、色々のことを考へてゐるらしかつた。原田もそれに異存はなかつた。日常のこま〳〵した實際的の仕事は、少しも頭腦の働かない姉の流義でやられては、迚も駄目だといふ氣がしてゐた。で、それ以上のことは、追々に吹込むとして差當り東京の家庭生活に順應することを心がけるやうに、品子にも話したほどであつたが、しかし辰子が何を分るものかと云ふ氣がしてゐた。品子にもつと現代人らしい智識と氣分を與へなければならないと思つた。藝術の端くれくらゐは分つておかせたいと云ふ氣がした。しかし其處まで引出すのは、生優しいことではなささうであつた。殊に現代の空氣の通つてゐない原田の郷里の町に育つて、碌々女學校の教育すら受けてゐないのみならず、周圍の世間とまるで沒交渉な地位におちてゐた家庭の空氣を吸つてゐた品子としては、若い女の自覺らしいもののある筈もなかつた。生活の壓迫とか孤獨の遣瀬なさは、本能的な彼女の不滿と悲哀であつても、それも然う失望的な煩悶とはなつてゐなかつた。原田は何だか道が遠いやうな氣が切にしてゐた。さう云ふ機緣が、寧ろありさうに思はれなかつた。しかし其にしても、彼女は隨分田舍育ちで普通感情の教養が幾んど缺けてゐるやうであつた。そんな點は或程度まで、辰子に委しておけると思つてゐたが、何うかすると、辰子に取仕切らせることを不快に思つた。

「私だつてまさかそんなに酷くしやしませんよ。」辰子は言つた。「ですけれど、さう〳〵はお客さま扱ひにもしておけないぢやありませんか。」

「勿論己もそれは分つてゐる。しかし馴れるまでさ。まだ氣分もおちついてゐないのに、遽に嫁を姑が扱ふやうにしては可けない。今のうちは、まあ精々機嫌を取つておくより外ない。」

「え、だから加減はしてゐるつもりなんですけれど。貴方が少し氣を揉みすぎるんです。私に委しておいて下さると可いんですけれど。」辰子は溜息まじりに言つた。

「けれどあの寂しいお寺へ行くものゝ身にもなつてなつて考へてみなければね。己にしても可哀さうだといふ氣もする

人間は生活の心配さへなければ、それで幸福といふものでないからな。」

「それあそれ處ぢやない。ですけれど、遠い外國へさへ行く人もあるんですから、まあ幸福な方かも知れませんわ。西山があんな風な男ですからきつと可愛がるに決まつてゐるんですもの。」

「あの寂しいところにゐれば、お互に頼りあふとになるのは當然だかね、慣れるまでが大變さ。我々の行つたのは、春か初夏だが冬を想像してごらん。」

「それあ然うですね。ぢや貴方は東京におきたいんですか。」

「まあそんな氣もするね。正直なところ。」原田は苦笑した。

「とにかく西山が來てからのことにしませう。」

「勿論さうだが、品子は何ういふ風だね。」

「厭だとは言はないんですよ。寂しいところは反つて好きだと言つてるくらゐですけれど、何でもこの間お寺でないといいけれど…と言つてゐたさうですよ。」

「それにこんな事は自分では容易に決定できることぢやないんだ。誰にしたつて迷ふのは當然だ。」

品子はその日も横濱から歸つてこなかつた。彼女は近頃少女を從兄の家へあづけに行つてから、中五六日ほどおいて、姉と一緒に横濱の伯父に遭ひに行つてゐた。横濱行については、原田は多少の不安も感じたが、「從兄妹同志の結婚なぞ厭だ」と、品子もさう言つてゐたし、姉もさう考へてゐた。

辰子は姉に原田の古い羽織を仕立直して、着せてやりなどした。半襟も似合ひさうな柄を見立てゝやつた。帶を黑繻子の細いのを締めさせた。

姉のと一緒に、品子の下駄や櫛やリボンなどを買つて來てやつたのは、彼女が來てから三四日してからであつたが、それを四疊半で裁縫にすわてゐる品子に見せると、「あら…どうも濟みません」と言つて目を潤ませてゐた。

「これは不斷にはいては可けないのよ。」辰子は彼女に言つた。

「家も子供が少ないと、何でもして上げられるんだけれど、然うもいきませんから、まあ一つ一つね。女が物持がよくないと駄目ね。」辰子はさうも言つてゐた。

　それに未だ當座など、辰子は品子を鏡臺の前にすわらせて、彼女の顔に似合ふと思つたやうに、髮を束髮に取あげてやつたり、白粉の刷き方を敎へたりした。原田が横から見てゐると、顔がぐつと引締つてお上品らしくなつた。ほんとうに下脹の好い顔だと思つた。

「女は作りやう一つね。私なぞ迚も駄目ですけれど、品ちやん自分で氣をつけて、外へ出たら餘所のお嬢さんの振を見て、自分で工夫おしなさい。お國の方は一向かまはないやうだけれど……。」

　品子は笑つてゐたが、さう嬉しさうにも見えなかつた。この頃も彼女は時々四疊半へ入つて、簞笥の前にすわりながら、物思ひに沈んでゐるやうなことがあつた。それに原田に女の兒があつても、想つたほどお互にさう睨みあひもしなかつた。さうした情感に缺けてゐるのではないかと、辰子は憂へてゐたりした。

「何だかお母さんを苛めてるやうでしたよ。」辰子はまた原田にそんな事を傳へた。

「お母さんはお母さんの用事で來たのに、何故早く歸らなかつたかと、そんな事を言つて怒つてゐるんですよ。姉さんは人がいゝんですね。やつぱりあれでは駄目ですわ。品ちやん少し我儘かも知れませんね。」

「姉にはね。第一親父が品子にかけては、目がなかつたんだから。」原田は分疏のやうに言つたが、「しかし何うして、姉にそんな小言を言ふだらう。やつぱり田舍へ歸りたいのかね。」

「さうかも知れませんね。」

「しかしお寺へ行くのは承知してゐると、姉も言つてるし、品子も少し好すぎると言つてゐたくらゐだからな。」原田はさうも言つたが、品子の氣持は彼自身にも、辰子にも解りかねた。

で原田も辰子も、とかく焦燥氣味な日を送りがちであつたが、彼はまたこんな事も考へた。彼女を引取つた鑛山主の分家にゐるうちに、何か不幸な出來事があつたのではないかと。しかし其は重大な貞操上のことで。そして其には、又それ相當の暗示もあつたのであつた。或時氣分の打釋けた品子の話によると、その主人と夫人とのあひだに始終爭鬪があつた。お氣に入りの品子は、奥の方に勤めてゐて、客の應對や、酒の酌などをしながら、それらの光景を絶へず目撃してゐた。

「それこそ好い小説ができるわ。」

そして彼女はその狀態を、可也面白可笑しく話した。機嫌の取りにくい夫人のところへは、始終夫人の昔し仲間の藝者たちや女將連が出入してゐるとか、主人が多勢を相手に酒宴をやつてゐる最中に、大喧嘩を始めて、食卓のうへに並んであつた高貴な瀬戸物などが、微塵に粉碎されるとか。食べ荒した料理が、毎日のやうに棄てられるとか。品子が時々夫人に厭味を言はれたことなど……。

「そんな家にゐてはいけなかつたね。」原田はさう言つて笑つてゐた。

「隨分大變なもんですね。」辰子も驚嘆の聲を放つてゐた。

で原田は自分の想像を、辰子にも話した。

「とすると、輕卒なこともできないね。西山に已がすまないとになる。」

さうは言ひながらも、原田はやつぱり然うは信じたくなかつた。辰子もさう深く氣に留めないらしかつた。

しかし不思議なことには、電報に應じて急遽出てくべき筈の西山は、いつまでも出てこなかつた。返辞もなかつた。それが又ひどく原田を複雑な不安に陷れた。

六

しかし原田の不安と焦燥は、段々募つて行くより外なかつた。彼は單に、それを想像する餘地があると思はせられたばかりでなく、或時甥の不用意な辭によつて、總てを明示されたやうな氣がしたからであつた。

それは斯うであつた——

或日長く横濱にゐた一人の甥が、近頃田舍へ歸省したと言つて、ふらりと遣つて來た。彼は上の姉の末子であつたが、其の次兄と共に東北の方の鑛山の仕事に係はつてゐた。勿論彼は二十二の、思昇つた、口の惡い、しかし正直な青年であつた。彼は迚もこつ〲働いてなどゐられないと言ふ風であつた。うんと一つ大きく當ててくれやう、そしてそれから眞實の仕事を初めやうと。

「それが可かんのだ。」原田はその日も、揶揄半分そんな事を言つてゐた。

「お前たちの爲てゐることは、危くて爲樣がない。」

彼は小さい若者であつたが、可也大胆で機敏であつた。

「だつて其ぢや追着かないもの。眞面目にやつてゐたんぢや、頭の上りつこはありやしない。仕事の資金を誰か出してくれるもんですか。」

「仕事さへ立派だつたらな。」

「駄目ですよ。」

すると彼は品子の來てゐることを、辰子から聽かされた。

「品子が來てゐるんだつて、へえ。」彼は冷笑を浮べた。

「田舍へ歸れば、時々逢ふでせう。」

「逢ふもんか。」彼は吐出すやうに言つたが、「町にもゐられなくなつて、叔父さんとこへ來たんだらう。田舍ぢや評判が惡いぜ。」

そして彼は金屬製の紙捲入をぱちんと開けて、金口を一本出して、吸ひはじめた。
「評判がわりいって何だい。」原田は訊ねた。
「知らないの。」彼は不思議さうに、表情を誇張した。
「知らない。言つてごらん。」
「××家の書生なんか引かけやがつて、爲様がないや。」
原田は棒で擲られたやうに感じたが、落着いてゐた。彼等の母同士は仲がわるかつた。非を搜しあふと云ふ風もあつた。それに此の若者の口にも、うつかり乘れないと思つた。
「人聞きのわるいことを言ふもんぢやないぜ。田舍の町の風評なんか當になるものか。第一女一生の運にも關することだ。無闇なことを吹聽するのは止せよ。」原田は少し強く窘めた。
彼はにやにやしながら、默つてしまつた。そして何か本を一二冊手に持つと、直に歸つて行つた。彼は山で氣が荒くなつてゐた。
けれど其の事は、原田の想像に强烈な色彩を與へた。
「そんな難癖をつけて出したに違ひない。」原田は獨りでさう辯解したが、しかしそんな事實がいくらかあつたに違ひないといふ氣がした――相手が誰であるにしても。そして其の相手は、原田の推察するところでは、やつぱり其に違ひなかつた。
「駄目かも知れないな。」彼は絕望的に呟いてゐた。
「まさかそんな事もないだらうと思ひますがね。」辰子は應へた。
その頃西山から手紙が來てゐた。それによると、親類に不幸があつて、幾日も其の方へ行つて、今日漸と歸つて手紙を見たが父が行く筈だから、總ては彼から聽取つてくれと言ふのであつた。

無論その手紙のついた翌日の午前、田舎にぶら〳〵してゐた原田の舅がやつて來て、親類の家にゐた。原田のところへはまだ來なかつたけれど、田舎の様子は老人の話でほゞ判つた。お寺のおばさん—先住の梵妻が、原田の方から嫁の來ることを、餘り好く思つてゐないと言ふとであつた。そして其を聽いて來たのは辰子であつた。

「おばさんは別に可けないと言つた譯ぢやないんださうですがね、今の處あの人の機嫌をよくしておかないと、西山も少いのですから何かに困るでせうから。それにおばさんもいくらか意地にもつたんでせうよ。日本橋の方のを、私たちが餘り進まなかつたから。」

日本橋の木綿問屋の細君は、お寺のおばさんの姉であつた。

「けれどあの話は、己が壞したんぢやないんだ。たゞ少し年を取りすぎてやしないかと言つたまでだ。」

「え、それあ然うですとも。」辰子は困惑を感じた。

「それに品子だつて、西山の口から出た話ぢやないか。」

「さう云ふことは…貴方なぞの氣持は、あの人達には迚も解りませんよ。」辰子は嘆息をついて、「それにお爺さんにも、ちよつと妙な癖がありますのよ。おばさんの御機嫌を取るために、何を言つたか分りませんよ。己が壞してくるとか何とか言つて、出て來たものなんでせう。」

原田は腹立しく思つたが、爲方がなかつた。悪くすると孤獨の地位に立たなければならぬ、其のおばさんのとも考へずにはゐられなかつた。さう云ふ人があつたのでは、品子も可哀さうだと言ふ氣がした。

しかし原田は、老人の來たとき、一應事實と心持とを說明しておく必要を感じたところで、冷靜に其の事を話した。

「さういふ事は、歸つてまたよく私が話をしますで、また何とかなりませう。娘さんもなか〳〵好い子ですでね。」老人はそんな事を言つてゐた。

それから二三日たつて、彼は歸つて行つた。勿論品子たちは、横濱から歸ると、老人のゐる家へも一度遊びに行つた

のであつた。

原田は品子の樣子に、時々深い注意を拂つた。彼女は大抵裁縫にすわるか、蔭で母親と何かひそ〳〵話すか、時とすると「金色夜叉」など引張出して、拾ひ讀みをしてゐた。東京へ來ても、別に芝居を見たいやうな風もなかつた。宮城や何かを子供が見せにつれて行つても、驚きもしなかつた。

「たゞ東京驛だけは、さすが東京だつて言つてゐたんですて。」辰子はそんなことを、原田に告げた。

「お前小說なんか讀むかい。」原田は「金色夜叉」を繙いてゐる彼女にきいてみた。

「いゝえ」と、品子はにつと笑つてゐた。

で、西山の方のことを話して聞かせたけれど、失望の色も悅びの色も見せなかつた。

原田は品子の貞操上のことについて、姉に糺しても見た。

「そんなことがありませうかね。」姉はさう言つて首を傾げてた。

「僕はさういふ氣がする。」

姉は深い疑惑(?)の色を浮べた。で、それを分明否定もしなかつたが、素より肯定もしなかつた。

「よく品子にきいてごらんなさい。ぼんやりしてゐる處ぢやないぢやないか。」

「それは然うやけど、それも夫人の嫉妬や。」姉はさう言つた表情をしてゐた。

「それで品子は何うなんだらう。やつぱり歸りたいんだらうか。」

「え、そんな事ばかり言つてゐる。さうかと思ふと、お寺へ行くのは厭でもないやうやし……」と、姉は口頭で笑つて、

「も一度あんたから言つてもらうたら何うでせう。」

「勿論結婚の話は、今のところ一寸行惱みだけれど、それにしても何故僕の家にゐるのを厭がるだらうか。」原田は興奮した。

「さあ。それが解らんのです。東京の叔父さんのお世話になると、田舍の伯母さんや伯父さんに、それ見たかと言つて、嗤はれるのが辛いと言ふのやけれど。」

勿論それならばその意味は原田にも解らないことはなかつた。原田は母の存生のをりから、送金の大部分が、この姉の生計費の方へ流れて行くのだと言つて、上の姉が始終非難してゐたことを知つてゐた。のみならず連れて來た少女の母―まだ若い孤獨者―が品行を挙引してゐるやうにも疑はれた。

原田は更めてまた品子を傍へ呼んで、くど〳〵と言つて聽かせた。

「誰の厄介にもならずに、お前たちが遣つて行けるものぢやないんだよ。横濱の伯父さんか己か、まあ眞身で心配してくれるものは、それより外にないのだ。それだのに、品ちやんは何うして己の言ふとほりにならないんだい。何うして己の家にゐるのが厭なんだい。己はお前たちを田舍に放下しておけないんだ。同じ貧乏するなら、此方にゐてもらひたいくらゐだが、よく好く暮さうと云ふには、何うしても横濱か己かの傍にゐなけあ駄目なんだ。田舍の女たちと相談したつて何になるものか。一體品ちやんはこの先き何うしてやつて行くつもりなの。」原田は年效もなく自分にも感激したやうな調子で說いたり詰つたりした。勿論辰子や姉も傍から口を添へたが。

「叔父の御親切はわかつてゐますけれど、今度はさういふ積りで來たのではないんです。その事をお母さんに諄いほど話してあるのに……お母さんが東京に出るときも、此間横濱から歸るときも……決して叔父さんのお世話にならんやうに……田舍で二人で一生懸命働きませうねつて、私口の酸くなるほど言つたのに。」

そして彼女は母親に怨みの辭を浴せながら口惜しさうに泣いた。

「それはお前が、そんな勸め口をしくじつたから、それで伯父さんや伯母さんが然う言つたんだらうけれど、お前はほんとうに剛情だな。」

原田は終ひに怒り出した。

「まあ、さう貴方のやうに短兵急に仰やつても駄目ですわ。」辰子は止めた。そして品子に、「品ちやんも、叔父なればこそ心配して下さるんですから。惡く思つて可けませんよ。まあ可ございます。あつちへ行つていらつしやい。」

そして品子を立たせてから、「私がまた暇にあかして、よく話しますけれど、あんなに歸りたいと言んですから、又出直すかしても、一旦歸したら何うでせう。」

「さうさね。さうでもしなければ……。しかし己には何うもわからない。やつぱり自分に暗いところがあつて、お寺へ行きにくいから、それであんな事を言つてるやうにも思へるが、それともあの子供のお母さんに、何か言はれてるのかも知れない。一度縁談口を周旋されたこともあるから。」原田は私語いてゐたが、それにしても可恐しい剛情だと思はれた。勿論總てのことは、時が來なければ判斷がつかないと云ふ氣がした。品子に絡はる一切の暗い運命（若しあるとすれば）と彼女の本質とが。とにかく今は手がつけられなかつた。

ふと辰子が玄關脇の物置を覗いてみると、品子は嗚咽の聲を立てながら何かびり〳〵引裂いてゐた。姉は傍にゐて、ひどく當惑してゐた。

「ずゐぶん我儘らしいですね。」辰子は大分たつてから、さう言つて原田の傍へ來た。

「何だか襦袢の袖を引裂いたり何かしてゐますよ。姉さんがまた、あの子に言伏せられて困つていらつしやるんですもの。」

そんなかと原田は、暗い目をした。忿怒の色が動いた。

「しかし放擲つてお置きなさいましよ。」辰子は原田が立ちかけさうにするので、周章て止めた。

「それに先刻から訊いて見ると、品ちやんにも一應の理由はあるらしいんですの。もう暮だといふのに色々遣りちらしたまゝで、一月も家をあけて、姉さんが餘り氣樂だと言つて怒つてゐるんですの。姉さんお居でなさいといへば、いくらでも居ますよ。品ちやんもあんなとをするのは、それあ何うしたつて好いとは言へませんけれど、親類の手前、貴方に

迷惑をかけに來たことは秘密にしておくつもりだつたのを、こんなに長引いたんぢや、伯母さんの口がまた煩さいと、それを心配してゐるらしいんですの。それで？今度は一旦早く歸つて、又こつちの話が決つたら、其時出てくると言ふんですから。肚は何うでも、まあ解つてゐますね。」

「己には解らない。」

その翌日品子母子は上野から立つた。品子の顔がその日初めて晴々と輝いてゐるのを、原田は不思議さうに眺めてゐた。解放された悦びと、戀の憧憬とに潤ひ和いだやうな目をしてゐた。

それから二三箇月たつた。原田は西山が上京したとき、品子の寫眞を見たいと言つたので、それを要求してやつたが、今はないから、そのうち撮つたら送るといふ返辭があつたきり、何時までたつても何の沙汰もなかつた。



石川五右衛門

上司小劍

生立の記

五

寺へ手習ひに行く時、文吾は街道の煮賣屋の前を通るのが厭やであつた。畔を渡り、小徑を拔けて、少しでも近い方を行くのであるが、其の煮賣屋の前だけはどうしても通らなければならなかつた。一束の杉の葉を吊した軒下に、『名物にしん蕎麥』といふ字が、障子へ大きく書いてあつて、其の奥に主婦の蒼白い顔が、ふは〱と水にでも浮いてゐるやうに見えてゐた。薄暗いところで、黒い着物を着てゐるので、顔だけがくツきり現はれて、身體は煮物の臭ひの漂ふ中に暈されて了つた。

冬の寒い盛りにも、煮賣屋の表は障子が一枚だけ開いて、街道を人が通る度に、蒼白い主婦の顔は、きツと此方を見た。足音がしないでも、人さへ通ると、主婦はそれを其の低く平べツたい鼻で嗅ぎ取るかのやうに、直ぐ感知して此方を向いた。

文吾が藁草履に砂埃りを立てつゝ通つても、深沓の破れたのに泥を踏んで行つても、煮賣屋の主婦の窪んだ濁つた眼は、決してそれを見遁がさなかつた。

文吾はもとよりこの主婦が、文吾の通る時だけにさうするのだとは思つてゐなかつた。自分ばかりが主婦に注目されてゐるのではないことをよく知つてゐた。日がな一日其の煮賣屋の店の奥に坐り込んで、蕎麥や焼豆腐の煮物の臭ひを嗅ぎながら、まるで關所の役人か何かのやうに、一々街道を往來する人に目を着ける。それはもう主婦の心では、見たいといふことを離れて、人さへ通れば、たゞ何かなしに表を見るのだ。人の足音さへ耳に入ると、眼はもう往來を向いてゐる。それがだん／＼練れて來ると、もう足音なんぞは聞えなくとも、人さへ通れば眼の球の方が先きにそれを知つて、背後向きに坐つてゐても、くるりと首を捻つて、往來を見るやうになつた。それで今日はこの往來を幾人ぐらゐ人が通つたかといふことを、主婦はちやんと知つてゐて、客が來ると、通つた人の數や種類を大聲に話してゐた。文吾も時々それを小耳に挾んで、大和へ越え、伊勢に通ふこの街道筋が、日によつて通る人の數に、大層な違ひのあるのを知つてゐた。

文吾は煮賣屋の主婦が、自分の通る時ばかり氣を配つて此方を見るのではないといふことを知つてゐながら、主婦にチロリと自分の姿を見られるのが、厭やで厭やでたまらなかつた。どんなに足音を忍ばせて歩いても、杉の葉の吊してある其の軒下に文吾の影がさすと、主婦の蒼白い顔は、きツと此方を見た。曇つた時や、雨の降る日でも、主婦は決して文吾の通るのを見遁がさないから、それが文吾は憎らしくてたまらなかつた。酒を賣るしるしに軒へ杉の葉を吊しておいても、備へた樽はよく空になつてゐた。杉の葉も黄色く枯れかゝつて、焚き付けになりさうであつた。其杉の葉を指さして、空樽に失望した酒好きの旅人が、主婦を談じつけてゐる隙に、文吾は今日こそ主婦に姿を見られまいぞと思つて小走りに駈け抜けようとしても、主婦は一心に何やら喋舌りながら、客と睨み合つてゐた眼をば、稲妻のやうに文吾の方へ向けることを忘れなかつた。『さアしまつた。』と文吾は思つた。

どうかして、主婦に見られないやうに、あの杉の葉を吊した店の前を通り過ぎることは出來ないものかと、八歳の文吾が小ひさい魂魄は、いろ／＼に苦勞を始めた。或る時は、餘りに憎らしくなつて、自分を見るあの主婦の眼を突き刺

してやらうかと思つて、文吾は母の使ひ古した槌を一本持ち出したことさへある。毎日絲を紡いでゐる母は糸紡ぎ車から外した槌の古いのを、危いからと言つて、高い棚の上へ載せてゐた。蹈臺を用ゐても、文吾はまだ其の棚へ手が屆かなかつた。ところが棚の領主のやうにして、塵埃を蹴立てつゝ其の上を暴れてゐる鼠が、槌を一本轉がし落したのが、ぐさとばかり古疊の上へ突つ立つた。文吾は急いで駈け寄つて、其の槌を取り上げたが、錆びてはあつても、尖つてゐて、錐よりも鋭かつた。其處へ母が來かゝつたので、文吾は手に持つた槌を隱す暇もなく、『鼠ッ、鼠ッ』と棚を指さして叫ぶと、母は慌てた樣子で、上を仰ぎ見たから、其の間に文吾は槌を懷中へ忍ばせて了つた。

『文吾はん、鼠が何んにも落せしまへなんだか。……』と言ひ〳〵、母はあたりを見廻はしたが、古疊の上には、齲齒が痛むとよく紙に包んで痛い齒に嚙ませられる鼠矢が五粒ほど、黑くバラ〳〵とこぼれてゐるだけであつた。

『いゝえ、何も落せしまへん。……其の齒痛の禁厭だけだんがな。』と言つて、文吾は槌を隱した懷中を押さへつゝ、つぽんと立つてゐた。母は文吾の言葉を疑ふ樣子もなく、昔し榮えた家の面影を殘してゐる廣い裏庭の、崩れかけた土塀の側へ行つて、丹念にしんし張りをつゞけた。張つて麩糊を引いてゐるのは、文吾の單衣になる繼ぎ接ぎだらけの大和木綿であつた。初夏の空は淺緑に晴れて、山も里もキラ〳〵と輝き渡つてゐた。

六

山城へ行き、近江へ拔ける旅人は、文吾の育つた村の街道を步かない。大和から伊勢へ、伊勢から大和へ、伊賀路の物靜かな麥秋の頃を、六十六部が多く通つた。

『あゝア、また六部の鉦が鳴るわいな。…………』と、母は瘦せた胸を、洗ひ晒した澁染めの單衣の上から押へて、こ今にも秋ならぬ時雨の來さうな顏をして、六部の鉦の遠ざかり行くのに耳を澄ましてゐた。一人の六部が行つて了うて、また一人の六部の鉦が、杉の葉を吊した煮賣屋の方から流れて來た。

「あッ……」と叫んだ母は、兩手で耳朶に蓋をした。六十六部の多く通る麥秋の頃には、文吾の家の表戸が閉め切つてあつて、六部に留守だと思はせるやうにしてあつた。報謝を受けようとする鉦の音が、いつまでも家の前に鳴つてゐるのを避ける用意だと、文吾は去年あたりから氣付いてゐた。

六十六部の鉦が、夕暮れまでも鳴つてゐると、母は頭痛を起して、奥の納戸へ倒れ込んで了つた。其處の長押には槍と薙刀とをかけた跡があつて、得物は疾くに失はれてゐた。

槍があつたら、其の槍で、あの煮賣屋の婆の眼を突いてやるのにと思つて、文吾は柄を隠した懐中を押さへつゝ、表の往來へ駈け出して行つた。煮賣屋の前を歩いて、婆がいつもの通り此方を見よつたら、いきなり飛び込んで行つて、其の目尻の下がつた兩眼を突き刺してやらうと、文吾は其の時ほんたうにさう考へたのであつた。

文吾の眼からは婆でも、煮賣屋の主婦は、まだ三十七八の殘りの色香を、櫻の若葉に留めてゐるほどの女であつた。年中血の道で、蒼白くふさいでゐても、琵琶をとつては、平家の一曲に村人の涙を唆ることもあつた。この日は茜染めの單衣若々しく、背中を往來に見せて坐つてゐたが、人が表を通る毎に、細い首を捻ぢ向けて、眼の光りを投げかけることは、一人〳〵に怠らなかつた。文吾がこの煮賣店に近づいた時は、何處で棄てられたか、見馴れぬ子狗が一頭、鼻を土に擂り付けて、物の臭ひを嗅ぎ廻はつてゐた。懐中から柄を取り出して、路傍の缺け瓦に尖端の銹を磨りおとした文吾は、白く光る針のやうな鋭さに見入りながら、これで煮賣屋の婆の眼をば、飛び込んでたゞ一突きと、氣が狂ふたやうに草履の足音もパタ〳〵と急ぎ足に通りかゝる途端、あの子狗がくん〳〵鼻を鳴らして、煮賣屋の土間へ入つて行つた。さうして其處にあつたお客からの預り物の錢の端を銜へて引つ張つたので、主婦は其の方へ氣を取られて、この時ばかりは、店の前を態と荒々しく通る文吾の方に眼が屆かなかつた。

きつと此方を見るであらう、見たらこの柄であの厭やな眼を一突きと、後の難儀も考へないで、飛んだことを考へてゐた文吾は、ソッと息を吐きつゝ、首尾よく煮賣屋の主婦の眼から遁れてあの店の前を通ることが出來たのを喜んだ。

それから毎日〳〵、文吾は何か知ら居合はせた子狗なり、雞なり、雀なり、或る時は空の鴉なりを種につかつて、其の方へ煮賣屋の主婦の注意を惹け付けておいて、自分だけは其の關所役人のやうな目尻の下がつた眼から見遁されることを工夫し始めた。うまく行く時もあるし、しくじることも多かつたし、寺で敎はる手習ひよりも、文吾には煮賣屋の前で身を忍ぶ工夫を練るのが面白くなつて、うまく行つた日は終日氣持ちがよく、しくじつた時は、腹が立つて仕樣がなかつた。しかしもうあの鋭く尖つた楇で煮賣屋の主婦の眼を突き刺さうなぞといふことは考へなかつた。

朝遲いにきまつてゐた文吾が、此頃は早く來るやうになつたので、お寺の和尚さんも、寺子朋輩も、『これやえらいこツちや』と思つた。早く來ると言つても、矢ツ張り文吾が一番遲かつた。しかし今までは、みんなが双紙を一面習ひ終つた頃に、さして急ぎ足でもなく入つて來た文吾が、まだ墨を磨つてゐるうちに來ることもあるやうになつた。一同が机の前に頭を揃へて和尚さんにお辭儀してゐる時に文吾の姿が見えるのは、餘ツぽど早いのであるが、遲くとも、双紙を二三枚習はぬうちに、文吾の机にも硯や筆や墨が取り出されてあるやうになつた。

或る時はまた文吾が、何時の間に來たのか、隣りの机の子さへ知らぬことがあつた。文吾はまだ來んなアと、和尚さんも朋輩も皆さう思つてゐるうちに、文吾がにこ〳〵してもう双紙を一二枚習ひかけてゐるのを見て、あツと驚かされることもあつた。

文吾はそれが得意であつた。煮賣屋の主婦の眼を晦ますことを覺えてから、それをいろ〳〵の人に試みたが、うまく行くことの多いのに、嬉しくてたまらなかつた。『これはうまいなア。』と、文吾は獨りで叫んだ。

七

たゞ足音を忍んで、人の眼を晦ますだけでは詰まらないといふことを、文吾の小ひさな胸は考へ始めた。

初夏から眞夏になる頃には、文吾の忍び足もおひ〳〵に習練の効を積んで來た。それでも時々、煮賣屋の主婦の目尻

の下がつた眼には見現はされることがあつて、「あの糞婆め」と歯嚙みをしたが、家の母や寺の和尚さんの眼を晦ますことは、もう何んでもなくなつた。

人の眼を晦ますことが何んでもなくなるに連れて、それをたゞぼんやりとやつてゐることが、文吾には詰まらなくなつたのである。去年の秋の末に腮の外れるほど大きな口を開いて、夜露に濡ふたうまいやつをドッサリ喰べたあの御所柿も、今年は不作と見えて、花が尠なかつた。其の御所柿の樹から、「人のものは我が物、我が物は人のもの」といふやうなことを教へられた文吾は、今度偶然に覺えかけたこの忍び足の法で、人のものを我が物にしてやるのも面白いことであらうと考へた。さうしてそれを先づ家の母に試みてやらうと思つて、寺の午休みに、窃と自分の家へ忍び込んで見た。

棚の上を走る鼠の足音の方に、母の心を引き付けておいて、首尾よく一本の枘を懐中に隱し了せたのと、店の土間へ這ひ込んだ子狗に、煮賣屋の主婦の眼を晦ましたのとが、文吾の忍び足の法を會得しかける最初であつたが、近頃ではもう、鼠や子狗がうまく出て來なくとも、小ひさな石ころを一つ、あらぬ方角へ投げ付けた物音の中に、身を隱すことも出來るやうになつた。

裏の崩れた土塀の上を、毛の汚れた野良猫がノソリ／＼と渡つて行く。折柄糸を紡いでゐた母の眼は、其の猫の方へ惹け付けられてゐて、文吾が直ぐ背後に立つてゐるのを知らなかつた。

ビイビイビイビイビイ、

チョン。

ビイビイビイビイビイ、

チョン。

糸車は靜かに廻はつて、じんき（白い綿を胡瓜の小さなのぐらゐにしたもの）は長く母の左手で糸になつて伸びると、右の手で廻はしてゐた車が、チョンと把手を鳴らす音とゝもに、枘に卷き着く絲の玉はだん／＼太くなつて行く。

ピイピイピイピイピイピイ

チヨン。

異國の歌でも聽くやうな糸車の音は、ウツとりとして、人の眠りを誘ふやうであつた。靜かな伊賀の山里の、村人は皆午睡の夢を貪つてゐるのに、文吾の母だけは、夜業をしても足らぬ賃仕事の糸紡ぎにかゝつてゐるのであつた。寺の午休みに駈け戻つて來た文吾は、母の手元にあるじんきの束を取つて、窃と物蔭へ身を忍ばせつゝ、樣子を窺つてゐると、自分の廻はす糸車の音に自分の眠りを誘はれながら、ぼんやりと向ふの土塀の上の野良猫に見入つてゐた母は、左の手に乏しくなつたじんきを繼ぎ足さうとして、手さぐりでじんきの束を求めたが、指先きに當るのは古疊の縁のほつればかりなので、ヤツと眼が覺めた風で四邊を見廻はしたが、じんきはそこいらに一本もなかつた。いぶかしさうに小首を傾けた母は、立つて行つて戸棚から一束のじんきを持ち出し、またピイピイと紡ぎ始めた。

文吾は再び拔き足して、母の傍に忍び寄ると、其の新しいじんきの束を攫つて、更に物蔭へ隱れた。今持つて來たばかりのじんきの束が、また見えなくなつたのに呆れた母は、暫く考へてゐる風であつたが、やがて糸車を片付け、膝の上の綿埃りを拂つてから、臺所へ行つて火打箱を取り出し、燧石をカチ／＼やつて、神棚に燈明を上げた。さうして其の前に長いこと瞑目祈念してゐた。

文吾は攫つた二束のじんきをば、門の直ぐ側へ投げて、忍び足に寺へ立ち戻つたが、七つ過ぎに家へ歸つて、今度は大びらに入ると、母はまだ神棚の前に坐つてゐた。

『文吾はん、氣い付けなはれや。今日は魔物が家の中へ入り込んでるよつて、……』と、聲を震はして言つた。文吾は獨りクス／＼笑つてゐた。

八

光明寺の和尙さんは、伏見から取り寄せた駿河屋の羊羹で、宇治の玉露を淹れて飮むのを樂んでゐた。紅を刷いたやうな四角い長いものを、和尙さんが大事さうに庖丁で切つて、齒のない口でもぐ〳〵やつてゐる度に、手習ひ子等は何を喰べてゐるのかと思つて、遠くから不思議さうに眺めてゐた。羊羹といふ名なんかは、もとより知らうやうもなかつた。文吾は初めにそれを見た時、家へ歸つて、母に和尙さんの不思議の食物のことを話すと、若い頃都の水を飮んだ母は薄笑をして、『それは伏見の駿河屋の晒らし羊羹といふもんや。』と敎へてくれたので、羊羹といふもの丶ことをよく知つてゐたし、此頃宇治で出來る玉露といふお茶のことを母に聞いてゐた。さうして其の羊羹といふものを一片喰べてみたくてたまらなかつた。

夏だから襖も障子も開け放してあるので、手習ひをしてゐる本堂の片隅から、庫裡の奥まで、一目に見通すことは出來るが、手習ひ子は庫裡へ片足でも蹈み込むことを禁ぜられてゐるから、羊羹の納つてある茶簞笥へ近づくことは、文吾の忍び足にもなか〳〵むづかしかつた。殊に本堂と庫裡との綴ぢ合はせのところには、賢さうな小僧が一人机を扣へて、別にお經をさらつてゐるし、まだ若い寺男の眼が臺所や庭前から光つてゐる。其の中を潜り拔けて、和尙さんの居間に忍び寄ることは、文吾が一生の大事のやうに思はれた。

其の頃は他の國々に、まだよく戰があつて、馬の蹄や、雜兵の草鞋に田畑を蹈み荒らされたり、家を燒かれたり、女を擄はれたりする噂さが、よく耳へ入つたけれど、この伊賀の國だけはさういふ難儀から暫らく免れてゐた。ところが此頃毎夜丑三つの刻限に、東の山の上へ怪しい星が現はれて、其の星の下に弘法大師のお姿があり〳〵拜まれるといふとを言ひ觸らすものがあつた。誰れが言ひ出したのか分らないけれど、光明寺の和尙さんも、スッカリそれを信じて、『これはきつと近いうちに、この伊賀にも戰があるに違ひない。それをお大師さんが敎へて下さるのぢや。』と、手習ひ子たちにも言ひ聞かせてゐた。

『和尙さん、戰があると、わたへ等はどないになりますのや。』と、一番年上の手習ひ子は和尙さんに問ふた。

『戰があつたら、もうお前ぐらゐの年のもんは、軍役といふて、兵粮運びなんぞに使はれるし、家にあるお米や麥は皆取り上げられ、家の納屋も燒かれる。』と、和尙さんは敎へた。

『兵粮運びしたら、駄賃呉れはりきツか。』と、其の手習ひ子は、嬉しさうな顔をした。

『駄賃は呉れんな、駄賃の代りに、流れ矢を貰うて死ぬぐらゐのもんや。』と、和尚さんは冷かに笑つた。

『人の家のお米や麥をたゞ取つて、駄賃も呉れいで兵粮運びさしまんのか。そいで家を燒く。まるで無茶やがな。……

……和尚さんそんな無茶しても、だいじおまへんのか。』と、横合ひから、眉を顰めつゝ問ふた手習ひ子があつた。

『どうもしやうがないなア。軍人は強いよつて。……』と、和尚さんは微笑んでゐた。

『強いもんなら、惡いことをしてもだいじおまへんのやなア。』と、其の子は腑に落ちぬといふ顏をした。

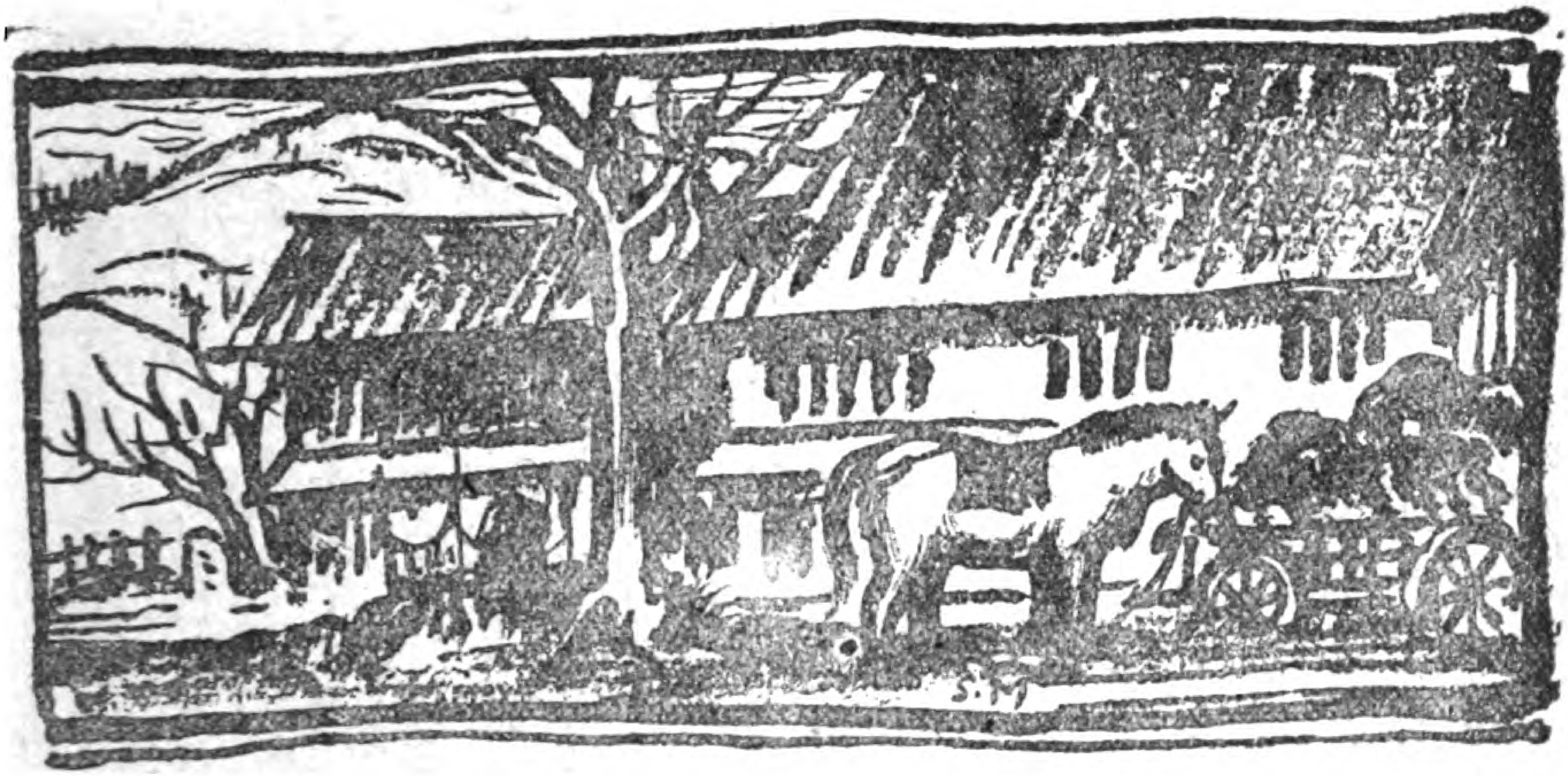
『現世ではしやうがないなア。……強いといふことは、善いといふこと正しいといふことより一枚上手ぢや。』と、和尚さんは矢ツ張り笑ひ續けた。

『強うならな、あかんわい。』と、誰れやらが大きな聲で、頓狂に言つたので、みんなは一時にどツと笑つた。しかし文吾だけは笑はなかつた。

文吾は笑ふよりも考へたかつた。『強いといふことは、善いといふこと、正しいといふことより一枚上手ぢや。』と言つた和尚さんの言葉を、しみ〲と嚙みしめて味ひたかつた。さうして、『強うなれ、強うなれ。』と、口の裡で叫んだ。けれども、よく考へてみると、一人だけでは幾分強くなつたとて、大勢でかゝつて來られては兎ても敵はない。これは何うでも手下をドッサリ拵へなければならない。其の手下の出來るまでは、近頃覺えた忍び足の法でやつてやらう。他人に出來ないことを自分がするといふのも、矢張り一つの強さだ。強いといふことが、善いといふこと、正しいといふことより一枚上手なら、もう大威張りぢや。自分はこの忍び足といふ強さで、煮賣屋の婆に勝つた、家の阿母さんにも勝つた。これから一つこの和尚さんに勝つて、どうしてもあのおいしさうな駿河屋の羊羹を喰べねばならぬと、文吾は小ひさな胸に、自ら問ひ、自ら答へて、深く決心した。

其の夜の丑三つに、大膽な文吾は、東の山へ現はるゝといふ大きな星と弘法大師のお姿とを拜むのぢやと、母に告げて、壞れかけてガタ〲してゐる雨戸の外へ出たが、其のまゝ跣足に夜露を踏んで、飛ぶが如く光明寺へ駈け付けると、うま〲和尚さんの居間に忍び入つた。

（未完）



喜戯
蘇東坡
或は『湖上の詩人』　一幕三場

谷崎潤一郎

時　宋の神宗皇帝の時代
所　杭州府　南方支那西湖の畔にある城邑

人物
蘇東坡　詩人　當時杭州府の通判と云ふ役を勤めて居る
毛澤民　詩人の同僚
吳小一　吳服商人
張二　扇子賣り
朝雲　妓生　詩人が愛して居る女
群芳　妓生　毛澤民が愛して居る女
琴操　妓生
高瑩　妓生
鄭容　妓生

その他府の役人市民等大勢

第一場

杭州府衙門内の廳堂。――此處は庶民の訴を聽く場所で、徳川時代のお白洲のやうに階の前が石甃を敷いた廣場になつて居る。堂上ところどころに役人の執務する机や椅子が並べられ、中央に通判の席が設けてある。堂の背面には柱廊があり、その柱の列の向うには、南國らしい麗かな青空が見え、遠く西湖の水が翡翠色に輝やきながらチラチラとさゞ波を漾はせて居る。時は秋の末であるが、ちやうど日本の四月頃に似た暖かい季候で、ぽかぽかと睡くなるやうな日の午後。下手の方の大きな菊の花瓶を飾つた卓の前に、二人の書記生が向ひ合つて事務を執つて居る。

幕が開くと間もなく、廣場の下手から毛澤民が出て來る、才子風の優雅な美男子である。

（毛澤民）はてな、東坡先生はおいでにならんかな、……

ちよつと立ち停まつて考へ、書記生等に聲をかける。

（毛澤民）君、君、先生は何處においでだらう？

（書記甲）先生ですか、先生は二階にいらつしやいます。何か御用ならお呼び申して參りませう。

（毛澤民）では毛澤民がお暇乞ひに出ましたと、さう云つてくれ給へ。

（書記甲）お暇乞ひに？

（毛澤民）あゝさうだよ、大分延び延びになつてしまつたが、旅の仕度も出來上つたから、今日はどうしても出發しなけりやならないんだ。

（書記甲）よろしうございます、兎も角もさう申し上げて參りませう。

書記甲、杜郎の上手へ退場

（書記乙）いよいよお出かけになりますかな、お名残り惜しうございますな。

（毛澤民）君たちにも長々御厄介になつたが、もう此れでお別れだよ。

（書記乙）あなたが居らつしやらなくなると、明日から此の役所も大分淋しくなりますなア。せめてもう四五日もお延ばしなすつては如何です。

（毛澤民）何卒そんな事は云はないでくれ給へ、それでなくつても立つのが嫌で仕様がないのに、さう云はれると猶更悲しくなつて來るよ。

（書記乙）しかし何でせう、都へお出でになれば田舎と違つていろいろ面白い事がお有りでせうし、いづれ何處ぞへ御榮轉になるのでせうから、結構な譯ぢやございませんか。

（毛澤民）結構な事なんかありやしないさ。都と云ふ所は君たちの考へて居るやうな、好い所ぢやないんだからね。

（書記乙）すると矢張り、此の杭州に勝る所はありませんかな。

（毛澤民）さうだとも、何と云つたつて杭州が天下第一さ。景色は佳し、喰ひ物はうまし、氣候は暖かだし、女は綺麗だし、それに人氣が穩やかだから、こんな住み心地のいゝ所はありはしない。斯う云ふ土地に居ると、人間は長生きをするね。

（書記乙）そんなもんかも知れませんな、私なぞは一生此處で老いぼれてしまふんですが、役所の仕事は樂ですし、東坡先生はあの通り氣さくな方ですから、此れで長生きが出來さへすりやあ、先づ仕合はせだと思はなければなりません。

（毛澤民）ほんとに君たちは羨ましい。僕なぞはお上の命令でいつ何處へ轉任するかも知れないんだから、まるで葬のやうなものさ。地位や月給が上つたからつて嬉しくも何ともないよ。……

書記庄甲が戻つて來る

（書記甲）毛澤民先生、どうもお待たせ申しました。

（毛澤民）御都合はどうだつたかね？

（書記甲）エ、、實はその、東坡先生は唯今御酒を召し上つていらして、大分酩酊の御様子です。

（毛澤民）ハ、ア、相變らずと見えるね。

（書記甲）それでお取り次ぎをしましたところが、お別れに一獻差し上げたいから是非二階へおいで下さるやうにと、さう仰つしやつて居らつしやいます。いかゞでせう、彼方（あちら）へ入らしつてお相手をなすつては？

（毛澤民）さあ、どうしたもんだらう？　ちよつとお顔を見て行きたいが、酒が始まるとつひ長ツ臀になるんでなあ。

（書記甲）まあ宜しいぢやございませんか、折角ですから。

（毛澤民）いや、今日はそんなにグズグズしては居られんて。一日一日と出立がおくれるばかりだから。

（書記甲）でもちよつと如何です？　もう今日かぎり杭州の酒の飲み收めだと思し召して。

（毛澤民）その飲み收めと云ふ奴がナカナカさうは行かんのだよ。此の間から何度飲み收めをやつたか知れないが、一向收まりが付かないんだ。

（書記甲）あはゝゝゝ、さうでもございませうが、此れでほんとの飲み收めとなすつたら如何です。實は今しがた錢塘江の鯛が獲れたので、それを肴に御酒が始まつた譯なんです。

（毛澤民）錢塘の鯛か、うまさうに舌なめずりをする。あれがあるとちよつと飲めるな。

（書記乙）あの鯛の味は格別ですからな、北の方へ入らつしやると、あんな生きのいゝ魚は喰べられませんよ。

（毛澤民）おい、おい、好い加減にしないか、そんな話をするのは罪だよ。

（書記乙）それではいつそお會ひにならずに、お出かけになりますか。

（毛澤民）左様さ、お目に懸らないのも失禮だし、二階へ行くと怪しくなるし、どうも困つたもんだ。まあもう少し此

處でお待ち申すとしやう。

（書記甲）そりやあ駄目ですよ、何しろエライ御機嫌で、腰が立たないくらゐぐでぐでに醉つ拂つておいでですから、とても下へは入らつしやいますまい。

（書記乙）どうしても二階へ入らつしらやなけりやいけませんな、杭州の酒の飲み收めで、錢塘の鯛の喰ひ收めをなさるんですな。

（毛澤民）チョツ、仕方がない！ではちよつと行つて來るか。——此の鹽梅ぢや今日も立てなくなりさうだぞ。

毛澤民頭を掻き掻き柱廊の上手へ這入つて行く。その後ろ影が見えなくなると、書記生は眼を見合せて笑ひ出す。

（書記甲）毛澤民さんも。大分此の土地には未練がありさうだね。

（書記乙）今も散々泣き言を並べて居たがね、あの人の身になつて見ると、此處を離れるのは嘸辛いだらうよ。

（書記甲）色男にはなりたくないものさ、斯う云ふ時に泣きの淚で別れなけりやあならんからね。

（書記乙）全くだよ、あれだけの女にあゝまで惚れられちや、何ぼ何でも男冥理が好過ぎるからな、まあ罰が中つたと云ふもんだらう。

（書記甲）しかし毛さんに轉任を命じるなんて、東坡先生もナカナカ人が惡いね、自分だつて朝雲の臀を追つかけ廻して居る癖に、少しは察してやるがいゝんだ。

（書記乙）なあに、それは毛さんの方が惡いんだよ私には此れ此れの女がございますからと、思ひ切つて白狀すればいいのに、イヤに遠慮して隱して居るもんだから、とうとうこんな事になつちまつたのさ。先生は捌けた方なんだから、譯を話しさへすりやあ何とかして下さるんだ。

（書記甲）さうよなあ、詰まらん遠慮をしたもんだなあ、全體あの人は女に持てるだけあつて、氣が弱いからいかんのだなあ。

廣場下手より取り次ぎ役の少年登場。

（少年）書記さん、書記さん、今日は暇だと思つたら、やつと一人訴人がやつて來ましたよ。

（書記甲）來たかね、來たら此處へ通しなさい。

（少年）南庫の和樂樓の高瑩と云ふ藝者ださうです。ちよつと可愛い女です。

（書記甲）餘計な事を云はんでもいゝ、さつさと連れて來なさい。

少年口笛を吹きながら輕快な足どりで立ち去る。

（書記乙）和樂樓の高瑩と、……聞いたことがあるやうだな。

（書記甲）ほら、あの西院街の生藥屋の亭主を旦那にして居る女だらう。

（書記乙）うん、あの女か、それぢやいよいよ引かされるんで、落籍の許可を願ひに來たんだな。

（書記甲）まあそんな事だらうよ。

（書記乙）だが此の頃はメツキリ訴訟沙汰が少くなつてたまに事件と云やあ、藝者の落籍ばかりぢやないか。まるで此の役所は身請け相談所のやうな形だね。

（書記甲）訴訟沙汰が少いのは天下泰平の徴なんだから、大いにめでたい譯さ。われわれは毎日役所で居睡りをして、居て、時々藝者の顏が見られて、それで月給が貰へるとすりやあこんな有り難い事はないよ。

高瑩が少年に導かれて廣場へ出て來る、手に一通の願書を持つて居る。

（少年）案内しながら、さあ君、此方だよ、此方へ來給へ、此處はお役所だからお茶屋でやるやうにデレデレしちやいけないよ。成るたけ眞面目な顏つきをして、その願書を斯う云ふ風にと、身振りをして見せる、兩手で鄭寧に差し上げて、あの階段の所へ行つてお辭儀をするんだ。

（高瑩）斯うなの？　少年の身振りを眞似ながら、斯う云ふ風にやればいゝの？

（少年）うんさうださうだ、それから哀れつぽい聲を出して、「お願がございます」ッて云ふんだ。さうすると、そら。」彼處に役人が居るだらう、あの人がやつて來て其の願書を取り上げてくれる、それから東坡先生が御出席になつて裁判をして下さるんだ。

（高瑩）あら、東坡先生が？――

（少年）さうだよ、君は先生を知つて居るのかい？

（高瑩）えゝ知つてるわ、二三度お座敷でお目にかゝつた事があるの。

（少年）知つてゝも知らない風をして、濟まして居なけりや駄目なんだよ、此處はお役所なんだから。

（高瑩）だつてあたし、極まりが惡いわ。…

（少年）なあに大丈夫だ、心配しないで僕の云ふ通りにやつて見給へ。それに今しがたお酒が始まつたやうだから、しめたもんだよ。先生は醉つて居らつしやると何でも「うん、うん」て承知なさるんだ。

（高瑩）まあ隨分ね、お役所に居らしつて晝間からお酒を召し上るなんて。

（少年）そりやあ君仕方がないさ、先生はたゞの役人ぢやないんだもの。詩人に酒は附き物ぢやないか。――それぢや僕は失敬するよ。

少年再び口笛を吹きつゝ退場。

書記等はそれ迄の間ニコニコ笑ひながら樣子を見て居たが、少年が引込むと同時に威儀を取り繕つて嚴然と控へる。

（高瑩）階段の下に來り、敎へられた通りにして、お願ひでございます。

（書記甲）何だ？

（高瑩）あの、わたくしは南庫和樂樓の官妓をして居ります高瑩と申す者でございます。少しお願ひの筋があつて參りました。

(書記甲) 願書を持つて來たか？

(高瑩) はい、此處に持つて居ります、どうぞ御覽下さいませ。

書記甲願書を受け取つて席へ戻り、机の上にひろげて讀む。乙もそれを覗き込む。高瑩はぢつと階段の下に平伏して居る。

(書記甲) はゝあ、此れは落籍願だね。

(高瑩) 左樣でございます、長らく皆樣の御贔負に與りましたが、今度堅儀になりまして、良人(おつと)に從ひたいと思ふのでございます。

(書記甲) ふん、成る程。……で、その相手は誰だね？

(高瑩) はい、あのう。……それを申し上げなけりやいけないのでございませうか？

(書記甲) いけないと云ふ譯でもないがな、まあ孰方(どつち)かと云へば、申し上げるに越したことはないやうだな。

(高瑩) あら！ そんな事を仰つしやつてお嬲りなすつては嫌でございます。

(書記乙) あはゝゝゝ、云はなけりやあ云はんでもいゝよ、ちやんと種は上つて居るから。

(高瑩) どうぞ何も彼もお察し下さいまして、お許しが出ますやうにお取りなし下さいまし。ほんたうにお願ひでございます。

(書記乙) よし、よし、まあ何と仰つしやるか先生に伺つて見なけりや分らんが、今ちよつと御用中だから暫く待つて居るがいゝ。

少年登場、忙しさうに廣場を駈けて來る。

(少年) 書記さん、書記さん！

(書記乙) 何だ？

(少年) 又一人來ましたぜ。

(書記乙) 又來たか。今日は大分忙しいぞ、今度のは何者だね？

(少年) やつぱり藝者です。

(書記甲) いやはや、どうも驚いたね。

(少年) 北庫の容風樓の鄭容と云ふ女ださうです。

(書記甲) どうせ又落籍だらう。

(書記乙) 面倒だから一緒に片附けてしまはうぢやないか。

(少年) それぢや直ぐに連れて來ませうか？

(書記乙) あゝ連れておいで。

(少年) 承知しました。

少年退場。

(書記乙) 甲に向つて、君、どうしたもんだらう、先生はまだお済みにならないだらうな？

(書記甲) あの塩梅ぢやあ多分晩まで打つ通しだらうと思ふがね、ちよつとでいゝから今の内に御出席を願はうぢやないか。

(書記乙) だが大丈夫か知ら？　そんなに酔つて居らしつて。

(書記甲) なあに、毎度の事だから何でもないさ、酔つ拂つて居らしつたら僕が引つ擔いで來るよ。

書記甲柱廊の上手へ立ち去る。

少年が鄭容を連れて來る。

(少年) 案内しながら、そら、彼處に一人君のお仲間が居るからね、あの階段の處へ行つて、今敎へた通りにすればいいんだ。

（鄭容）あら！　高瑩さんが居らつしやるわ。
（少年）しツ、しツ、お役所の中で餘計な事を云ふんぢやないツたら？　いゝかい？　分つたかい？　しツかりかりやり給へ。
少年鄭容を殘してフイと下手へ逃入つてしまふ。
（鄭容）階段のほとりに跪き、高瑩と同じやうにして願書を捧げながら、お願ひでございます。
（書記乙）何だ？
（鄭容）わたくしは北庫春風樓の官妓をして居ります鄭容と申す者でございます。少々お願ひの筋がございまして…。
（書記乙）あゝよし、よし、その願書を見せないさい。
願書を受け取り、ざつと眼を通して机の上に置く。
（書記乙）お前も落籍を願ひに來たんだな。
（鄭容）左樣でございます。お許しが出ますでございませうか？
（書記乙）そりや出ないとは限らんがね、一體お前たちのやうな賣れッ兒が揃ひも揃つて、さうどうも商賣を止めると云ふなあ穩やかでないね。土地の花柳界がさびれるばかりだよ。
（鄭容）まあ、御挨拶で恐れ入りますこと！　わたくしなんかとてもそんな賣れッ兒ぢやございませんわ。「揃ひも揃つて」だなんて、高瑩さんがお氣の毒でございますわ。
（高瑩）あら！　鄭容さんは隨分だわ！　あなたこそあたしなんかよりズット賣れッ兒ぢやあなくつて？
（鄭容）あんな嘘ばッかり！　藝だつて器量だつて、あたしあなたの足もとにも追つ着きやしないわ。
（高瑩）そりやあたしの方で云ふ事よ、あたしこそお多福の藝なし猿よ。
（鄭容）あらいやだ！　どうぞお靜かに願ひます。

（書記乙）これ、これ、好い加減にしなさい、役所で喧嘩をするやつがあるか。
（高瑩）だつてあんまりなんですもの。
（鄭容）でもあたし、高瑩さんと一緒にされちや詰まらないわ。

二人ともだんだん行儀が悪くなつて甘つたれた聲を出し始める。

柱廊上手より通判蘇東坡が書記生甲に伴はれて來る、醉歩蹣跚たる様子。

（書記甲）よろけさうになる東坡の體を支へながら、オツト、お危ぶなうございます。……もし、もし、そちらへ入らしツちやいけません、此方でございます。
（東坡）分つてるよ、分つてるから大丈夫だよ、うーイツ……あゝ好い心持ちだ、……
（書記乙）妓生等に向ひ、これ、先生のお出ましだぞ、兩人とも其處に愼しんで控へて居なさい。

兩人急に居ずまひを直して平伏する。東坡は書記生に扶けられて漸く通判の席に就く。

（書記乙）先生、どうも御酒興中のところを飛んだお妨げをいたしまして、甚だ恐れ入ります。
（東坡）あはゝゝゝ、大分堅苦しい御挨拶だね、さう云はれると吾輩ちよつと返答に困るて。
（書記乙）どういたしまして、いつも御機嫌で結構に存じます。
（東坡）うーイツ……よろよろとして椅子から轉げさうになる、や此りやあいかんぞ、今日の醉ひ方は特別だぞ、斯うして居ると何だか眼の前がチラチラして來る。朦朧と眼を瞬き、階前に跪いて居る妓生等の姿を認める。ほう、此れは不思議だ、……わしは醉つ拂ふとよくこんな事があるんだが、彼處に斯う、綺麗なものがチラチラして居るのは彼りやあ何だな？ それとも私の眼の加減かな？
（書記甲）彼處に居りますのは、あれは訴人でございます。
（高瑩）お願ひでございます、……

(鄭容) どうぞお情けを持ちまして、お聽き屆けなされて下さりませ。

(東坡) ほゝう、大分多勢居るやうだな。

(書記甲) いや多勢ではございません。二人だけでござます。

(東坡) 二人には見えんぞ、わしには別嬪の顔が五つ六つ見えるぞ。

(書記甲) あはゝゝゝ、

(書記乙) 二通の願書を差し出す。先生、御面倒でもちよつと此れを御覽下さいまし。此の二人は孰れも官妓でありまして、落籍の許可を願ひたいのだと申して居ります。

(東坡) ふん、よし、よし、……成る程、南庫和樂樓の高瑩と申すのは其の方か。

(高瑩) はい、私でございます。

(東坡) 其の方は此の度び藝者稼業を止めて良人に從ひたいと申すのだな?

(高瑩) 御意にございます。

(東坡) エヽと、それからと、……北庫粉鳳樓の鄭容と申すのは其の方か。

(鄭容) はい、私でございます。

(東坡) 其の方も落籍が望みと見えるの?

(鄭容) 御意にございます。

(東坡) あはゝゝゝ、何も役所へ來たからと云つて、さう改まつてペーコペコお辭儀をせんでもよい。お前たちに餘り切り口上でやられると、折角の酒が醒めるからな。

(鄭容) 恐れ入りましてございます。

(東坡) しかし何だな、お前たちのやうな綺麗所が、今の若さで止めると云ふのは甚だ以て不心得の話だな。

(書記乙) 鼓生等に向ひ、それ見ろ! 己の云つた通りだ。

(東坡) 何だね、何かあつたのかね?

(書記乙) いえ、何もあつたのぢやございません。ちよつと獨り語を申しましたので、……

(東坡) なんと物は相談だが、もう一と稼ぎして見たらどうだ?

(高瑩) 泣き聲になつて鼻を鳴らしながら、だつて先生、そんな事を仰つしやつてあたしほんとに困つてしまひますわ。實は約束した人があるんですもの。

(鄭容) あたしだつてさうですわ先生、……

(書記甲) これ、これ、のろけを云ふ奴があるか、此處を何と心得て居る?

(東坡) あはゝゝゝ、イヤなかなか面白いぞ、わしはお前たちのやうな美人連に「先生先生」ッて云はれて、右左から取つ付かれたのは今日が始めてだて。かうなつて見ると役人も惡くはないな。

(高瑩) いよいよ甘つ垂れる、ねえ先生、先生はほんとに焦れッたいわ。お願ひですから聞いて頂戴よウ!

(鄭容) ねえ先生、あたし手を合はせて拜みますわ。

(東坡) 待て待て、今判決を書いて遣はすから。――

(高瑩) それぢや許して下さいますの?

(東坡) さあ、許してやらうかな、それとも許してやるまいかな、兎に角書いて見なければ分らんよ。

さう云ひながら、東坡筆を執つて一氣に判狀を書き下す。高瑩に與ふる判狀に曰く「高山白早。瑩骨氷肌。那解老。從此南徐。良夜清風月滿湖。」鄭容に與ふるものに曰く「鄭莊好客。容我樽前先墮幘。落筆生風。籍甚聲名不負公。」書き終ると、先づ最初の一通を書記甲に渡す。

(東坡) 此れだ、此れを高瑩にやりなさい。

（書記甲）判狀を取つて見ながら、先生、此れは一體何でございます。

（東坡）それが判決だよ、まあ讀んで見給へ。

（書記甲）讀み上げる、「高山白きこと早し、瑩骨氷肌、那んぞ老を解せん、此れ從り南徐、良夜淸風月淵に滿つ。」——ヘテナ、先生、此れはたしか木蘭花詞の歌の文句ぢやございませんか。

（東坡）あはゝゝゝ、君には其れが分らんかね。他の一通を取つて書記乙をさし招く、此れ、此れ、此れを鄭容にやりなさい。

（書記乙）判狀を受け取り、同じく開いて見不思議さうに首をかしげる。オヤおかしいぞ、此れも歌の文句のやうだぞ。——「鄭莊客を好む、我を容るゝ樓前先づ憤を墜さしむ、落筆風を生ずれば、籍名を籍りて公に負かず。」——先生、御冗談をなすつちやいけません、此れも矢張り木蘭花詞ぢやございませんか。

（東坡）うん、さうだよ、ちよつと洒落て見たんだよ。

（書記乙）甲に向ひ低聲に囁く。おい、君に此れが分るかね？

（書記甲）歌の文句は分つて居るが、此れを判決だと仰つしやるのはどう云ふ譯だらう。

（書記乙）どう云譯かサツパリ分らんよ。何しろ今日は御酒が行き過ぎて居るから始末にいかん、あとでゆつくり書いて頂くとしようぢやないか。

（書記甲）さうするより仕方がないね、此の判決ぢや役に立たんから。階段の下に來り、妓生等に諭す。お前たちには氣の毒だけれど、あの通り先生はひどく醉つ拂つて居らつしやるんで、とてもお分りになりさうもないからな、明日でももう一遍出直して來た方がよささうだよ。惡い事は云はんからさうするがいゝ。

（高瑩）あら、あたしどうしたらいゝでせう。

（鄭容）困つちやつたわねえ。

(東坡) こりや、こりや、何をグヅグヅしやべつて居るのだ私はいくら醉つ拂つても氣は確かだぞ。

(書記乙) いえ、わたくしたちは何もその、…決して先生を醉つ拂ひだと申した譯ぢやございませんので、……

(東坡) あはゝゝゝゝ、どうも融通の利かん男たちだ。折角判決を書いてやつたのに、それが君たちには分らんとえるの？

(書記甲) でも先生、お言葉ではございますが、歌の文句ぢやあちと困りますのでな。

(東坡) あはゝゝゝ、分らんければもう一度此處へ持つて來なさい。

書記甲乙兩人、判狀を東坡の前に差し出す。

(東坡) そらいゝか、歌の文句には違ひないが、よく氣を附けて讀んで見なさい。——「高山白きこと早し」だ、「瑩骨氷肌、那んぞ老を解せん」さう云ひながら、朱で圏點を打つて行く。「此れ從り南徐、良夜清風月湖に滿つ」——それ此處のところに高、瑩、從、良、と入れてあるのだ。どうだ分つたらう？

(書記甲) へヘエ、な、な、成る程成る程、「高瑩良に從ふ」と云ふ譯ですか、イヤさすがは先生、どうも恐れ入りました。

(東坡) それからもう一つは斯うだ。——「鄭莊容を好む、我を容るゝ樽前先づ幘を墜さしむ、落筆風を生ずれば、聲名を藉りて公に負かず」——な、此處に此の通り鄭、容、落、籍とあるではないか。

(書記乙) や、此りやあ素敵だ、歌の文句かと思つたら、判決の文字が詠み込んであるんだ。此りやあナカナカ乙なもんだぞ。

此の間に毛澤民登場、上手柱廊の柱に凭れて、感心しながら裁判の樣子に見惚れてゐる。

(書記甲) 相手が藝者で、判決の文句が木蘭花詞か、——こんな風流な思ひつきは、先生でなけりやとても出來ない藝當だて。

（東坡）あはゝゝゝゝ、分つたら女たちに渡してやりなさい。

（書記甲）高瑩に判狀を渡してやりながら、これを御覽、此の歌の中に「高瑩從良」とあるんだ。お前は望み通り良人を持つ事が出來るんだぞ。

（高瑩）判狀を押し戴き、つくづくと讀んで見ながら、あら、どうでせう！　まあ奇態だわね、ちやんと此處に書いてあるのね、お許しが出たばかりかこんな珍しい物を書いて頂いて、あたしほんとに仕合はせだわ！

（書記乙）鄭容に判狀を渡す、それ、お前のも此の通り「鄭容落籍」と這入つて居る、——此れでお前の身は自由になつたのだ。

（鄭容）まあ！　ほんたうだわ！　此處にちやあんと私の名前が詠み込んであるわ！　でも先生は何て御器用な方なんでせう。……

（東坡）なあに、私は器用でも何でもないよ、歌の文句が浮かんだのは、つまりお前たちが美人だからさ。あはゝゝゝ。

（書記乙）詞は洒落てるし、書き手は先生だし、お前たちは飛んだ拾ひ物をしたんだぞ。よくお禮を申し上げるがいゝ。

（高瑩）先生、まことに有り難う存じます。此のお書き附けは家代々の寶にいたします。

（鄭容）何と申し上げてよいやら、お禮の言葉もございません。まるで夢のやうでございます。

（東坡）さあさあ、もうそんな禮には及ばん、早くそれを持つて歸つて好い人に見せてやんなさい。

高瑩鄭容の兩人、立ち上つて下手の方へ歩いて行きながら、各々判狀を手にして嬉しげに語り合ふ。

（高瑩）まあよかつたこと！　先生は何て捌けた方なんでせう。

（鄭容）やつぱり詩人なんて云ふ者は、普通の人間とは違つて居るのね、あたし、此の書き附けを大事に取つて置いてみんなに見せびらかしてやらなくつちや。

(高瑩) それがいゝわね、あたしたちは今日は餘ッぽど日が好いんだわ。……

兩人イソイソとして廣場を去る。

(書記甲) 乙に囁く、どうだい君、彼奴等はうまい事をしたぢやないか。美人と云ふ者は仕合はせだな。

(書記乙) 先生もあの調子だから、紅裙連に持てる譯さ。

書記生等机に向つて再び事務を取り始める。

其の時まで默つて樣子を見て居た毛澤民が、東坡の前に進み出る。

(毛澤民) 東坡先生、唯今の御判決は大分面白うございましたな。

(東坡) や、君は其處に居たのか、どうも飛んだところを見られちやつたな。實は今のは一杯機嫌でちよつと徒らをやつたんだよ。

(毛澤民) 一杯機嫌であゝ云ふ當意即妙のお考へが出ると云ふのは、大したものです。先生のやうな詩人でなけりや、とても思ひも及ばぬ事です。今更ながら敬服の外はございません。

(東坡) あはゝゝゝ、そんな事はどうでもいゝが、今の事件で折角の酒が醒めちまつた。さあ毛君、此れから一つ飲み直しだ、是非もう一度附き合つてくれ給へ。

(毛澤民) いえ、有り難う存じますが私はさうしては居られませんので、……

(東坡) いや、いかんいかん、逃げると云ふのは卑怯だぞ。

(毛澤民) ですがわたくしも、今日はどうしても出發しなければなりませんから、何卒もう御勘辨を願ひます。お名殘り惜しいのは山々ですが、いつまでお別れの杯を酌んでも際限はありませんし、却つて悲しみが増てばかりですから、此れでほんたうに綺麗サッパリとお暇乞ひをいたします。

(東坡) ヘテナ、どうしたのか今日はひどく剛情だな、出發出發と云ひなさるが、明日にしたらいゝぢやないか。

（毛澤民）いゝえさうは參りません、先達辭令を頂きましてから、今日は立たう、明日は立たうと思ひながら、つひ先生のお言葉に甘へて出發の時期を後らせてしまひまして、もう今日で半月にもなつてしまひました。どうせ私も轉任を命ぜられた以上、遲かれ早かれ旅に出なければならない體でございます。さう云ひながらホロリと落涙する、東坡はそれに心付かぬ樣子。ですからもう何も仰つしやらずに、一と思ひに私を立たせて下さいまし。

（東坡）成る程、これは私が惡かつたかな、酒の相手が一人でも減ると思ふと、心細くつてつい冗談を云つたんだが、い都へ行けば君も出世をする譯だから、わしは大いに君の榮轉を喜んで居るんだ。ではもう御遠慮には及ばん、わしもお引き留めはしないからどうか機嫌よくめでたい門出をしてくれ給へ。

（毛澤民）悲しい感情を押し包んで、はあ、有り難う存じます、それぢや先生も御機嫌よろしう。

（東坡）君も道中を氣を附けてな、――都で弟の子由に會つたら、此の間の手紙を渡してくれるやうに私は杭州の片田舍で、明け暮れ湖水の景色を眺めながら、至極呑氣に月日を送つてゐる。都に居るよりは結句此の方が仕合はせだからと、君からもよくさう云つて貰ひたいもんだね、弟の奴め、私が負け惜しみを云ふんだぐらゐに思ひさうだからな。

（毛澤民）お言傳はたしかに承知いたしました。――ところで私は、一つ先生にお願ひがあるのです。わたくしも長年の間この美しい湖畔の景色を友として、先生のお側に居たのですから、どうか後々の記念になるやうな御近作の詩を一種餞別として書いて頂きたう存じます。

（東坡）いや、其れは困るよ、わしの詩なぞは三文の値打ちもありはしない、とても君等に見せるやうな代物ではないんだから。

（毛澤民）先生、そりやあいけません、そんな御謙遜をなすつちやいけません、先生は當代第一の大詩人です、いくらお隱しになつても私はちやんと知つて居ります。先生の詩は「李白と雖及び難し」と、皇帝陛下までがさう仰つしやつてお褒めになつたんぢやありませんか。

(東坡) あはゝゝゝゝ、李白も私に比べられては嘸かし迷惑をして居るだらうよ。……

(毛澤民) そんな冗談を仰つしやつてお惚けなつても駄目ですよ。世間の人は先生のお書きになつたものを、金錢に換へても欲しがつて居りますからな。現にたつた今あの藝者たちに書いておやりになつたものは、あれは一體何でございます。

(東坡) あれはほんの駄洒落でな、木蘭花詞の歌の文句をもじつたのだ、わしは醉つ拂ふと駄洒落は云ふが詩は作らんよ。

(毛澤民) あれほどの才をお持ちになりながら、詩が作れぬとは仰つしやれますまい。私が日頃どれほど先生の徳をお慕ひ申し上げて居るか先生だつてよもや御存知ない筈はなからうと存じます。たとへ一句でも一行でもいゝのですから、どうか何なりと御揮毫をお願ひいたします。

(東坡) さあ、さう云はれるとやつぱりちよつと書きたくもなつて來るがね、――私はどうも惡い癖があつて、今迄たびたび詩の爲めにしくじつて居るもんだから、ウッカリ書く譯には行かんのでな。

(毛澤民) 詩を書いた爲めにしくじりをなすつた？　そんな事がありますか知らん？

(東坡) さうだよ、考へて見ると馬鹿々々しい話だが、私が此の土地へ左遷されたのも、もとはと云へば詩の祟りなんだ。「東坡と云ふ奴は怪しからん、詩を作つて時事を諷刺した」と云ふので、とうとうこんな遠い所へ流し者にされたのさ。だから此の上詩を作つたりすると、どんなお咎めを受けるかも知れんので、詩人商賣は近頃ふッつり止にしたんだ。

(毛澤民) すると先生は杭州へ入らつしつてから、一度も詩をお作りにはならないのですか？

(東坡) まあ表向きは、作らんことにしてあるんだがね、……

(毛澤民) あはゝゝゝゝ、しかし內々はお作りになるんでせう。全體杭州のやうな風雅な土地へ流し者にして、詩を作るなと云つたつて其りやあ無理な注文ですよ。此の土地に居ると、詩人でなくても詩を作りたくなりますからな。

(東坡) 全く君の云ふ通りだよ。實は都を立つ時にも弟の子由の奴がいろいろ心配をしてくれてな、「西湖の景色が美しくても決して詩を作つちやいけません」などと、くれぐれも忠告されて來たんだが、さて此處へ來て見るとさう云ふ譯にも行かんものだて。別に作らうと云ふ氣はなくつても、持つたが病でつい口の先に出てしまふもんだから。

(毛澤民) あはゝゝゝ、イヤ大きに御尤もです。さう云ふ譯なら都へ行つても內證にして置きますから、どうか私には特別を以てお書き下さいまし。先生に詩を作るのを禁じるなんて、こんな間違つた話はありませんよ。

(東坡) よし、よし、では折角だから、ちよつと一筆書くとしようかな。

(毛澤民) 是非お願ひ申します。決して御迷惑になるやうなことはいたしません。

(東坡) なあに君、知れたら知れたで仕方がないんだ。どうせ都には分らず屋が揃つて居るんだから。——

さう云ひながら悠々と紙を展べて暫く沈吟し、やがて一首を書き下す。「湖光瀲灔晴偏好。山色空濛雨亦奇。若把西湖比西子。淡粧濃抹也相宜。」——書き終ると筆を投げ捨てゝ哄然と笑ふ。

(東坡) 出來た、出來た、あはゝゝゝ、

(毛澤民) や、先生有り難う存じます。

(東坡) あはゝゝゝ、此れでいゝ、此れでいゝ、とうとうわしは禁を破つてしまつたぞ。さあ君、此れを持つて行き給へ。

(毛澤民) 紙を受け取つて眺める、成る程、此れは七言絶句ですな。「湖光瀲灔晴るれば偏に好し、山色空濛雨も亦奇なり、若し西湖を把つて西子に比ぶれば、淡粧濃抹也相宜し。」——あゝ先生、有り難う存じます。「若し西湖を把つて西子に比ぶれば、」——あゝ何と云ふ面白い比喩でせう。書記生等の傍に行きながら、此れ、此れ、君たちも此れを見給へ、僕は斯う云ふ結構な物を書いて頂いたのだ。

書記生兩人、感に堪へたやうな調子で口々にその詩を吟詠する。

（書記甲）湖光瀲灧晴るれば偏へに好し、山色空濛雨も亦奇なり、……

（書記乙）若し西湖を把つて西子に比ぶれば、淡粧濃抹也相宜し。

（毛澤民）な、君たちにも此の詩の意味は分るだらう。西湖の景色を西施に比べてお歌ひになつたのだ。あゝ西湖と西施、——僕に取つてこんな思ひ出の深い詩はない！……先生有り難ふ存じます、此れで私も都へ旅立つことが出來ます。此の詩を讀んでさへ居れば、私の心はいつも美しい杭州の天地を離れないでございませう。

少年登場、例の如く廣場を駈けて來る。

（少年）書記さん、書記さん

（書記甲）これ、先生がおいでだぞ、靜かになさい。

（少年）でも又やつて來ましたぜ。

（書記甲）又やつて來たか、どうも今日は不思議な日だな。

（書記乙）今度は何處の藝者だね？

（少年）ところが今度のは藝者ぢやないんです。太平街の呉小一と云ふ呉服屋が、扇子屋の張二を訴へて來たんです。何でも大分面倒な事件のやうです。

（書記甲）先生、どういたしませう。直ぐにお裁きを願へませうか。

（東坡）左樣さな、後でゆつくり飲み直すとして、ついでに其れも片附けてしまはうかな。

（書記乙）少年に向ひ、では其の訴人を連れて來たらよからう。

（少年）畏まりました。

少年退場。

（毛澤民）先生、お忙しいところを大變お邪魔いたしました。それでは此れでいよいよお別れいたします。どうか先生

もお體を御大切に、さうして一日も早く都へお歸りになれますやう、私も彼方でお待ち申して居ります。
（東坡）有り難う。又いつ會へるやら分らないが、君も丈夫で暮らし給へ。
（書記甲）毛澤民さん、御機嫌よろしう。
（書記乙）お見送りも致さないで飛んだ失禮をいたしますが、御無事の御旅行をお祈り申します。
（毛澤民）もうどうぞお構ひなく。それぢや君たちも御機嫌よう。

毛澤民廣場へ降りて下手へ退場。

少年が吳小一と張二とを連れて來る。吳小一は張二の襟頸を捕へて引つ立てながら、大聲に喚き立てゝ居る。

（吳）さあ、もうお役所へ來たからにや何と云つたつて勘辨はならねえぞ。是非とも此の始末を附けて貰はなきやならねえんだ。それが嫌なら手前を牢に打つ込んでやるからさう思へ。ほんたうに散々ッぱら人を馬鹿にしやがつて、呆れ返つた太い野郎だ。……
（少年）吳小一を制しながら、おい、おい、さう君のやうにムカツ腹を立てゝガミガミ怒鳴つても仕樣がないよ。云ふ事があるならお役人の前で云ひ給へ。
（書記甲）これ、これ、餘り騷々しいぞ、場所柄を辨へぬか。
（少年）それ見ろ、叱られたぢやないか。だから己の云はない事ぢやないんだ。——えゝ申し上げます、吳服商人吳小一、ならびに扇子賣り張二を連れて參りました。
（書記乙）してお前たちは何をそんなに爭つて居るのだ。
（吳）まあお聞き下さいまし、わたくしは御城內太平街に吳服屋渡世をいたして居ります吳小一と申す者でございます此の張二とはかねがね知り合ひの仲でございまして、本年の春つい心易だてに綾絹を二百五十反ばかり、代價二百兩に上ります品物を此の男に融通いたしましたところが、九月一杯と申す約束の期限が參りましても一向代金を拂ひません

のみか何の彼のと口先ばかりうまい言を申しながら、もう此れで一と月以上も引つ張つて居るのでございます。お蔭で私(わたくし)は飛んだ災難を背負ひ込みまして、商賣の方が立ち行かない始末でございます。お役人様の前でございますが、ほんたうにこんな太い奴はございません、まるで騙りも同然の奴でございます。どうぞお取り調べの上お上のお力を持ちまして、何とか埒があきますやうにお裁きをお願ひいたします。

此の間張二は首を縮めて小さくなつて居る。その後ろに少年が厳然と立つて、見張りをして居る。

(書記甲) 先生、お聞きの通りの次第でございます、いかゞ取り計らひませう。

(東坡) 呉小一とやら、其の方の申し立てはしかと事實に相違ないか?

(東坡) 其の方はそれなる張二と云ふ者へ、今年の九月までの期限で綾絹を賒け賣りしたと申すのだな。

(呉) はい、事實に相違ございません。

(呉) 左様でございます。

(東坡) それに對して張二が代金を拂はぬと申すか?

(呉) 仰せの通りでございます。

(東坡) これ、張二とやら其の方は唯今呉小一が申す通り、綾絹二百五十反を借り受けたに相違ないか?

(張) はい、それはもう借り受けたに相違ございません。

(東坡) 呉小一はまだ代金を受け取らぬと申して居るが、たしかに左様かな?

(張) はい、呉小一さんにはまことにお氣の毒なことで、面目ない仕儀ではございますが、わたくしもいろいろ商賣上の思はく違ひから手詰まりになりましたやうな譯でございまして、濟まないとは思ひながらつい延び延びになつて居るのでございます。何も私は呉小一さんを欺さうと云ふ氣はございませんので、拂はうにも拂ふ金がございませんから少し待つてくれるやうにと頼んで居りますのに、どうしても承知してくれないのでございます。

（東坡）しかし其の方は人から物を借りて置きながら、期限が切れても返さぬと云ふ法はないぞ。

（張二）それは重々私の方が悪いのでございます。しかし日頃の誼もございますのに、金を返さないからとてやれ騙りだの詐欺だのとは云はれますのが、いかにも心外でならないのでございます。どうぞお上のお慈悲を持ちまして、せめてもう三月なり半年なり待つてくれますやうに、お諭しを願ふ譯には參りませんでせうか。商賣は時の運と云ふこともございます、私も今でこそ斯うして困つては居りますもの、、一時の急をお救ひ下さればきつと呉小一さんに迷惑はかけない積りで居ります。

（呉）えゝちよつと申し上げます。此の男は此の傳で人を欺すのでございますから、あんなことを申しましても決してお取り上げになつてはいけません。二百兩の金を今日中に耳を揃へてくれなければ、私は邪が非でも承知する譯には參りません。

（東坡）まあ待て、待て、其の方の申し立てはよく分つて居る。唯今張二を取り調べて居るのだ。

（呉）はツ、恐れ入ります。

（東坡）では張二に尋ねる、──其の方何か商賣上の手違ひをしたと申すのはどう云ふ譯だ？　其の事情を申し立てゝ見い。

（張）はい、それは斯うでございます。──わたくしは呉小一さんから借り受けた綾絹で扇子を造りまして、夏をめあてに一と儲けする積りでございました。ところが御承知でもございませうが、今年は思ひの外氣候が不順で、春の末から夏へかけて毎日のやうな雨天續き、おまけにうすら寒い日が多かつたものでございますから、目算がガラリと外れてまるで品物が賣れないのでございます。まあ其れや此れやで私もいろいろ呉小一さんに云ひ譯をして居るのでございますが、どうぞ今の場合をお察し下さいまして、何とかお慈悲深いお取りなしが願へれば有り難たう存じます。

（東坡）成る程、其の方の申すことも尤ものやうだな。──して其の方は其の賣れ殘りの扇子を如何いたした？

（張）それはそつくり山のやうに積み上げて、店にしまつてあるのでございます。しかし私も、實は折角の仕込みを持ち腐れにするのが殘念に思はれますし、あまり吳小一さんの催促が厳しうございますので、たとへ一本でも二本でも買つてくれる人はないかと存じまして、時候外れではございますが、此の頃少し陽氣が戻りましたのを幸ひに、毎日僅かづつ荷を擔いでは賣り歩いて居るやうな始末でございます。

（東坡）ほゝう、それはナカナカ奇特な事だな。だが秋の扇を買ふやうな物好きな者は少からう。どうだ、ちつとは商ひがあるか？

（張）いえ、お察しの通りちつとも商ひはございません。たゞほんの氣休めの爲めに賣り歩いて居るだけでございます今日も朝から町中を歩き廻つて見ましたが、まだ一本も賣れはいたしません。

（東坡）ふゝん、……今日も賣り歩いたと申すか？

（張）左樣でございます。

（東坡）其の方其の荷物を何處に持つて居る？

（張）唯今御門内にお預けして參りました。

（東坡）それには扇子が何本ぐらゐあるな？

（張）左樣でございます、ちやうど此處に四十本持ち合はせて居ります。

（東坡）ふゝん、四十本あるか。……これ吳小一、

（吳）はゝッ、

（東坡）其の方は銀子二百兩を即座に受け取りさへすれば、何も異存はないのだらうな？

（吳）仰せまでもございません。さうして頂けば此の上もないのでございます。

（東坡）よし、よし、今直きに其の方の望み通りにしてつかはさう。

（呉）へゝツ、ではあの、その銀子をお立て替へ下さいますので？

（東坡）まあどうするか見て居るがよい。——張二！

（張）はい、

（東坡）其の方その四十本の扇子を殘らず此れへ持つて參れ。

（張）不思議さうな顏つきで、はツ、畏まりました。

張二急ぎ足で下手へ這入る、少年も其の跡に附いて行く。

（東坡）書記甲に向ひ、それから君たちに賴みがあるんだ。君は一つ看板を書いてくれ給へ。

（書記甲）あの、看板を書きますんで？

（東坡）さうだよ。成るべく目立つやうに、大きな字で筆太に書いて貰ひたいな。

（書記甲）何と書きますので？

（東坡）左樣さな、——「東坡先生御揮毫扇面大販賣」とやつて貰ふかな。さうして其の看板を役所の門前に立てかけるんだ。

（書記甲）でも先生、そんなものを立てかけたら多勢人がやつて來て大變でございます。

（東坡）いや構はん、構はん、多勢やつて來るほど都合がいゝんだ。書記乙に向ひ、それから君は大きな硯へ墨をドッサリ擦つてくれ給へ。

（書記乙）へエ、承知いたしました。

甲は看板を書き、乙は墨を擦り始める。張二と少年とが扇子を抱へて來る。

（張）えゝ申し上げます、扇子を持つて參りました。

（東坡）それでちやうど四十本か？

(張) 左樣でございます。

(東坡) ところで張二、わしが其の扇子へ何か一と筆づゝ書いて遣はすから、其の方それを持つて、此の役所の門前で市を開くがいゝ。大丈夫賣れることは請け合ひだぞ。

(張) はい、はい、それはもう先生に御揮毫が願へますれば、こんな結構なことはございません。きつと扇子に羽根が生へて飛ぶやうに賣れるでございませう。

(東坡) あはゝゝゝ、賣れたら其の方は間違ひなく吳小一に金を返すであらうな。

(張) そりや勿論でございますが、かりに一本が五兩としましても四十本で二百兩、若しそれ以上に賣れました場合には、殘りの金はどういたしませう。

(東坡) それは其の方の利得になるのだ、遠慮なく取つて置くがよい。

(張) 嬉しさの餘り忙然として、あ、ありがたう存じます。

(吳) おい、張二さん、お前は飛んだ運のいゝ男だぜ。五兩としても二百兩、七兩として二百八十兩、まあ已の考へちやあ三百兩や四百兩はまたゝくうちだ。

(張) そんなに儲かつたら已はどうしたらいゝだらう？ 借金が返せて、資本が出來て、曲つた運を取り返して、まるで嘘のやうな話だな。

(吳) 先生、まことに有り難う存じます、張二ばかりか私も大助かりでございます。

(張) ほんたうに何から何まで行き屆いたお取り計らひ、御恩は一生忘れはいたしませぬ。此れで私はやう／＼浮かび上れます。

(東坡) あはゝゝゝ、書記乙に向ひ、さあ墨が擦れたら扇子を此處へ持つて來なさい。

(書記乙) 畏まりました、扇子を東坡の机に運びながら、ですが先生、これだけの扇子をお書きになるのは大變でございさい

ますな。

(東坡)なあに、どうせ今日は禁を破つたついでだからな、四十本や五十本は何でもないよ。まあちよつと見て居給へ。

其の間に書記甲は香椀を書き終り、乙と共に東坡の机へ來て左右から覗き込む。東坡扇子を取り上げて片端から書き始め、忽ちのうちに二三本出來上る。

(書記乙)ほゝう! 早速出來ましたな、此れは五言絶句ですな。

(書記甲)成る程、成る程、いゝ文句ですなあ!

(書記乙)や、今度は繪だぞ。

(書記甲)はゝあ、山水でございますな。先生は繪の方もなか〳〵御器用で居らつしやいます。

(書記乙)それ、又一つ出來たぞ。

(書記甲)今度は七言七絶句かな。

(書記乙)今度は又繪だ。

(書記甲)此れは蘭だね。

(書記乙)うん、さうだ〳〵、そら、もう蘭が出來上つちやつた。

(書記甲)今度は竹だ。

(書記乙)うんさうだ、竹だ〳〵。

(東坡)此の鹽梅ぢや造作はないぞ、あはゝゝゝゝ。

階下の三人はもどかしさうに伸び上つて居る。書記生等夢中になつて見惚れながら頻りに感嘆の叫びをつゞける。

舞臺廻る。

第二場

役所の門前。――「東坡先生揮毫扇山大販賣」の看板が掲げられ、其の前に町の群集がうようよして居る。張二と呉小一とが一段高い所に登つて、代る代る聲を絞りながらせり賣りの最中である。段の上には銀貨が山のやうに積み上げられ、往來にもところどころにこぼれ落ちて散亂して居る。少年が時々書き上つた扇子を五六本づゝ門内から運んで來たり、銀貨を拾つて整理してやつたりして居る。

（張）扇子をかざしながら、さあ、いくら、いくら！

（呉）さあ早くお買ひなさい、早く買はないとなくなつちまふぞ！

（張）もうたつた十五本だ。

（呉）四十本のうちがもうたつた十五本だ！　根ツ切り葉ツ切り此れッ切りだ。

（張）いくら、いくら！

（呉）さあ早いところ早いところ！

（群集の一）十五兩！

（張）それ十五兩！

（群集の二）十六兩！

（張）それ十六兩！

（呉）もう一と息！

（群集の三）十七兩！

（張）それ十七兩！

（群集の四）十八兩！

（群集の五）十九兩！
（哭）それ十九兩だ！　もう一と息、もう一と息！
（群集の六）二十兩、二十兩！
（張）それ二十兩！――よし！　二十兩で賣つたく。

群集先を爭つて扇子を買ふ。
此の時門内から毛澤民が旅裝を整へて騾馬に跨りつゝ出て來り、混雜の樣子を面白さうに眺めて居たが、やがて張二に尋ねる。

（毛澤民）これ、これ、もう品物は賣り切れになつたかな？
（張）へえ、此れですつかり賣り切れでございます。
（毛澤民）わしも一本買ひたいと思ふのだが、もう一本もないか？
（張）まことにお氣の毒樣で、もう一本もございません。
（毛澤民）其處に一本殘つて居るのは、それは何だ。
（張）はい、此れはあの、………賓は私も先生のお蔭を持ちまして飛んだ大金儲けを致しましたので、せめて此の一本だけは、家の寶として取つて置きたいと存じますのでございます。
（毛澤民）成る程、それは殊勝な心がけだ。………しかしどうだな、それを私に讓つてくれる氣はないかな？
（張）折角でございますが、どうぞ此れだけはお見逃し下さいまし。わたくし共はあなた樣のやうな御身分のあるお方とは違ひまして、いくら先生に書いて頂きたいと存じましても、此の後二度と斯う云う物が手に入る時はないのでございます。
（毛澤民）いやいや、それは私とても同じことだ。わしは今日から先生のお側を離れて、遠い旅に出なければならん身の上なのだ。就いてはさう云ふ珍しい扇子を、再び買ふ折はないのだから、勝手ながら私に讓つてはくれまいかの？

(張) さう仰つしやれば其れも御尤もではございますが、私に取りましても此れは大事な品物でございますから、……

(毛澤民) では斯ういたさう、それを私が五十兩で買つて上げよう。

(張) ナニ、あの五十兩で？

(毛澤民) さうだ、五十兩で買つて上げる。

(張) そりやほんたうでございますか？

(毛澤民) あはゝゝゝ、其の方の家の寶を買はうと云ふのに、五十兩でも高くはあるまい。

(張) よろしうございます、それほどまでに仰つしやるものをお斷りするのも冥理が惡うございます、ではたしかに五十兩でお賣り申しませう。

(毛澤民) おう賣つてくれると申すか、それは恭い！ 鞍馬に積んだ荷物の中から銀貨を取り出す、さあ五十兩、よく改めて受け取つてくれ。

(張)。へえ、へえ、たしかに。――――此れは有り難う存じます。

此の間に群集は手に手に扇を打ち開いて眺めつゝ次第に退場。少年と吳小一とは跡に散らばつた銀貨を寄せ集めて勘定して居る。

毛澤民は扇子を取り、馬上に其れを打ち眺めつゝ暫く無言の體

(吳) 張二さん、金の勘定はすつかり濟んだぜ。此處に五百三十兩、それから其の五十兩が這入るとして締めて五百八十兩、儲けたも儲けたも何と素晴らしい儲けぢやないか。

(少年) 畜生！ ほんとに此の扇子屋はうまい事をしやがつたぞ！ こんなに澤山の金を見たなあ僕は生れて始めてだ

(張) あまり嬉しくつて已は何だかぼんやりしちやつた、こんなに儲けて罰が中りやあしないかな。

(吳) あはゝゝゝ、さあ張三さん、約束の金を返しておくれ。

(張) いゝとも、いゝとも、もう斯うなりやあ豪儀なもんだ。それ二百兩とな、それから利息に二十兩附けて上げよう

（少年）おい、おい、僕には一文もくれないのかい？　僕は大分手傳つてやつたぜ。
（張）うんさうだつけ、お前さんにもお禮をしなけりや惡かつたな、それ、十兩上げる。
（少年）やあ、えらく奮發したぞ、此れだけ貰やあ文句はないや。

少年小躍りしながら銀貨を受け取つて何度も勘定をした後、看板を擔いで門内に入る。張二と吳小一とは金の袋を重たさうに肩に擔いで上手へ這入る。

（毛澤民）依然として扇子を視つめつゝほツと溜息をつく。あゝ、あゝ、此れは西湖の斷橋の圖だ。繪は見事だが斷橋とは心細い大方緣が切れると云ふ謎だらうて、……

さう云ひながら悲しい思ひ入れて扇子を懷ろに收め、名殘り惜しさうに後を振り返りつゝ驢馬を進めて下手へ行つてしまふ。鈴の音が長く聞える。

「第三場」

湖上の夜。——見渡す限り渺渺たる水面、上手に近くこんもりとした孤山の翠微が見え、下手の方には遙かに杭州城の町の灯がチラチラして居る。折々何處やらで微かな笛の音が聞える。

美しい月の光を浴びて一艘の畫舫が湖心に浮かんで居る。船中には蘇東坡と妓生の朝雲とが差し向ひで微吟低酌の模樣。

（朝雲）先生、あれを御覽なさいまし、——あのまんまるな月の影が、ちやうど今雷峰塔の上にかゝつて參りました。ほんとにまあ、今夜は何と云ふいゝお月夜でせう。
（東坡）あゝ好い月だな、今日は晝間から飲み續けたが、今宵の酒はまた格別だ。斯うして居ると私は何も彼も忘れてしまふ。此れですつかり晝間の疲れが拔けたやうだ。
（朝雲）おや、何處かで笛の音が聞えるやうでございますね、斯う云ふ晩にあの音色を聞いて居ると、あたし何だか悲

しくなつて參りますわ。

（東坡）しかしそなたがさう沈んで居ては、折角の酒が面白うない。——どれ、一つ元氣を出して琵琶でも弾いてくれ、わしが歌を唄つて聞かさう。

（朝雲）ではあのいつもの、先生のお好きな西湖の歌をお聞かせなすつて下さいまし。

朝雲琵琶を把つて調子を合はせる、東坡は眼を閉ぢ空を仰ぎつゝ左の歌詞をうたふ。

（東坡の唄ふ歌）——

碧澄々として、凝たり一萬頃、徹底琉璃
青鄧々として、列なる三百面、交翡翠を加ふ
春風吹いて過ぐれば、艶桃穠李描くが如く
夏日照らし來れば、綠蓋紅蓮畫に似たり
秋雲掩映すれば、滿籬の嫩菊金を集め
冬雪分飛すれば、孤嶼の寒梅玉を破る
曉霞は連絡す三天竺
暮靄は横堆す九里松
風は呼猿洞口に生じ
雨は龍井山頭に飛來す
簪花人は逐ふ、淨慈來訪の友
客は投ず靈隱寺

此の歌の間に笛の音が止む。朝雲は琵琶を置いて杯を東坡にさす。

(朝雲) あゝ有り難うございました、今のお歌で氣がせい〳〵しましたわ。

(東坡) あはゝゝゝ、そなたに感心されるほどの藝でもないが、此の湖の月を肴に酒を飲んで、好きな歌でも唄つて居れば私は世の中に不足はないのだ。なあ朝雲、そなたもさうは思はんかな。

(朝雲) でもあたし、先生のやうな御立派な方がこんな田舍へ流されておいでになるなんて、つく〴〵お氣の毒だと存じますの。いづれ其のうちに都へお歸りになるんぢやなくつて?

(東坡) なあに都へ歸るなんて、私は近頃そんなことを夢にも考へちや居ないのだ。事に依つたら一生流人で終るかも知れん。

(朝雲) だけど、都の人たちはなぜ先生のやうな方を流し者なぞにしたんでせう、ほんとにひどい人たちですわね。

(東坡) さう云つてくれるのは有り難いが。わしは此の通りの酒飲みで、暇があれば詩を作つてぶら〳〵遊んで居るより外に能のない人間だからな、結局田舍の役人が相當して居るんだよ。

(朝雲) いゝえ、先生はえらい方よ、立派な理想を持つて居らつしやるのに世間が用ゐてくれないものだから、ヤケを起して居らつしやるのよ。お隱しになつてもあたしちやんと知つて居ますわ。——ねえ先生、先生はあんまり詩がお上手だもんだから、それで都の人たちに嫉まれて居らつしやるんでせう、詩の道樂をお止めになれば、きつとお上のお許しが出るに極まつて居ますわ。

(東坡) しかし朝雲、わしは痩せても枯れても詩人だからな、詩を作るなと云ふのはてんで無理ぢやないか。悧巧なそなたにも似合はん事だ。

(朝雲) あら、お氣に觸つたらどうぞ勘忍して下さいまし。何もあたしそんな積りで云つたんぢやありませんの。そりや先生がいつ迄も詩人で居て下すつて、此の杭州を離れずに居て下さる方が、あたしたちにはどんなに仕合はせか知れ

ませんわ。先生にはお氣の毒かも知れませんけれど。……

（東坡）さう氣の毒氣の毒と云つてくれるな、わしはちつとも自分を氣の毒とは思つて居ないのに、さう云はれると詰まらない事を思ひ出して、何だか心細くなつて來るよ。

（朝雲）それぢや矢つ張り都が戀ひしいと思し召して？

（東坡）都は戀ひしいとも思はないが、でも都には弟の奴が居るのでな、………今頃はどうして居るかと思ふと、たゞ其れだけが氣に懸るのだ。

（朝雲）まあ、さぞお懷（なつか）しうございませうね、お察し申しますわ。

（東坡）時に朝雲、そなたには兄弟があるのか？

（朝雲）いゝえ、親も兄弟もありませんの。あたしほんたうの獨りぼつちでございます。

（東坡）しかし何だらう、親や兄弟の代りになつてくれる人が、もうちやんと出來て居るのだらう。

（朝雲）あら、御冗談を仰つしやつちや困りますわ。あたしにはそんな者もございませんの。

（東坡）ふゝん、さうかな、世間ではそなたのことを男嫌ひだと云つて居るが、するとやつぱり噂の通りと云ふ譯かな。

（朝雲）男嫌ひだなんて、そんな譯でもないんですけれど、あたし運が惡いのよ。

（東坡）あはゝゝゝ、そなたほどの器量と才とを持ちながら、運が惡いとは云はせないぞ。さうしてそなたは、藝者になつてからもう何年になる？

（朝雲）ちやうど四年になりますわ。

（東坡）四年も商賣をして居れば、それ、その朝雲と云ふ名前のやうに、朝（あした）には巫山の雲となり、暮には雨となることもありさうなものだのに、まだそなたには楚の襄王が見附からぬかな。

（朝雲）朝の雲も暮の雨も、何處と云ふあてなく風に吹き送られて行くばかり、いつになつたら襄王の夢に會へるのや

ら、行く末のことを考へると、あたしほんたうに心細くなつて來ますわ。

(東坡) 成る程な、そなたほどの藝者でも矢張り苦勞はあると見える。そなたもわしと同じやうに、あまり氣位を高くすると、どうしたつて獨りぼつちにならなきやならない。つまりはまあ、自分で苦勞を求めるやうなことになるんだ。

(朝雲) でもあたし、意地ツ張りだから駄目なんですの。……… そりやあたしのやうな女でも。何とか彼とか云つて下さる方はあるんですけれど、あたしにだつて少しは考へがありますからね、いくらお金を積まれたつて氣に入らない人に身を任せようとは思ひませんわ。

(東坡) だが、そなたに思ひを寄せる者は一人や二人ではなからうに、氣に入つた者がたまにはありさうなもんぢやないか。

(朝雲) たまに氣に入つた人があれば、賤しい稼業の女なぞを相手にしては下さいませんし、相手になつてくれる人は道樂者の商人ばかりですし、あたし此頃は自分で自分の身がじみじみ嫌になりましたわ。……… ねえ先生、藝者なんてほんとに詰らないもんですわ。………

この時また笛の音が聞え、だんだんに畫舫へ近づいて來る。

畫舫は靜かな波に揺られて悠々たる圓を描きながら、極めて緩慢に、ダルリと一と廻りする。其の間兩人無言。

笛の音いよいよ近づき、上手孤山の島蔭より一艘の畫舫の舳が現はれたまゝ、其處にぢつと停まつて居る。同時にパッタリと笛の音が止む。

月は天心にかゝり、皎々たる光が一と入その魅力を增す。

(東坡) ………朝雲、

(朝雲) はい、

(東坡) そなたはわしの心をよく知つて居てくれる。數多い此の土地の藝者の中で、わしの心持ちが分つてくれるのは

そなたばかりだ。………

(朝雲)………

(東坡)そなたは自分で世を狭める不遇な藝者、わしは世に容れられない不遇な詩人、そなたはわしを哀れな男とは思つてくれぬか。

(朝雲)先生こそあたしを可哀さうだと思し召して下さいまし。………

(東坡)朝雲、わしの心を察してくれ。

(朝雲)冥加に餘る先生のお言葉、………うれしうございます。

東坡汝然として女の手を把る。朝雲も言葉なく俯し目がちになつて涙ぐむ。やゝ暫くして島蔭の船中より琵琶の音と共に悲痛なる女の聲で歌が聞える。歌の途中から東坡と朝雲とは其の船の方を眺めやりつゝ耳を澄ます。

(女の唄ふ歌)——

涙は欄杆を濕ほし花は露を帶く
愁は眉に到つて峰の碧(みどり)聚まる
此の恨み平分して取れば
更に言語なうして空しく相窺ふ二細雨
殘雲意緒なし、朝々暮々
今夜山深きところ
斷魂潮(うしほ)に分付して回(かへ)り去らん

(東坡) 愕然として、や、や、あの歌をうたふのは誰だ、あの船を呼べ。

(朝雲) 船の方を手招ぎしながら、もし、もし、そちらに居らつしやるのはどなた？

(東坡) わしは蘇東坡だ、その船の者に用があるぞ。

(朝雲) どうぞ其の船を寄せて頂戴。――――

船無言のまゝ此方へ漕いで來る、船中には年寄りの船頭と、妓生二人とが乘つて居る。妓生の一人は群芳、一人は琴操、歌を唄つたのは前者で、琵琶を彈いたのは後者である、船が近づくに隨ひ、二人とも羞かしさうに畏まつて俯向いて居る。

(朝雲) あら群芳さんに琴操さんだわ。

兩人とも稍下を向いて默つて居る。船は東坡の畫舫の舷側へ舳をつける。

(東坡) してそなたたちは、今頃何をして居たのだ？

(琴操) はい、あまり美しいお月夜なので、月見がてらに船を出したのでございます。

(東坡) さうして今の歌の主は、琴操、そなたか？

(琴操) いいえ、……

(東坡) では群芳が唄つたのか？

群芳琴操と顔を見合はせて何やら躊躇する様子。

(東坡) これ、これ、隱すには及ばんぞ。群芳、そなたが唄つたのだな。

(群芳) ……はい、先生が居らつしやるとも知らずに、飛んだものをお耳に入れまして、お羞かしう存じます。

(東坡) いや、いや、羞かしいどころではない。詞と云ひ、調と云ひ、わしはしみじみ身に沁みて聞いて居つたぞ。あれは離別の悲しみを歌つたものゝやうに思はれるが、それにしてもあの心にくい歌の文句を作つた人の名が知りたい。

そなたにあれを教へたのは誰だ？
(群芳) モヂモヂしながら、はい、あの、どうぞ其の人の名前だけは、………
(東坡) 云へぬと申すのか。
(群芳) はい、お免しなすつて下さいまし。
(東坡) ほゝう、さう云はれると猶更わしは聞きたくなる。あれほどの歌を作れるやうな風流な心得のある者が、憚りながらわしを除いては此の土地に居さうもないと思はれるに、さてさて世間には隠れた才子が居るものだな。これ群芳隠し立てをするには及ばん、是非その人の名を聞かしてくれ。
(群芳) でもあの、決して人に云つてはならぬと、堅く止められて居るのでございます。
(東坡) 聞けば聞くほど床しい心根の人と見える。それほどの人を知らずに居たとはわしこそはほんたうに恥かしいわ。これ、悪いやうには計らはぬから何卒その人の名を明かしてくれ。
(朝雲) もし、群芳さん、先生があれほど仰つしやるのに、なぜそんなにお隠しなさるの？　打ち明けて下すつてもよくはなくつて？
(琴操) ほんたうにさうよ、あたしあなたの心持ちはよく分つて居てよ、だけど、そりやいろいろ打ち明けられない譯もおありでせうけれど、もう斯うなつたら、詰まらない遠慮なんかなさらない方がいゝと思ふわ。
(東坡) 何か込み入つた譯があるなら、それもついでに話して聞かすがいゝ。及ばずながら私が力になつて上げよう。
(琴操) ね、群芳さん、あゝ仰つしやるのに隠し立てをなすつちや却つて損だわ、いつそ先生にお話ししちやつた方がいゝわ。ね、分つたでせう？　群芳袂に面を掩うてさめざめと泣き出す、　あら、あなたどうなすたの？
(朝雲) まあ、それほど思ひ詰めたことがあるなら、猶更ちやありませんか。ね、後生だから聞かして頂戴。
(東坡) さ、どうか聞かしてくれ、さう泣いて居ては話が分らぬ。あの歌を作つたのは何處の才子だ？　定めしそなた

の戀人であらうが、そなたは其の人と辛い別れをしたとでも云ふのか？　さあ、早く云ふがいゝぞ。

(群芳) はい、……あの歌を作つた人は、毛澤民さまでございます、……

(東坡) ナニ、毛澤民？

(群芳) どうぞお察し下さいまし、……

群芳聲をあげて激しく泣き崩れる。東坡と朝雲とは顏を見合はせて驚く。琴操は群芳の肩を撫でゝ劬はつてやつて居る。

(東坡) ではあの毛澤民には、そなたと云ふものがあつたのか、わしは今日まで其れを夢にも知らずに居たわい。……だがさう云へば、此の間から何となく塞いで居るやうだつたが、それならさうとなぜ打ち明けてはくれなんだかな。

(群芳) でも二人の間柄は私事、公けの御用には換へられぬと仰つしやつてゆうべは散々泣き明かして、あの別離の歌をおよみになつたのでございます。

(東坡) さうとも知らずに私はあの男を都へ立たせてしまつたが、心のうちでは嘸恨んで居たゞらう。……

(群芳) いえ、いえ、ちつとも恨んでなんぞ居らしやりはしませんわ。先生のやうな名高い詩人と、たとへ一年でも机を並べて暮らせたのは此の上もない名譽だと、昨夜もさう仰つしやつて居らつしやいました。

(東坡) そんなに慕つて居てくれたのに、わしは愚かにもあの男を少しも認めてやらなかつた。……成る程此の蘇東坡は名高い詩人かも知れぬ、しかし毛澤民は世に知られない氣の毒な詩人だつたのだ。わしはきつと、今夜の歌をかずに居たら、いつ迄もあの男をたゞの役人と思つて居ただらう。それほどの風流才子とは知らずに濟んでしまつたゞらう。あゝ、わしは今更毛澤民に合はせる顏がないやうな氣がする。……

(朝雲) ねえ、先生、あたし群芳さんがお可愛さうでなりませんわ。毛澤民さんだつて、今のお歌にあるやうに、可愛い人を振り捨てゝいらつしやるのはどんなにかお辛いことでせうに、いつそ喚び返して上げる譯には行きませんの？

(東坡) おゝ、そなたはよいところへ氣がついてくれた。世の中には役人になる者はいくらもある、しかし詩人と云は

れる者はめつたにないのだ。毛澤民はわしの知己だつたのに、此の美しい湖畔の町を追ひやつて殺風景な都の空へ立たせたのは、ほんたうに私の誤りであつた。わしも群芳と同じやうにあの男が戀ひしくなつたわい。

(朝雲)今日の夕がたお立ちになつたばかりですから、まだ遠くへは入らつしやりますまい。直ぐに人をおやりになれば、きつと明日のうちに間に合ひますわ。

(東坡)これ、群芳、もう泣くことはないぞ、今夜のうちに使を出して必ず喚び戻してつかはさう。

(琴操)まあよかつたこと! あたしあなたがたの喜ぶ顔が早く見たいわ。嘸うれしいでせうねえ。

群芳はたゞ嬉し涙にかきくれてゐる。

(東坡)さあ、もう泣くのは止せ止せ、機嫌を直して、一つ前祝に私の杯を受けてくれ。

(朝雲)此れと云ふのも毛澤民さんの歌のお蔭、あたしあの歌をもう一度聞かして頂きたいわ。

(東坡)うんさうだ、それがいゝ、それがいゝ、わしもあの歌を聞いて、毛澤民の風流にあやかりたいぞ。

(琴操)琵琶の調子を合はせながら。　さあ群芳さん、戀ひしい人を偲ぶよすがに、もう一度あれをお唄ひなさいな、明日になれば悲しい歌もみんな喜びの種になるのよ。

群芳琵琶の音に催されていつとはなしに涙の顔を擡げ、惹き入れられるやうになつて、最初は微かに、次第次第に聲を張りつゝうたふ。

(群芳の唄ふ歌)――

涙は欄杆に濕ほし花は露を着く
愁は眉に到つて峰の碧(みどり)聚まる
此の恨み平分して取れば

更に言語なうして空しく相親ふ二一細雨
殘雲意緒なし、朝々暮々・
今夜山深きところ
斷魂潮に分付して回り去らん

東坡と朝雲と首を垂れて聽く。歌聲止んで琵琶の餘韻未だ全く盡きざるうちに幕。（大正九、七月作）

■編輯室より■

■七月八月は、暑いのに肩の凝る研究論文も如何かと思ひ、評論欄は大に手控へて居たが、九月からは愈々讀書のシーズンに入ることだから、大々的に論文欄に力を入れて、本誌の特長を發揮する氣で、同人一同頗る意氣込んでゐる。新秋の候、改造式新計畫が、如何に誌界を驚倒するかは、今日より期して俟たれたい。

■小說欄及社會講談欄は逐號大に發展する筈であるが、何分紙價累月暴騰して、毎號頁不足で苦しんで居る始末、外の物價は漸次下つて行くのに、紙價は反對に段々騰貴して行く、此珍現象が除去されねば、一般公衆は、安いそして內容の豐富なものを手にすることが出來ない譯である。我國文化の爲めに洵に困つたことである。

■七月號は頗る大盛況で、市內の如きは三日を出ずして大半賣切れとなつた。同人は此愛顧に報ゆる爲め、愈々內容を整備し記事を豐富にすることに努力する氣である。

毎月一日發行一回

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	七十錢	二錢
半ヶ年	四圓二十錢	不要
壹ヶ年	八圓四十錢	不要

外國行郵稅は一部十四錢增大號は別に定價を定む

廣告

▼廣告料は直接本社並に取次店に御照會願上候
▼廣告は御便宜の取次店へ御依賴願上候

註文の注意

▼御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▼增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▼見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし
但し郵券代用一割增の事
▼御拂込は振替によるゝを最も便利とす

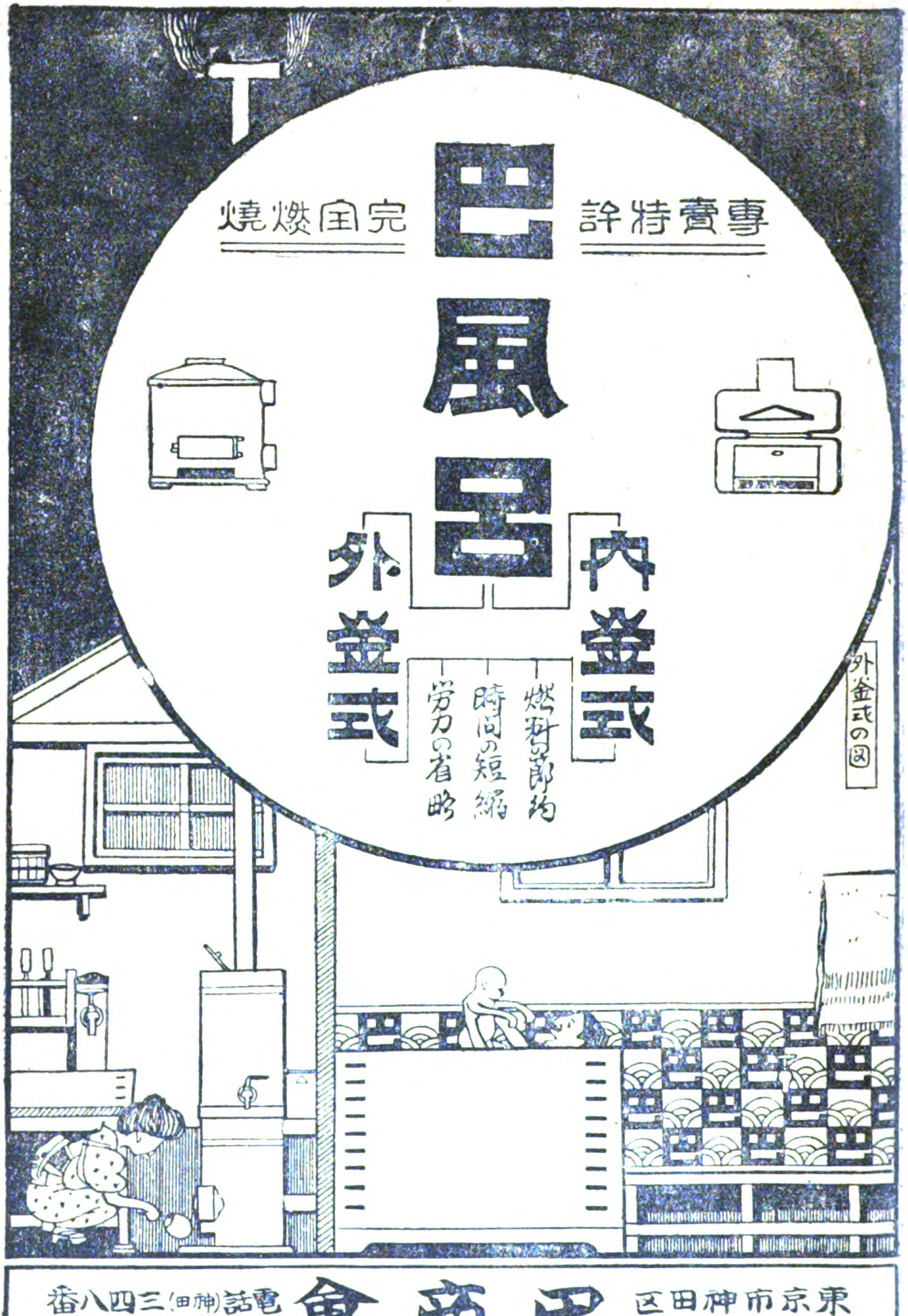
本誌大賣捌所

東京堂　東海堂　北陸館　上田屋　至誠堂

大正九年七月二十七日印刷納本
大正九年八月一日發行

本號定價 金七十錢

編輯兼發行兼印刷者 東京府中目黑七七〇 横關利藤太
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿七番 秀英舍
發行所 東京芝區櫻川久保町七 改造社
電話新橋一八五九
振替東京八四〇二



東京市神田区
鍛冶町廿番地

巴商會

電話(神田)三四八番
振替(東京)四三二番